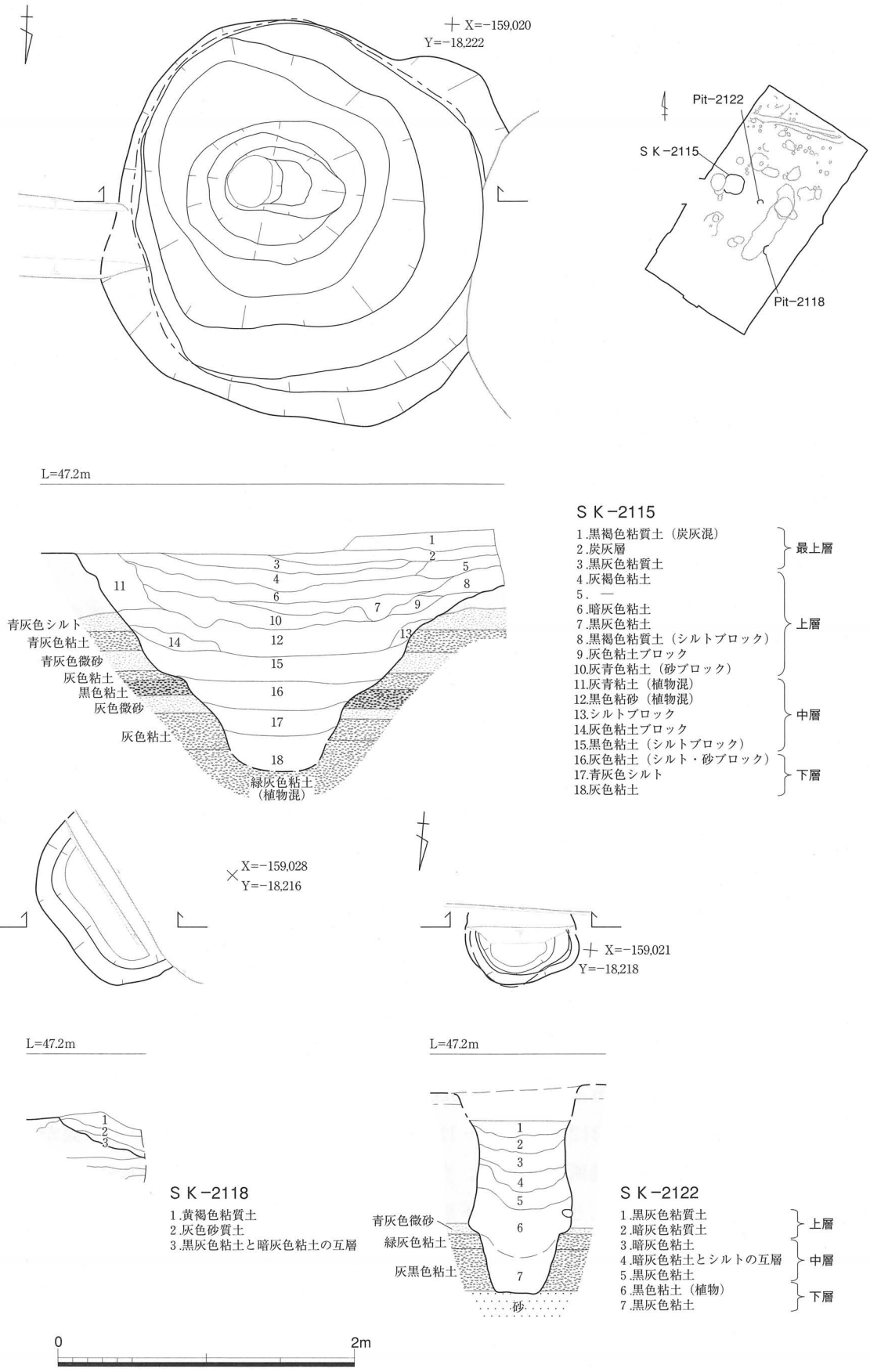


第422図　弥生時代後期初頭の遺構（S＝1/40）

溝

ＳＤ－2103（第423図、写真図版278・279）

本溝は、調査区北半の北側で検出した。弥生時代中期後葉のＳＤ－2101の北側に隣接したほぼ同規模の溝で、調査区西側でＳＤ－2101を切り込んで合流する。本溝は西北西－東南東に軸をもち、調査区東端では並行するＳＤ－2101と同様に、ＳＤ－1114の手前で北側へ屈曲する。溝幅は、東側が0.58ｍであるが、ＳＤ－2101との合流部となる中央アゼ付近は1.30ｍとなる。断面は、単独の東側は逆台形で深さ0.26ｍであるが、合流する西側ではＳＤ－2101の上面を浚って皿状となり、深さは0.18ｍを測る。堆積土は３層からなり、第１層：黒褐色粘質土、第２層：黒色粘質土、第３層：黒灰色粘質土である。時期は、大和第Ｖ様式である。

第80次調査区では本調査区ＳＤ－1114の北延長溝であるＳＤ－101Ｂとともに、その西肩において並行する後期初頭溝のＳＤ－102を検出している。ＳＤ－2103が、時期・位置関係からこれに繋がる可能性は高い。本調査区の北西側には微高地が想定されるが、弥生時代中期後葉の先行するＳＤ－2101とともに、これを囲んだ区画溝となる可能性がある。

（６）弥生時代後期後葉の遺構（第386図、写真図版273・274）

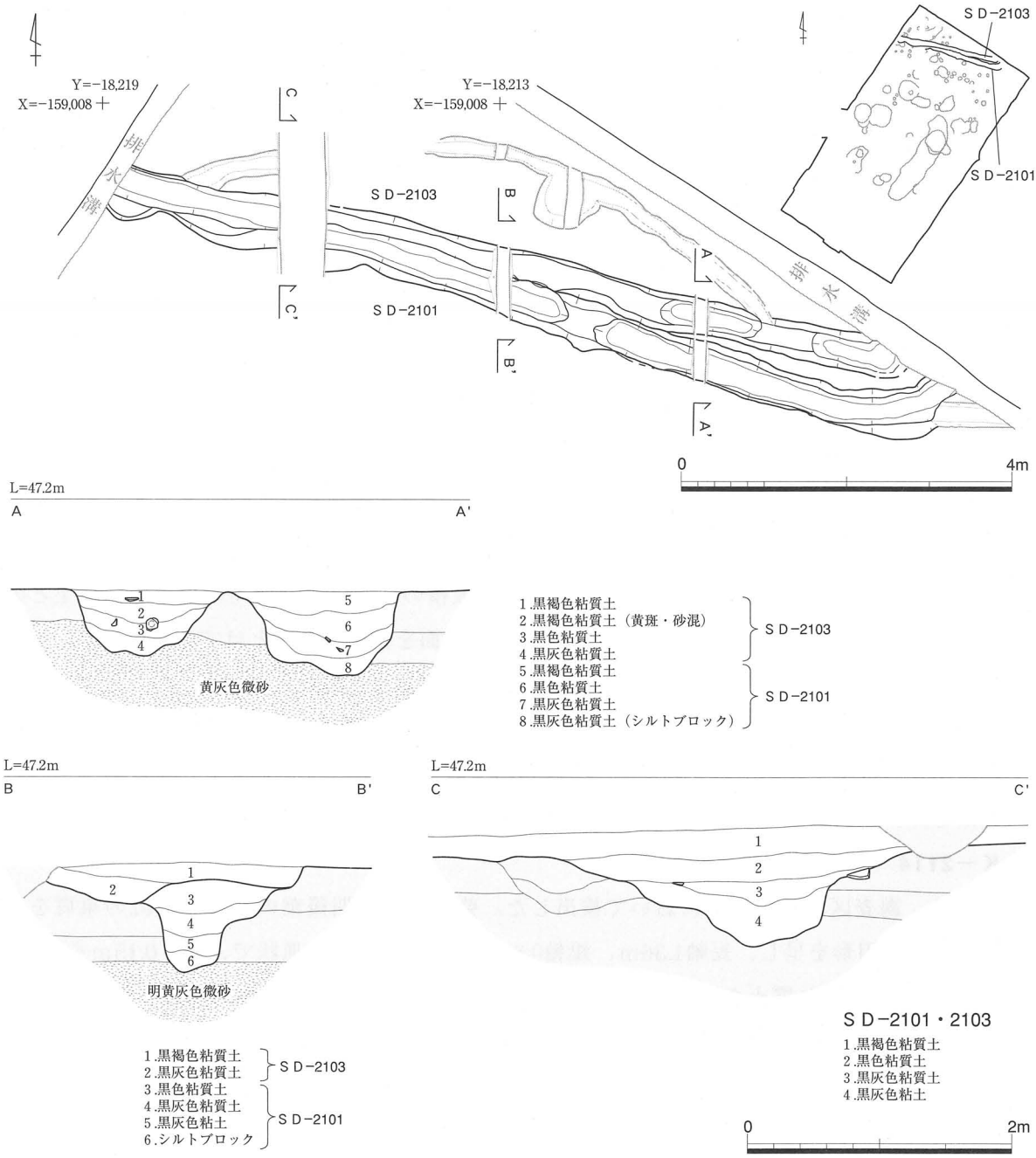
弥生時代後期後葉の遺構は、第Ⅵ層：黄褐色粘質土の上面で検出している。本調査区における弥生時代後期の遺構のうち、前葉のものについてはほとんどみあたらない。出土土器も弥生時代後期前葉のものは少ない。再び遺構数、出土土器量が増えるのは、弥生時代後期後葉である。弥生時代後期後葉の遺構には、多数の土器が出土した井戸ＳＫ－2111の他、土器溜まり状の浅い不定形な土坑や炭灰層をもつ小土坑がある。土器溜まり状の浅い不定形な土坑や炭灰層をもつ小土坑については、竪穴住居跡の可能性も想定されよう。

土坑

ＳＫ－2102（第424図、写真図版282）

本坑は、調査区北半の東側において検出した。平面は不整形を呈し、長軸2.40ｍ以上、短軸2.25ｍである。断面は皿状で、深さ0.25ｍを測る。堆積土は２層からなり、第１層：黒褐色粘質土、第２層：灰色粘土である。

第１層：黒褐色粘質土からは、大和第Ⅵ－４様式の土器がまとまって出土した。特に、土坑南東側となるＹ＝－18,211ｍとＸ＝－159,020ｍの交点付近では半完形や大形の破片が集中し、土坑北西側となるＹ＝－18,212ｍとＸ＝－159,019.5ｍの交点付近ではほぼ完形の甕が２点並ぶという、異なる二つの集中箇所があった。当初は、土坑南東側の土器群について、大型建物跡の東側柱列の延長上にあることと、その下層の灰色粘土が柱根腐食痕に類似することから、ここまで大型建物跡ＳＢ－1201の東側柱列が延びることを予想し、これを柱根腐食痕上の落ち込みと捉えた。そして、土坑北西側の甕２点とその周辺土器のみをＳＫ－2102とし、南東側の土器群からは独立させて考えていた。しかし、柱根腐食痕と考えた灰色粘土の直下に柱根はなく、柱列も延びないことが判明した。このため、これら二つの集中箇所からなる土器群を、



第423図　弥生時代中期後葉・後期初頭の遺構（平面図：Ｓ＝1/80、断面図：Ｓ＝1/50）

ひとつの落ち込みに伴うものと解釈し、南東側の土器群も含めＳＫ－2102とした。

ＳＫ－2103（第424図、写真図版283）

本坑は、調査区北半の北側において検出した。東半は、Ｙ＝－18,216ｍに沿って設定した調査区中央南北アゼ部分にあるため未検出となっている。本坑の平面は不整円形を呈し、復原径1.10ｍである。断面は、皿状で深さ0.08ｍを測る。堆積土は、黒褐色粘質土の単層である。上面からは、完形の甕や鉢を含む大和第Ⅵ－４様式の土器片がまとまって出土した。南側に隣接するＳＸ－2101と一連のものとなる可能性もあるが、本坑から布留式土器は出土していない。

ＳＫ－2106（第424図、写真図版283）

本坑は、調査区北半の中央において検出した。北端部は、中世素掘小溝によって切られる。平面は不整円形を呈し、長軸1.30ｍ以上、短軸1.20ｍである。断面は、皿状で深さは0.16ｍを測る。堆積土は２層からなり、第１層：暗黄褐色粘質土（ハード・炭灰混）、第２層：炭灰層である。上面からは、大和第Ⅵ－４様式の壷下半部が出土した。

ＳＫ－2109（第424図、写真図版283）

本坑は、調査区北半の中央において検出した。平面は楕円形を呈し、長軸1.04ｍ、短軸0.80ｍである。断面は浅い逆台形で、深さは0.20ｍを測る。堆積土は炭灰層の単層である。時期は、大和第Ⅵ－４様式である。

ＳＫ－2111（第424図、写真図版284・285）

本坑は調査区北半の西端において検出した。弥生時代中期中葉のＳＫ－2120と弥生時代中期後葉のＳＫ－2116、弥生時代後期初頭のＳＫ－2115の３基の井戸を切っている。平面は不整円形を呈し、長軸2.32ｍ、短軸2.00ｍである。断面は円筒状であるが底面を一段深掘りし、深さは1.45ｍを測る。底面は標高45.50ｍで、河川堆積の灰青色砂と河川東肩の黒色粘土との境に達する。灰青色砂からの湧水が激しく、確実な底面を把握することはできなかった。

堆積土は、大きく上・中・下の３層に分かれる。上層は黒色系粘質土であるが、その切り合い関係を把握できずに大半をＳＫ－2120上層として掘り下げた。中層は黒色系粘土であるが、その上部からは半・完形品の大和第Ⅵ－３様式の土器が多数出土した。また、下層の黒色砂の上面からは、壷胴部下半１点が出土した。本坑の機能は、井戸と考えられる。

ＳＫ－2114（第425図、写真図版286）

本坑は、調査区北半の東側において検出した。弥生時代後期後葉のＳＫ－2102の東肩を切る。平面は楕円形を呈し、長軸1.36ｍ、短軸0.84ｍである。断面は皿状で、深さ0.15ｍを測る。堆積土は、暗褐色粘質土の単層である。時期は、大和第Ⅵ－４様式である。本坑とＳＫ－2102との関係であるが、両者は同時期であり一連の落ち込みとなる可能性もある。

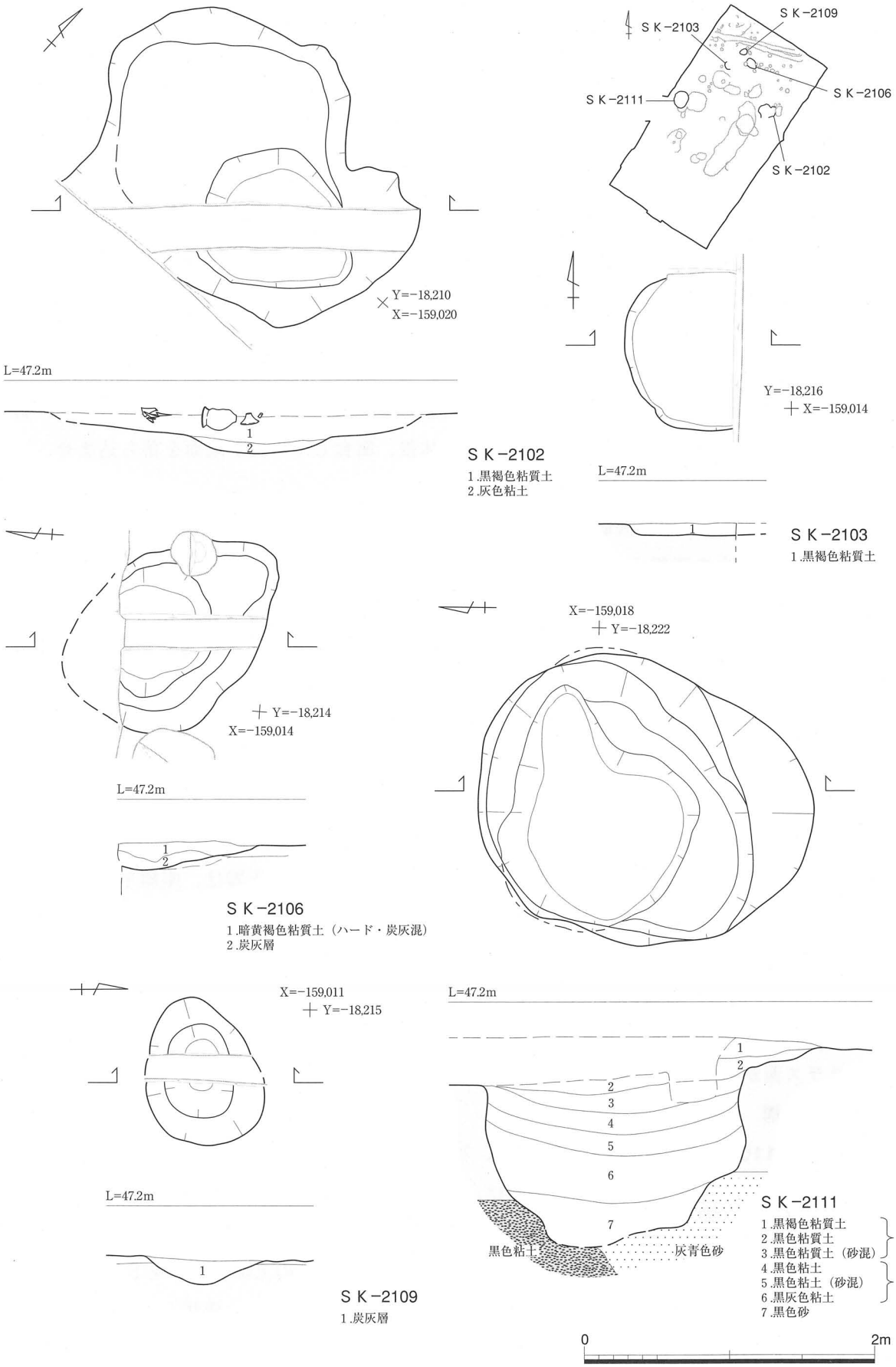
（７）古墳時代初頭の遺構（第386図、写真図版273・274）

第Ⅵ層：黄褐色粘質土の上面では、弥生時代後期後葉及び古墳時代初頭の半・完形品などの土器片を多量に含んだ不定形な浅い落ち込みを検出した。これらは遺構としての掘形が明確でないものが多い。その土器片群は第Ⅴ層：黒褐色粘質土の上面を検出した段階で確認している。古墳時代初頭の遺構については、調査技術的に第Ⅵ層：黄褐色粘質土の上面まで掘り下げ検出したが、実際には第Ⅴ層上面から掘り込まれている可能性も考えられる。

土坑

ＳＫ－2101（第425図、写真図版286）

本坑は、調査区北半のＳＸ－2101の西側に隣接して検出した。位置的には、弥生時代中期中葉のＳＫ－2121の上面にあたる。平面は円形を呈し、径0.94ｍである。断面は皿状で、深さ



第424図　弥生時代後期後葉の遺構（S＝1/40）

は0.20mを測る。堆積土は、黒褐色粘質土の単層である。本坑については、弥生時代後期後葉及び布留０式の土器片がまとまりをもったことによって認識しており、輪郭や掘形については検出根拠に乏しい点がある。あるいは、東に隣接するＳＸ－2101と一連の遺構となる可能性がある。

ＳＫ－1122（第425図、写真図版287）

本坑は、調査区南半の西側で検出した。位置的には、Pit－2105Wの抜き取り坑上面にあたる。平面は不整楕円形を呈し、長軸0.98m、短軸0.85mである。断面は逆台形で、深さは0.32mを測る。堆積土は３層からなり、第１層：黒褐色粘質土、第２層：暗灰色粘土（褐色粘質土混）、第３層：灰色粘土である。第１層の黒褐色粘質土は、布留期の土器溜まりになっており、ほぼ完形の布留０式の甕が１点出土した。なお、底面の土層は、木材が腐食することによって形成された灰色粘土で、その直下には木材が横たわっていた。おそらく、大型建物の柱材、あるいはそれに関連した木材であろう。大型建物解体後、腐食した木材が地面を落ち込ませ、周辺地形は布留期前後まで凹凸があったことを推測させる。

ＳＫ－2124（第425図、写真図版288）

本坑は調査区北半の西側で検出した。北端が布留期の土器溜まりＳＸ－2101と接する。位置的には、Pit－1201Wの抜き取り坑北端にあたる。平面は不整楕円形を呈し、長軸2.32m、短軸1.08mである。断面は逆台形で、深さは0.39mを測る。堆積土は３層からなり、第１層：暗褐色粘質土、第２層：黒褐色粘質土、第３層：黒褐色粘質土（黄灰色砂ブロック）である。本坑東半の第１層：暗褐色粘質土から、布留０式の小型器台が半完形で１点出土した。

溝

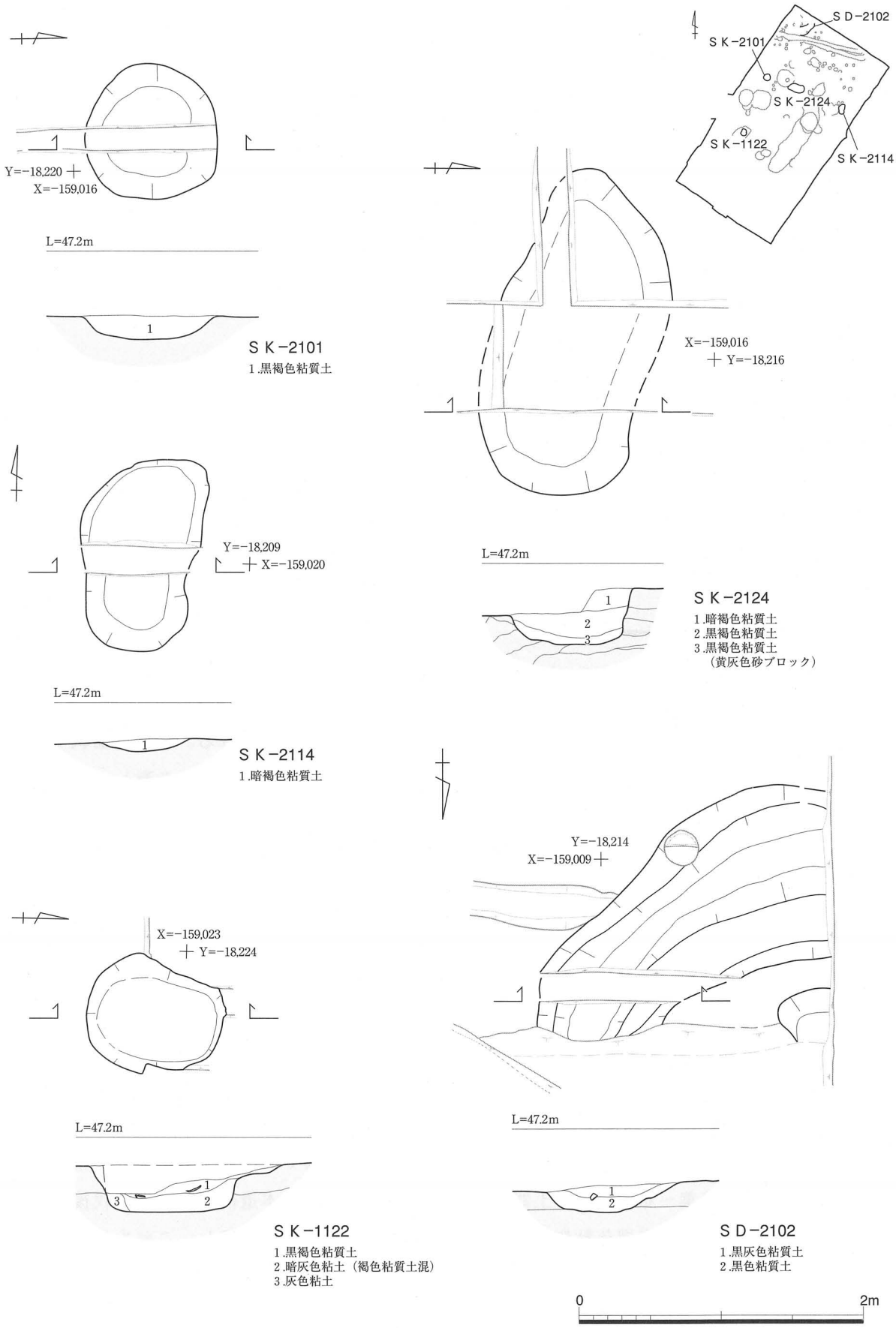
ＳＤ－2102（第425図、写真図版288）

本溝は、調査区の北隅で検出した。溝というよりは、弥生時代中期のＳＤ－2104の上面に堆積した布留期の土器溜まりの様相を呈する。というのも布留０式土器は、座標Ｙ＝－18,216mに沿って設定された幅0.70mの調査区中央アゼを境として、東側のＳＤ－2104上面にのみ分布する。その北端部は中世素掘溝に切られ不明である。本溝は北から南に向かって幅を拡げ、幅1.00～1.24mである。断面は西側にテラスを有する逆台形で、深さは0.20mを測る。堆積土は２層からなり、第１層：黒灰色粘質土、第２層：黒色粘質土である。布留期の土器溜まりとしては、テラス面から上の第１層だけであった可能性がある。

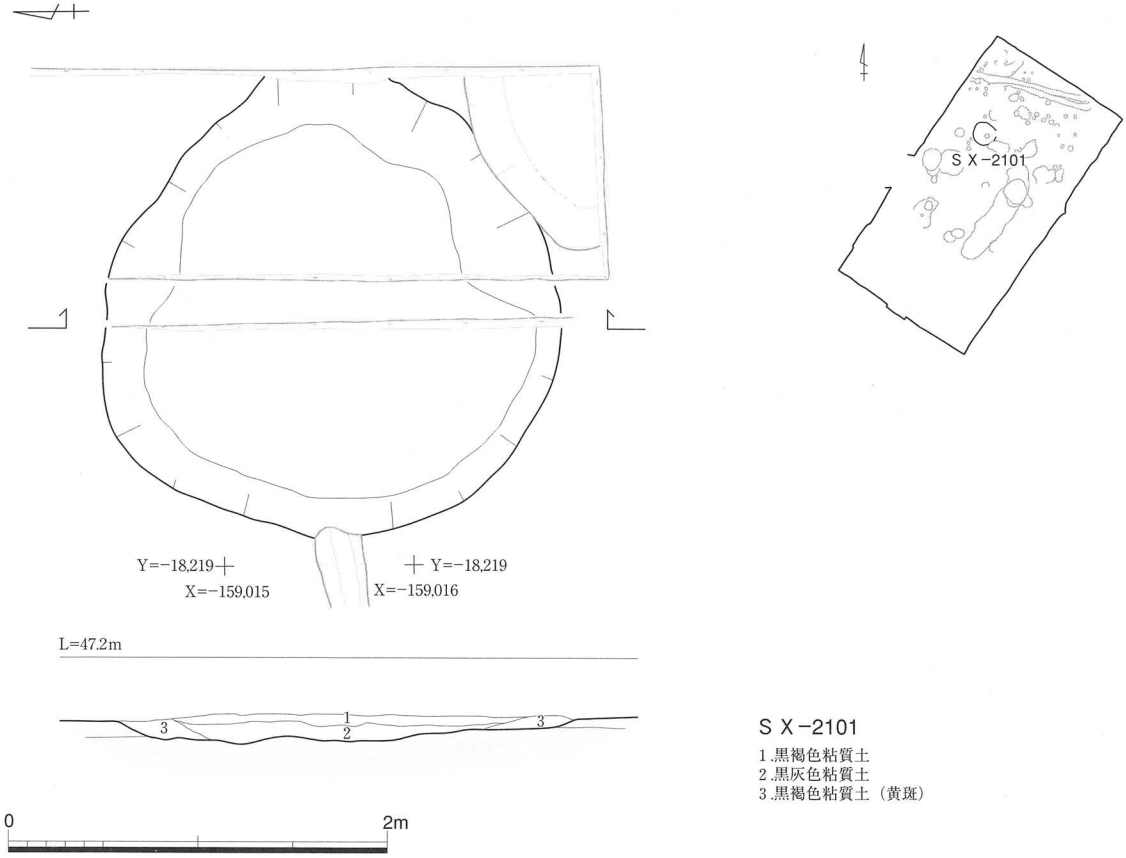
性格不明遺構

ＳＸ－1101・1102・ＳＫ－2113（第427図、写真図版289・290）

本遺構は、調査区中央で検出した。当初は、中世素掘溝に分断されることや調査次数が異なることから、ＳＫ－1120の上面のものをＳＸ－1101、大型建物跡の東側柱列（Pit－1203Ｅ～1205Ｅ）の上面のものをＳＸ－1102、中央柱列（Pit－1201Ｃ）の上面のものをＳＫ－2113として捉えていたが、これらは一連の落ち込みであろう。本遺構は細長い溝状を呈し、幅2.50m前後である。直線的なラインとして肩を検出しているが、土器溜まりとその周囲の変色から識



第425図　弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構（S＝1/40）



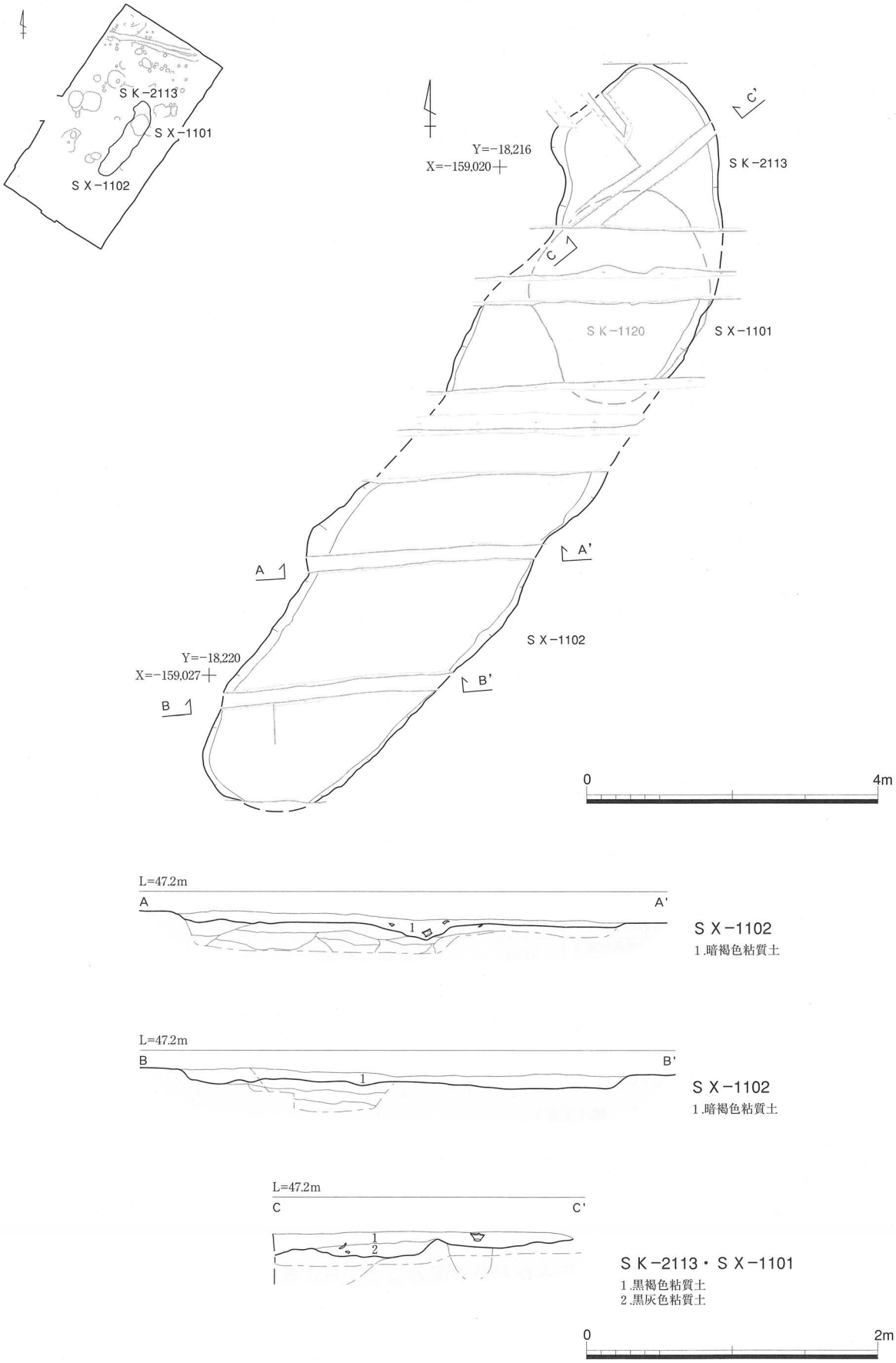
第426図　古墳時代初頭の遺構（1）（S＝1/40）

別したものであって、実際には明確な肩は有していなかったと考えられる。断面は皿状で、深さは0.10～0.20mを測る。底面も調査技術上から平坦としたが、本来は凹凸の激しいものであったと考えられる。土器は、多量の大和第Ⅵ－4様式に少量の布留0式が含まれる。

本遺構は、大型建物跡ＳＢ－1201の東側柱列とほぼ対応する。大型建物跡ＳＢ－1201の上面にあって、東側柱列上のみでこうした土器溜まりが形成されるのは、柱の抜き取りとの関連で考えられる。西側柱列の大半は柱が抜き取られているのに対し、東側柱列には柱根が残存している。残存する柱根の腐食が進むに従い、弥生時代後期～布留期の生活面に落ち込みを生じさせ、土器溜まりが形成されたのであろう。

ＳＸ－2101（第426図、写真図版286・287）

本遺構は調査区北半の西側で検出した。南端が布留期のＳＫ－2124と接する。平面は円形を呈し、径2.40mである。断面は皿状で、深さ0.16mを測る。堆積土は、上層の黒褐色粘質土、下層の黒灰色粘質土、周囲肩部の黒褐色粘質土（黄斑）の3層である。上層の黒褐色粘質土には、弥生時代後期後葉～布留0式の土器が多量に溜まっていた。本遺構は、弥生時代後期～布留期の遺物包含層となる黒褐色粘質土を掘削中に集中する土器群を認識し、これを手掛かりとして遺構輪郭を検出したため土器が浮いた状態となった。本遺構と南に接する同時期のＳＫ－2124との境は明瞭でなく、一連の浅い土器溜まりとなる可能性は高い。



第427図　古墳時代初頭の遺構（２）（平面図：Ｓ＝1/80、断面図：Ｓ＝1/40）

第73表　第Ⅵ層上面柱穴一覧表

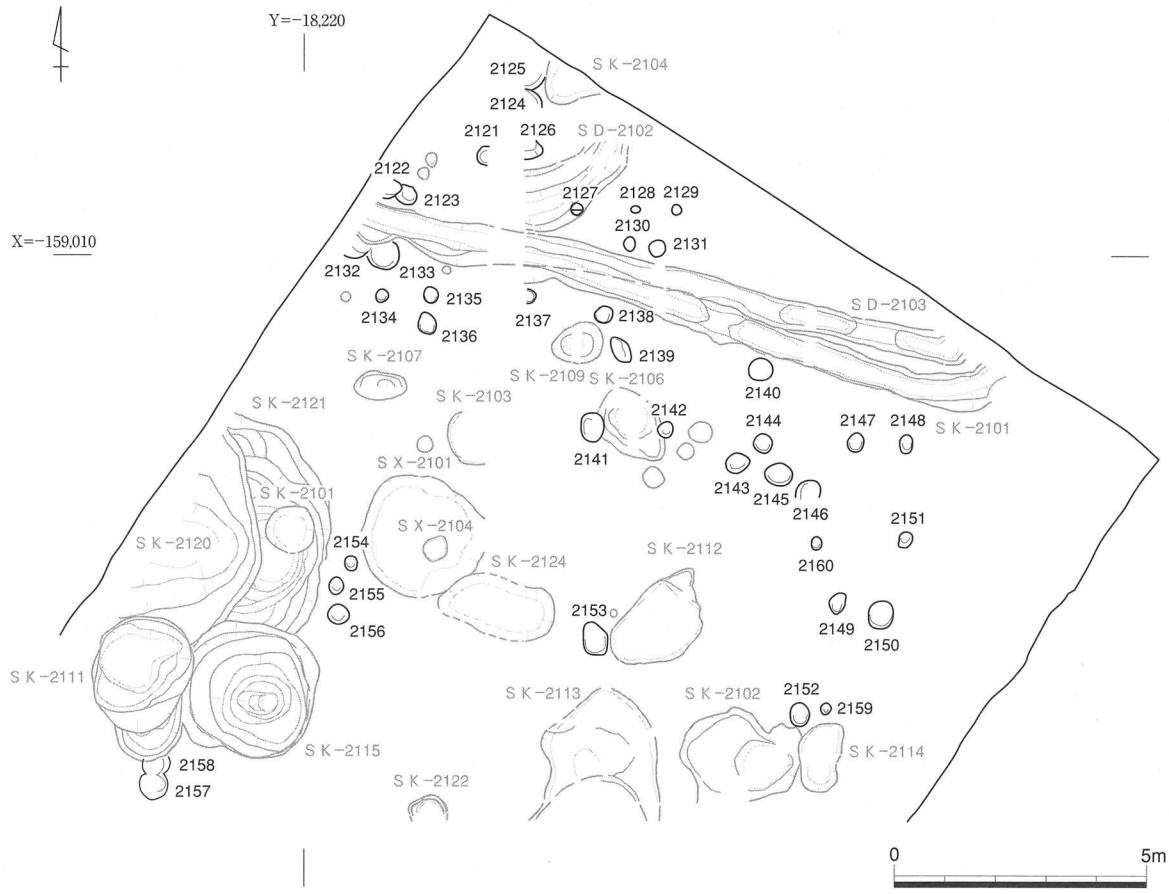
柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底標高(m)	時期(大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit−2121	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.38	—	0.18	46.64	—		
Pit−2122	不整円形	皿状	黒褐色粘質土	0.40	(0.24)	0.08	46.76	—		
Pit−2123	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	※0.50	0.38	0.11	46.70	—		
Pit−2124	不整円形	皿状	黒灰色粘質土	(0.36)	0.36	0.10	46.53	—	焼土塊	
Pit−2125	不整円形?	皿状	黒灰色粘質土	—	—	0.10	46.54	—	焼土塊	
Pit−2126	不整円形?	逆台形	黒褐色粘質土	(0.44)	—	0.23	46.59	Ⅱ−3		
Pit−2127	円形	—	黒褐色粘質土	0.24	—	—	—	—		
Pit−2128	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.18	0.14	0.05	46.75	—		
Pit−2129	円形	半円形	黒褐色粘質土	0.20	—	0.20	46.53	—		
Pit−2130	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.30	0.22	0.12	46.72	—		
Pit−2131	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.32	—	0.17	46.66	—		
Pit−2132	—	逆台形	黒褐色粘質土	—	—	0.19	46.53	—		
Pit−2133	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.60	—	0.10	46.60	中期		
Pit−2134	円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.24	—	0.20	46.66	—		
Pit−2135	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.34	0.28	0.10	46.77	—		
Pit−2136	不整形	逆台形	黒褐色粘質土	0.42	0.34	0.18	46.68	—		
Pit−2137	円形?	皿状	黒褐色粘質土	0.28	—	0.05	46.83	—		
Pit−2138	円形	—	黒褐色粘質土	0.34	—	—	—	—		
Pit−2139	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.56	0.34	0.12	46.72	—		
Pit−2140	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.48	—	0.15	46.59	—		
Pit−2141	楕円形	皿状	黒褐色粘質土(黄斑)	0.56	0.46	0.12	46.72	—		
Pit−2142	不整円形	円筒状	暗褐色粘質土(ハード)	0.32	—	0.27	46.62	—		
Pit−2143	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.46	0.38	0.07	46.81	Ⅱ−3		
Pit−2144	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.38	—	0.09	46.80	—		
Pit−2145	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.54	0.42	0.10	46.79	—		
Pit−2146	円形	皿状	黒褐色粘質土	0.46	—	0.10	46.79	—	土器片円板	
Pit−2147	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.38	0.30	0.10	46.81	—		
Pit−2148	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.36	0.26	0.22	46.66	—		
Pit−2149	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.42	0.30	0.14	46.73	—		
Pit−2150	円形	皿状	暗灰色粘質土(ハード)	0.56	—	0.10	46.78	—	杓子形土製品 焼土塊	
Pit−2151	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.26	—	0.20	46.68	—		
Pit−2152	円形	皿状	暗黄褐色粘質土(ハード)	0.46	—	0.09	46.81	—		
Pit−2153	不整形	逆台形	黒褐色粘質土(砂混)	0.68	0.50	0.23	46.66	—		
Pit−2154	円形	皿状	黒灰色粘質土	0.30	—	0.08	46.71	—		
Pit−2155	円形	皿状	黒灰色粘質土	0.34	—	0.09	46.71	—		
Pit−2156	円形	皿状	暗黄褐色粘質土(ハード)	0.42	—	0.10	46.66	—	被熱土器	
Pit−2157	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.56	—	0.24	46.62	—		
Pit−2158	円形?	円筒状	暗灰色粘質土(砂混)	0.56	—	0.29	46.58	Ⅳ		
Pit−2159	円形	円筒状	暗黄褐色粘質土(ハード)	0.20	—	0.16	46.76	—		
Pit−2160	円形	円筒状	暗褐色粘質土(黄斑)	0.24	—	0.20	46.66	—		
Pit−2161	円形	皿状	黄褐色粘質土	0.22	—	0.11	46.77	—		
Pit−2162	楕円形	皿状	—	0.44	0.25	0.15	46.73	—		

※は復原値、( )は残存値

(8) 第Ⅵ層上面の柱穴

Pit−2121〜2162（第428図、第73表）

第Ⅵ層：黄褐色粘質土の上面において、約40基の柱穴を検出した。その分布は、一面下位となる第Ⅶ層：暗灰色粘質土の上面にある大型建物跡ＳＢ−1201を避けるかのように、調査区北側のＳＤ−2101・2103付近に集中している。この点について、大型建物跡を特別視する見方もできるが、その上面は落ち込みなど多く濁ることから、柱穴を識別できていない可能性がある。柱穴の多くは、直径0.3ｍ前後で深さは0.3ｍ未満と、小規模である。遺物が少なく時期決定はできないが、検出面から弥生時代中期中葉後半〜古墳時代初頭の幅が考えられる。



第428図　第Ⅵ層上面の柱穴（Ｓ＝1/150）

（９）中世の遺構

中世の遺構は、弥生・古墳時代遺物包含層である第Ⅴ層：黒褐色粘質土の上面において検出している。第84次調査で検出していた中世大溝ＳＤ－50Ｎと中世素掘小溝である。本書においては、中世素掘小溝はこれまで割愛してきたが、本調査区においては素掘小溝から石製銅鐸鋳型片が出土していることもあり、文章として触れておく。

ＳＤ－50Ｎ（写真図版290）は、第84次調査において検出していた中世大溝ＳＤ－50の北側延長である。直線の東西溝が、本調査区西端で北へＬ字に屈曲する。大型建物跡ＳＢ－1201の西側柱列Pit－1206Ｗ・1207Ｗを切る。規模・堆積土などについては、「第４節　第84次調査報告」で報告している。

中世素掘小溝は、東－西方向のものが主体を占める。このうち、調査区北半において検出したＳＤ－2075は、他の素掘小溝よりもやや規模が大きく、上面には現行水路が沿っていることからも、地割り溝的性格をもっていたと考えられる。本溝は、大型建物跡ＳＢ－1201の西側柱列Pit－1201Ｗ・1202Ｗの柱根上面を削る。その一本北側のＳＤ－2074から、石製銅鐸鋳型片が出土した。

5．まとめ

今回の最大の成果は、弥生時代中期中葉の大型建物跡ＳＢ－1201の全容を明らかにしたことである。しかし、第84・89・93次の３年度にわたって同地での範囲（内容）確認調査をおこなったことにより、大型建物跡の周辺遺構についても多くの情報を得ることができた。特に、第80次調査区から本地に向かって延びる総延長60mのＳＤ－1114は、地形の落ち際に沿って弥生時代中期中葉に掘削され、幾度かの再掘削を経て弥生時代後期後葉まで継続することが明らかとなっている。大型建物跡の主軸は、ややずれてはいるがこの溝に沿うものといえよう。また、第89次調査のＳＤ－1115、小溝のＳＤ－1110・1111・1117は、ＳＤ－1114に連結している。このＳＤ－1114が、大型建物も含めた周辺遺構の基準となっていた可能性は高い。

まず、第93次調査区の成果について、地形、遺構を時期別にまとめる。

地形

今回の調査区内では、顕著な地形の変化を認めることはできなかった。しかし、南東から北西に向かって並んだ弥生時代中期後葉～後期後葉の井戸が示すように、その方向で砂層のベースとなっている。大型建物跡は、この砂層を跨ぐように立地する。微高地上ではあるが、地盤が安定しているとは言い難い。また、ＳＤ－1114とこれに直交する溝が示すように、微高地は北西から南東に向かって落ち込んでいる。この微高地において、大型建物跡は南東末端に位置し、その中心は北西部にあるものと想定される。

遺構

弥生時代前期　第Ⅶ層：暗灰色粘質土の上面では、弥生時代前期の遺構を検出することも可能であったが、大型建物跡の柱穴掘形保存のため、ほとんど調査をおこなっていない。しかし、大型建物跡の柱穴や大型遺構の断面で確認する限り、その遺構分布密度は極めて高いものと考えられる。また、他時期遺構に混入した前期弥生土器には、古相の特徴をもつもの（大和第Ⅰ－１様式）も多い。本調査区が、微高地であり弥生時代前期の古い段階から利用されていたことを示すものといえる。

弥生時代中期初頭～前葉　第Ⅶ層：暗灰色粘質土の上面において、灰層（ＳＸ－2109）の拡がりと焼土面を確認した。灰層（ＳＸ－2109）中からは、大和第Ⅱ－１様式の土器が出土している。このことから、第Ⅶ層上面が、弥生時代中期前葉の生活面であったと考えられる。また、周辺の他時期遺構からも、混入したと考えられる発泡あるいは溶解した大和第Ⅱ－１様式土器、円形土台状土製品や焼土塊が多く出土する。高熱を伴ったと考えられる焼土面や発泡土器、焼土塊は、特殊な印象を与えるものである。今後、これら遺構・遺物の性格を慎重に検討していく必要があろう。この他、ＳＫ－2206はサヌカイト剥片が詰まった土坑である。周辺で石器生産がおこなわれていたことを示す資料となる。

弥生時代中期中葉　この段階において、北東－南西に走行するＳＤ－1114の掘削と大型建物の築造があり、本調査区周辺に大きな画期があったと考えられる。ＳＤ－1114は、これを境

として西側が高く、東側が落ち込んだ地形であり、微高地末端を画するが如き様相を呈する。本溝には、ＳＤ－1115や小溝ＳＤ－1110・1111・1117が直交して取り付いており、西側微高地からの排水をおこなっていたこともうかがえよう。また、大型建物跡が北東－南西に軸をもつのは、先に掘削されたこの溝に軸を合せたことによるものと考えられる。ＳＤ－1114は、区画溝としての役目も有していたのであろう。

大型建物跡の詳細については後述するが、出土遺物と遺構の切り合い関係から、大和第Ⅲ－２様式には築造され、大和第Ⅲ－４様式までには廃絶していたものと考えられる。ＳＫ－1128は、Pit－1206Wの柱根抜き取り坑上に形成された大和第Ⅲ－４様式土器と炭を含む落ち込みである。この段階までには大型建物は、火を受け解体されていたと考えられる。また、大型建物跡の身舎位置に大和第Ⅳ～Ⅴ様式の井戸が多数掘り込まれていることも、弥生時代中期後葉までには解体されていたことを示唆する。

この他、注目すべき遺構として大型建物跡の北西側に掘り込まれたＳＫ－2120・2121がある。時期は大和第Ⅲ－１・２様式であり、今回検出の大型建物と併存していた可能性が高い。ＳＫ－2121をＳＫ－2120が切っているが、その境は明瞭でなく、同一地点に時間を置かず掘削された井戸の可能性が高い。このうち、ＳＫ－2120からは、柄付きの打製石戈が出土している。

弥生時代中期後葉　注目すべき遺構として、調査区の北端で検出したＳＤ－2101がある。溝は西北西－東南東に走行し、調査区東端の区画溝ＳＤ－1114に直交するかのようであるが、その手前で北側へと屈曲し並行する。弥生時代後期初頭にはＳＤ－2103が、その北側に接するように再掘削される。本溝は、東端で北側へと屈曲しＳＤ－1114に並行する状況から、第80次調査区のＳＤ－102に繋がるものと考えられる。あたかも、区画溝ＳＤ－1114で区画された微高地のさらに小区画といった様相を呈する。

弥生時代後期～古墳時代初頭　弥生時代後期初頭は、弥生時代中期後葉と同様に井戸を掘り込んでいる。これに対し、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構は、不定形で浅いものが多い。その一方で、比較的形を止めた土器群が廃棄されているのが特徴である。竪穴住居跡の可能性も想定されよう。また、大型建物跡の柱列に沿って、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の土器溜まりが形成される。

第93次調査区における成果は以上のとおりであるが、このうち特に注目すべき点について第84・89次調査区の成果もあわせてまとめておく。

大型建物跡について　第93次調査で全容を明らかにした大型建物跡ＳＢ－1201は、桁行６間（約13.2m）、梁間２間（約6.0m）で、棟通りにも柱列をもった総柱型であるが、独立棟持柱はもたない。時期は、弥生時代中期中葉である。

唐古・鍵遺跡の大型建物跡としては、第74次調査に続き２例目の検出となった。今回の大型建物跡は、第74次調査のように独立棟持柱をもたないが、一方においては総柱型といった

共通点もある。今回の大型建物跡と第74次調査の大型建物跡は約200mの距離をもつが、地区的には同じ西地区となる。時期は第74次調査区の大型建物跡が集落の大環濠が成立する以前の大和第Ⅱ－２～３様式に位置付けられたのに対し、今回のものは大環濠成立以後の大和第Ⅲ－２～３様式に位置付けられる。その他、第74次調査区の遺構密度が希薄であったのに対し、今回の第93次調査区は遺構密度が高いといった違いがある。

独立棟持柱をもつ建物は、近畿地方の弥生時代の全期間に通有な建物であるから、第74次調査と今回の大型建物における建築構造の差が、時期差に関連するのは薄いとみてよいだろう。むしろ、建築構造と立地場所における遺構密度の差に、何らかの関連が求められるのかも知れない。唐古・鍵遺跡のような大集落には、地点ごとにそれぞれの機能をもった大型建物施設が配置されていたことも想定できよう。

前身建物の有無について　今回検出した大型建物跡とは別に、第84次調査で２基、第89次調査で１基の大型柱穴を検出している。いずれも、距離的に離れていることや、掘形と柱根の位置関係から、それぞれ異なる建物に伴うものと考えられる。今回の大型建物跡以外に、周辺には３棟の大型建物跡の埋没が想定されるのである。このうち、第84次調査区東排水溝で検出した直径60cmの大型柱根をもつPit－104は、弥生時代中期中葉の小溝であるＳＤ－110に上面を切られることから、今回検出の大型建物の前身建物である可能性が高い。本調査区周辺は、大型建物の集中する地区であったことがうかがえる。

区画溝について　弥生時代中期後葉～後期初頭のＳＤ－2101・2103も注目すべき遺構である。ＳＤ－2101・2103は、西北西－東南東に走行し区画溝ＳＤ－1114の直前で北側へ屈曲、第80次調査区では両者が並行する形で検出されている。あたかも、本調査区の北側、区画溝ＳＤ－1114に区画された微高地内をさらに区画しているかの様である。第80次調査区では、区画溝ＳＤ－1114から翡翠製大形勾玉を２個収めた鳴石容器や直立した完形の無文広口壷が出土している。また、区画溝ＳＤ－1114から出土した大和第Ⅳ様式の絵画土器が、ＳＤ－2101・2103と並行する部分に集中したことも意味をもつのかもしれない。ＳＤ－2101・2103に囲まれた、弥生時代中期後葉～後期初頭の特殊地区を想定することも可能である。

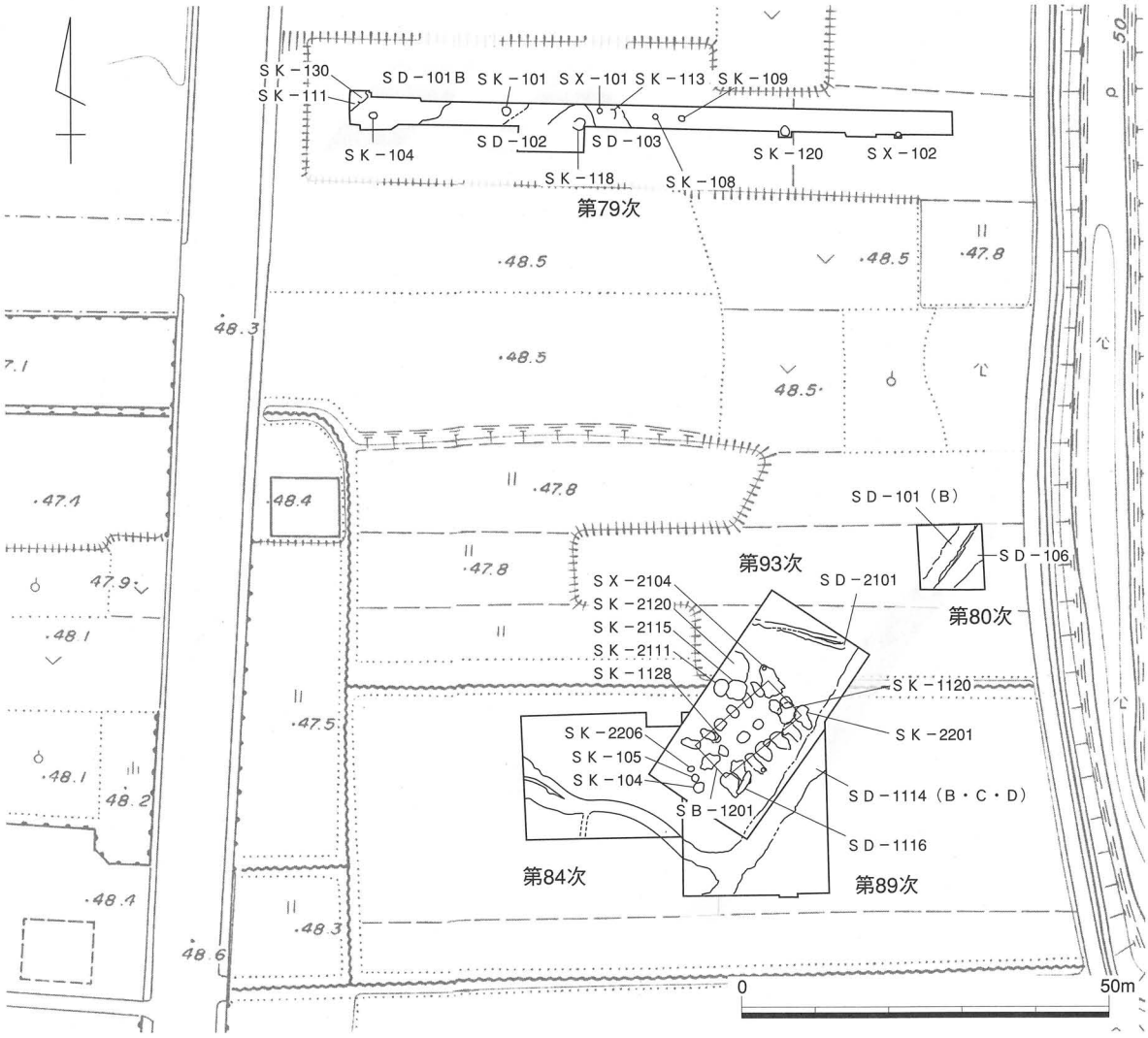
本調査区周辺では、大型建物が継続的に築造され、また溝で区画された地点のあることがうかがえる。西地区と呼ばれるなかで、特殊な場所であったことが想定されよう。また、本地は微高地の末端に過ぎず、その中心はより北西側にあると予想される。

第７節　西地区の出土遺物

１．土器

（１）第79次調査

第79次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は230箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は147箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、３割５分減である。また、調査面積約276㎡であるから、１㎡あたり0.53箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ147箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝41箱（27.9%）、弥生時代土坑31箱（21.1%）、弥生時代溝67箱（45.6%）、柱穴群７箱（4.8%）、弥生時代土器埋納坑１箱（0.7%）である。



第429図　西地区の主要遺構（S＝1/1,000）

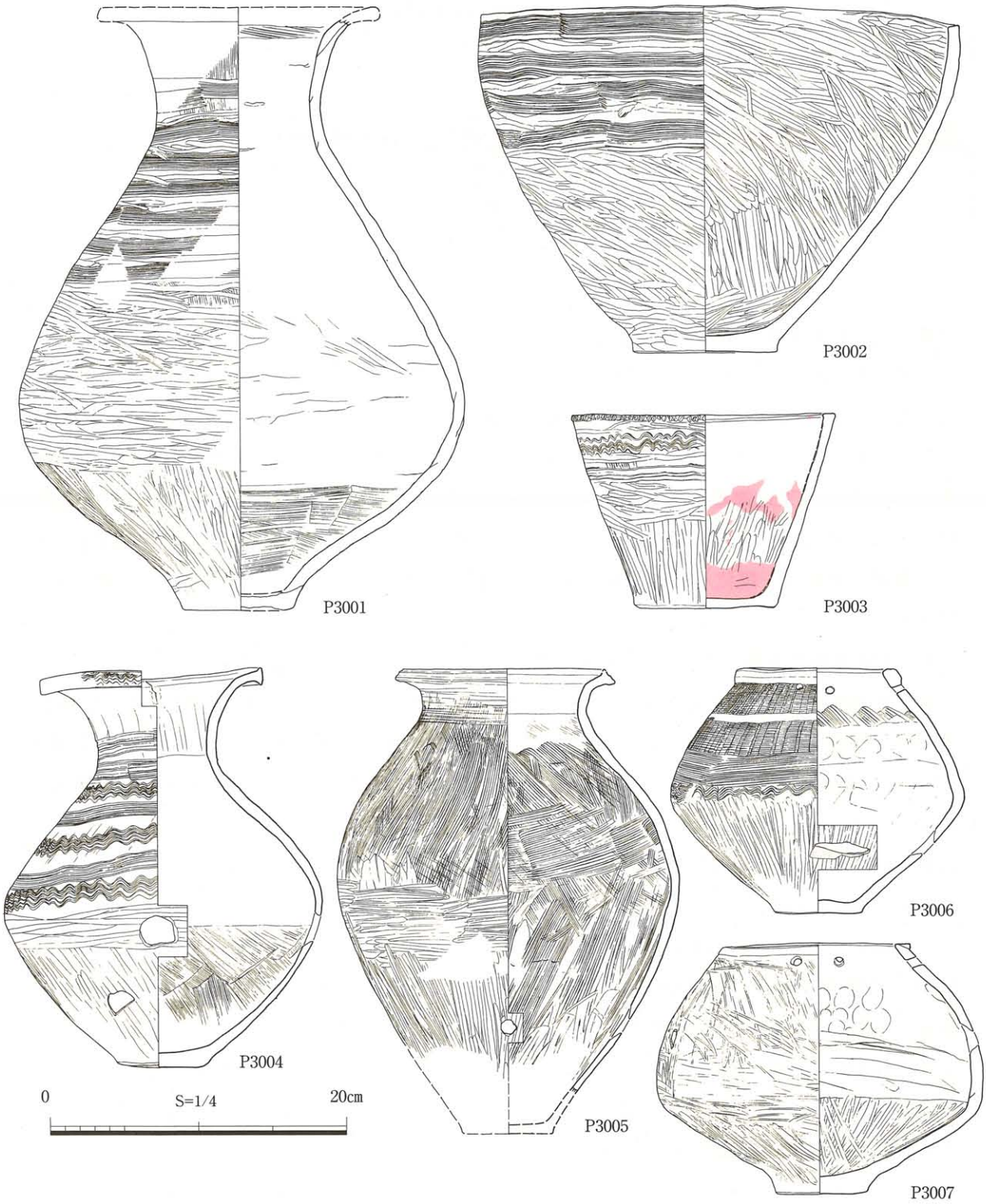
遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3001 図版323-1	広口壷	79次	SK-118	第5・6層	器高 ※40.2 胴径 30.2 底径 6.7	(外)頸部及び胴部上半は縦位ハケ後、櫛描き直線文7帯。胴部下半は縦位ミガキ。胴部最大径付近は横位ミガキ。 (内)胴部下半は横位ハケ。胴部上半はナデ。	半完形品	Ⅱ-3-b
P 3002 図版323-2	鉢	79次	SK-118	第5層	器高 23.6 口径 31.8 底径 9.8	(外)胴部上半に櫛描き直線文(11本/1.55cm)4帯。胴部下半は左上がりミガキ。底面に木葉圧痕。 (内)胴部下半は縦位ミガキ。胴部上半は左上がりミガキ。	半完形品	Ⅱ-3-b
P 3003 図版323-3	鉢	79次	SK-118	第4層	器高 13.2 口径 17.5 底径 8.8	(外)口縁部外端に刻目。胴部上半に、櫛描き波状文1帯、櫛描き直線文1帯。胴部下半は縦位ミガキ後、その上部を横位ミガキ。 (内)縦位ミガキ。	外面に煤、内面にベンガラ付着 半完形品	Ⅲ-1
P 3004 図版323-4	広口壷	79次	SK-101	第5層	器高 27.1 口径 14.4 胴径 21.6 底径 5.0	(外)口縁部に櫛描き波状文1帯。頸部に櫛描き直線文2帯。胴部上半に、櫛描き波状文1帯、直線文 1帯、波状文1帯、直線文1帯、波状文1帯(14本/1.4cm)。胴部下半は縦位ミガキ。胴部最大径付近は横位ミガキ。 (内)胴部下半は左上がりハケ。胴部上半はナデ。	胴部最大径付近及び胴部下半に穿孔 穿孔と対称の底部磨滅 完形品(一部欠)	Ⅲ-4
P 3005 図版323-5	広口壷	79次	SK-101	第6層	口径 13.5 胴径 23.1	(外)口縁端部は上方に突出。口縁端部に凹線文2条。胴部は最大計付近を左上がりタタキ後、上半を右上がりの横位タタキ、下半は底部からの縦位ケズリ。その後、胴部上半を頸部からの縦位ハケ、胴部下半を縦位ミガキ後、最大径付近を横位ミガキ。頸部はヨコナデ。 (内)胴部下半は右上がりハケ後、一部を縦位ケズリ。胴部上半は左上がりハケ後、最大径付近を右上がりの横位ハケ。頸部はヨコナデ。	口縁部は打ち欠き 胴部下半穿孔 半完形品(底部を欠く)	Ⅲ-4
P 3006 図版324-1	無頸壷	79次	SD-101B	第7(下)層	器高 16.6 口径 9.5 胴径 19.9 底径 5.8	(外)胴部上半に、櫛描き簾状文2帯、櫛描き直線文1帯、櫛描き波状文1帯(22本/2.6cm)。胴部下半は縦位ミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内)ナデ。胴部上半に左上がりのハケを残す。	胴部下半穿孔 完形品	Ⅳ-1
P 3007 図版324-2	無頸壷	79次	SK-104	第3層	器高 16.9 口径 10.8 胴径 22.1 底径 5.6	(外)胴部上半及び胴部下半は縦位ミガキ。胴部最大径付近は横位ミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内)胴部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。胴部最大径付近は左上がりケズリ後、ナデ。	半完形品	Ⅴ-1

ＳＫ－118出土土器（第430図、写真図版323）

ＳＫ－118からは、コンテナ２箱（1.4%）の土器が出土している。このうち、下層の青味のかかった灰色系粘土からは、接合によって全形を復原し得る広口壷（Ｐ3001）、大型の直口鉢（Ｐ3002）が出土した。また、上層では、中層直上の暗灰色粘土から笊とともに直口鉢（Ｐ3003）が出土している。これらは、大和第Ⅱ－３－ｂ様式と大和第Ⅲ－１様式の土器型式区分に層位的根拠を与える資料である。

Ｐ3001は、頸部が短く胴部が下膨れの形態でありながら、櫛描き直線文による文様帯が頸部から胴部上半の上部までの施文であるため、アンバランスな印象を受ける。施文されない胴部上半の下部は、横位ミガキが施される。Ｐ3002は、口縁部がやや内湾し端部には面をもつ。胴部上半に４帯の櫛描き直線文を施している。どちらも、大和第Ⅱ－３－ｂ様式の特徴的な器種である。

上層から出土したＰ3003は、口径と底径はさほど違わず、口縁部から底部に向かって直線的にすぼまったあたかも「バケツ」のような器形である。口縁端部には刻目を施している。大和第Ⅲ－１様式に特徴的な器種である。なお、内面にはベンガラが付着している（「特殊遺物・考察編」で赤色顔料容器（Ｐ5308）として再掲載されている）。



第430図　西地区出土土器（１）

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P3008 図版324-4	鉢	79次	SK-113	第2層	器高 18.7 口径 25.6 底径 7.0	(外)胴部上半に櫛描き直線文(11本/12cm)3帯。胴部下半は横位ミガキ。口縁端部に板状工具による刺突文。 (内)横位ミガキ。	内面に炭化物付着 半完形品	Ⅲ-1
P3009 図版325-1	鉢	79次	SX-101	第1層	器高(30.0) 口径 48.0	(外)口縁部から下がった位置に貼付凸帯1条。凸帯上に刻目。口縁部と凸帯間に櫛描き波状文1帯。凸帯下には交互に櫛描き波状文4帯と直線文(9本/1.55cm)4帯。胴部下半は縦位ケズリ後、ミガキ。 (内)左上がりハケ。外面の櫛描き文に対応するヨコナデ。	底部破断面及び口縁部は著しく磨滅	Ⅲ-3
P3010 図版324-5	甕	79次	SX-102	第1層	器高 50.9 口径 36.8 胴径 41.2 底径 10.0	(外)胴部は縦位ハケ。底部側面はヨコナデ。 (内)胴部上半は左上がりハケ後ナデ。胴部下半は右上がりミガキ。		Ⅲ-2

ＳＫ－101出土土器（第430図、写真図版323）

ＳＫ－101からは、コンテナ２箱（1.4%）の土器が出土している。中層の下位から、完形の広口壷（Ｐ3004）、底部を打ち欠いた無文広口壷（Ｐ3005）が出土した。

Ｐ3004は、ヨコナデによって口縁端部が上方と下方に突出する。胴部最大径付近にはかすかな稜があり、下地調整として横位方向のケズリが施されていたことを示している。Ｐ3005は、ヨコナデによって口縁端部が上方に突出し、拡張された端面には２条の凹線が施されている。胴部上半には、縦位ハケの下地にタタキが観察できる。これらは、大和第Ⅲ－４様式の特徴をもつ。

ＳＤ－101Ｂ出土土器（第430図、写真図版324）

ＳＤ－101（Ｂ・Ｃ・Ｄ）からは、コンテナ30箱（20.4%）の土器が出土している。しかし、本報告で図化し得たのは、唯一の完形であったＳＤ－101Ｂの無頸壷（Ｐ3006）１個体に過ぎない。Ｐ3006の胴部上半に施された櫛描き文は原体幅2.6cmと幅広く、大和第Ⅳ様式の特徴である。

ＳＫ－113出土土器（第431図、写真図版324）

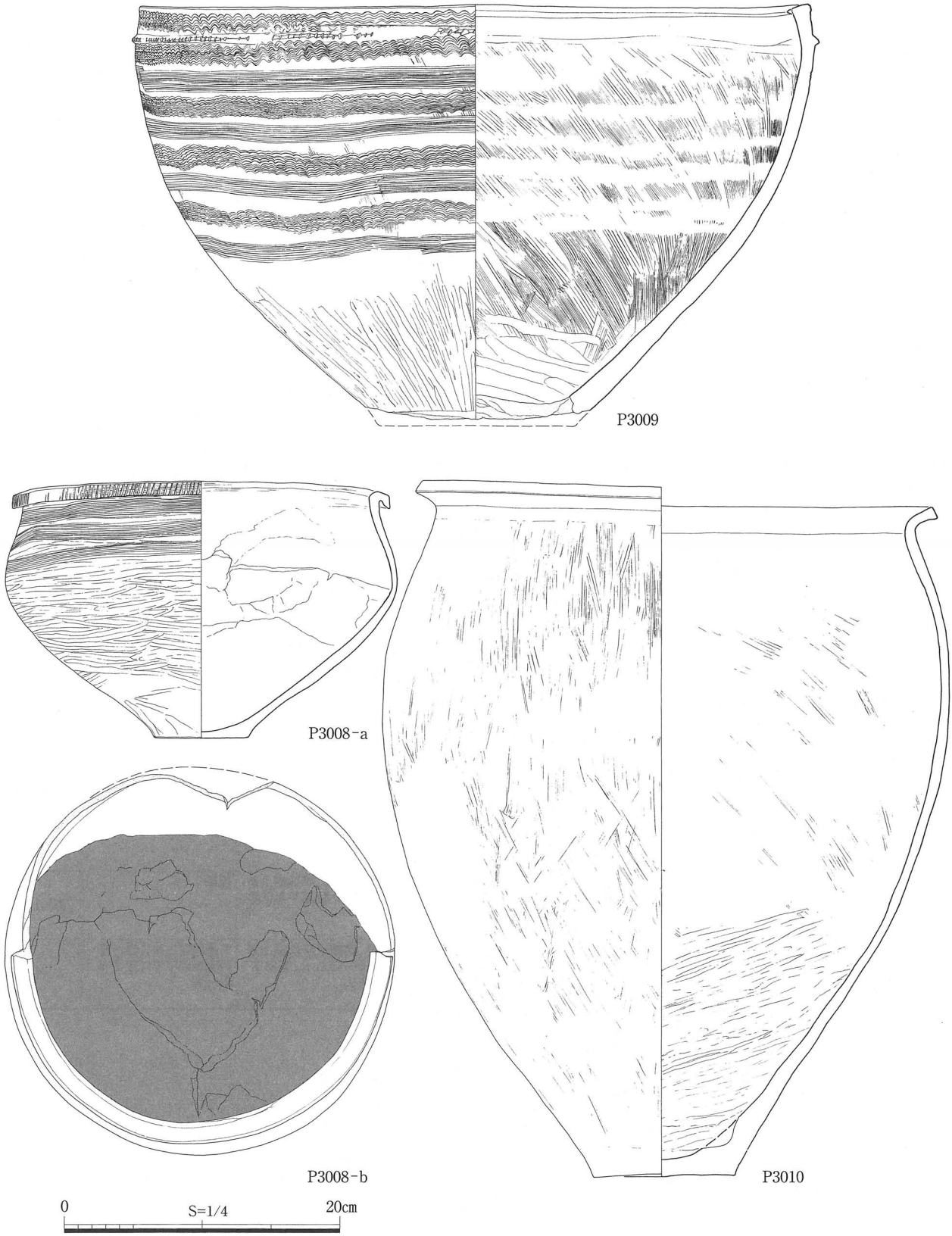
ＳＫ－113からは、コンテナ１箱（0.7%）の土器が出土している。ＳＫ－113は、ＳＤ－103に切られていて、これを識別することなく掘り下げたため、コンテナ１箱のほとんどは鉢（Ｐ3008）の破片である。Ｐ3008の深い鉢部と折り返した口縁部は、大和第Ⅲ－１様式の典型である。内面には、炭化物が付着する。

ＳＸ－101出土土器（第431図、写真図版325）

ＳＸ－101からは、コンテナ１箱（0.7%）の土器が出土している。そのほとんどが、集水枠として設置されていた大型鉢（Ｐ3009）の破片である。口縁部に断面三角凸帯をもち口径50cmに及ぶ大型鉢は、大和第Ⅲ－３様式を代表する器種である。

ＳＸ－102出土土器（第431図、写真図版324）

ＳＸ－102からは、コンテナ１箱（0.7%）の土器が出土している。そのほとんどが、正立した状態で設置されていた大型甕（Ｐ3010）の破片である。大型甕でありながら、胴部上半にタタキを残さず、口縁端部の突出もないことから、大和第Ⅲ－２様式と考えられる。

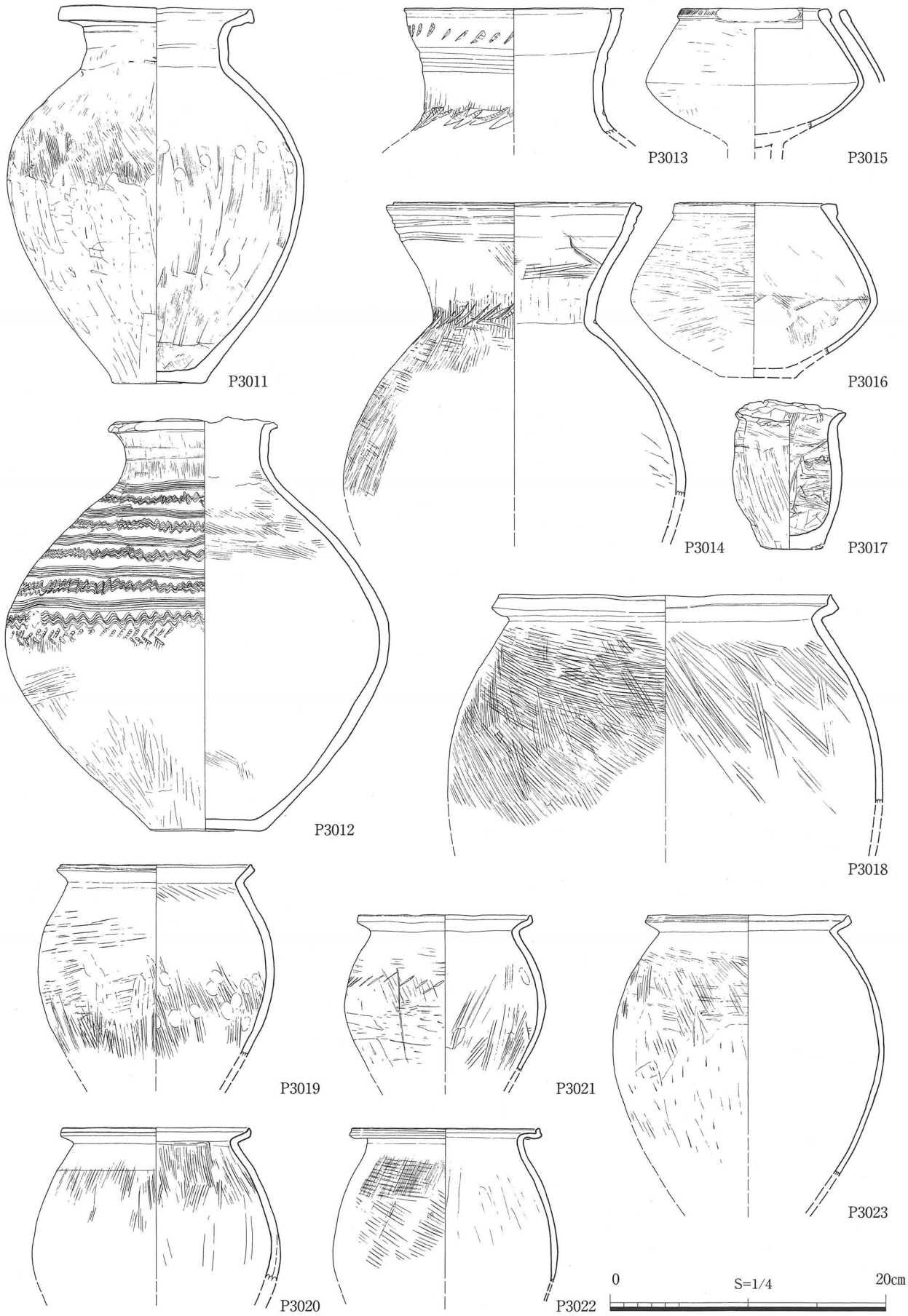


第431図　西地区出土土器（２）

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P3011 図版327-1	広口壷	80次	SD-101B	第11層	器高 27.6 口径 13.6 胴径 21.5 底径 6.4	(外)胴部最大径は左上りハケ。胴部上半は縦位ハケ。その後、胴部下半を底部からの縦位ケズリ。 (内)胴部下半は縦位ハケ後、ナデ。胴部上半は指頭圧痕。	底面すれる 完形品	Ⅳ-1
P3012 図版327-2	広口壷	80次	SD-101B	第10層	器高(30.1) 口径(11.6) 胴径 27.9 底径 8.2	(外)胴部上半に櫛描き直線文(5本/0.9cm)5帯、櫛描き波状文5帯を交互に施文。最下段に櫛描き刺突による羽状文。胴部下半は縦位ミガキ後、胴部最大径付近を横位ミガキ。 (内)胴部下半は縦位ハケ。胴部上半は左上がりハケ。	口縁部破面を研磨	Ⅳ-1
P3013 図版328-1	短頸壷	80次	SD-101	第3層 第5層	口径(15.6)	(外)頸部は縦位ハケ。口縁端部に凹線文1条、頸部中位に凹線文2条。口縁端部と頸部の凹線文間、頸部にハケ状工具による刺突文。 (内)口縁部は左上がりハケ。		Ⅳ-1
P3014 図版328-2	短頸壷	80次	SD-101	第6層	口径 17.4	(外)頸部は縦位ハケ。胴部は左上がりタタキ後、縦位ハケ。口縁端部に凹線文1条。口縁部に凹線文3条。頸部にハケ状工具による刺突文。 (内)頸部は横位ハケ。胴部はナデ。		Ⅳ-1
P3015 図版328-3	無頸壷	80次	SD-101	第6層	口径 10.4 胴径 15.8	(外)胴部上半は横位ミガキ。胴部下半は縦位ミガキ。口縁部に刺突文。口縁部の一端を削り込む。 (内)ナデか。磨滅の為、調整は不明。		Ⅳ-1
P3016 図版328-4	無頸壷	80次	SD-101	第6層	口径 10.0 胴径 18.0	(外)横位ミガキ。 (内)胴部下半は左上がりハケ。胴部上半は左上がりハケ後、ナデ。	内外面に煤付着	Ⅳ-1
P3017	甕	80次	SD-101B	第6層	器高 10.9 口径 8.0 胴径 8.0 底径 4.4	(外)胴部は縦位ハケ。その後、頸部は横位ハケ。 (内)右上がりハケ。	完形品	Ⅳ-1
P3018	甕	80次	SD-101B	第6層	口径 24.0 胴径 31.6	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりの横位タタキ後、左上がりハケ。 (内)左上がりハケ後、ナデ。	外面に煤付着 内面に炭化物の付着	Ⅳ-1
P3019 図版328-5	甕	80次	SD-101	第6層	口径 13.7 胴径 17.2	(外)胴部上半は右上がりの横位タタキ後、ナデ。胴部下半は底部からの縦位ケズリ後、縦位ハケ。 (内)縦位ハケ。胴部上半に指頭圧痕。	外面に煤付着 内面に炭化物の付着	Ⅳ-1
P3020 図版328-7	甕	80次	SD-101B	第11層	口径 13.4 胴径 18.0	(外)口縁端部は上方にやや突出。胴部上半は縦位ハケ。その後、頸屈曲部にヨコナデ。胴部下半はケズリか。 (内)胴部上半は縦位ハケ。胴部下半は右上がりハケ後、ナデ。	外面に煤付着	Ⅳ-1
P3021 図版328-8	甕	80次	SD-101B	第12層	口径 12.4 胴径 14.6	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりのタタキ後、縦位ハケ。胴部下半は縦位ケズリ後、横位ケズリ。胴部に刺突文。 (内)胴部は縦位ハケ後、上半をナデ。頸屈曲部をヨコナデ。	外面に煤付着 内面に炭化物の付着	Ⅳ-1
P3022	甕	80次	SD-101	第5層	口径 13.4 胴径 16.4	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりの横位タタキ後、縦位ハケ。胴部下半は縦位ケズリか。 (内)ナデ。	被熱	Ⅳ-1
P3023 図版328-6	甕	80次	SD-101	第9層	口径 14.6 胴径 19.7	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりの横位タタキ後、左上がりのハケ。胴部下半は底部からの縦位ケズリ。 (内)磨滅の為、調整は不明。	外面胴部上半に煤付着 内面胴部下半に炭化物の付着	Ⅳ-1

（2）第80次調査

第80次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は215箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は153箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、3割減である。また、調査面積約72㎡であるから、1㎡あたり2.13箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ153箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝26箱（17.0%）、弥生時代土坑1箱（0.7%）、弥生時代溝126箱（82.4%）となった。このうち、ＳＤ－101（Ｂ）が82箱（53.5%）を占めている。



第432図　西地区出土土器（３）

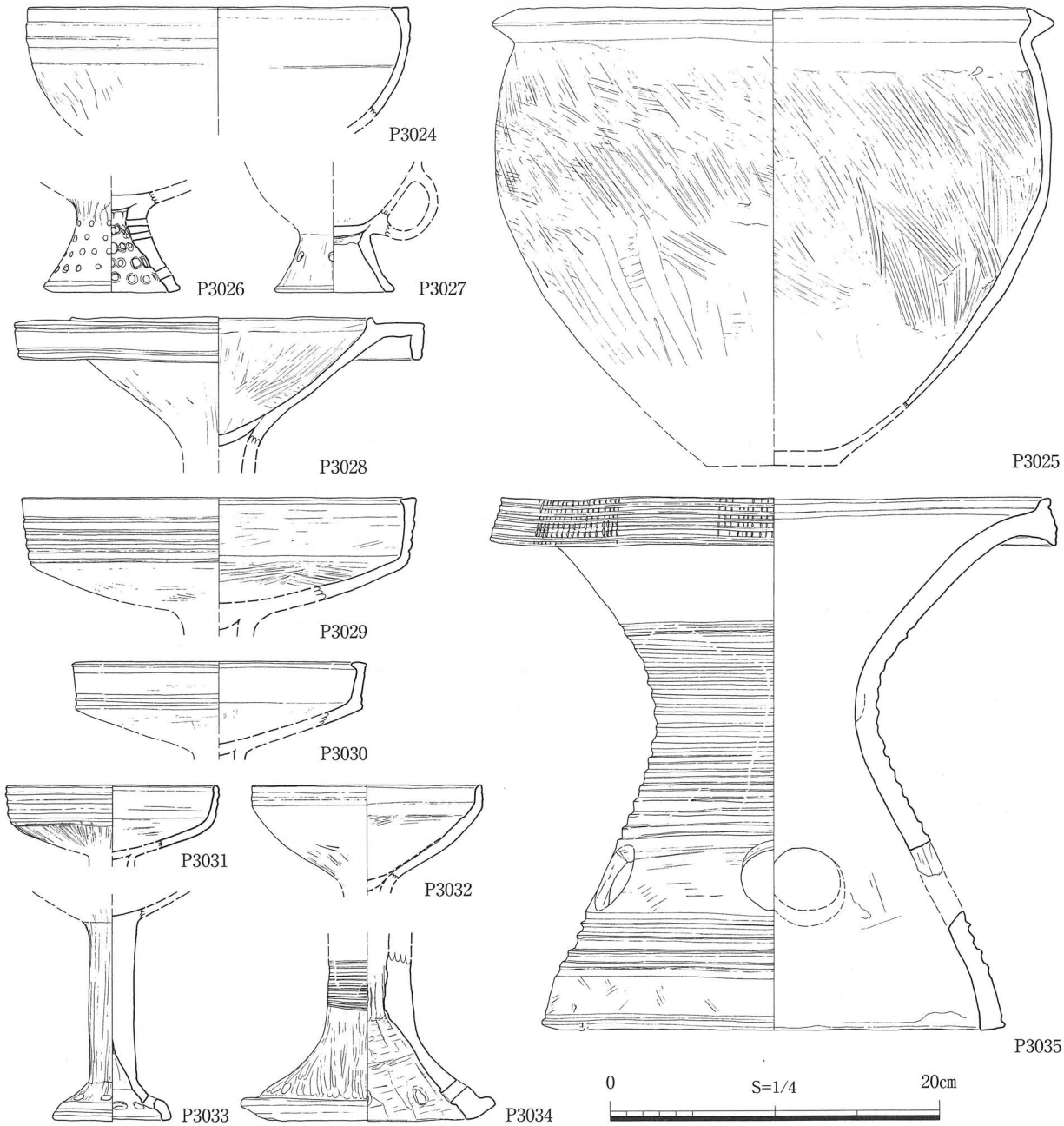
遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3024	鉢	80次	SD−101B	第8層	口径 21.2	(外)胴部上半は、凹線文4条。胴部下半は、上から下への縦位ケズリ。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P 3025 図版327−4	鉢	80次	SD−101B	第6層	口径 31.0 胴径 34.0	(外)胴部上半は横位タタキ後、左上がりのタタキ。その後、胴部上半を左上がりハケ。胴部下半は縦位ケズリ。 (内)左上がりハケ。		Ⅳ−1
P 3026	台付鉢	80次	SD−101B	第9層	底径 7.0	(外)脚裾部に浅い凹線文1条。4孔縦1列(1ヶ所のみ5孔)の透孔。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P 3027	把手付 台付鉢	80次	SD−101B	第6層	底径 6.4	(外)脚部中位に6方向の透孔。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P 3028 図版327−5	水平縁 高坏	80次	SD−101B	第6層	口径 18.0	(外)垂下部の上端と下端に凹線文1条。坏部は縦位ケズリ後、ミガキ。 (内)坏部は放射状のミガキ。	坏部ほぼ完存 (脚部付近が破損)	Ⅳ−1
P 3029	高坏	80次	SD−101	第5層	口径 23.6	(外)口縁部のやや下がった位置から坏屈曲部まで凹線文5条。 (内)横位ミガキ。		Ⅳ−1
P 3030	高坏	80次	SD−101	第5層	口径 16.2	(外)口縁部に凹線文1条、屈曲部に凹線文2条。坏部下半は縦位ミガキ。その後、坏屈曲部付近を横位ミガキ。 (内)口縁端部は内方に著しく突出。磨滅の為、調整は不明。		Ⅳ−1
P 3031	高坏	80次	SD−101B	第6層	口径 12.4	(外)坏部上半に凹線文4条。坏部下半は縦位ミガキ。その後、坏屈曲部付近を横位ミガキ。 (内)横位ミガキか。磨滅の為、調整は不明。		Ⅳ−1
P 3032	高坏	80次	SD−101	第5層	口径 13.6	(外)坏部上半に凹線文2条。坏部下半は縦位ケズリ後、横位ケズリ。 (内)横位ミガキか。磨滅の為、調整は不明。		Ⅳ−1
P 3033	高坏	80次	SD−101B	第6層	底径 6.3	(外)脚裾部に6方向の透孔。脚裾端部に凹線文2条。脚柱部は縦位ミガキ。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P 3034	高坏	80次	SD−101B	第9層	底径 12.0	(外)脚裾部に6方向の透孔。脚裾部は縦位ミガキ。脚柱部に櫛描き直線文(3本/5mm)3帯以上。 (内)右回りの横位ケズリ。		Ⅳ−1
P 3035 図版327−3	器台	80次	SD−101B	第8層	器高(32.5) 口径 32.8 底径 25.2	(外)体部下半に5方向の透孔。凹線文は、口縁端部に5条、体部に15条、透孔を挟んで脚部に5条、脚裾端部に1条。また、口縁端面の凹線を切って、ヘラキザミ7方向。 (内)丁寧なナデ。		Ⅳ−1

ＳＤ−101Ｂ出土土器（第432・433図、写真図版327・328）

ＳＤ−101Ｂからは、コンテナ11箱（7.2%）の土器が出土している。このうち、特徴的な壷6個体、甕7個体、鉢4個体、高坏7個体、器台1個体、合計25個体を図化した。これらの出土層位は下層と中層に分かれるが、両者はいずれも大和第Ⅳ−1様式の特徴を有し時期差はないと考えている。また、上層のＳＤ−101出土土器は大和第Ⅴ〜Ⅵ−4様式を主体とするが、大和第Ⅳ−1様式の特徴をもつものについては、あわせてここに掲載した。本溝からは、大型翡翠製勾玉2個（Ａ5018・5019）を収納した鳴石容器（Ａ5016）が出土しており、その取り上げ層位は第6層である。上層からの掘り込みによる鳴石容器の埋納も想定できないわけではないが、蓋とされる土器片（Ａ5017）も大和第Ⅳ様式の甕胴部片であり、本溝の出土土器が鳴石容器の埋納あるいは廃棄年代の手掛かりになると考えている。

Ｐ3011は、下層から直立して出土した広口壷である。口縁端部の上方への突出、胴部下半の鋭いケズリは大和第Ⅳ−1様式の特徴をよく示している。Ｐ3013・3014の短頸壷も、大和第Ⅳ様式の特徴的な器種である。

Ｐ3019〜3023の甕は、ヨコナデによって口縁端部を上方に突出させ、頸部に施されたヨコナデが胴部上半に深く及んでいる。胴部上半のタタキと下半のケズリが顕著である。



第433図　西地区出土土器（４）

Ｐ3035の器台は、鼓のように体部が強く括れ、脚裾部は内湾することによって踏ん張って立ち上がったような印象を受ける。口縁端部はヨコナデによって、上・下方に大きく突出し面をもち凹線文が施される。体部と脚部の凹線文間には無文帯があり、そこに５方向の透孔を配している。凹線文は太く深く、凹線文間はナデあげられて断面三角の凸帯状に突出している。この特徴は、大和第Ⅳ－１様式の典型といえる。Ｐ3035を先頭に、第65次ＳＤ－123（第163図）のＰ1099、第75次ＳＤ－101Ｂ（第278図）のＰ2011を順に並べるならば、大和第Ⅳ～Ⅴ様式の大型器台の型式学的変遷を見事に示す。

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3036 図版330-3	広口壷	93次	Pit-1201WB	第12層	口径 11.6	(外)頸部は縦位ハケ後、ヨコナデ。口縁端部は上方に突出。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3037 図版329-10	広口壷	93次	Pit-1205W	第4層	口径 15.8	(外)口縁端部は上方に突出。口縁端部に櫛描き波状文。 (内)磨滅の為、調整は不明。	被熱	Ⅲ-2
P 3038 図版329-2	広口壷	93次	Pit-1205E	第4層	口径 20.8	(外)口縁部下端に刻目。 (内)ヨコナデ。		Ⅲ-2
P 3039 図版329-1	広口壷	93次	Pit-1204E	第7層	口径 17.8	(外)頸部から胴部にかけて、櫛描き(9本/1.1cm)直線文1帯、櫛描き簾状文1帯、櫛描き直線文1帯以上。口縁端部に刺突文。頸部は縦位ハケ後、ヨコナデ。 (内)頸部は左上がりハケ後、ヨコナデ。		Ⅲ-2
P 3040 図版329-12	有段 口縁壷	93次	Pit-1207W	第3層	口径 23.8	(外)口縁部は縦位ハケ後、ヨコナデ。 (内)口縁部は左上がりハケ後、ナデ。		Ⅲ-2
P 3041	壷	93次	Pit-1202E	第4層	胴径 28.0	(外)胴部に櫛描き直線文(9本/1.2cm)1帯以上。胴部下半は縦位ケズリ。胴部最大径付近は縦位ハケ。その後、胴部下半を縦位ミガキ。胴部下半は左上がりハケ。胴部上半は縦位 (内)ハケ。	外面に煤付着	Ⅲ-1
P 3042	壷	93次	Pit-1201E	第4層	胴径 19.2 底径 4.6	(外)胴部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。 (内)磨滅の為、調整は不明。		Ⅲ-2
P 3043 図版330-9	無頸壷	93次	Pit-1201WB	第10(下)層	口径 11.2	(外)胴部に櫛描き直線文(10本/1.1cm)3帯以上。直線文間にミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内)胴部は縦位ナデ。		Ⅲ-1
P 3044 図版329-8	甕	93次	Pit-1203E	第3-b層	口径 21.6	(外)胴部上半は縦位ハケ。その後、頸部と胴部上半の屈曲部をヨコナデ。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3045 図版329-7	甕	93次	Pit-1203E Pit-1204E	第5-b層 第8層	口径 30.4	(外)胴部上半は縦位ハケ。口縁端部は上方に突出。 (内)胴部上半は縦位ハケ。口縁部は横位ハケ。	外面に煤付着 内面に炭化物の付着	Ⅲ-2

（3）第84次調査

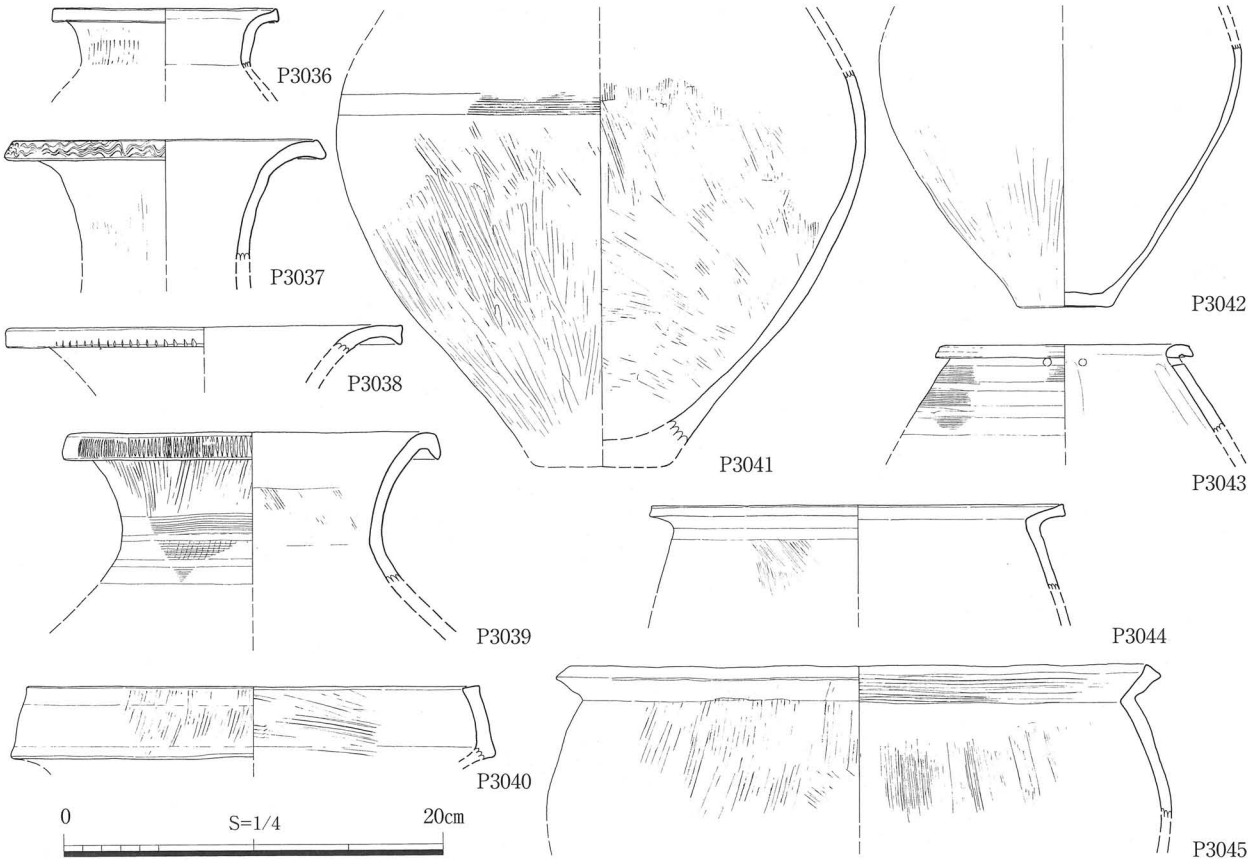
第84次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は174箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は128箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、2割6分減である。また、調査面積約424㎡であるから、1㎡あたり0.3箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ128箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝・中世大溝75箱（58.6%）、古墳周溝・遺物28箱（21.9%）、弥生時代土坑19箱（14.8%）、弥生時代溝5箱（3.9%）、柱穴群1箱（0.8%）となった。

このうち、中世素掘小溝・中世大溝・古墳周溝からの出土土器は、大半が弥生土器である。

（4）第89次調査

第89次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は179箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は117箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、3割5分減である。また、調査面積約500㎡であるから、1㎡あたり0.2箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ117箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝47箱（40.2%）、弥生時代土坑12箱（10.3%）、弥生時代溝57箱（48.7%）、その他1箱（0.9%）となった。

本調査では、第80次調査区のＳＤ－101（Ｂ）・106（Ｂ・Ｃ・Ｄ）に対応するＳＤ－1114（Ｂ・Ｃ）を長さ10mにわたって掘り下げている。出土土器は52箱（44.4%）に及ぶ。



第434図　西地区出土土器（５）

（５）第93次調査

第93次調査区では調査終了時に、出土遺物コンテナ（巾340×奥540×高150㎜）総数は310箱を数えたが、洗浄の後、土器を収納したコンテナ数は175箱となった。洗浄及び石器、木製品を省き詰めて収納すると、５割４分減である。また、調査面積約480㎡であるから、１㎡あたり0.4箱の土器出土量ということになる。土器コンテナ175箱の内訳は、遺物包含層・中世素掘小溝・中世大溝66箱（37.7%）、弥生時代土坑71箱（40.6%）、弥生時代溝14箱（8.0%）、大型建物跡（ＳＢ－1201）柱穴23箱（13.1%）、柱穴群１箱（0.6%）となった。

ＳＢ－1201出土土器（各柱穴）（第434～436図、写真図版329・330）

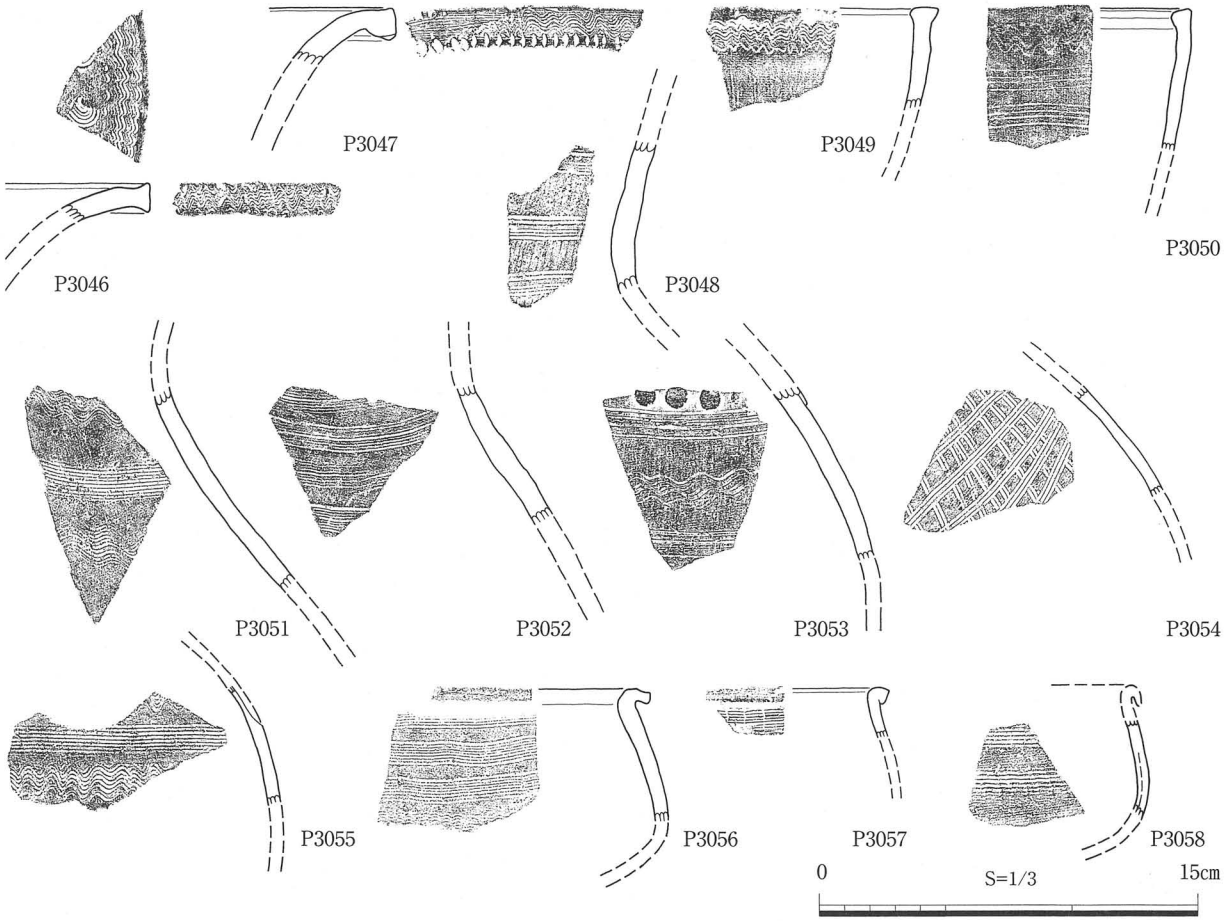
大型建物跡であるＳＢ－1201については、柱穴と柱根の関係を把握するために部分的な掘り下げをおこない、コンテナ数にして23箱（13.1%）という多くの土器片を得ている。ただし、遺物包含層のようにまとめて収納されているのではなく、柱穴・層位毎にこまかく小袋に分けて収納されているためかなり嵩張っている。実際には、1/3ほどの分量であると考えられる。

このうち、第434図は図化できるものを、第435図は小片であるが時期決定の判断材料になるものについて拓本を取り、出土柱穴とは関係なく器種ごとに配置している。第436図はPit－1201W出土土器の拓本をまとめているが、上段には据え付け坑出土、下段には抜き取り坑出土のものを配置した。

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3046 図版329-4	広口壷	93次	Pit-1203E	第4-b層	-	(外)口縁端部に櫛描き波状文(11本/1.4cm)。 (内)口縁部に櫛描き波状文、櫛描き扇形文。		Ⅲ-2
P 3047 図版329-11	広口壷	93次	Pit-1206W	第1層	-	(外)口縁端部に櫛描き波状文(8本/0.9cm)。口縁部下端に刻目。頸部は縦位ハケ。 (内)口縁部は横位ハケ。		Ⅲ-2
P 3048 図版329-14	広口壷	93次	Pit-1204W	第1層	-	(外)頸部は縦位ハケ後、櫛描き直線文(7本/0.95cm)3帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-1
P 3049 図版329-3	直口壷	93次	Pit-1201E	第4層	-	(外)口縁部直下に櫛描き(8本/1.15cm)波状文。口頸部は縦位ハケ。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3050 図版329-13	直口壷	93次	Pit-1205W	第6層	-	(外)口頸部に、櫛描き(8本/1.1cm)波状文1帯、櫛描き直線文2帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3051 図版329-17	壷	93次	Pit-1205W	第5層	-	(外)胴部に櫛描き(11本/1.5cm)波状文1帯、櫛描き直線文1帯、櫛描き波状文1帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3052 図版329-16	壷	93次	Pit-1205C	第2層	-	(外)胴部に櫛描き(9本/1.0cm)直線文4帯以上。 (内)ナデ。	生駒西麓産か (角閃石を含む)	-
P 3053 図版329-15	壷	93次	Pit-1205C	第1層	-	(外)胴部に、櫛描き文(8本/1.2cm)直線文1帯、櫛描き波状文1帯、櫛描き直線文1帯以上。上部直線文の上に円形浮文。 (内)左上がりハケ後、ナデ。	搬入土器か	-
P 3054 図版329-5	壷	93次	Pit-1201E	第3層	-	(外)胴部に斜格文(左傾斜線の工具は2条一単位、右傾斜線の工具は3条一単位)。 (内)磨滅の為、調整は不明。	P3055と同一個体か	Ⅲ-2
P 3055 図版329-6	壷	93次	Pit-1201E	第5層	-	(外)胴部に、櫛描き(9条/1.3cm)波状文1帯、櫛描き直線文1帯、櫛描き波状文1帯以上。櫛描き文間に暗文風のミガキ。 (内)磨滅の為、調整は不明。	P3054と同一個体か	Ⅲ-2
P 3056 図版329-18	鉢	93次	Pit-1205C	第5層	-	(外)鉢部上半に、櫛描き(8条/1.0cm)直線文3帯、櫛描き波状文1帯。 (内)横位ミガキ。		Ⅲ-2
P 3057	鉢	93次	Pit-1212E	第3層	-	(外)胴部上半に、櫛描き簾状文1帯以上。 (内)一		Ⅲ-2
P 3058 図版329-9	鉢	93次	Pit-1210E	第1層	-	(外)胴部上半に、櫛描き(10本/1.6cm)直線文1帯、櫛描き簾状文1帯。 (内)横位ミガキ。		Ⅲ-2

ＳＢ－1201の柱穴から出土する土器は、下層遺構の大和第Ⅰ様式や大和第Ⅱ－１様式のものを含むが、大和第Ⅲ－１・２様式の傾向をもつものが最も新しく、凹線文手法をもつものは認められない。例えば、広口壷口縁部（Ｐ3037・3046・3047・3059・3060）には、ヨコナデによる口縁端部の上下突出手法は顕著でなく、内面には刺突文でなく波状文や扇形文が用いられている。あるいは、折り返し口縁の広口壷（Ｐ3039）の端面に施された刺突文は、大和第Ⅲ－１・２様式の直口壷・鉢・甕に共有された標徴的文様である。直口壷（Ｐ3049・3050・3061・3070・3071）についても、口縁端部の内面への突出はさほど顕著ではなく、頸部の傾きが直線的な点も大和第Ⅲ－１・２様式の特徴といえよう。無頸壷（Ｐ3043）や鉢（Ｐ3056～3079）の口縁部も折り返しており、大和第Ⅲ－１・２様式の特徴である。

その中にあって、ＳＤ－1201W・1201WＢから出土した粘土紐の貼付けによる口縁端部をもつ鉢（Ｐ3068）や断面三角凸帯をもつ鉢（Ｐ3067・3074～3076）は、大和第Ⅲ－３様式の傾向をもつ土器である。これらが抜き取り坑であるＳＤ－1201Wだけに伴うのであれば、ＳＢ－1201の築造年代を大和第Ⅲ－２様式とし、柱抜き取りを大和第Ⅲ－３様式と解釈できるのであるが問題は単純ではない。Ｐ3067・3068は、ＳＤ－1201WＢからの出土である。このうち、Ｐ3067については断面三角凸帯が多条化し、棒状浮文を貼付ける搬入土器で、大和編年とは対応しない可能性はあろう。また、Ｐ3074・3075の口縁外端部の刻み、Ｐ3076の断面三角凸帯



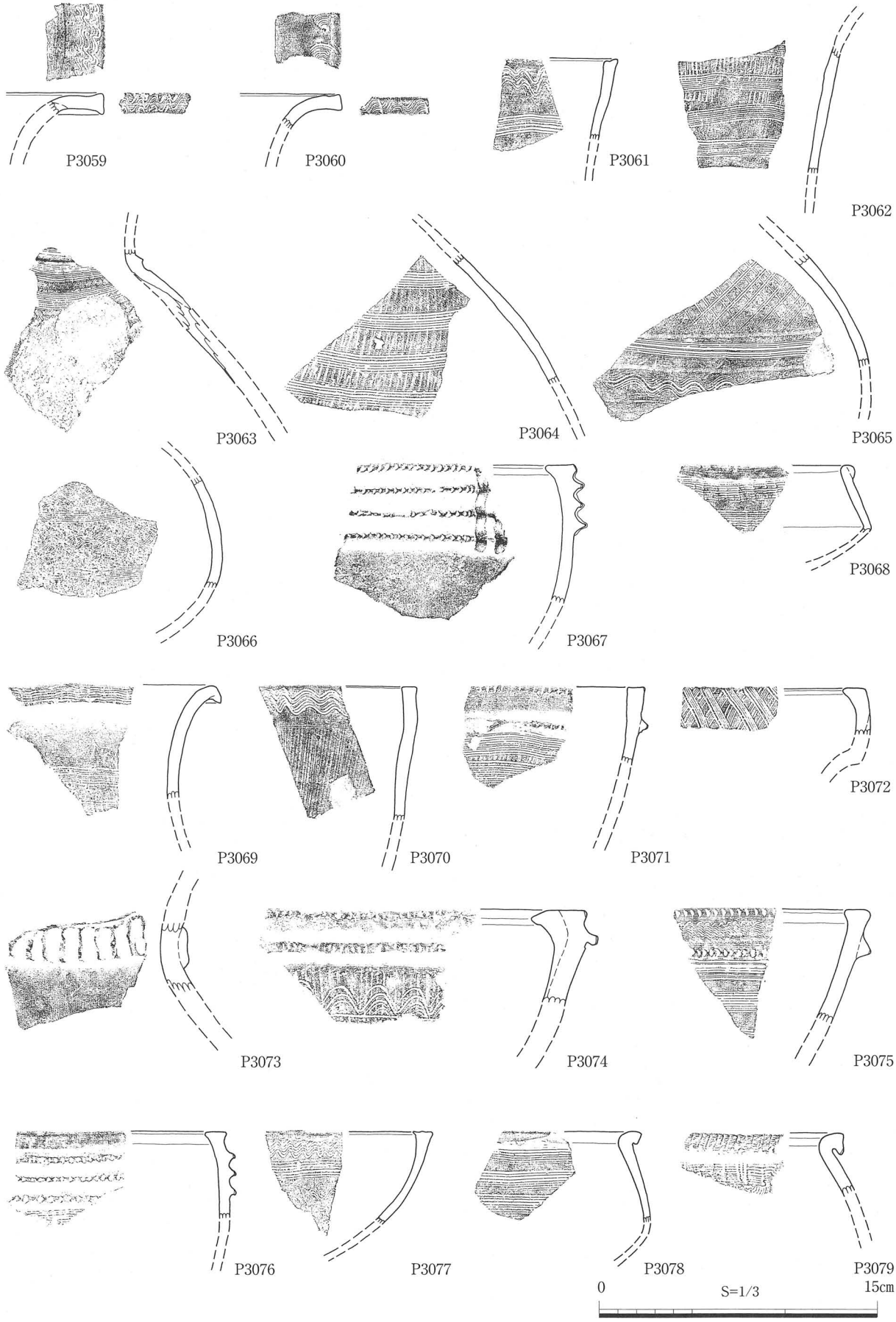
第435図　西地区出土土器（６）

の多条化をもって、大和第Ⅲ－３様式の大型鉢として定形化する以前と解釈することも可能であるかもしれない。ただし、都合に応じて分類基準を変化させることは慎みたい。

さて、ＳＢ－1201については国立歴史民俗博物館と田原本町教育委員会の共同で、柱材等に関してＡＭＳによる^{14}Ｃ年代測定をおこなっている。その結果、Pit－1203Ｅ・1206Ｅ・1207Ｅ・1202Ｃ・1203Ｗ・1204Ｗの単一試料も、Pit－1201Ｗのウイグルマッチングによる年輪試料についても、校正年代の確立密度分布は300calＢＣ前後と200calＢＣ前後の分断された数値を示しており、年代を絞り込むことはできていない。また、国立歴史民俗博物館は、唐古・鍵遺跡出土の大和第Ⅰ様式～布留１式の土器約80点についても器面の付着物を採取してＡＭＳによる^{14}Ｃ年代測定をおこなっており、前300年頃を含む前３世紀には大和第Ⅲ様式前半、前100年頃以前の前２世紀を中心とする年代には大和第Ⅲ様式後半を位置づけている。

ＳＢ－1201の柱穴から出土する土器が概ね大和第Ⅲ様式前半の特徴を示す一方で、Pit－1201Ｗにわずかに含まれる大和第Ⅲ様式後半傾向の土器があり、^{14}Ｃ年代測定の分断された数値がそのどちらとも対応することによって、本建物跡の土器による相対年代を断言することすら躊躇させる。ここでは、抜き取り坑を含めた全ての柱穴から凹線文を施した土器は出土せず、大半が大和第Ⅲ－２様式の土器であることを再び強調しておきたい。

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3059 図版330-2	広口壷	93次	Pit-1201WB	第11層	−	(外)口縁端部に櫛描き波状文(7本/1.1cm)。 (内)口縁部に櫛描き波状文。		Ⅲ-2
P 3060 図版330-1	広口壷	93次	Pit-1201WB	第14層	−	(外)口縁端部に櫛描き波状文(9本/0.95cm)。 (内)口縁部に櫛描き扇形文。		Ⅲ-2
P 3061 図版330-4	直口壷	93次	Pit-1201WB	第14層	−	(外)口頸部に、櫛描き(7本/1.0cm)波状文1帯、櫛描き直線文1帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3062 図版330-5	壷	93次	Pit-1201WB	第9層	−	(外)頸部は縦位ハケ後、櫛描き(8本/0.9cm)直線文5帯以上。 (内)左上がりハケ。		Ⅲ-2
P 3063 図版330-7	壷	93次	Pit-1201WB	第13層	−	(外)頸屈曲部に凸帯。胴部上半に、櫛描き簾状文2帯、櫛描き刺突文1帯、櫛描き直線文2帯か。 (内)左上がりハケ後、ナデ。		Ⅲ-2
P 3064 図版330-6	壷	93次	Pit-1201WB	第12層	−	(外)胴部上半に縦位ハケ後、櫛描き直線文(8本/1.2cm)4帯以上。 (内)左上がりハケ後、ナデ。		Ⅲ-1
P 3065 図版330-8	壷	93次	Pit-1201WB	第13層	−	(外)胴部上半に2条一単位の工具による斜格文、その下に櫛描き文(9本/1.05cm)2帯、上から直線文、波状文。櫛描き文間に暗文風のミガキ。 (内)左上がりハケ。		Ⅲ-2
P 3066	壷	93次	Pit-1201WB	第13層	−	(外)胴部上半に櫛描き文(10本/0.9cm)。波状文と直線文を交互に4帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3067 図版330-11	鉢	93次	Pit-1201WB	第9層	−	(外)口縁端部は外方を突出させ凸帯風とし、その直下に貼付凸帯3条。口縁部外端及び凸帯上に刻目。凸帯上に棒状浮文2条以上。 (内)縦位ミガキ。	搬入土器か	−
P 3068 図版330-10	鉢	93次	Pit-1201WB	第11層	−	(外)胴部上半に櫛描き簾状文(9本/1.2cm)2帯。櫛描き文間に暗文風のミガキ。 (内)胴部上半は横位ミガキ。胴部下半は縦位ミガキ		Ⅲ-3
P 3069 図版330-13	広口壷	93次	Pit-1201W	sec 第4層	−	(外)垂下させた口縁端部に櫛描き簾状文。頸部は縦位ハケ後、櫛描き(8本/1.0cm)簾状文2帯以上。 (内)ナデか。	中河内産か	−
P 3070 図版330-14	直口壷	93次	Pit-1201W	sec 第5(下)層	−	(外)頸部は縦位ハケ。口縁部はヨコナデ後、櫛描き(7本/1.0cm)波状文。 (内)左上がりハケ後、ナデ。		Ⅲ-2
P 3071 図版330-15	直口壷	93次	Pit-1201W	第2(下)層	−	(外)口縁部はヨコナデ後、その下に貼付凸帯。口縁端部及び凸帯上に刻目。凸帯より下に櫛描き直線文(10本/1.3cm)2帯以上。 (内)ナデ。		Ⅲ-2
P 3072 図版330-16	有段口 縁壷	93次	Pit-1201W	第4層	−	(外)口縁部に櫛描き(5本/0.6cm)斜格文。 (内)ヨコナデ。	中河内産か	−
P 3073 図版330-17	有段口 縁壷	93次	Pit-1201W	第4層	−	(外)頸屈曲部に貼付凸帯。凸帯上は指頭による刻目。 (内)胴部上半は横位ハケ。		Ⅲ-2
P 3074 図版330-18	鉢	93次	Pit-1201W	第4層	−	(外)縦位ハケ。口縁部よりやや下がった位置に貼付凸帯。口縁部外端及び凸帯上に刻目。凸帯より下に櫛描き波状文、直線文。 (内)ナデ。	内面炭化物付着	Ⅲ-3
P 3075 図版330-19	鉢	93次	Pit-1201W	第6-b層	−	(外)口縁部よりやや下がった位置に貼付凸帯。口縁部外端と凸帯上に刻目。口縁部外端と凸帯間に櫛描き波状文(10本／1.3cm)。凸帯より下に櫛描き直線文3帯以上。直線文間に暗文風のミガキ。 (内)横位ミガキ。		Ⅲ-3
P 3076 図版330-20	鉢	93次	Pit-1201W	第7層	−	(外)口縁部よりやや下がった位置に貼付凸帯3条。凸帯上に刻目。凸帯より下に櫛描き簾状文。 (内)ナデ。		Ⅲ-3
P 3077 図版330-21	鉢	93次	Pit-1201W	第3層	−	(外)胴部上半に、櫛描き(7本／1cm)波状文1帯、櫛描き直線文1帯、櫛描き波状文1帯。 (内)ヨコナデ。		Ⅲ-2
P 3078 図版330-22	鉢	93次	Pit-1201W	第3-b層	−	(外)胴部上半に、櫛描き(8本／1.1cm)簾状文1帯、直線文3帯。 (内)磨滅の為、調整は不明。		Ⅲ-2
P 3079 図版330-23	鉢	93次	Pit-1201W	第4層	−	(外)口縁端部に櫛描き簾状文後、下端に刻目。胴部上半に、櫛描き簾状文(9本／1.3cm)1帯、櫛描き扇形文。 (内)胴部上半は横位ミガキ。		Ⅲ-2



第436図　西地区出土土器（７）

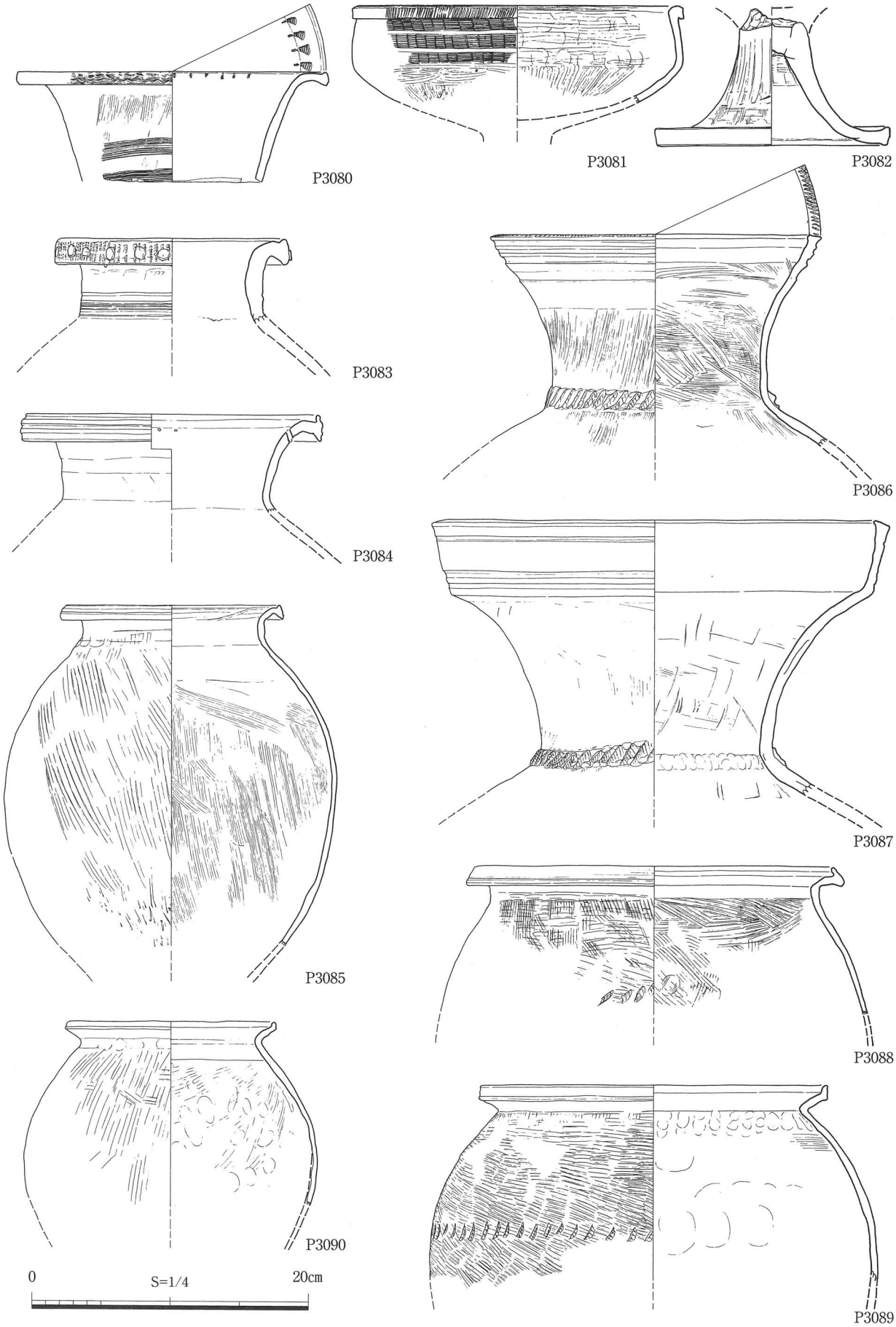
遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P3080	広口壷	93次	SK−2120	第11層	口径 21.8	(外)口縁端部は上方に突出。口縁端部に櫛描き波状文。頸部は縦位ハケ後、櫛描き(11本/1.3cm)直線文2帯以上。 (内)口縁部に櫛描き扇形文。ナデ。	頸部破断面を研磨	Ⅲ−2
P3081	鉢	93次	SK−2120	第11(下)層	口径 23.0	(外)口縁部にヘラ状工具による刺突文。胴部上半に櫛描き簾状文(8本/0.95cm)3帯。胴部下半は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。屈曲部は横位ミガキ。 (内)胴部上半は横位ミガキ。胴部下半は縦位ミガキ。		Ⅲ−2
P3082	高坏	93次	SK−2120	第11(下)層	底径 16.1	(外)脚柱部は縦位ミガキ。 (内)ナデ。紐状圧痕。	内外面に煤付着 (甕蓋に転用か)	Ⅲ−2
P3083	広口壷	93次	SK−2120	第2層	口径 16.0	(外)口縁端部は上下方に突出。口縁部端面に櫛描き(6本/1.4cm)刺突文後、円形浮文。頸部中位に凹線文1条。胴部上半に櫛描き直線文1帯以上。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P3084 図版331−1	広口壷	93次	SK−2120	第3層	口径 21.0	(外)口縁端部は上下方に突出。口縁端部に凹線文3条。口縁部に紐孔2孔一対。 (内)ナデ。		Ⅳ−1
P3085 図版331−2	広口壷	93次	SK−2120	第1層 第2層 第3層	口径 15.4 胴径 24.0	(外)口縁部は上下方に突出。口縁端部に凹線文2条。胴部上半は左上がりハケ。胴部下半は下から上への縦位ケズリ。 (内)胴部下半は縦位ハケ。胴部上半は左上がりの横位ハケ。	被熱	Ⅳ−1
P3086 図版331−3	短頸壷	93次	SK−2120	第1層	口径 22.4	(外)口縁部上端にハケ状工具による刺突文。口縁部に凹線文4条。頸部は右上がりハケ後、凸帯貼付。凸帯上にハケ状工具による刺突文。胴部上半は縦位ハケ。 (内)頸部は左上がり横位ハケ。		Ⅳ−1
P3087 図版331−4	有段口縁壷	93次	SK−2120	第1層	口径 32.0	(外)口縁端部に凹線文1条、口縁屈曲部付近に凹線文2条。頸部はナデ後、凸帯貼付。凸帯上にハケ状工具による刺突文。胴部上半はナデ。 (内)頸部は左上がりハケ後、ナデ。胴部上半は横位ハケ後、ナデ。		Ⅳ−1
P3088	甕	93次	SK−2120	第1層	口径 25.6	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は右上がりの横位タタキ後、縦位ハケ。胴部最大径付近にハケ状工具による刺突文。 (内)胴部上半は縦位ハケ後、左上がりの横位ハケ。その後、頸屈曲部をヨコナデ。		Ⅳ−1
P3089 図版331−5	甕	93次	SK−2120	第1層	口径 24.8	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりの横位タタキ後、縦位ハケ。胴部最大径付近にハケ状工具による刺突文。 (内)胴部上半は左上がりハケ後ナデ。		Ⅳ−1
P3090 図版331−6	甕	93次	SK−2120	第1層	口径 14.8 胴径 21.3	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がり横位タタキ後、縦位ハケ。磨滅。 (内)胴部上半は右上がりの横位ハケ後、指頭圧痕。		Ⅳ−1

ＳＫ−2120出土土器（第437・438図、写真図版331〜333）

ＳＫ−2120からは、コンテナ15箱（8.6%）の土器が出土している。このうち、下層の土器は３箱に過ぎず、12箱が上層の土器である。下層出土土器は、大和第Ⅲ−２様式の特徴をもち、壷１個体、鉢１個体、高坏脚部１個体を図化した。これに対し上層出土土器は、凹線文やタタキの盛行、大型の有段口縁壷や短頸壷など大和第Ⅳ−１様式の特徴をもち、壷５個体、甕７個体、鉢６個体、高坏７個体、器台１個体を図化した。

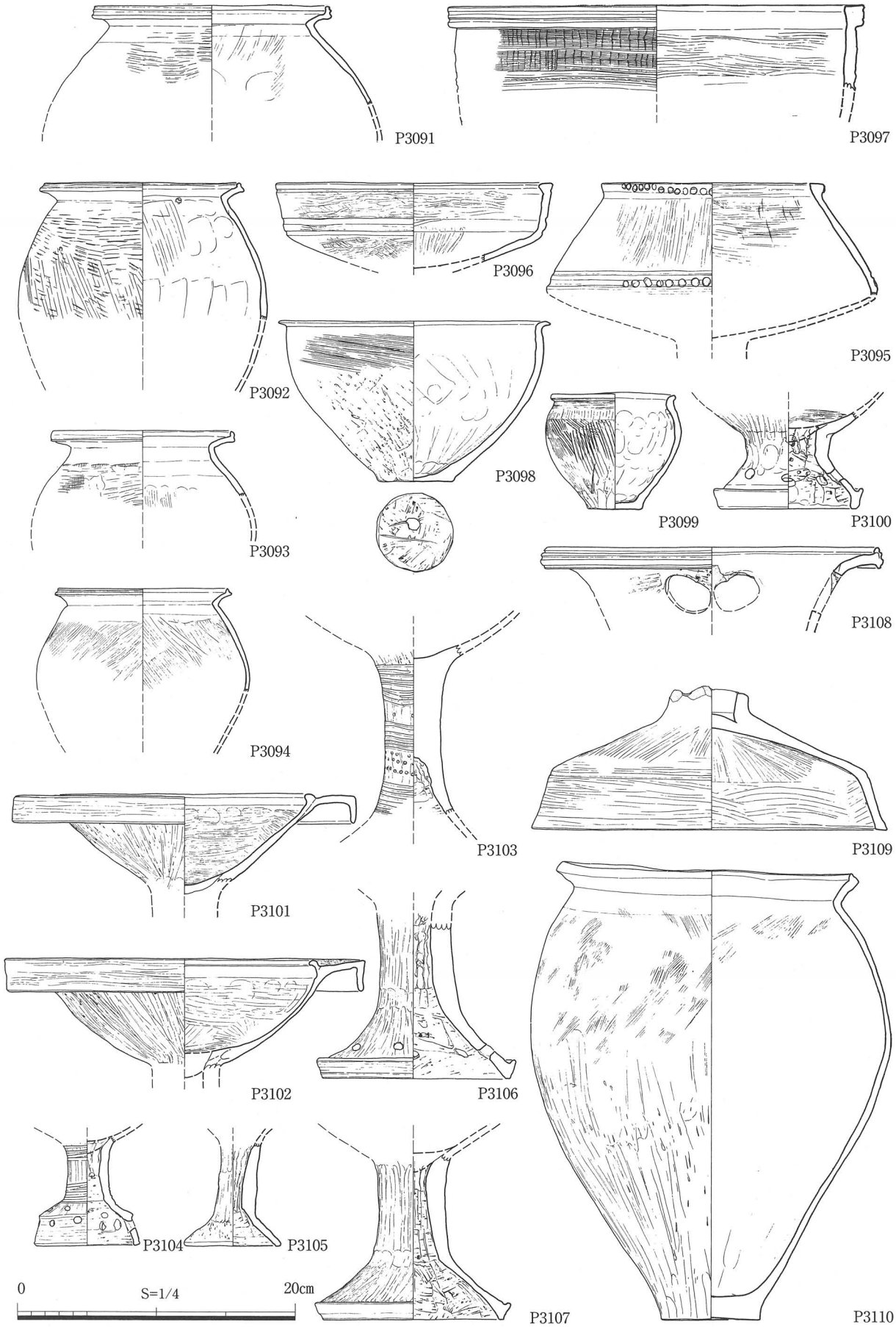
ＳＸ−2104出土土器（第438図、写真図版333）

ＳＸ−2104は、土器埋納坑である。本遺構は、ＳＢ−1201の北西隅柱であるPit−1201Wの埋土上面から掘り込まれており、ＳＫ−1128とともにＳＢ−1201の時期決定に重要な役割をもつ。上蓋として使用された高坏（Ｐ3109）、身として使用された甕（Ｐ3110）ともに、大和第Ⅳ−１様式の特徴をもつ。



第437図　西地区出土土器（８）

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P 3091 図版331-7	甕	93次	SK-2120	第2層	口径 16.6	(外)口縁端部は上方に突出。口縁端部に凹線文2条。胴部上半は横位タタキ。頸屈曲部にヨコナデ。 (内)胴部上半は縦位ハケ後、ナデ。		Ⅳ-1
P 3092 図版331-8	甕	93次	SK-2120	第2層	口径 13.8 胴径 18.0	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は左上がりの横位タタキ後、ナデ。その後、胴部最大径付近に縦位ハケ。 (内)ナデ。頸屈曲部に刺突。	内面に炭化物の付着 外面に煤付着	Ⅳ-1
P 3093 図版331-9	甕	93次	SK-2120	第2層	口径 12.8	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は右上がりの横位タタキ後、縦位ハケ。 (内)ナデ。	内面に炭化物の付着	Ⅳ-1
P 3094 図版331-10	甕	93次	SK-2120	第1層	口径 12.1	(外)口縁端部は上方に突出。胴部は右上がりハケ。その後、頸屈曲部をヨコナデ。 (内)胴部は左上がりハケ。	外面に煤付着	Ⅳ-1
P 3095 図版332-2	台付鉢	93次	SK-2120	第2層	口径 14.0 胴径 23.8	(外)口縁部上端はケズリ後ナデ。鉢部上半は縦位ミガキ。鉢屈曲部に凹線文3条。口縁端部の凹線文上に円形浮文。 (内)鉢部上半は横位ハケ後、横位ミガキ。		Ⅳ-1
P 3096 図版332-3	鉢	93次	SK-2120	第2層	口径 18.4	(外)胴部上半の上端に凹線文1条、屈曲部に凹線文2条。その後、胴部は横位ミガキ。 (内)胴部上半は横位ミガキ。胴部下半は縦位ミガキ。		Ⅳ-1
P 3097 図版332-1	鉢	93次	SK-2120	第1層	口径 27.4 胴径 28.8	(外)口縁端部に凹線文2条。胴部上半に櫛描き(14本/1.65cm)簾状文2帯。鉢屈曲部付近に凹線文3条以上。 (内)胴部上半は横位ミガキ。磨滅。		Ⅳ-1
P 3098 図版332-5	鉢	93次	SK-2120	第1層	器高 11.6 口径 19.0 胴径 18.5 底径 5.4	(外)胴部下半は左上がりのケズリ。胴部上半は左上がりの横位ハケ。底面はケズリ。 (内)ナデ。	底部穿孔	Ⅳ-1
P 3099 図版332-6	鉢	93次	SK-2120	第4層	器高 8.3 口径 8.8 胴径 9.75 底径 3.8	(外)胴部下半は縦位ケズリ。胴部上半は左上がりハケ後、胴部最大径付近に縦位ハケ。口縁部はヨコナデ。底面及び側面はナデ。 (内)ナデ。	内面に灰黄色の付着物 完形品(一部欠)	Ⅳ-1
P 3100	把手付 台付鉢	93次	SK-2120	第3層	底径 9.0	(外)鉢部は横位ミガキ。脚裾部に円形透孔。 (内)脚裾部は右回りの横位ケズリ。		Ⅳ-1
P 3101 図版332-7	高坏	93次	SK-2120	第1層	口径 17.6	(外)坏部は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。 (内)坏部は横位ミガキ。		Ⅳ-1
P 3102 図版332-8	高坏	93次	SK-2120	第4層	口径 18.6	(外)坏部は縦位ケズリ後、縦位ミガキ。 (内)坏部は横位ミガキ。		Ⅳ-1
P 3103 図版332-9	高坏	93次	SK-2120	第3層	−	(外)柱状部は、上端から下端にかけてヘラ描き直線文9条、円形刺突文1帯、ヘラ描き直線文7条、円形刺突文3帯、ヘラ描き直線文9条。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-1
P 3104 図版332-10	高坏	93次	SK-2120	第3層	底径 7.0	(外)柱状部は、上端ヘラ描き直線文4条、下端ヘラ描き直線文5条。脚裾部は有段で、上段と下段に小円透孔。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-1
P 3105	高坏	93次	SK-2120	第1層	底径 6.2	(外)柱状部は縦位ミガキ。脚裾部は縦位ケズリ後ナデ。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-1
P 3106 図版333-1	高坏	93次	SK-2120	第3層	底径 15.2	(外)柱状部から裾部にかけて縦位ミガキ。裾部に8方向の円形透孔。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-1
P 3107 図版333-2	高坏	93次	SK-2120	第1層	底径 12.4	(外)柱状部から裾部にかけて縦位ミガキ。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。	脚裾部外面に煤付着	Ⅳ-1
P 3108 図版332-4	器台	93次	SK-2120	第2層	口径 23.8	(外)口縁端部は上下方に突出。口縁端部に凹線文3条。体部は左回りのケズリ。円形透孔。 (内)ナデ。	被熱	Ⅳ-1
P 3109 図版333-9	台付鉢	93次	SX-2104	第1層	口径 23.8	(外)口縁部に凹線文1条。鉢屈曲部に凹線文1条。鉢部上半は横位ミガキ。鉢部下半は縦位ミガキ。脚部に5方向の小円形透孔か。 (内)鉢部上半は横位ミガキ。鉢部下半は縦位ミガキ。	土器棺蓋か	Ⅳ-1
P 3110 図版333-10	甕	93次	SX-2104	第4層	器高 33.1 口径 20.8 胴径 26.0 底径 6.8	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は右上がりハケ。胴部下半は底部からの縦位ケズリ後、縦位ミガキ。その後、底部側面はナデ。 (内)胴部上半は右上がりハケ。その後、胴部全体をナデ。	土器棺身か	Ⅳ-1



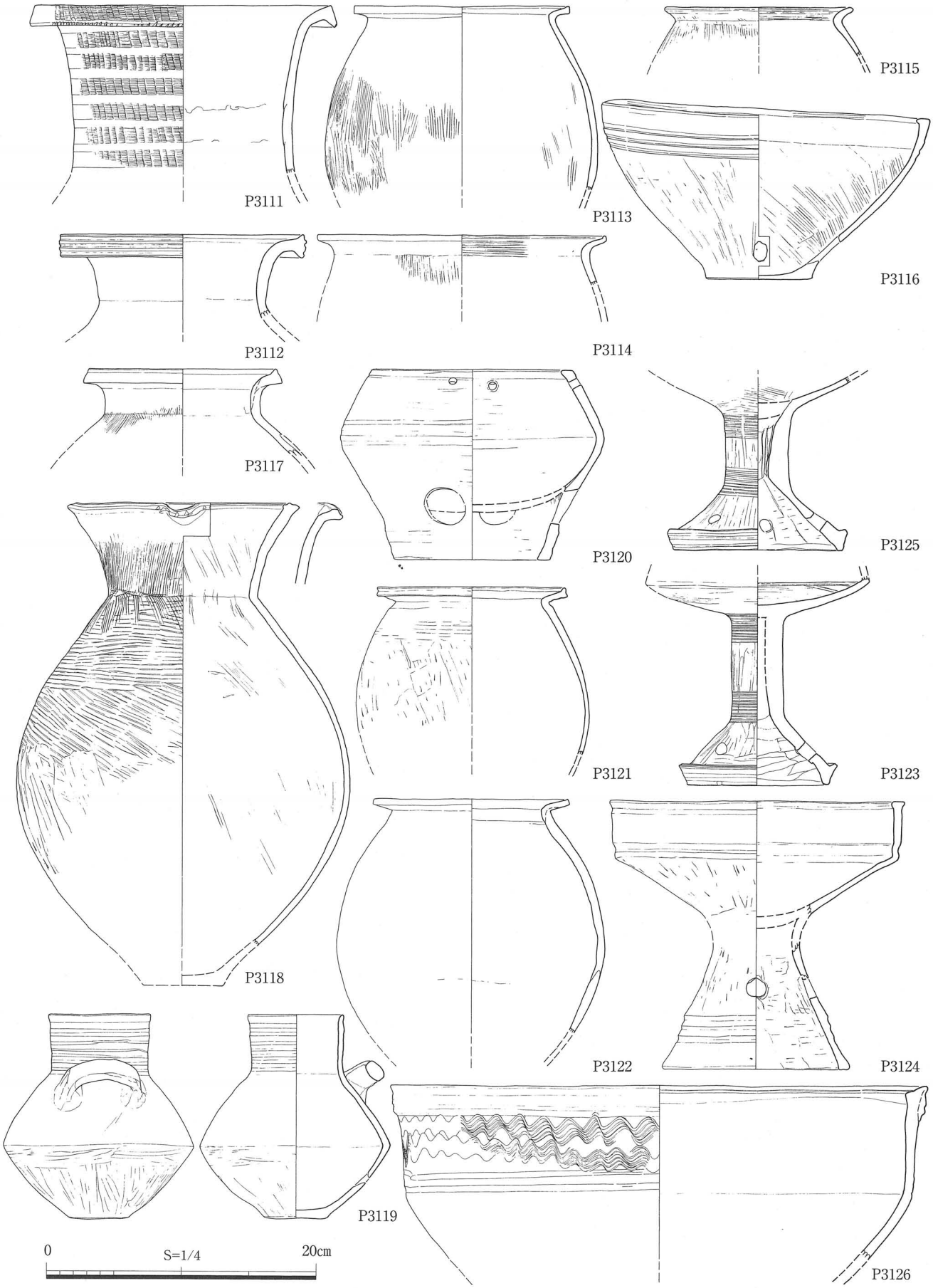
第438図　西地区出土土器（９）

遺物番号 写真番号	器種	調査 次数	遺構名	層位 (取上)	法量(cm)	調整・文様	備考	時期 (大和様式)
P3111 図版333-3	広口壷	93次	SK-1128	第3層	口径 21.8	(外)口縁端部は垂下。口縁部端面に櫛描き簾状文、下端に刻目。頸部に櫛描き簾状文(11本／1.3cm)6帯以上。 (内)ナデ。	中河内搬入土器	−
P3112 図版333-4	広口壷	93次	SK-1128	第3層	口径 18.0	(外)口縁端部は上下方に突出。口縁部端面に凹線文3条。 (内)ナデ。		Ⅲ-4
P3113 図版333-5	甕	93次	SK-1128	第1層	口径 15.6 胴径 20.3	(外)口縁端部は上方にやや突出。胴部は縦位ハケ。 (内)ナデ。		Ⅲ-4
P3114 図版333-7	甕	93次	SK-1128	第1層	口径 21.2	(外)口縁端部は上方に突出。胴部は縦位ハケ。 (内)口縁部は横位ハケ。		Ⅲ-4
P3115 図版333-6	甕	93次	SK-1128	第1層	口径 13.6	(外)口縁部はヨコナデ。胴部は縦位ハケ。 (内)口縁部は横位ハケ。		Ⅲ-4
P3116 図版333-8	鉢	93次	SK-1128	第2層	器高 13.4 口径 22.6 底径 7.6	(外)口縁部からやや下がった位置に凹線文3条。下半はケズリ後、縦位ミガキ。底面はケズリ。 (内)左上がりハケ後、ナデ。	下半部穿孔	Ⅲ-4
P3117	短頸壷	93次	SD-2101	第4層	口径 13.7	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は縦位ハケ。 (内)ナデ。		Ⅳ-2
P3118 図版334-1	短頸壷	93次	SD-2101	第1層	口径 15.2 胴径 24.7	(外)口縁部上端に凹線文2条。口縁部は片口、そこに刻目。口頸部は縦位ハケ後、口縁部をヨコナデ。胴部は最大径付近を左上がりタタキ後、上半を横位タタキ。胴部下半は下から上への縦位ケズリ。 (内)胴部は左上がりハケ後、ナデ。		Ⅳ-2
P3119 図版334-2	水差形 土器	93次	SD-2101	第1層	器高 15.2 口径 7.4 胴径 14.2 底径 4.2	(外)口頸部に凹線文7条以上。胴部下半は縦位ミガキ後、胴部最大径付近に横位ミガキ。 (内)ナデ。	胴部下半に煤付着 下半部穿孔 ほぼ完形(口縁部一部欠)	Ⅳ-2
P3120	台付 無頸壷	93次	SD-2101	第4層	器高 14.2 口径 13.2 胴径 19.6 底径 9.6	(外)口縁部に凹線文1条、胴最大径に凹線文3条、脚部に凹線文4条。全面に横位ミガキ。口縁部に2孔一対の紐孔。 (内)胴部は横位ミガキ。脚部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-2
P3121 図版334-3	甕	93次	SD-2101	第1層	口径 13.6 胴径 17.5	(外)口縁端部は上方に突出。胴部上半は横位タタキ。下半は下から上への縦位ケズリ。 (内)ナデ。		Ⅳ-2
P3122	甕	93次	SD-2101	第1層	口径 14.3 胴径 20.0	(外)ナデ。 (内)ナデ。	搬入土器か 胴部上半と下半で胎土異なる 外面煤付着	−
P3123 図版334-4	台付鉢	93次	SD-2101	第1層 第2層 第4層	胴径 16.6 底径 9.8	(外)脚柱部上端と下端にヘラ描き直線文12条。脚裾部に3方向の透孔。脚裾部、脚柱部、及び鉢部下半は縦位ミガキ。鉢屈曲部付近は横位ミガキ。 (内)鉢部下半は横位ハケ後、横位ミガキ。脚裾部は右回り横位ケズリ。		Ⅳ-2
P3124 図版334-5	台付鉢	93次	SD-2101	第1層	器高(20.0) 口径 20.2	(外)口縁部に凹線文1条、鉢屈曲部に凹線文2条、脚部に凹線文3条。脚部に透孔。鉢部下半及び脚部に縦位ケズリ。 (内)脚部は右回りの横位ケズリ。		Ⅳ-2
P3125 図版334-6	高坏	93次	SD-2101	第1層	底径 11.8	(外)脚柱部上端と下端にヘラ描き直線文9条。脚裾部に5方向の透孔。裾部端面に凹線文2条。 (内)脚裾部は左回りの横位ケズリ。		Ⅳ-2
P3126	鉢	93次	SD-2101	第4層	口径 39.4	(外)口縁部と胴部屈曲に凹線文2条。胴部上半に櫛描き波状文(6本/1.3cm)2帯。 (内)胴部上半に横位ミガキ。	口縁部にタール状の炭化物付着	Ⅳ-2

ＳＫ－1128出土土器（第439図、写真図版333）

ＳＫ－1128は、ＳＢ－1201の西側柱であるPit－1206Wの柱抜き取り坑上面に形成された落ち込みである。出土土器量は1箱に過ぎないが、ＳＢ－1201の廃絶時期決定に重要な資料である。このうち、6個体の図化が可能であった。

Ｐ3112は広口壷で、口縁端部を上下方に突出させ、拡張して凹線文3条を施している。Ｐ3115は甕で、大和形の特徴をもつが口縁部は短く、端部の刻目を欠く。Ｐ3116は直口鉢で、



第439図　西地区出土土器（10）

口縁部よりやや下がった位置に３条の凹線文を施す。これらの土器群は、その特徴から大和第Ⅲ－４様式に位置づけられる。なお、Ｐ3111の広口壷は中河内産からの搬入土器であろう。

ＳＤ－2101上層出土土器（第439図、写真図版334）

ＳＤ－2101からは、コンテナ６箱（3.4％）の土器が出土している。このうち、上層から大きな破片でまとまって出土した壷４個体、甕２個体、鉢３個体、高坏１個体、合計10個体について図化した。これらは、先述の大和第Ⅳ－１様式であるＳＫ－2120上層出土土器と比較すると明瞭であるが、全体的に小型化しており大和第Ⅳ－２様式に位置づけられる。

第84・89・93次調査区は、同一地点において年度毎に調査区を拡張したのであって、これを一つの調査として捉えるならば、総調査面積は1081㎡、総出土土器コンテナ数は420箱となる。１㎡あたり0.4箱の土器出土量である。出土土器は、大和第Ⅰ－１様式から布留０式、古墳時代後期、中世と幅広い時期にわたるものであるが、大半は弥生土器である。

注目すべきは、大和第Ⅰ－１様式土器の出土である。大型建物跡保存のため下層遺構は掘り下げていないが、他時期遺構に混入して散見することができる。土器文様として「特殊遺物・考察編」の遺物図版41に掲載した前期弥生土器のほとんどが、第84・89・93次調査区出土であることからもそれはうかがえよう。おそらく、下層には弥生時代前期前葉の遺構が拡がるものと考えられ、本地がその段階から安定した土地であった事を示すものといえる。

第89・93次調査区で総延長40ｍにわたって検出したＳＤ－1114については、第89次調査でわずか７ｍの範囲を掘り下げたに過ぎない。それでも、第89次調査区の総出土土器117箱のうち、52箱（44.4％）を占めている。また、調査区のほとんどがこの溝内であった第80次調査では、調査面積約72㎡に対して153箱もの土器が出土し、１㎡あたり2.13箱という桁はずれな数値を示している。本溝の総延長40ｍを完掘すれば、第84・89・93次調査区の土器出土量は２倍になっていたであろうことは想像に難くない。それほどにＳＤ－1114は、大和第Ⅲ－１～Ⅵ－４様式の土器を含んでいる。また、本溝からは、第80次調査でＰ5009、第89・93次調査でＰ5024・5075の絵画土器が出土している。これらは第80次調査の鳴石容器とあわせて、本溝の特殊性とみることができるのかもしれない。

図面掲載はしていないが、第93次調査区のＳＫ－2111も特筆することができる。ＳＫ－2111は、調査区西端で検出した大和第Ⅵ－３様式の井戸である。本坑からは、コンテナ17箱（9.7％）の土器が出土しており、特に中層上位の半・完形品からなる土器群の集中には著しいものがある。これらの土器群には、器高15㎝に満たない小型長頸壷が20個体余り含まれている。後期弥生土器の多量出土は珍しいものではないが、小型長頸壷の集中は注目される。

この他、第84・89・93次調査区からは、点々と庄内・布留式の土器が出土している。明確な遺構としては、第84次調査区の井戸であるＳＫ－110に過ぎないが、弥生時代中期中葉の大型建物跡であるＳＢ－1201の柱根腐食痕上面には、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の土器溜まりが形成されている。

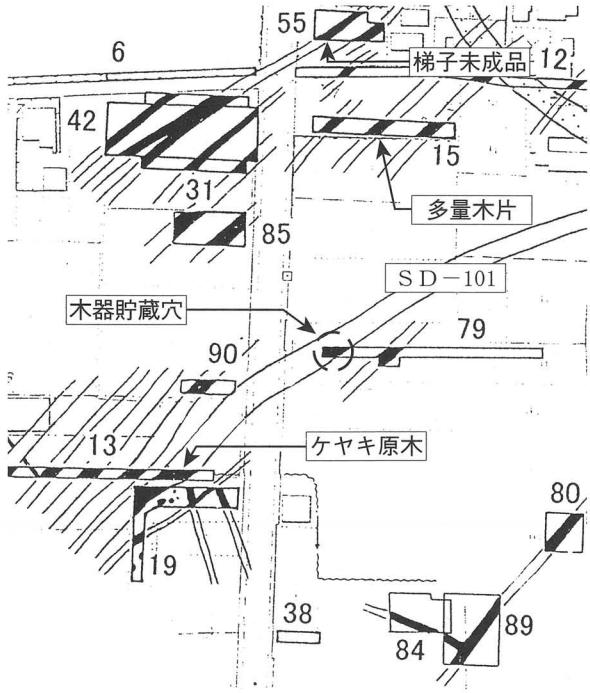
２．木製品

唐古・鍵遺跡の西地区は地区範囲が広く、集落形成の初期段階から安定した居住域として利用されていたと考えられる地区である。

今回報告分の西地区は、西地区の北部にあたり、居住域から内環濠の部分である。出土した木製品は99点であり、その内訳は、第74表のとおりである。

木製品が出土した遺構で特筆されるものは、第79次調査の大和第Ⅳ様式期の木器貯蔵穴（ＳＫ－111・130）である。唐古・鍵遺跡では前期の木器貯蔵穴は多く分布するが、中期以降は井戸や環濠（溝）貯木が主流となるため、第Ⅳ様式期の木器貯蔵穴は珍しい。同時期の西地区北部は環濠帯が形成され、第15次調査や第13次調査などでその環濠中から原木（写真５）や多量の木片（チップ）が出土しており、木材の入手から初期製作段階の資料が豊富である。

また、第79次調査では、大環濠ＳＤ－101が検出され、鍬などの農具や高杯・杓子などの食膳具が出土している。高杯などの食膳具は赤彩や彫刻が施されたものが目立つ。第93次調査では盾や石戈などが出土しており、日常生活に使用する道具だけではなく、儀式などの特別な場での使用が想定できる木製品も多く出土している。



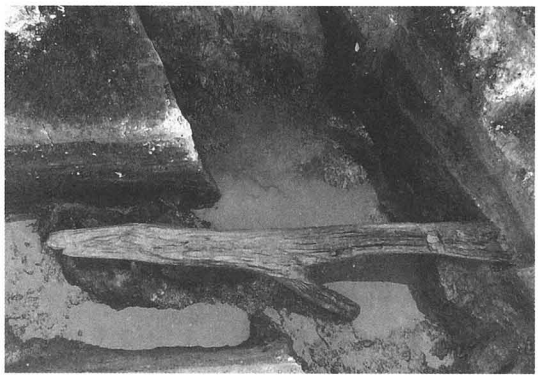
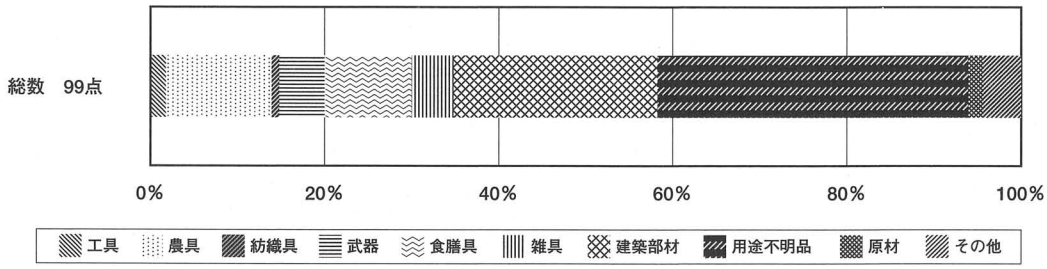


写真５　ケヤキ原木出土状況（第13次調査）

第440図　西地区木製品出土地点図（Ｓ＝1/2,500）

第74表　西地区出土木製品の器種組成

総数	工具	農具	紡織具	武器	食膳具	雑具	建築部材	用途不明品	原材	その他
99	2	12	1	5	10	5	23	35	2	4



（1）工具

膝柄横斧柄未成品（W3001）　膝柄斧柄の台部と思われる。

（2）農具

平鍬（W3002・3003）　W3002は平鍬の身である。頭部は欠損しているが、刃部にかけて徐々に幅を減じる平面形で、柄孔ラインに段をもつ。隆起は明瞭な段をもつタイプで、舟形を呈する。側面観は隆起面に向かって湾曲する。刃部幅からは狭鍬の範疇に入るが、湾曲する点と、平面形から広鍬にちかいといえ、広鍬を再加工した可能性も考えられる。

W3003は二連の平鍬未成品である。下端の小口面には横方向からの連続した加工痕があり、伐採痕と思われる。上端の小口面には両面からの切断痕が残存しており、本来は三連以上あったと想定できる。後面中央にも切断痕がみられ、この2つの平鍬も分離される直前段階のものであろう。平面形は頭部から中位に向かって徐々に幅を増し、中位から刃部に向かって垂下する形態である。隆起部が最も厚く、そこから、周縁に向かって緩やかに厚みを減じる隆起になると思われる。後面には加工時の工具端部のキズが多く残存している。加工具は鉄器であったと推定でき、その幅は約2㎝である。（出土状況：写真図版編 図版193）

泥除未成品（W3004）　W3004は泥除の未成品である。上位が幅狭く、下位が幅広の変楕円形を呈し、側面観は笠形である。前面は柄孔を穿つ部分にのみ小さな平坦面を作り、周縁に向かって低くなるよう加工している。後面は周囲約3㎝の平坦面を作り、そこから中心の柄孔を穿つ付近に向かって緩やかに削り込んでいる。W3003の平鍬未成品と共伴しており、同時に製品に仕上げ、結合して利用しようとしたものと推定できる。加工具幅は約2.5㎝である。（出土状況：写真図版編 図版193－1）

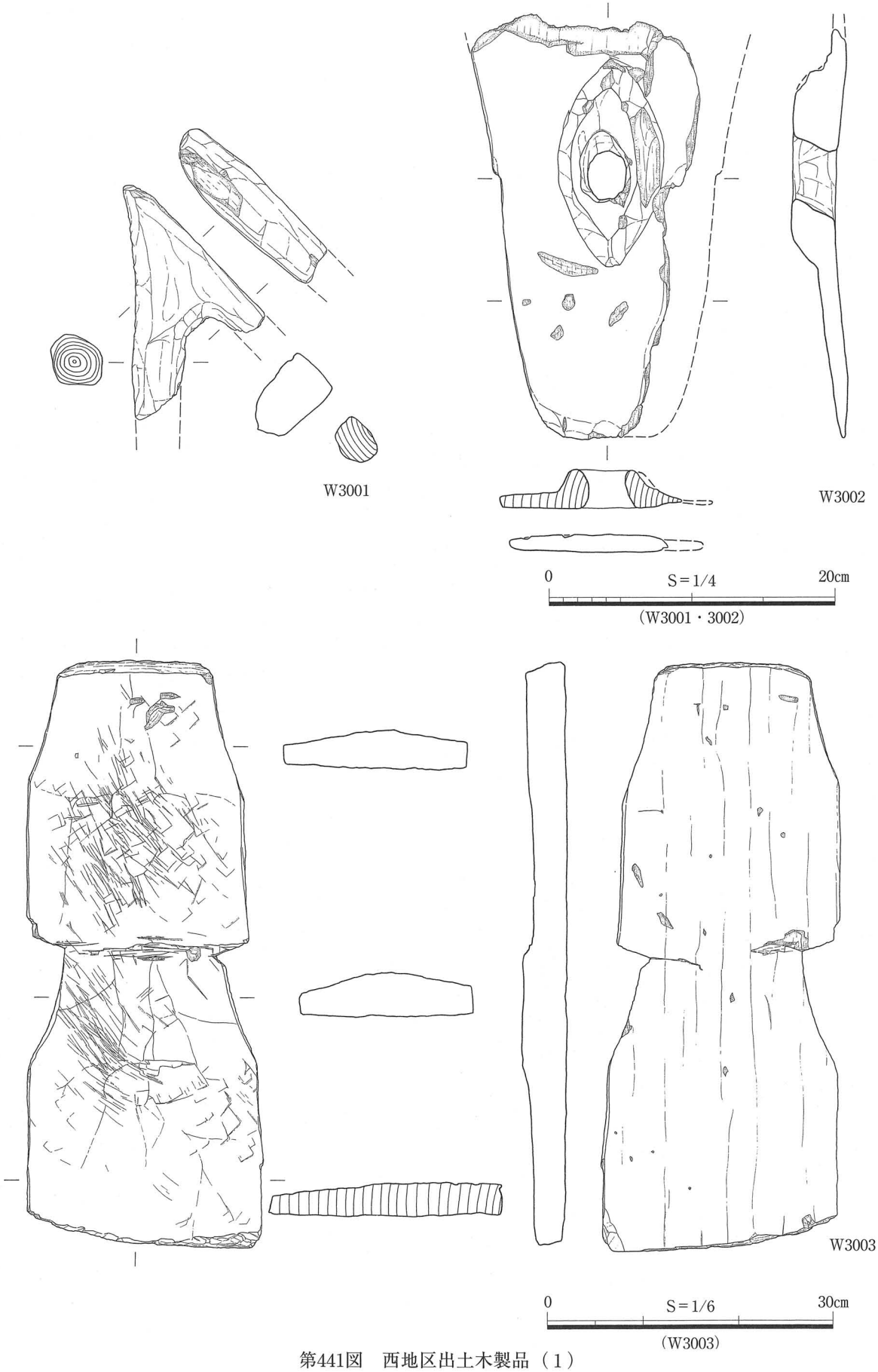
鍬曲柄（W3005）　W3005は曲柄鍬の膝柄である。斧柄などと同様、幹を台部に枝を柄とした木取りである。台部は平坦に作り、上下端に紐掛け用の突起をもつが、明瞭に作り出されておらず、使用痕もみられないことから未成品の可能性がある。加工具幅は約1㎝である。

横槌（W3006）　W3006は横槌の敲打部である。芯持ち材を利用している。上位に浅いキズが数ヶ所みられ、鉄製工具痕の可能性がある。

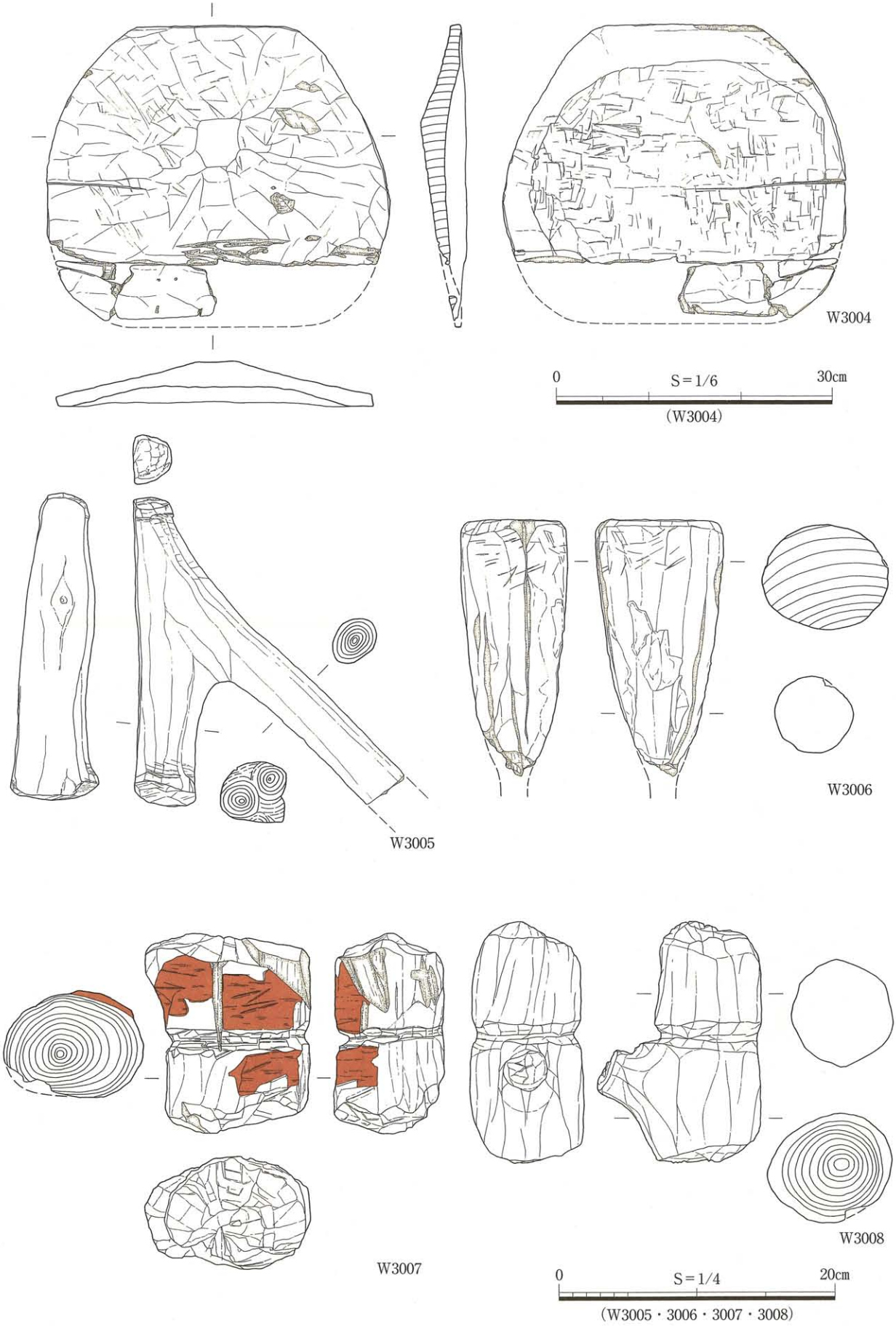
木錘（W3007・3008）　W3007は芯持ち材を用い、側面中央に細い溝を削り込んでおり、表面に樹皮が残存している。中央の溝と小口面には加工痕が残存し、加工具幅は約2㎝である。

W3008はW3007と同様、芯持ち材を用い、側面中央に細い溝をめぐらせたものである。

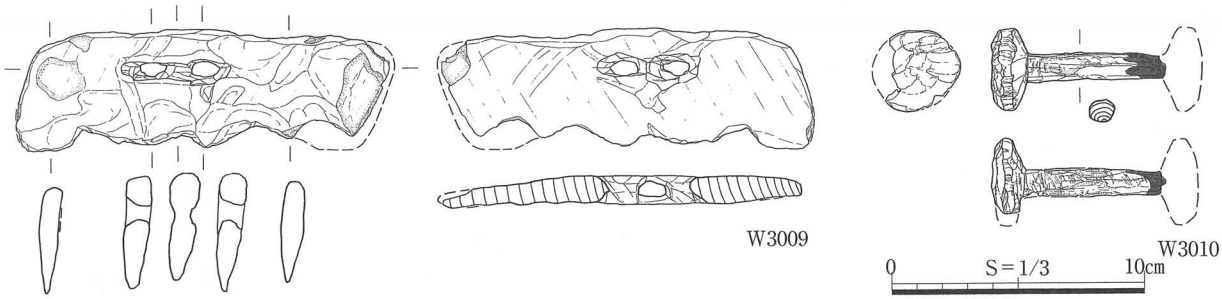
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(㎝)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3001	膝柄横斧柄未成品	79次	SK-105	第4層	長（16.6）、柄径 約3.5 台部長（13.6）、台部幅 3.9		水	サカキ	Ⅵ-4
W3002	平鍬	93次	SK-2201	第4層	長（29.7）、幅（16.1）、身厚 1.3 隆起高 4.0		ラ	コナラ属 アカガシ亜属	Ⅰ
W3003	平鍬未成品	79次	SK-130	第5層	長 61.1、幅 24.9、厚 4.7	二連。 隆起部に付近に加工時のキズ残存（鉄製工具痕か）	ラ	コナラ属 アカガシ亜属	Ⅳ-1



第441図　西地区出土木製品（１）

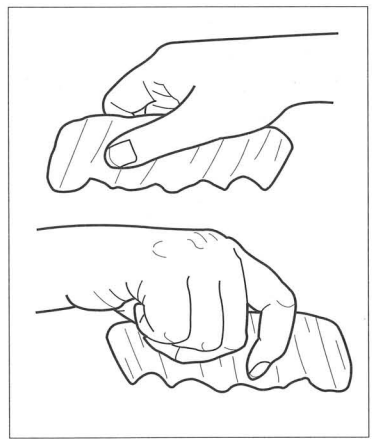


第442図　西地区出土木製品（2）



第443図　西地区出土木製品（３）

穂摘具（W3009）　W3009はいわゆる木庖丁である。柾目材を利用し、側辺が木目と平行した平行四辺形を呈する。片側中央の紐孔周囲には背と平行に溝が彫られている。その溝中に２孔の紐孔が両側から穿孔されている。刃部は現状で大きな鋸歯状になっているが、本来の形態か、使用によって出来た形態なのかは不明である。表裏全面にくぼみが多くみられ、明らかに使用による圧痕と思われるものも存在する。まず、紐孔から背に向かって細長い圧痕があり、紐圧痕と考えられる。また、背部の片側とそこから紐孔を挟んだ対角線上に深いくぼみがみられ、手の腹部分と親指による圧痕と思われる。これらの観察からこの穂摘具の持ち方を復元すると右図のように推定でき、穂摘具の使用状況を推察できる貴重な資料といえよう。



第444図　穂摘具（W3009）の持ち方推定

（３）紡織具

糸巻具（W3010）　W3010は芯持ち材を利用した、糸巻具といわれる木製品である。芯部分を軸部とし、その両端に円盤状の板が作られる。加工は細い工具で面取り加工が施されている。軸部欠損側は炭化している。

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3004	泥除未成品	79次	SK-130	第5層	長（31.9）、幅 36.9、高 4.9 厚 1.2～3.0	加工痕明瞭に残存。 加工具幅:約2.5cm	ラ	コナラ属 アカガシ亜属	Ⅳ-1
W3005	鍬曲柄	79次	SD-101B	第7層	長（27.5）、柄径 約3.0 台部長 22.2 、台部幅 4.5	未成品の可能性あり	ラ	サカキ	Ⅳ
W3006	横槌	93次	SK-2111	第4（下）層	長（18.6）、幅 9.3、厚 7.7	先端付近に浅いキズあり （鉄製工具痕か）	水	サカキ	Ⅵ-3
W3007	木錘	93次	SK-2111	第4（下）層	長 14.5、幅 12.0、厚 8.0	樹皮残存。 加工具幅:約2.0cm	ラ	エノキ属	Ⅵ-3
W3008	木錘	79次	SK-102	第4層	長 17.5、幅 11.8、厚 8.3		水	ケヤキ	Ⅴ-2
W3009	穂摘具	79次	SK-101	第5層	長（14.7）、幅 4.8、厚 1.2	使用によると思われる くぼみが全面に残存	水	コナラ属 コナラ節	Ⅲ-4
W3010	糸巻具	93次	SK-2116	第4-b層	長（6.9） 端部径 3.2、軸部径 約1.0		ラ	カヤ	Ⅳ-2

（4）武器

刀剣鞘（W3011）　W3011は柾目材を用いた組合せ剣鞘の破片である。長方形を呈し、上下に横方向の小溝をめぐらせている。横断面はドーム形で中央を刳り込み空洞を作る。縦断面も少し刳り込んでいる。加工痕は外面には無く丁寧に仕上げ加工が施されているが、内面は細い加工痕が残存する。内面下端部に少し磨耗がみられ、内容物（剣？）の出し入れによるものの可能性がある。上下端にめぐる小溝に紐状のものを巻き縛って鞘としたものと考えられる。

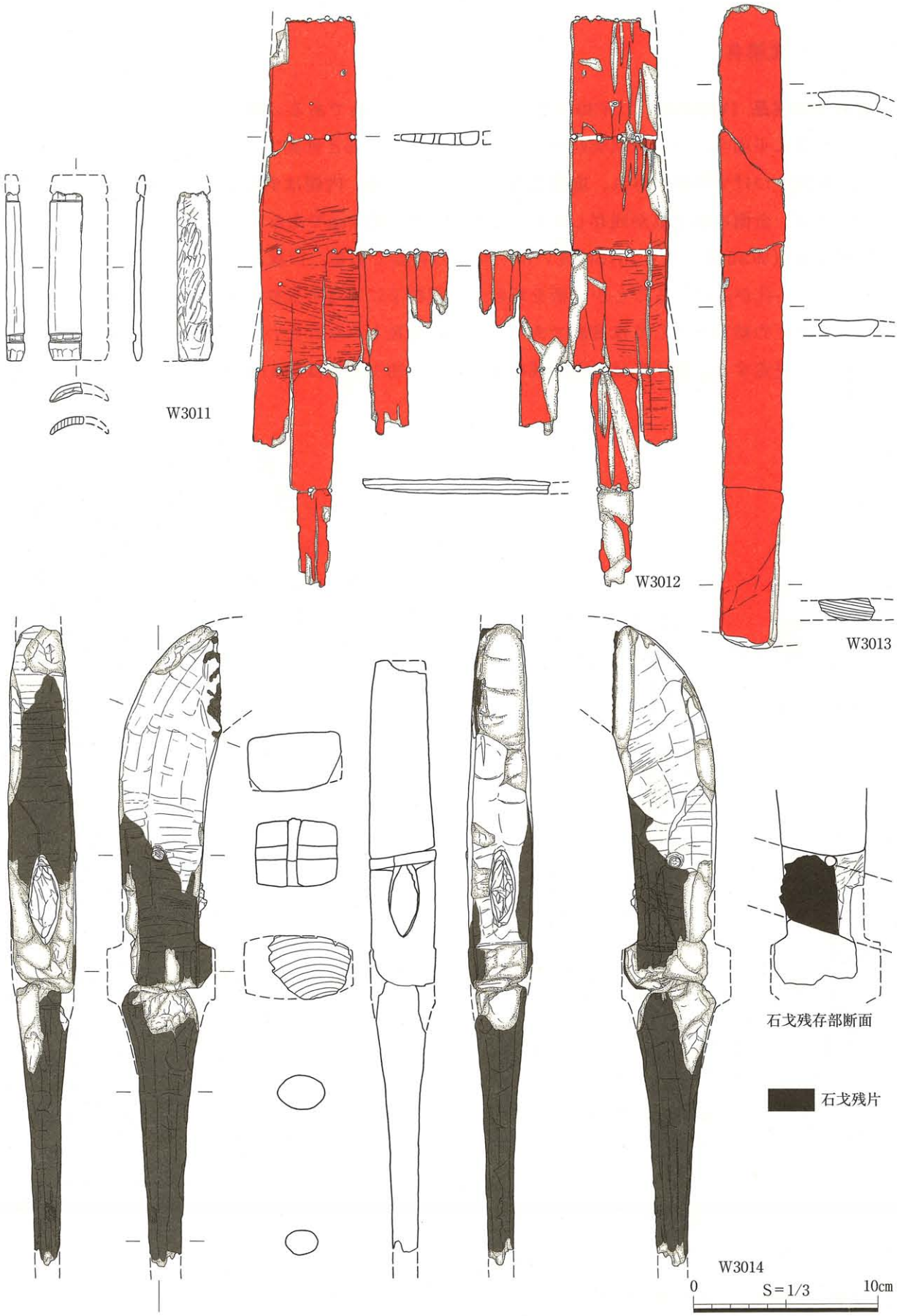
盾（W3012・3013）　W3012は両面赤彩の盾である。片側の一部が側面にまで赤彩が及んでいることから盾の端面として復元すると、小孔列と垂直でなく、上方が内側へ傾く形態と推定できる。径２㎜程の小孔列が５列確認でき、その列間隔は約6.4cmである。Ｂ面には小孔間に赤彩の及んでいない部分が筋状にみられ紐の痕跡と考えられる。両面ともに非常に浅く細い横方向のキズがみられ、仕上げのミガキ痕と思われる。

W3013は板状で赤彩が施されていることから盾とした。下端以外の部分は欠損しており、全体形は把握できない。下端付近は少し厚く作られており、水平でないことからも再加工された可能性がある。片面は部分的に赤彩が確認でき全面赤彩と思われ、反対面は無彩である。

石戈柄（W3014）　W3014はサヌカイト製石戈が装着された状態で出土した。石戈の法量は残存長3.6cm、幅3.8cm、厚1.6cmであり、装着角度は75度前後で頭部を折損している。（石器の詳細は打製石器（794頁）で記載する）

柄は、上下端が欠損しているが、握り部と装着部からなり、その間に一段幅広く作られた把縁をもつ。また、頭部は丸く緩やかに曲がる平面形である。装着孔は把縁直上にあり、両側から斜め方向に穿孔されている。装着孔を穿孔後、石戈を挿入し、固定するために木釘を打ち込んだようである。木釘孔は両側穿孔で、径６㎜の円柱形の木釘を打ち込んでいる。把縁より上位の断面は中央が少し膨張した長方形で、握り部は円形となる。加工痕は装着部から上端にかけて残存し、仕上げのミガキ痕も一部残存している。握り部は炭化が激しく加工痕はみられないが、上位側面に浅いくぼみがみられ、使用時の握りの痕跡の可能性がある。装着部から下端にかけて炭化が激しく、頭部欠損面にも炭化が認められることから、頭部欠損後炭化したものと推測できる。

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3011	刀剣鞘	93次	Pit-1201W	西アゼSec第7層	長（9.1）、幅（1.8）、厚 0.4、高 1.0		ラ	マキ属	Ⅲ-3
W3012	盾	89次	SD-1114C	第10層	長（30.8）、幅（10.6）、厚 0.9	赤彩	水	モミ属	Ⅳ-1
W3013	盾	93次	SK-2120	第11(下)層	長（34.8）、幅（3.5）、厚 1.2	片面(実測面)赤彩。再加工の可能性あり	水	モミ属	Ⅲ-2
W3014	石戈柄	93次	SK-2120	第11(下)層	長（34.3）、幅（5.0）、厚 3.2～3.6	石戈装着状態で出土	ラ	ヤブツバキ	Ⅲ-2

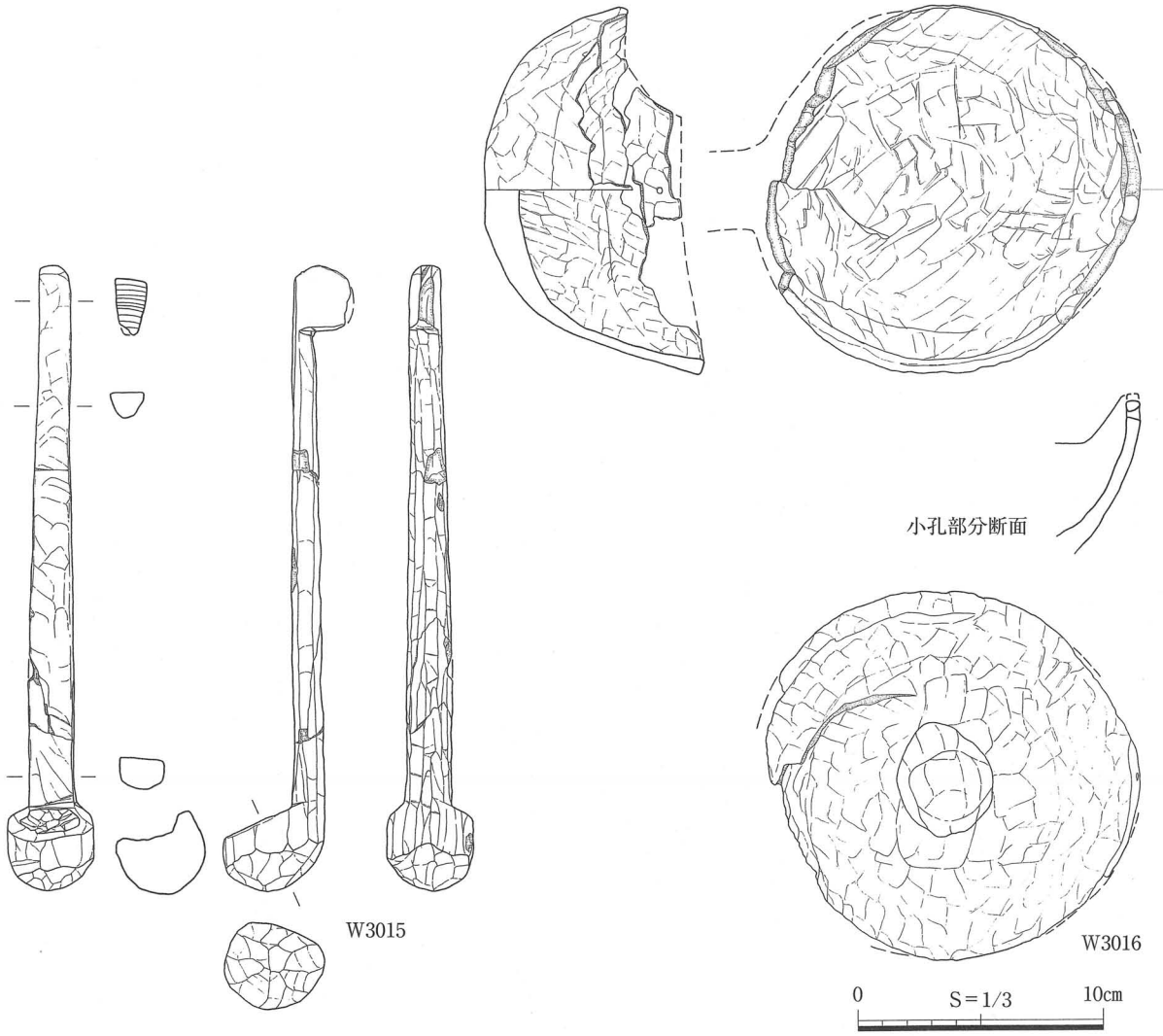


第445図　西地区出土木製品（４）

（5）食膳具

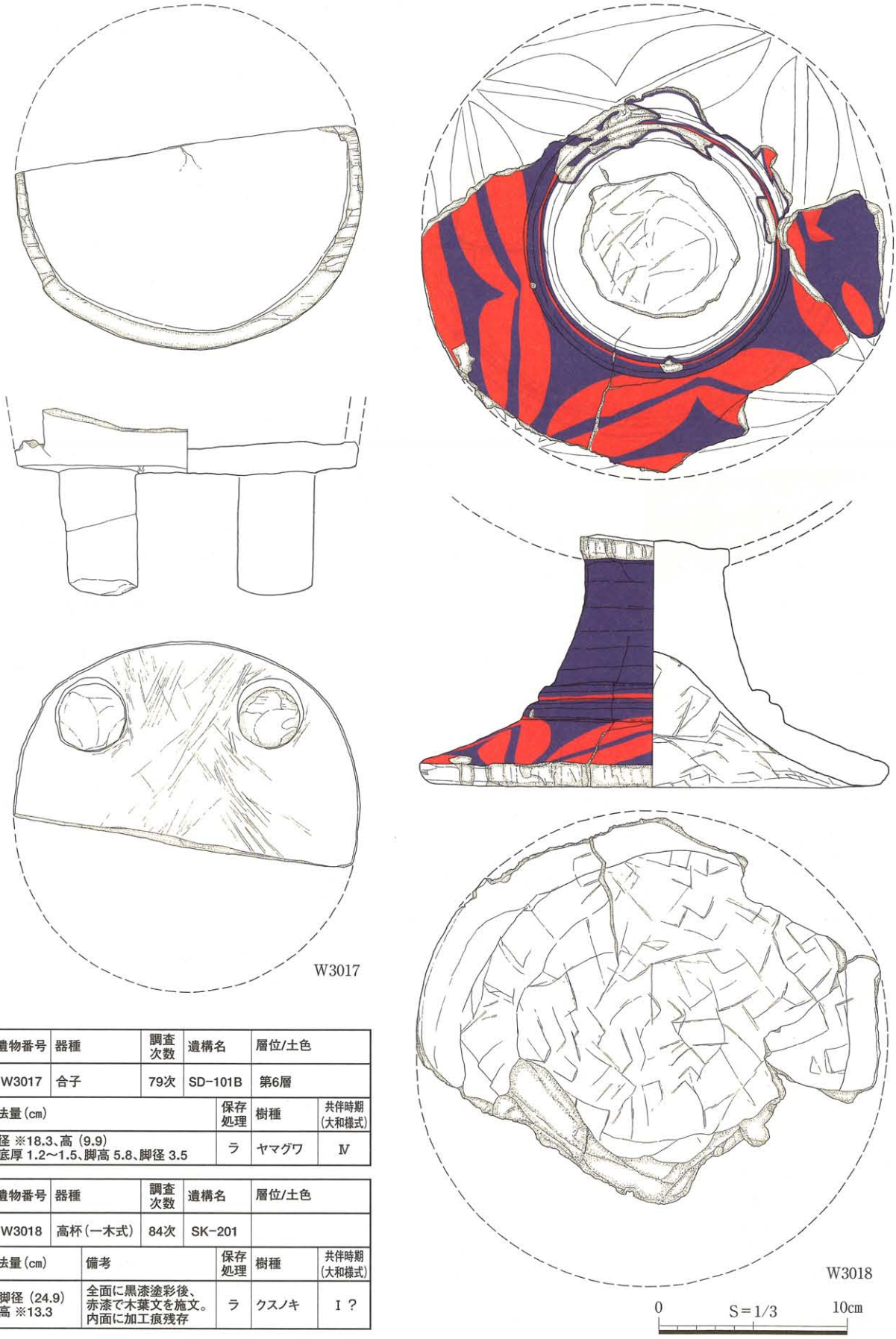
縦杓子未成品（W3015）　W3015は小型の縦杓子未成品である。柄部は断面半円形の棒柱状で、上端に平面半円形の板状突起が付く。身は口縁が柄部と垂直でなく、先端に向かって斜め下に角度をつけて作り出され、底部は丸く作られている。内側は少し彫りくぼめられている程度である。全面に加工痕が残存しており、加工具幅は約1㎝である。

不明容器（W3016）　W3016は丸いボール状の容器である。口縁が水平でないことと、側面に1ヶ所小孔がみられることから柄を組合せた横杓子になる可能性がある。小孔は径約3㎜と小さく柄との結束孔としては貧弱であり、あまり磨耗もみられない。底面は、径4㎝程の平坦面をもち安定する。加工痕は全面に残存しており、加工具幅は約1㎝である。



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3015	縦杓子未成品	79次	SD-101B	第7-b層	長 25.3、幅 3.5 柄幅 1.3～1.8	加工具幅:約1.0cm	ラ	ヤマグワ	Ⅳ
W3016	不明容器	93次	Pit-1201W	第5層	口長径（15.0）、口短径 14.8 高 5.8、8.9、厚 0.4～1.4	側面に小孔1ヶ所。 杓子の可能性あり	ラ	ヤマグワ	Ⅲ-3

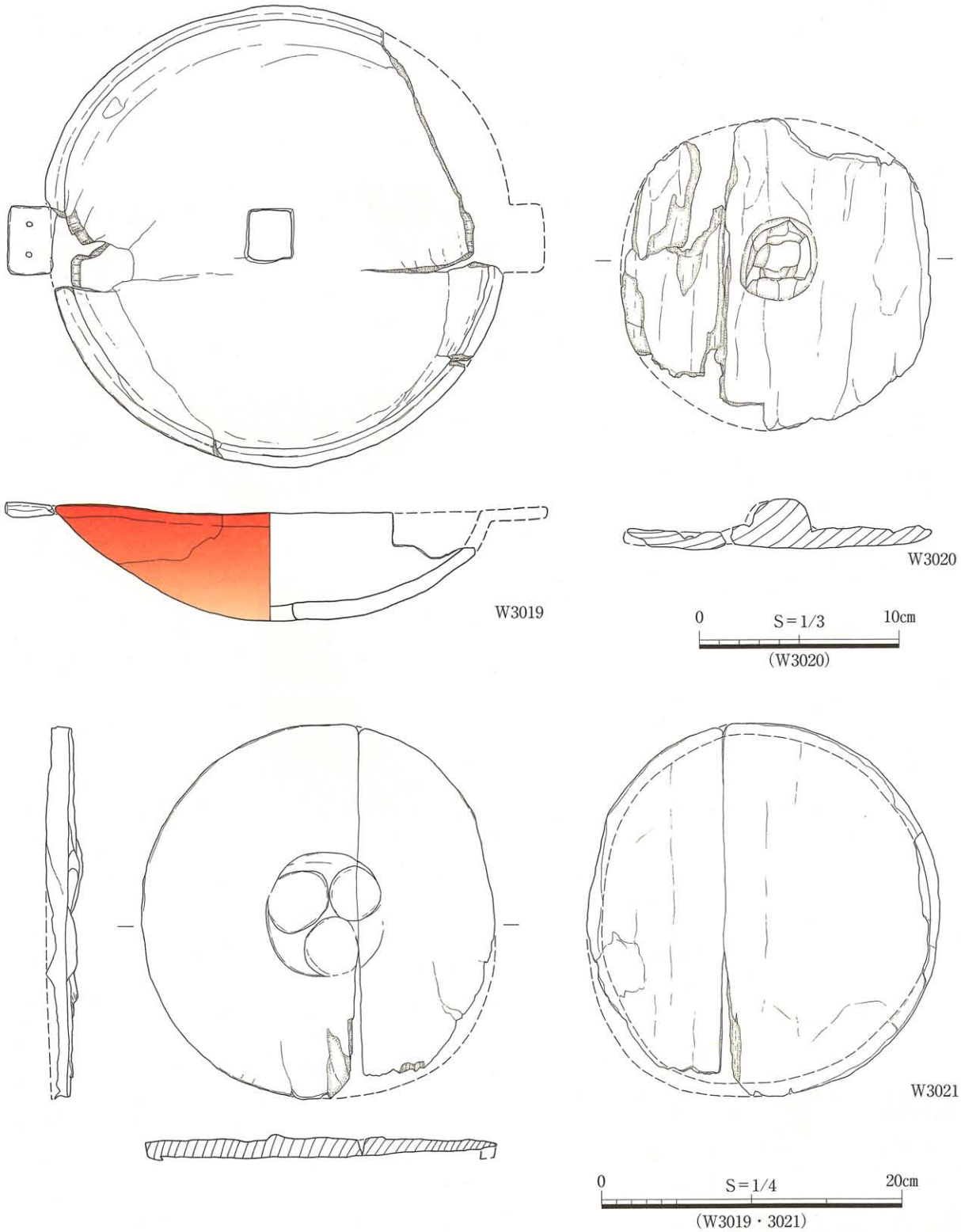
第446図　西地区出土木製品（5）



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	
W3017	合子	79次	SD−101B	第6層	
法量(cm)			保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
径 ※18.3、高（9.9） 底厚 1.2〜1.5、脚高 5.8、脚径 3.5			ラ	ヤマグワ	Ⅳ

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	
W3018	高杯（一木式）	84次	SK−201		
法量(cm)	備考		保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
脚径（24.9） 高 ※13.3	全面に黒漆塗彩後、赤漆で木葉文を施文。内面に加工痕残存		ラ	クスノキ	Ⅰ？

第447図　西地区出土木製品（６）



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3019	高杯(組合せ式)	79次	SD-101B	第6層	口径 30.6、最大幅 ※35.7 高 8.0、厚 1.2	外面赤彩	ラ	ケヤキ	Ⅳ
W3020	蓋	79次	SD-102	第3層	径 15.5、厚 2.4、1.0	裏面全面炭化。 土中で一度乾燥している	水	ヤマグワ	Ⅱ-2～ Ⅲ-1
W3021	蓋	79次	SD-101B	第9層	径 24.7、厚 1.6、高 2.4	被せ蓋。 中央に刻文あり	ラ	ヤマグワ	Ⅲ-3

第448図　西地区出土木製品（7）

合子（W3017）　W3017は円形の合子の底部である。脚は比較的外側に円柱状のものが２本残存しており、四脚容器と推定できる。外底面には線状の細かい加工痕が残存している。

高杯（W3018・3019）　W3018は彩文が施された一木式高杯である。脚部中位には２条の凸帯が作り出されている。裾部端面に１条の沈線が施されていた可能性があるが、明瞭でない。脚部内面の周縁には２～３cmの平坦面があり、接地面となる。装飾は全面に黒彩が施された後、赤色顔料によって脚裾外面に木葉文が描かれている。木葉文は葉の部分に赤彩を施す陽画で、１本の軸部をもつ斜軸木葉文である。木葉文の外側にも赤彩がみられるが、その意匠は不明瞭で、円弧状あるいは直線状になるものと思われる。２条の凸帯の間には幅約３mmの直線文を赤色で施す。加工痕は杯部内面と脚部内面にみられ、加工具幅は約1.5cmである。

W3019は組合せ高杯の杯部である。平面円形で左右に蓋と結束するための方形板状の突起が作り出される。突起には径3.5mmの結束孔が２ヶ所穿たれている。杯部中央には方形孔があり、組合せ材が挿入されていたと考えられる。外面赤彩。（出土状況：写真図版編 図版194－３）

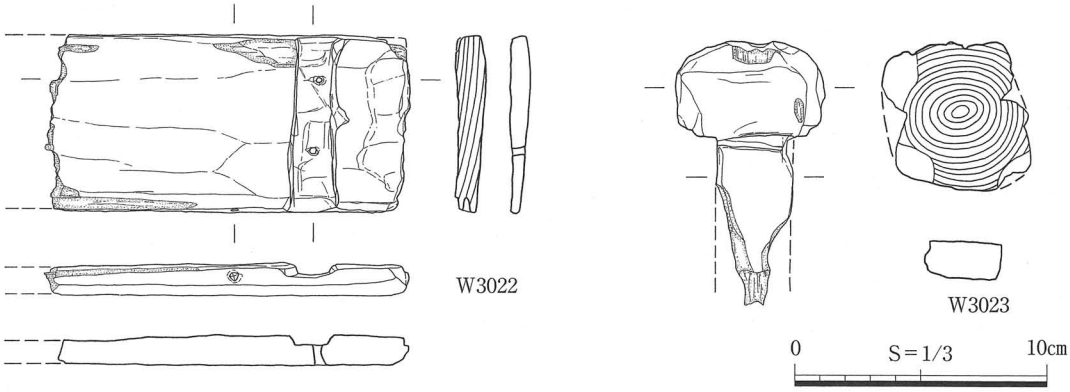
蓋（W3020・3021）　W3020は円形の置き蓋である。中央に突出したつまみを作り出す。裏面が激しく炭化している。

W3021は円形の被せ蓋である。外面中央には径約８cm内に３つの円を浮き彫りにした刻文が施されている。

（６）雑具

部材（W3022・3023）　W3022は板状の組合せ部材である。幅約1.3cm、深さ約0.4cmの溝が作り出されており、そこに径0.2cmの小孔を２ヶ所穿っている。また、側面にも径0.2cmの目釘穴がみられる。溝に他の部材をはめ込み木釘で固定したものと思われる。短辺端付近に圧痕と思われるくぼみがみられる。

W3023は栓状の部材である。方柱状で頭部を一段大きく釘頭状に作ったものである。下位が欠損しているため枘孔の有無は不明である。建築部材とも考えられる。



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3022	部材	93次	SK−2120	第11(下)層	縦 7.0、横 (14.3)、厚 0.7		水	ヒノキ科	Ⅲ−2
W3023	部材	89次		黒灰色粘土	長 (10.3)、幅 5.8、厚 5.2		ラ	針葉樹	弥生前期

第449図　西地区出土木製品（８）

（7）建築部材

板材（W3024）　W3024はW3025の柱材の脇で出土した3枚の板材のうちの1枚である。柱材に接着した状態で出土し、板材に柱の圧痕が明瞭に残る。上端には粗雑な刳り込みがあり、穿孔と考えられる。下端の小口面には両面からの加工痕（切断痕）が確認できる。柱材との機能的関係は不明であるが、板材の厚さなどから、元々は床材あるいは壁材などの建築材であり、それを転用して柱穴内に入れられたものと推定している。（出土状況：写真図版編 図版267－1）

柱（W3025）　"W3025は第93次調査大型建物跡ＳＢ－1201の北西隅柱である。柱は検出状態における上面側と下面側で保存状況に違いがある。とりわけ、上面側の中央芯部分は腐食し洞となり、これを中心として上面側1/3の上部から下面側先端部はヒダ状となる。それ以外は保存状況が良く、加工痕が観察できる。なお、現地において柱先端が炭化しているのを確認した。

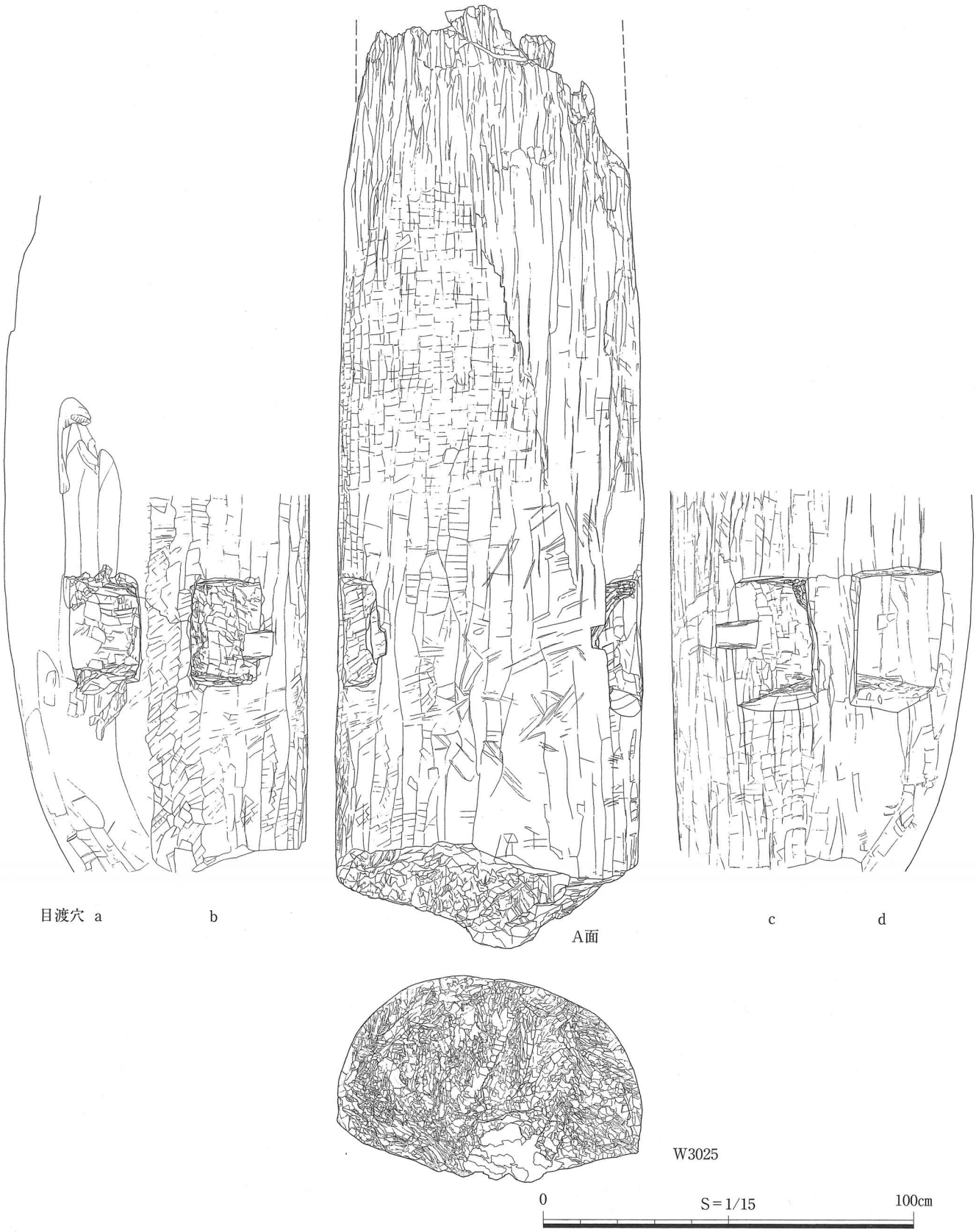
検出状態において2孔一対の目渡孔がちょうど両側面の位置にあることから、上面側をＢ面、下面側をＡ面として記述する。本柱の縦断面形は、Ａ面側は平坦であるのに対し、Ｂ面側は両端に向かって湾曲している。この湾曲は、柱上半は腐食であるが、下半は大きく加工されたためである。また、Ａ面では加工痕が柱主軸に平行して幾条も観察できるのに対し、Ｂ面は磨耗し側面や基部付近でないと加工痕を観察できない。このことから運搬時にはＢ面が下面であり、その基部下半を樵状に加工していたと考えられる。なお、Ａ面の右側は柱上部から目渡孔に向かってすぼまりながら、一層剝がれた状態となっている。この部分にも加工痕は残存しており、製材時には既に剝がれていたのであろう。Ｂ面の右側では目渡孔の上部30cm程が浅くくぼんでいる。さらにその上部には節があり、枝払いの際に生じた裂け目痕跡であろうか。器面に残された加工具幅は3cm弱と、5.5cmの大きく2種類である。

目渡孔は2孔一対で、底部先端から60～70cmの位置にある。いずれも柱主軸に沿った長い長方形で、接する2孔が柱内部で連結し蔓掛け用の陸橋部を作り出す。Ａ面向かって左側面に配された目渡孔（ａ・ｂ）は横28cm前後、縦20cm前後で、作り出される陸橋部は長さ24cm、幅14cm、向かって右側面に配された目渡孔（ｃ・ｄ）は一回り大きく横35cm前後、縦24cm前後で、作り出される陸橋部は長さ34cm、幅12～14cmを測る。また、目渡孔内の調整についても、Ａ面向かって左側面のものは粗いのに対し、右側面のものは丁寧である。Ａ面側の両目渡孔は、Ａ面側の長辺に直交する長方形の欠き込みをもつ。その欠き込みの機能については、不明である。なお、Ａ面向かって右側面の目渡孔内には、運搬時に使用したと考えられる1cm前後の蔓が14本の束となって残存していた。

柱の底面は、樵状の加工によりＢ面側1/3を欠くが、伐採時における両側面からの打撃によりくさび状に突出していたと考えられる。この突出した先端部には、Ａ面側からの斫り痕をもつ。折り取り面を加工したものと考えられる。また、突出部はＢ面側が最も高いが、この部分における磨耗が著しい。柱落とし込みの際に、生じたものであろう。底面の打撃痕は、最大幅で7cmを測る。斫り痕の加工具幅は2.2cmである。（豆谷）"（出土状況：写真図版編 図版266）

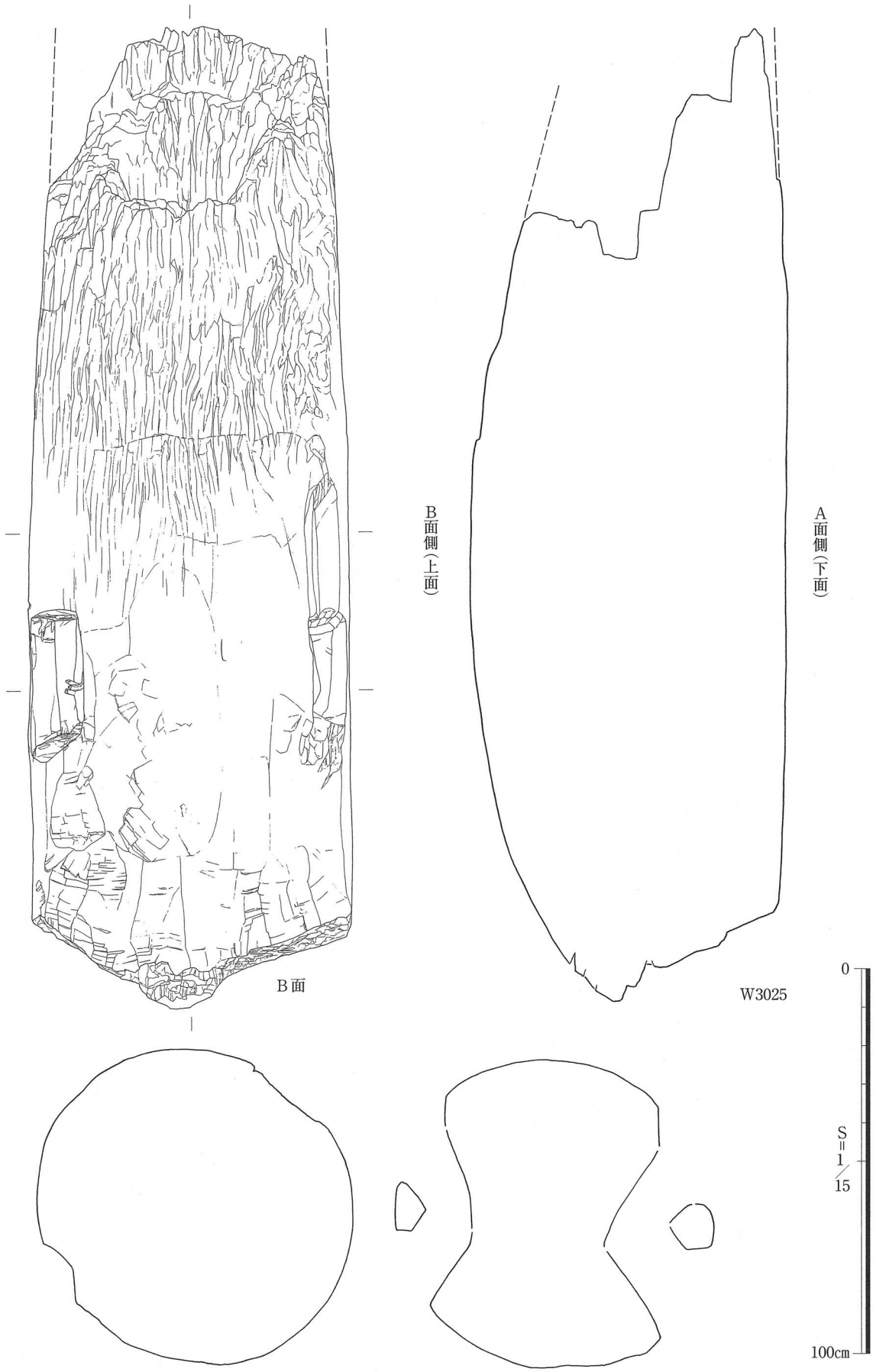
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3024	板材	93次	Pit-1201WB	第15層	長（114.3）、幅 27.5、厚 3.7	建築材（壁・床板）からの転用の可能性あり。加工具幅:1.8～2.0cm	水	ヒノキ	Ⅲ-2・3

第450図　西地区出土木製品（９）



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3025	柱	93次	Pit-1201WB	第14層	長 (250.0)、径 83.2	目渡穴2ヶ所。内1ヶ所にツル残存	ラ	ケヤキ	Ⅲ-2

第451図　西地区出土木製品 (10)



第452図　西地区出土木製品（11）

（8）用途不明品

用途不明品（W3026～3029）　W3026は円錐状の用途不明品である。丸木材で枝材を用いたものと思われる。根元の太い部分に現存で6条の沈線が線刻されている。先端は欠損するが、側面観は先端が少し上方へ反る。沈線付近には黒彩が残存しており、全面黒彩であった可能性がある。先端付近一部炭化。匙か。

W3027は割材を利用した円柱状の用途不明品である。中央に方形の穴が加工されており、その両側面には木釘は残存していないが、径3㎜の目釘穴が1孔ずつ穿たれている。この方形の穴に他の部材をはめ込み木釘で固定したものと思われる。面取り加工はみられるが、比較的加工は粗雑である。一木鋤などの把手部材か。

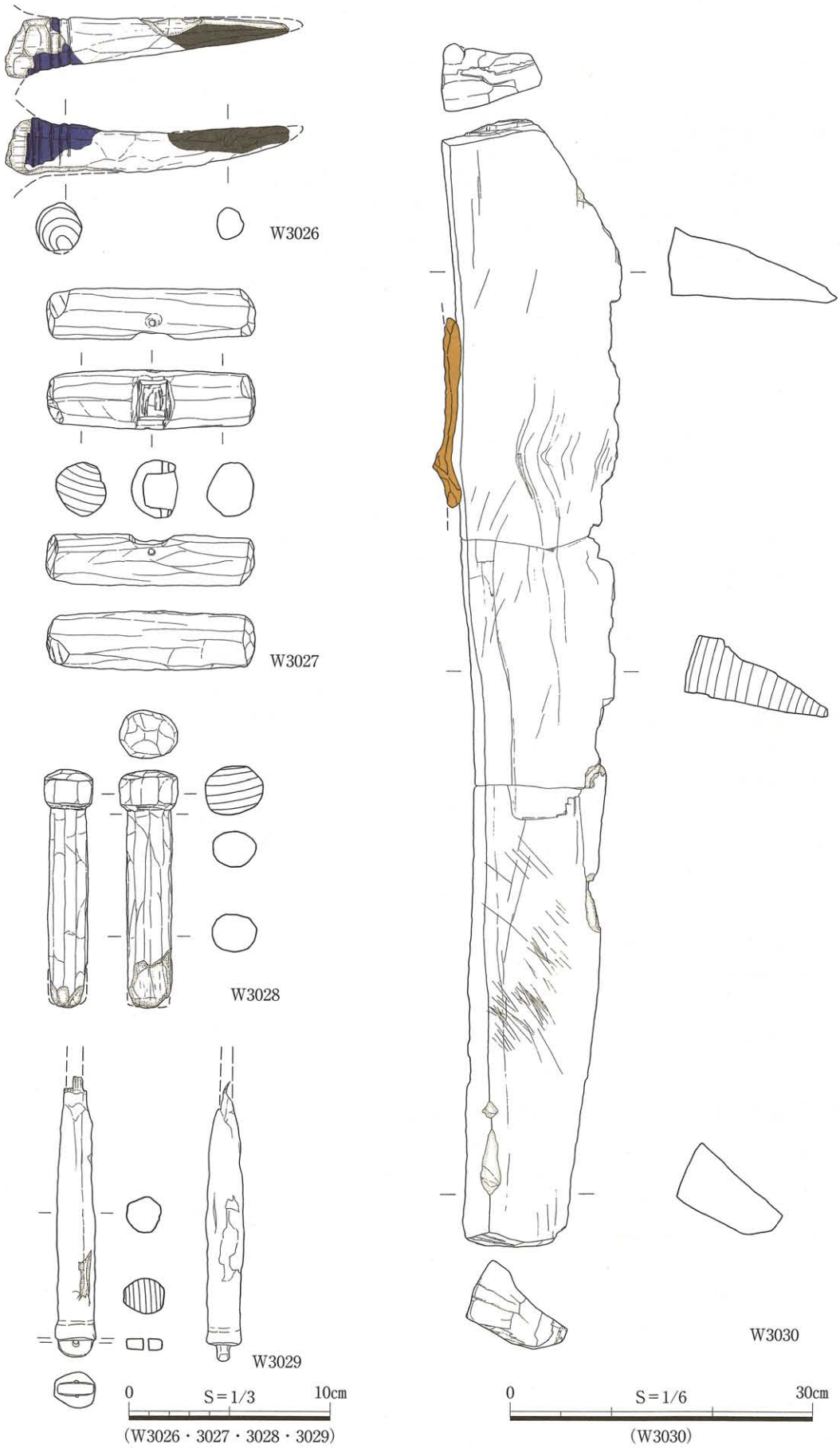
W3028は割材を利用した棒状の用途不明品である。ほぼ完形品で頭部は一段大きく釘頭状に作られている。枘穴などに差し込む部材か。

W3029は割材を利用した柄状の用途不明品である。同形の木製品が第61次（W1062）、第69次調査（W1063）でも出土している。断面円形で裾部が少し開く。下位には半円形で板状の突出部が付き、中央に小孔が穿たれている。保存状態は悪く先端は繊維状になっているが、類例から考えると、現状の先端付近で一段細く作られていたと想定でき、そこに他の部材を組合せて使用したものと思われる。

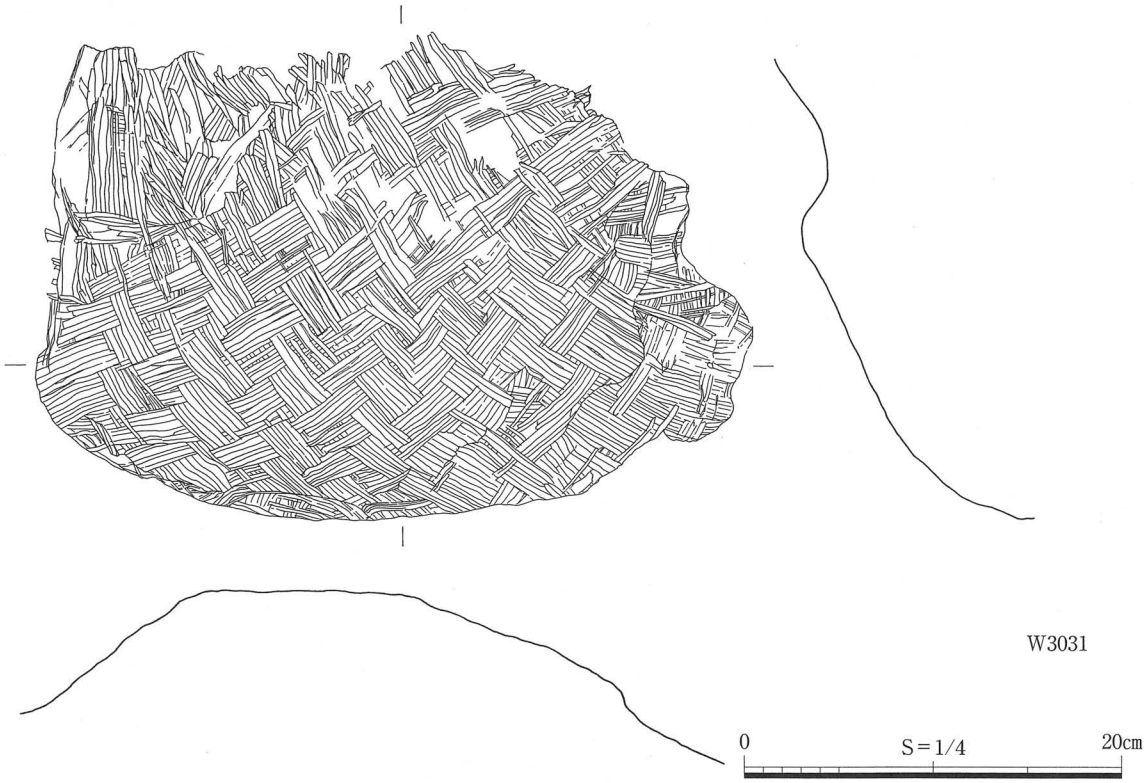
（9）原材

原材（W3030）　W3030はみかん割りの原材である。一部表面に斜め方向のキズがみられる。小口面には伐採痕が残存する。樹皮一部残存。（出土状況：写真図版編 図版192－2）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3026	用途不明品	84次	SK-103	第6層	長 (14.0)、幅 (2.8)、高 (3.0)	表面に漆?塗彩。 一部炭化	水	クスノキ	Ⅳ-1
W3027	用途不明品	93次	Pit-1201W	第5層	幅 10.3、長径 2.9、短径 2.3 方孔縦 2.0、方孔横 1.5、方孔深 1.6		水	ヒノキ	Ⅲ-3
W3028	用途不明品	79次	SD-101B	第7層	長 11.8、幅 2.9、厚 2.4		水	ヒノキ科	Ⅳ
W3029	用途不明品	80次	SD-106	第6(下)層	長 (13.8)、幅 2.0、厚 1.8	W1062・1063と同形	水	ヒノキ	Ⅲ
W3030	原材	79次	SK-111	第6(下)層	長 110.4、幅 18.1、厚 6.9	みかん割り材。 樹皮一部残存	ラ	コナラ属 クヌギ節	Ⅳ-1



第453図　西地区出土木製品（12）



遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)	備考	保存処理	樹種	共伴時期(大和様式)
W3031	籠編物	79次	SK−118	第3層	長（25.8）、幅（37.6）		―	未同定	Ⅲ−1
WP3001	籠編物	79次	SK−118	第3層			―	未同定	Ⅲ−1

第454図　西地区出土木製品（13）

（10）繊維製品

編物（W3031・ＷＰ3001）　W3031は網代編みで編まれた編物である。破片であり、全体形は不明である。タテ材、ヨコ材共に数本（５本１単位？）の細い材を利用し、２本越２本潜１本送で編まれている。１本の材幅は1.5～３㎜である。図右端には下位に重なっている網代が一部みえているが、同一か別個体かは不明である。

ＷＰ3001も網代編みの編物である。破片であり、全体形は不明である。タテ材、ヨコ材ともにW3031よりも太い材を１本ずつ利用し、２本越２本潜１本送で編まれている。

３．石器

西地区の打製石器は、一部を除いてサヌカイト製であり、剥片・石核を含めたサヌカイト製遺物の総重量は約143.81kgに達する。１㎡あたりの出土量は約81ｇとなる。そのうち第79次調査地22.12kg、第80次調査地18.00kg、第84次調査地31.69kg、第89次調査地18.07kg、第93次調査地53.93kg（うち10.86kgはＳＫ－2206から）出土しており、１㎡あたりの出土量はそれぞれ約82ｇ、180ｇ、75ｇ、36ｇ、112ｇ（ＳＫ－2206を除くと90ｇ）となる。第80・93次調査地での出土量は、他の地区まで含めても群を抜いて多い。また石核の出土点数が多く、第79・84次調査地にややまとまっており、西地区のなかでもこれらの地点が石器製作の場として盛んに利用されたことがわかる。一方、楔形石器は第84・89・93次調査地に多く、第79・80次調査地に少ない傾向を示している。

第75表　西地区の石器

種類	器種	79次	80次	84次	89次	93次	合計
打製石器	石剣	21	12	27	9	25	94
	中形尖頭器	5	7	6	8	8	34
	石鏃	37	49	56	54	66	262
	石錐	26	22	54	17	40	159
	石小刀	10	2	8	9	6	35
	石匙	0	0	0	1	1	2
	スクレイパー	20	3	4(1)	19(1)	16(4)	62(6)
	楔形石器	4	4	15	8	8	39
	火打石	0(2)	0	1	1	1	3(2)
	石鍬	0(1)	0(1)	0(1)	0	0	0(3)
	石核	17	6	30	8	14	75
	合計	140(3)	105(1)	201(2)	134(1)	185(4)	765(11)
磨製石器	石庖丁	46	29	32	29	46	182
	石庖丁未成品	5	1	5	2	11	24
	太型蛤刃石斧	5	1	3	5	6	20
	柱状片刃石斧	1	0	1	1	3	6
	扁平片刃石斧	0	1	3	3	6	13
	磨製石鏃	0	0	2	0	0	2
	磨製石剣	3	3	4	0	2	12
	磨製石戈	0	1	0	0	4	5
	環状石斧	0	0	0	0	0	0
	合計	60	36	50	40	78	264
石製品	石製紡錘車	1	2	1	0	1	5
	石製紡錘車未成品	1	1	1	0	0	3
	石製円板	1	0	1	0	0	2
	垂飾品	1	0	0	0	0	1
	ミニチュア石製品	0	2	0	1	0	3
	用途不明石製品	4	3	3	4	12	26
	石鋸	1	4	3	1	3	12
	石鋸素材	2	6	2	6	12	28
	砥石	29	33	26	22	38	148
	合計	40	51	37	34	66	228
礫石器	敲石	11	6	3	6	11	37
	石槌	1	0	0	0	0	1
	磨石	11	6	3	7	18	45
	台石	3	0	0	0	3	6
	石皿	3	0	0	0	3	6
	投弾	0	4	2	1	5	12
	合計	29	16	8	14	40	107

註）打製石器の数値はサヌカイト製の点数
（　）内の数値はサヌカイト製以外のものの点数を示す

磨製石器は264点で、西地区では南地区と同様に石庖丁が多数出土しており、石器組成の６割に及ぶ。いわゆる未成品も出土しており、石庖丁の製作がおこなわれたことが推定できる。流紋岩製石庖丁、石斧類、磨製石鏃、磨製石剣、磨製石戈も一定量出土している点には、南地区と類似した様相を認めることができる。

石製品は228点ある。砥石については明確な傾向を指摘できないが、先述の分類項目をほぼ網羅している。「置砥」とみられる大形の砥石や、他の地区では出土していない「提げ砥」の欠損品とみられる資料が出土している点は注視される。

礫石器は107点出土しており、すべての器種がそろっていることが指摘できる。サヌカイトを用いた硬質のものから、砂岩を用いた軟質のものがあり、多様な石材が利用されている。南地区同様、磨石や石皿が多数確認できるが、南地区に比べて石皿が少ないようである。

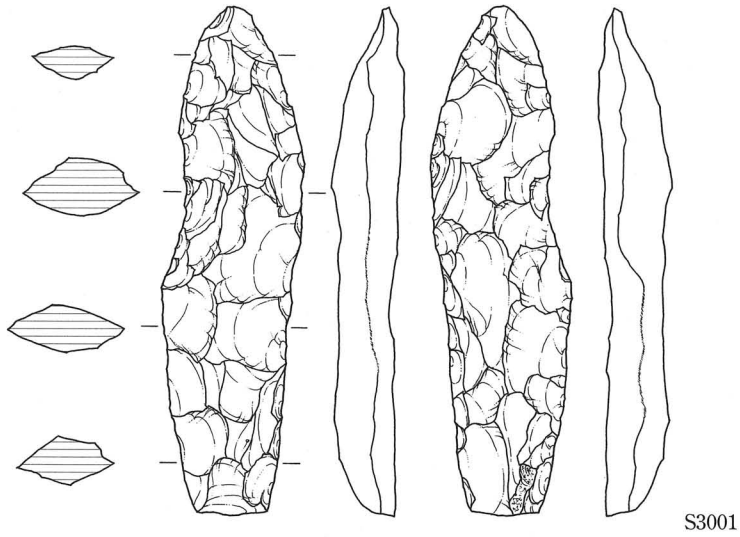
（1）打製石器

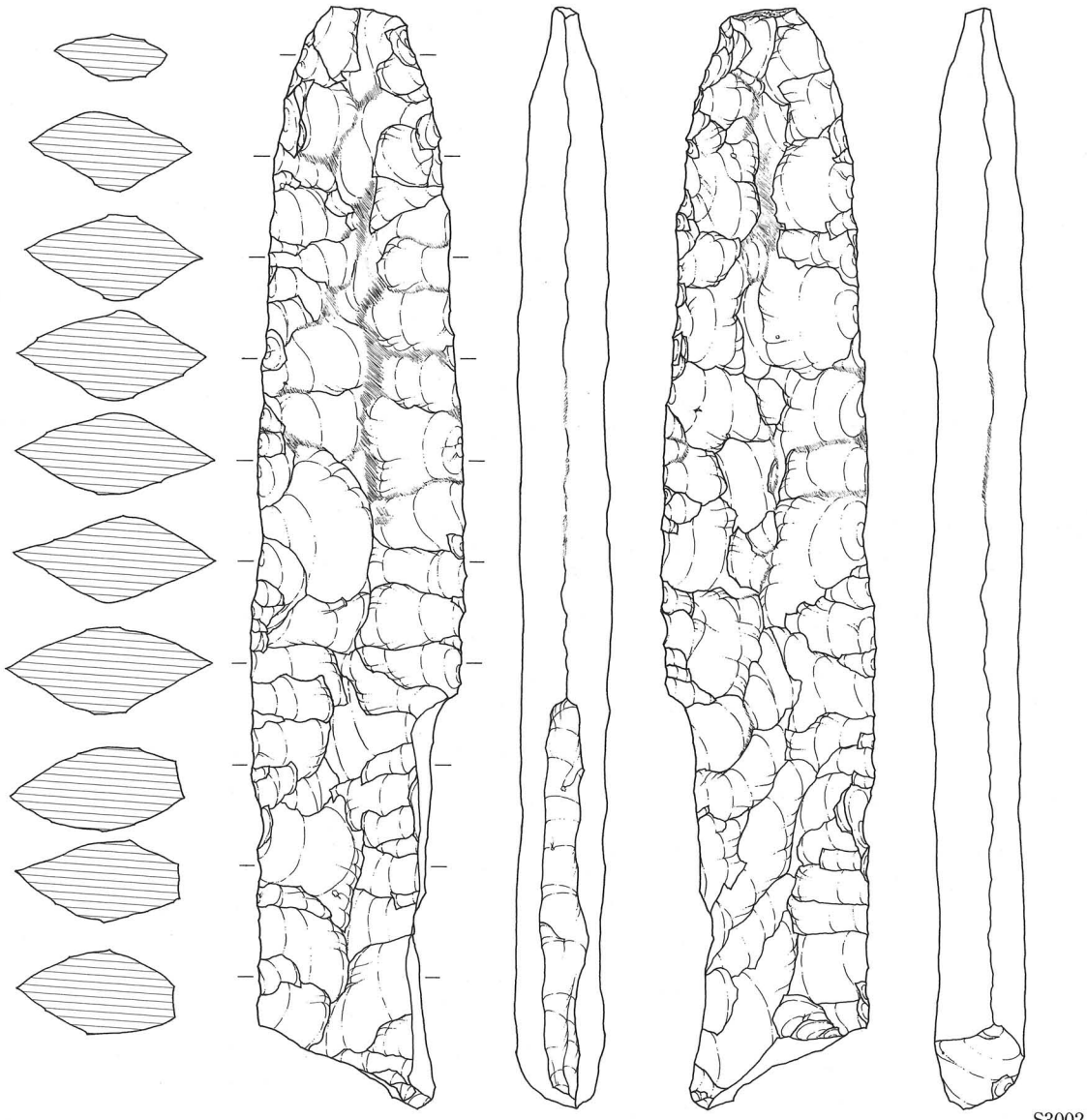
石剣（Ｓ3001～3009・ＳＰ3001～3020）　94点確認しているが、全体の形状をうかがえるものは10点にすぎず、そのほかは先端部片が26点、中央部片が30点、基部片が28点ある。

Ｓ3001はｂ面基部に自然面が認められ、原石か、背面に自然面をもつ剥片を素材としていると推察される。自然面の観察からは、石理走向が判読できる。ａ面先端部左側やｂ面左側に階段状の剥離痕が発達するものの、概ね左右対称の形状が意図されたと思われる。平面形態を著しく乱しているａ面先端部左側の剥離痕は、他の剥離痕とは剥離角がまったく異なる上、隣り合う剥離痕や対辺からの剥離痕よりも、切り合い関係の上で新しい。製作の最終段階で生じた何らかの事故、あるいは使用によって破損した後の、修正作業の痕跡と推測できる。両側縁にはわずかに磨耗が認められる。

Ｓ3002は最大長が22.8cmに達する大形の石剣で、唐古・鍵遺跡で確認されているなかでも最大のものである。すべての剥離面がわずかに光沢をみせる。先端部に自然面が残るほかは、素材の性状をうかがうことができない。全体的に丁寧な調整が施されているが、先端部に自然面が残っていることからも、製作途上品と思われる。調整は薄手の調整剥片を剥ぎ取りつつ進行しているが、ｂ面先端部のみ、ネガティブバルブが発達した剥離痕をみせる。先端部を中心に、基軸に斜交する研磨痕が観察される。中央の鎬に相当する部分を中心に、剥離痕の稜によって形成された凸部が擦り落とされているようである。こうした研磨痕は、周囲の剥離痕と一定の前後関係をもたず、調整作業のなかで随時、障害となりそうな部分が研磨によって入念に調整された、「中間研磨」[(1)]の痕跡と思われる。中央部付近の両側縁にも磨耗痕が観察されるが、こうした痕跡も、剥離作業に伴う側縁の擦り調整として理解すべきなのかもしれない。残された基端部をみる限り、基端部の調整も入念におこなわれたようであるが、重大な剥離事故が生じたため、加工が断念されたようである。基端部から側縁を導線に生じたファシット状の剥離痕、左側縁から生じて基端部をもち去った剥離痕ともに、不純物が観察される。後者の剥離痕については、再加工が試みられている。

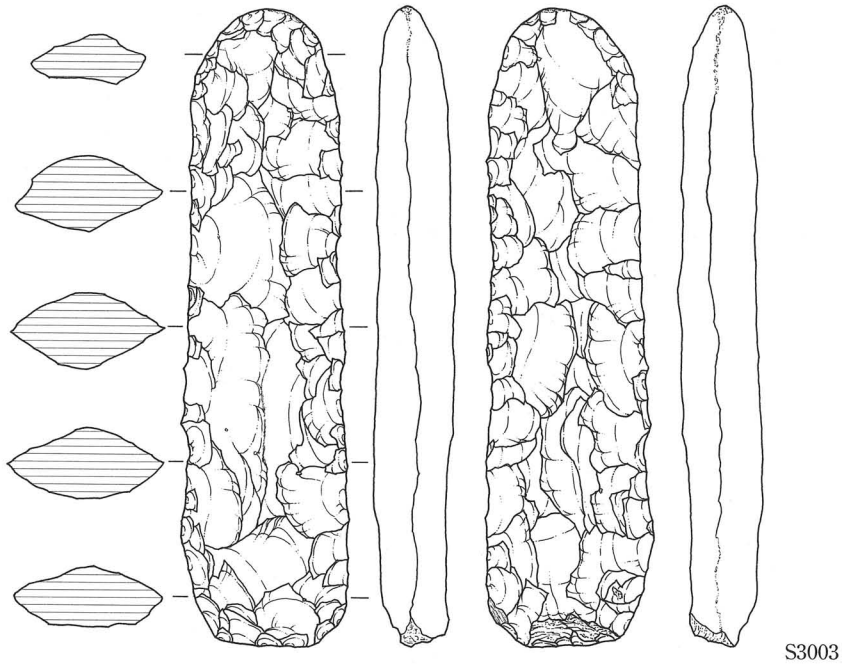
Ｓ3003はわずかに黒色の縞が入るサヌカイトが利用されている。ｂ面基部にポジティブな剥離痕が観察されることから、剥片素材であると思われる。また基端部には自然面が残っており、素材剥片が少なくとも末端に自然面を有していたこと、順目で剥離されたことがわかる。ｂ面基端部付近の左側には、基軸に斜交する研磨痕が観察される。またａ面中央の鎬にあたる部分が、わずかに磨耗している。基端部は両面加工によって整えられている。全体的に薄手の調整剥片を剥ぎ取りつつ調整が進められているが、ａ面先端部左側、基端部、左側縁基部には階段状の剥離痕や敲打痕が認められる。先端部は丸く、敲打痕が微細剥離痕を伴いながら発達しており、先端部の整形に際して執拗に打撃が施されたことが推測される。ｂ面先端部には、他の剥離痕との切り合い関係や剥離方向、大きさを鑑みても作業意図を異にすると思われる剥離痕が先端方向から生じており、剥離事故の痕跡である可能性がある。先端部の敲打痕はその

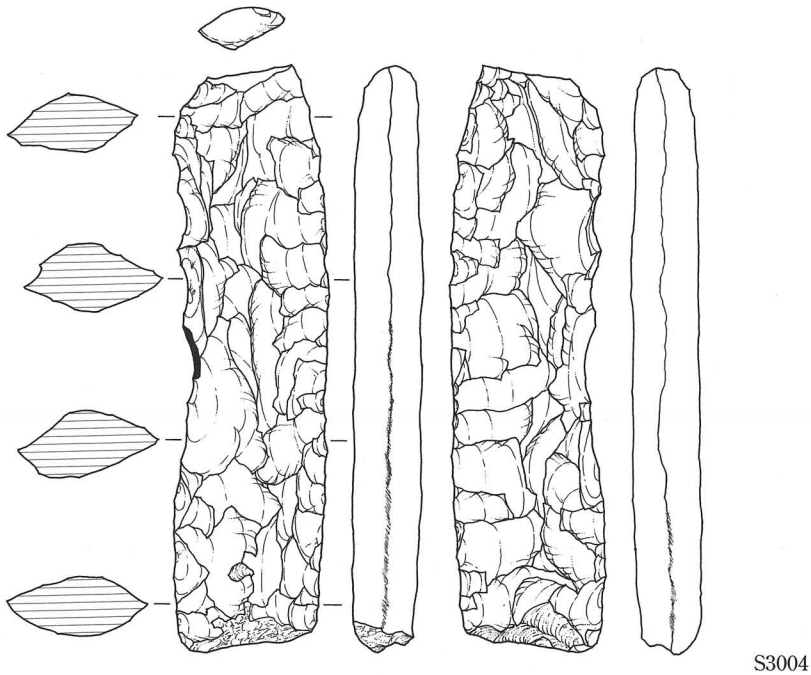


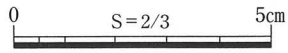


0　S＝2/3　5cm

第455図　西地区出土打製石器（１）







第456図　西地区出土打製石器（2）

修正に伴うものであろうか。

S 3004はａ面及び基端部に自然面が残されていることから、原石か、背面に自然面をもつ剥片を素材にしていると考えられる。ネガティブバルブの発達しない、薄手の調整剥離によって丁寧に整形されている。平面形態を乱している左側縁の一連の剥離痕は、ネガティブバルブ

の発達する、やや粗雑な剥離痕であり、他の剥離痕に後続する。剥離角の点からも他の剥離痕と性格の異なるものと思われる。また本資料の両側縁には磨耗痕が発達しているが、左側縁の粗雑な剥離が施されている部分の側縁には、磨耗痕が観察されない。一連の粗雑な剥離痕が先端部の折損面に後続することから考えて、先端部折損後、再加工が目指されたと推測できる。先端部の折損面には不純物が観察される。基端部の自然面からは石理走向が判読できる。

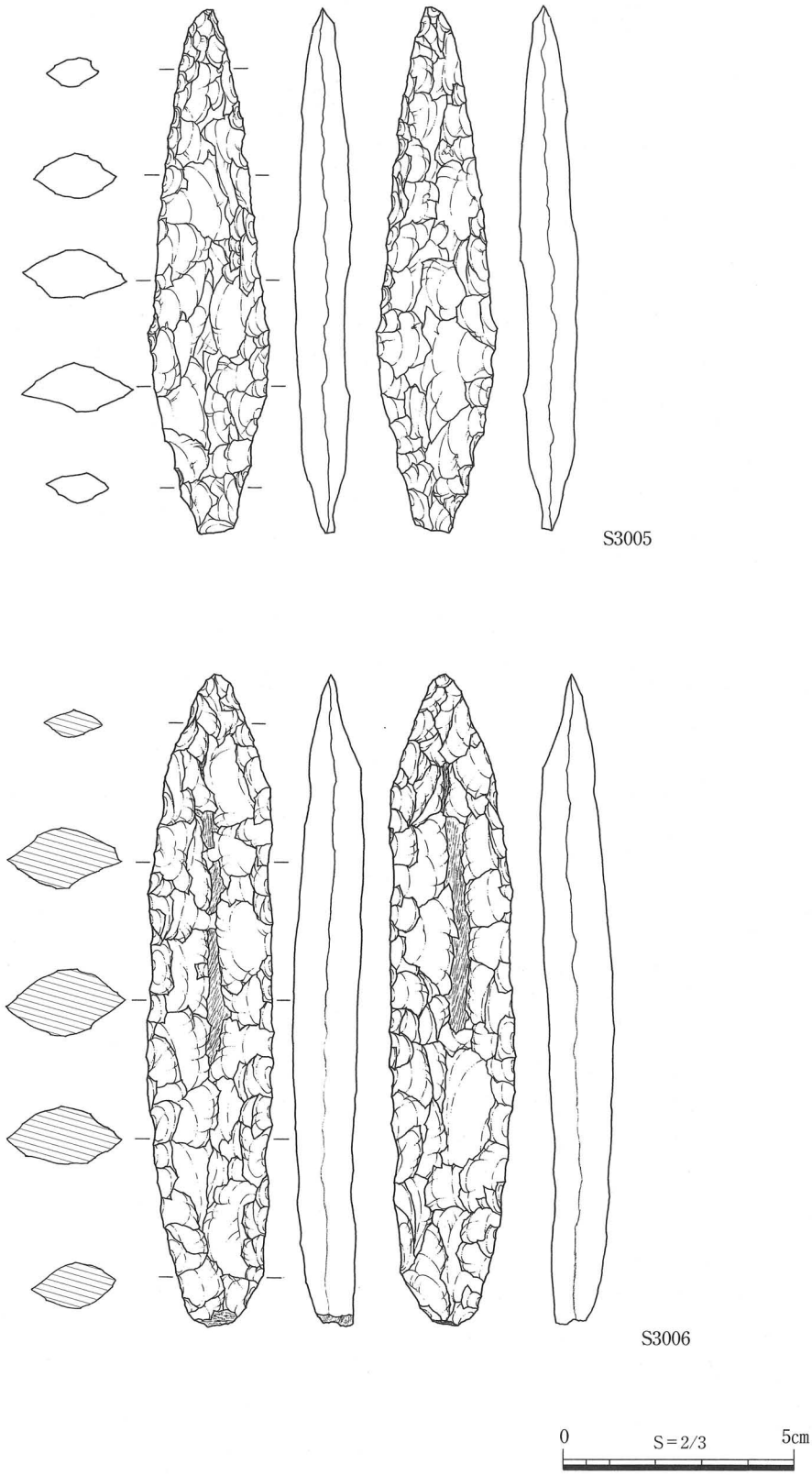
Ｓ3005は素材に関する情報が認められないほど調整が進んでおり、基部も丁寧に調整されている。ａ面右側には階段状や蝶番状の末端部をみせる剥離痕がやや目立ち、中央部には蝶番状の末端部によって生じた段から、小剥離痕が２つ生じているのが観察できる。打点も比較的明瞭であり、いわゆる「パンチ使用による剥離面」[1]に相当すると思われる。これらの剥離痕は、側面観においても肥厚している部分に相当し、階段状や蝶番状の末端部の剥離痕が生じて除去困難となった、肥厚部の調整が意図されたと推定される。

Ｓ3006は基端面に自然面をとどめているほか、素材の性状に関する情報は得られない。自然面の観察によると、石理走向は基軸に斜交している。平面形態は基部がやや曲がっているものの、全体が丁寧に仕上げられている。側縁の基部よりの部分には磨耗痕が観察され、最終段階の調整剥離によって生じた側縁の凹凸の凸部を中心に磨耗している。ａ・ｂ両面には基軸にやや斜交する方向に発達した、明確な研磨痕が観察される。切り合い関係の観察によると概ね現存している調整剥離痕よりも先行するようであり、調整剥離の比較的初期の段階で「中間研磨」が施されていると思われる。

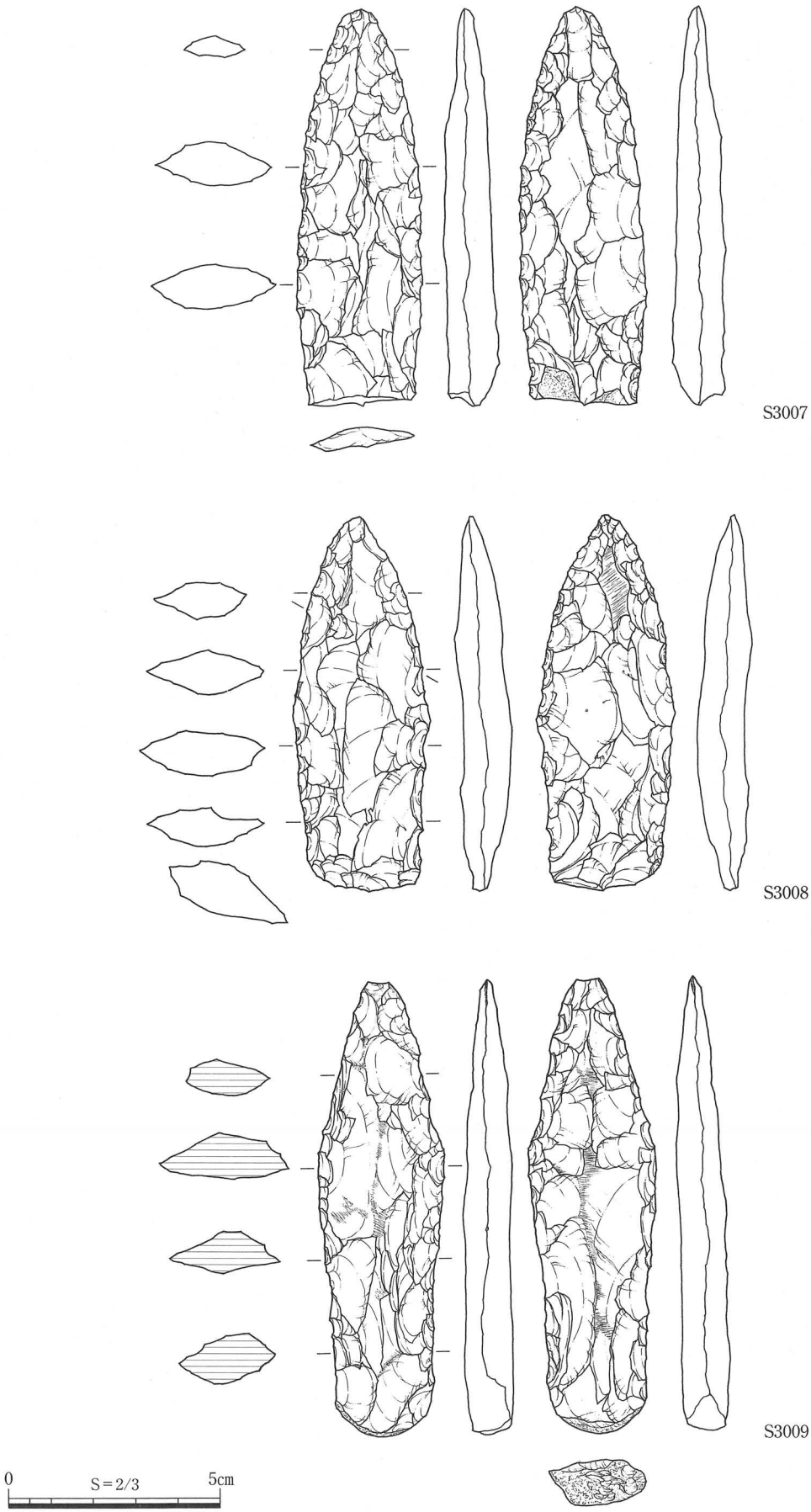
Ｓ3007はｂ面中央部にポジティブな剥離面が観察され、剥片を横方向に用いていることが推定できる。基部側を折損しているが、ｂ面下端部に石材の変質部が認められ、折損の要因となったと考えられる。先端部には最終剥離痕としてファシット状の剥離痕が残されている。

Ｓ3008はｂ面にポジティブな剥離面が残存しており、剥片が横方向に利用されたと判断できる。ａ面には基部方向からの剥離痕が２枚確認できるが、切り合い関係やリングの状況、本資料の加工程度から考えて素材剥片の背面の名残である可能性が高い。またａ面先端部付近には、ごくわずかに自然面が残されている。素材剥片は、原石から剥片が数枚剥離された石核から得られたと推測できる。全体的に階段状の剥離痕が目立ち、側面観にも素材剥片に起因する湾曲をとどめている。ａ面先端部左側には、階段状剥離痕の末端部から生じる明確な剥離痕が確認でき、「パンチ使用による剥離面」にあたる。また先端部付近はａ・ｂ両面とも、わずかに磨耗している。基端部は両面加工によって整えられている。

Ｓ3009はｂ面にポジティブな剥離面が大きく残されており、基端部に自然面をみせることから、側縁に自然面をもつ剥片が横方向に利用されたと考えられる。全体的に階段状の剥離痕が目立ち、a面右側縁はその発達が著しい。ａ・ｂ両面のいたるところに、基軸に斜交～直交する研磨痕がみられ、剥離痕との切り合い関係に照らしても、調整作業のなかで何度か「中間研磨」を試みる場面があったと思われる。先端部は両側縁が著しく磨耗しているが、磨耗痕の形成の後も、剥離は施されているようである。基端部の調整はほとんど認められないが、基端



第457図　西地区出土打製石器（3）



第458図　西地区出土打製石器（４）

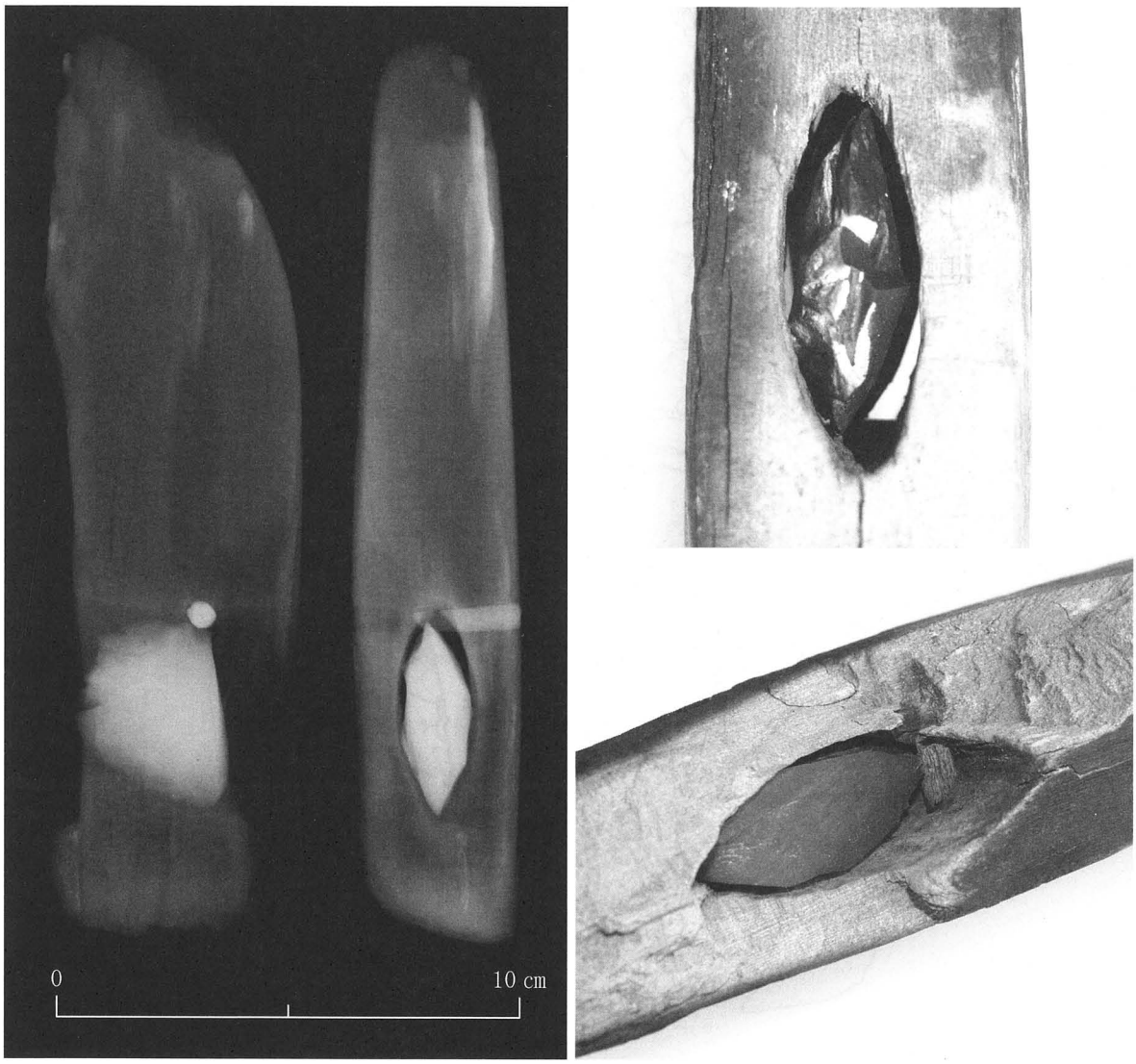


写真６　木製柄内石器（ＳＰ3102）装着状況

部の自然面上には微細な剥離痕を伴う敲打痕が発達している。

ＳＰ3102は最大長3.6cm、最大幅3.8cm、最大厚1.6cmで、先端部を折損している。木製柄に装着されているため、石器そのものの詳細な観察は難しいが、両面調整によって断面が凸レンズ形に仕上げられており、技術形態学的には、石剣として分類した石器と同じである。基端部からも粗雑ながら両面調整が施されているが、基部片面には自然面が残存している。石理走向は不明である。折損のため、本来の形状はわからないが、仮に両側縁が平行する形状の石剣を想定した場合、木製柄への装着角度（木製柄の木目と石器の基軸のなす角度）は75度前後となる。石器の装着孔上端には木釘が打ち込まれている。Ｘ線写真の観察によると、石器側縁の木釘が接触する部分が凹状に変形していることがわかる。この点から、石器を木製柄に差し込んだ後、固定するために木釘が打ち込まれたと考えられる。折損面は両極剥離面となっているが、折損面の観察からは、折損の直接的な要因となったのは、握部方向から加わった力であると考

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量（cm）			重量（g）	備考	共伴時期（大和様式）
					最大長	最大幅	最大厚			
S3001	石剣	79次		灰色粘質土	10.1	2.3	1.2	36.6	両側縁に磨耗痕	弥生
S3002	石剣	79次	SD−101B	第10層	22.8	(4.3)	1.9	(218.3)	先端部付近に研磨痕。両側縁に磨耗痕	Ⅲ−3
S3003	石剣	79次	SD−120	第1層	12.6	3.4	1.5	83.1	基端部付近に研磨痕	Ⅲ−2
S3004	石剣	93次	SK−2120	第6層	(11.6)	3.2	1.2	(59.4)	両側縁に磨耗痕	Ⅲ−2
S3005	石剣	84次	SD−101W	第1層	(11.5)	2.6	1.3	(32.1)		古墳後期
S3006	石剣	84次		黒褐色粘質土	14.2	2.7	1.3	63.5	中央部付近に研磨痕。両側縁に磨耗痕	弥生・古墳
S3007	石剣	93次		黒褐色粘質土	(9.4)	2.9	1.1	(35.9)		弥生・古墳
S3008	石剣	89次	SD−1114B	第8層	8.9	3.2	1.2	36.2	先端部付近に研磨痕	Ⅳ
S3009	石剣	80次	SD−106	第5層	(10.8)	3.1	1.2	(44.3)	両面に研磨痕	Ⅲ
SP3001	石剣	84次	SD−102	第1層	(3.2)	(3.1)	(1.3)	(9.6)	被熱	古墳後期
SP3002	石剣	93次		黒褐色粘質土	(4.1)	(3.4)	(0.9)	(10.6)		弥生・古墳
SP3003	石剣	93次		黒褐色粘質土	(5.6)	(2.8)	(1.0)	(12.0)		弥生・古墳
SP3004	石剣	79次	Pit−134	暗灰色粘質土	(6.1)	(3.5)	(1.0)	(26.7)		弥生中期
SP3005	石剣	93次		黒褐色粘質土	(6.4)	(4.6)	(1.3)	(37.3)		弥生・古墳
SP3006	石剣	84次	SD−101E	第2−b層	12.9	3.5	1.6	73.4		古墳後期
SP3007	石剣	84次	SD−61	灰褐色粘質土	(12.2)	(2.9)	(1.6)	(60.7)	両側縁に磨耗痕	中世
SP3008	石剣	93次	SK−2115	第7層	(8.3)	(2.9)	(1.3)	(28.5)		Ⅴ−2
SP3009	石剣	84次		暗灰褐色粘質土	(7.9)	(3.6)	(1.3)	(30.3)		弥生〜中世
SP3010	石剣	93次	SD−2101	第1層	(6.8)	(3.2)	(1.2)	(34.5)		Ⅳ−2
SP3011	石剣	93次	SK−2120	第1層	(7.5)	(2.8)	(1.1)	(28.8)		Ⅳ−1
SP3012	石剣	93次		黒褐色粘質土	(3.3)	2.8	1.3	(13.7)		弥生・古墳
SP3013	石剣	79次	SD−103	第2（下）層	(4.3)	3.9	1.7	(38.6)		古墳後期
SP3014	石剣	93次		黒褐色粘質土	(3.6)	4.1	1.4	(30.7)		弥生・古墳
SP3015	石剣	93次		黒褐色粘質土	(3.7)	(4.0)	(1.2)	(15.1)		弥生・古墳
SP3016	石剣	93次		黒褐色粘質土	(5.8)	4.7	1.1	(33.4)		弥生・古墳
SP3017	石剣	93次		黄褐色粘質土	(6.1)	3.3	1.5	(32.1)	二重風化	弥生
SP3018	石剣	93次	SK−2111	第1層	(7.7)	4.4	1.1	(60.8)		Ⅵ−3
SP3019	石剣	80次	SD−106	第5（下）層	(9.2)	3.5	1.8	(78.9)		Ⅲ
SP3020	石剣	79次	Pit−1110	黒色粘質土	(10.5)	3.3	1.2	(55.5)		弥生中期
SP3102	石剣	93次	SK−2120	第11（下）層	(3.6)	(3.8)	(1.6)	−	木製柄装着状態で出土	Ⅲ−2
S3010	中形尖頭器	93次		灰褐色粘質土	(8.0)	2.0	0.9	(13.2)		弥生〜中世
S3011	中形尖頭器	93次		黒褐色粘質土	6.9	2.8	1.6	33.1	風化がやや進む	弥生・古墳
S3012	中形尖頭器	89次	SD−1001	第1層	6.3	2.2	1.3	18.8		中世
S3013	中形尖頭器	93次	SD−2101	第1層	(6.4)	1.9	0.9	(11.5)		Ⅳ−2
S3014	中形尖頭器	89次		黒褐色粘質土	6.3	3.3	1.1	(22.2)		弥生・古墳
S3015	中形尖頭器	89次	SD−1114C	第11層	7.2	3.6	1.1	28.2		Ⅳ−1

えられる。おそらく使用時に握部方向から強い力が加わった際、石器が装着孔の頭部側に押し当てられて木釘に力が集中し、反作用がおこって両極剥離状の折損が生じたと思われる。以上の観察結果は、本資料が戈として使用されたとする想定と矛盾しない。装着孔内部には、折損の際に生じたと思われる、長幅２㎜程度のチップが１点挟まっている。

中形尖頭器（Ｓ3010〜3015）　34点確認している。他の地区と比べて、細身のＩ類の占める割合が高い（44%）。

Ｓ3010は細身で先鋭なＩ類に属するものであるが、ネガティブバルブの発達する著しく粗雑な剥離痕がａ面左側・ｂ面左側に残されており、いびつな平面形態を呈している。基部をわずかに折損している。

Ｓ3011はＩ類に分類でき、他の資料より若干風化が進んでいる。ａ面及び先端・末端に自然面が残されていることから、原石か、背面・側面に自然面をもつ剥片を素材としていると推測できる。いずれにしても、本資料の最大長（6.9cm）は素材を提供した原石の大きさをある程度反映しているだろう。非常に粗雑な作りをしており、両側縁が敲打痕で覆われているほか、器面にも階段状の剥離痕が発達している。

Ｓ3012は細身で、Ⅰ類に属する。平面形態はよく整えられているが、側縁はいびつである。

Ｓ3013もⅠ類に属する。ｂ面にはポジティブな剥離面が、ａ面には素材剥片の背面のものと思われる大きな剥離痕が観察される。ｂ面先端部には、素材剥片の蝶番状の末端部が残されている。基端部の自然面は素材剥片の打面と思われ、自然面を打面として順目で剥離された剥片を素材としていることがわかる。調整は浅く、側面観に素材剥片の形状が強く残されている。

Ｓ3014は木葉形を呈し、Ⅱ類に分類できる。ｂ面にはポジティブな剥離面が、ａ面には自然面が残されており、背面に自然面をもつ剥片が素材となっていることがわかる。素材剥片は石理に沿って剥離されている。調整はやや粗雑な印象を受け、側縁の湾曲が著しい。

Ｓ3015もⅡ類に属する。ｂ面にポジティブな剥離面が、右側縁先端部に自然面をとどめることから、少なくとも末端に自然面をもつ剥片を、縦方向に利用していることがわかる。ａ面中央にも素材面と思われる平坦な剥離面が観察され、大きな分割面を作業面とする石核から、素材剥片が剥離されたことが推察される。自然面の観察によると、素材剥片は順目で剥離されている。調整は薄い調整剥片を剥ぎ取りつつ進められているが、平面形状は不整形であり、先端部の作出も完全ではないようである。

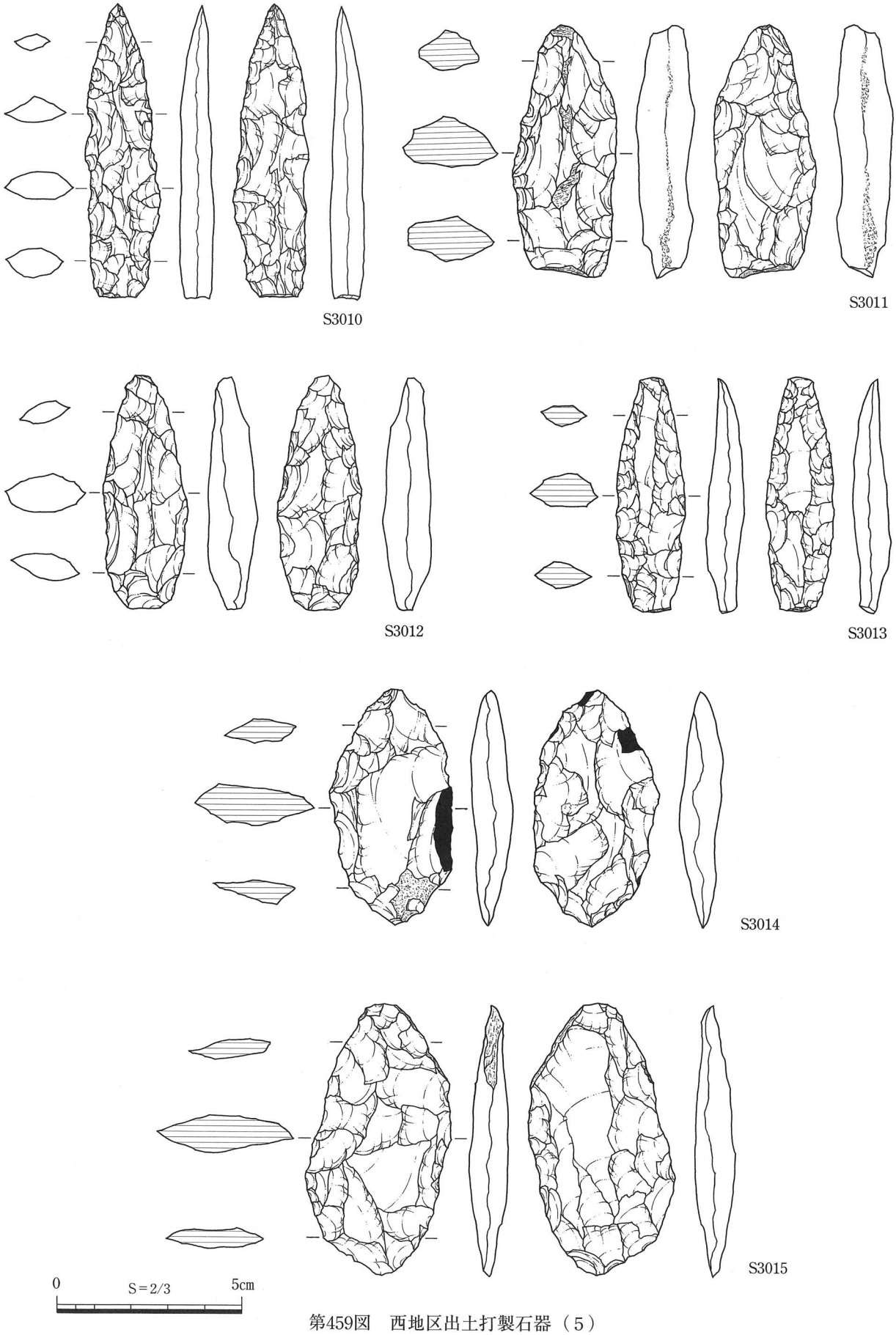
石鏃（Ｓ3016～3030・ＳＰ3021～3041）　262点確認している。各類型の割合は、Ⅰ類が33％、Ⅱ類が39％、Ⅲ類が９％、Ⅳ類が19％である。各調査地におけるⅡ類やⅣ類の割合には差があり、Ⅱ類については第79次調査地で60％、第80次調査地で28％、第84次調査地で45％、第89次調査地で37％、第93次調査地で24％となり、第79次調査地で特に高い割合を占めている。またⅣ類については第79次調査地で10％、第80次調査地で９％、第84次調査地で18％、第89次調査地で29％、第93次調査地で38％となり、第89・93次調査地でまとまった量が確認できる。こうした傾向は、今回報告するすべての調査地を合計したものにおける量比が、Ⅰ類43％、Ⅱ類37％、Ⅲ類７％、Ⅳ類13％であることと比較しても、明らかに西地区の傾向である。Ｓ3016・3017・3030がⅠ類、Ｓ3018・3019がⅡ類、Ｓ3020～3029がⅣ類である。Ｓ3030は有茎式石鏃であるが、逆刺が明瞭に張り出し、突起のように整形されている。

石錐（Ｓ3031～3040・ＳＰ3042～3059）　159点確認している。各類型の割合は、Ⅰａ類が21％、Ⅰｂ類が８％、Ⅱａ類が18％、Ⅱｂ類が７％、Ⅲ類が10％、Ⅳ類が23％、Ⅴ類が11％、Ⅵ類が２％である。Ｓ3031～3034がⅠａ類、Ｓ3035・3036・3038はⅡａ類、Ｓ3037・3039はⅣ類、Ｓ3040はⅤ類に相当する。

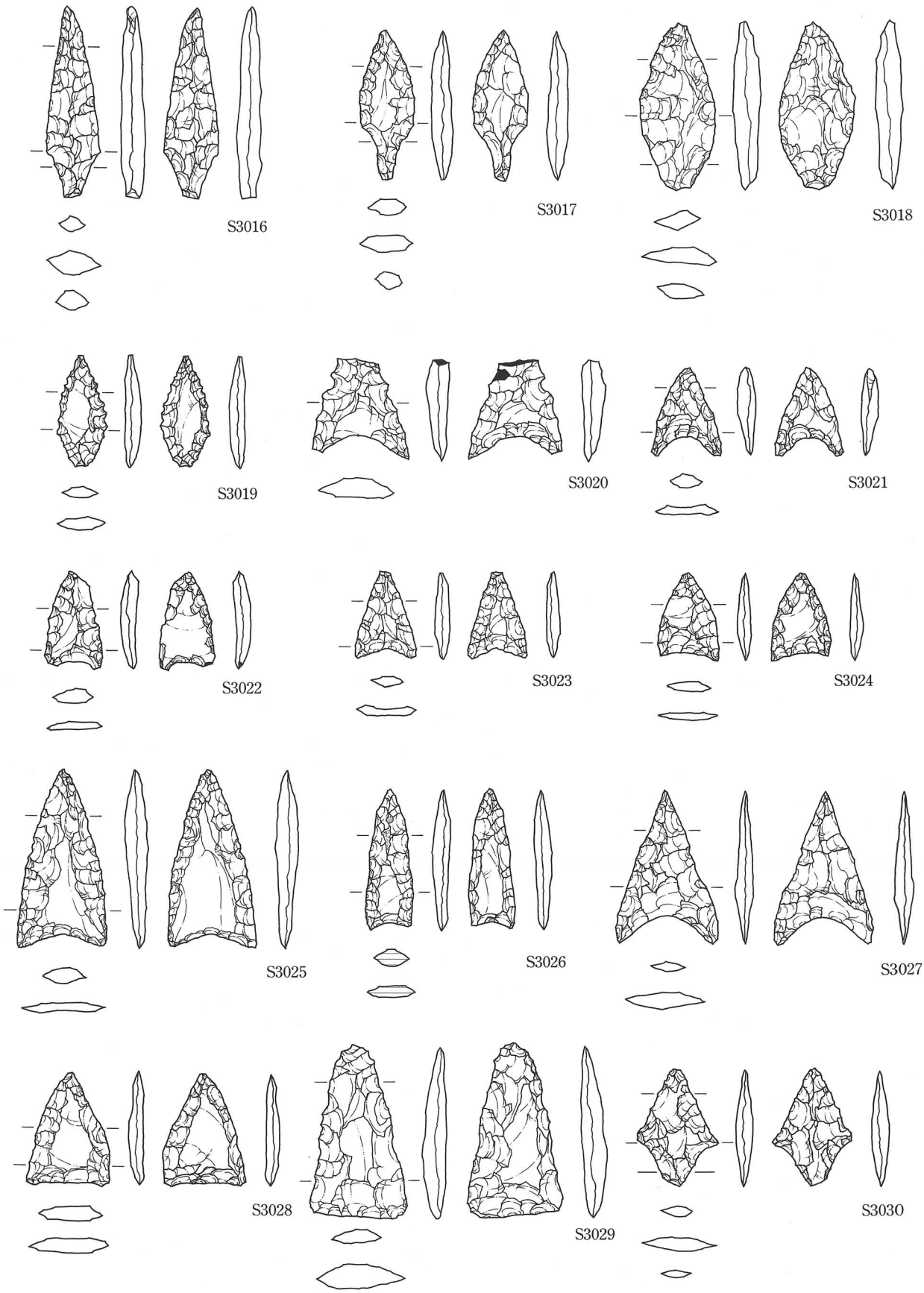
Ｓ3032は頭部の両側縁に磨耗痕が認められ、基軸に直交する方向に線状痕が観察できる。使用痕とは考えにくく、着柄方法と関わる痕跡の可能性がある。

Ｓ3033は錐部に急角度の折損状の剥離痕をとどめる。その縁辺が磨耗していることから、使用痕と考えられる。また頭部の縁部には、白色を呈する磨耗痕が観察できる。

Ｓ3036は剥離面を打面として剥離された大形の剥片を素材としている。素材剥片の背面に相当するａ面には、石材の変質部が観察できる。錐部は磨耗しており、白色を呈する磨耗痕が発達している。

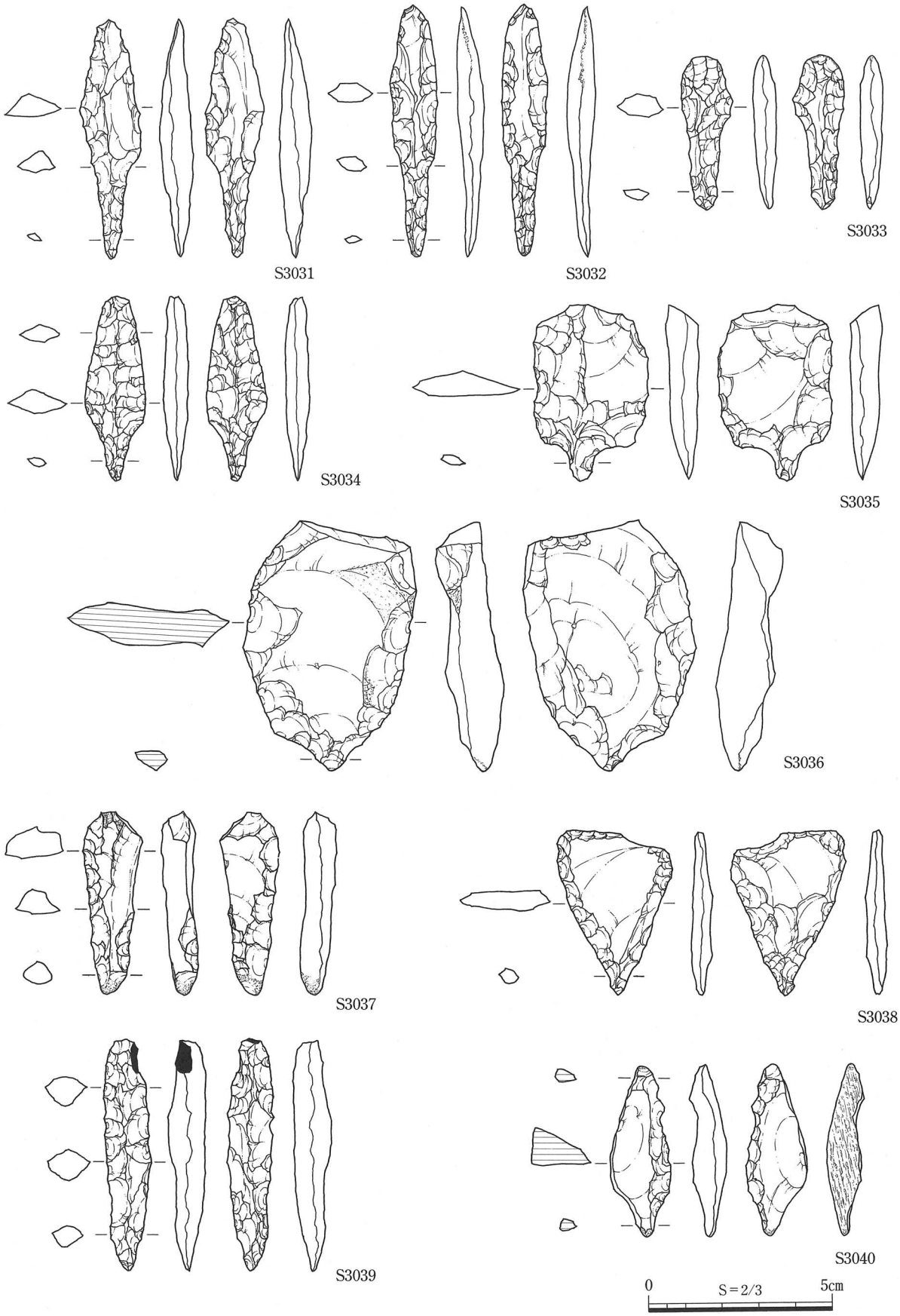


第459図　西地区出土打製石器（５）



第460図　西地区出土打製石器（6）

0　S＝2/3　5cm



第461図　西地区出土打製石器（７）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S3016	石鏃	84次	SD-113	第1層	(5.1)	1.5	0.7	(4.5)		Ⅲ-1
S3017	石鏃	80次	SD-106	第2(下)層	4.0	1.5	0.5	2.9		Ⅲ
S3018	石鏃	93次		青灰色シルト	4.5	2.0	0.7	5.4		弥生
S3019	石鏃	93次	SK-2120	第11(下)層	3.0	1.3	0.4	1.2		Ⅲ-2
S3020	石鏃	93次		黄褐色粘質土	(2.5)	2.7	0.6	(2.5)		弥生
S3021	石鏃	93次	Pit-1204C	第5層	2.3	1.9	0.4	1.2		Ⅲ-2
S3022	石鏃	93次		黄褐色粘質土	2.6	1.5	0.4	1.4		弥生
S3023	石鏃	93次		黄褐色粘質土	(2.4)	1.7	0.4	(1.1)		弥生
S3024	石鏃	93次	Pit-1206C	第3層	2.4	1.6	0.4	1.5		Ⅲ-2
S3025	石鏃	93次	SD-2103	第2層	4.8	2.4	0.6	4.9		Ⅴ-1
S3026	石鏃	93次	SK-2102	第1層	3.7	1.3	0.5	2.1		Ⅵ-4
S3027	石鏃	93次		黒褐色粘質土	4.1	2.7	0.5	2.8		弥生・古墳
S3028	石鏃	93次		黄褐色粘質土	3.0	2.2	4.0	2.9		弥生
S3029	石鏃	93次	Pit-1203E	第3層	4.6	2.6	0.6	7.0		Ⅲ-2・3
S3030	石鏃	93次	SD-2081	第1層	3.2	2.2	0.5	2.0		中世
SP3021	石鏃	80次		黒褐色粘質土	(7.4)	2.3	0.7	(11.9)		弥生
SP3022	石鏃	79次		黒褐色粘質土	(5.7)	1.9	0.5	(5.0)		弥生
SP3023	石鏃	84次	SD-01S	茶灰色粘質土	(4.7)	2.2	0.6	(6.5)	基部両側縁に磨耗痕	中世
SP3024	石鏃	80次	SD-101	第2層	(3.5)	1.8	0.4	(2.7)		Ⅵ-4
SP3025	石鏃	80次	SD-106	第2(下)層	(3.1)	1.7	0.5	(1.9)		Ⅲ
SP3026	石鏃	80次	SD-101	第2層	(3.7)	1.7	0.7	(3.6)		Ⅵ-4
SP3027	石鏃	84次		黒褐色粘質土	(2.5)	1.2	0.6	(1.5)		弥生・古墳
SP3028	石鏃	79次	SD-103	第2層	(4.9)	3.0	0.5	(5.8)	基部片側縁に磨耗痕	Ⅲ・Ⅳ
SP3029	石鏃	93次		黒褐色粘質土	4.7	2.0	0.7	1.9	基部両側縁に磨耗痕	弥生・古墳
SP3030	石鏃	89次	SX-1102?	第2層	4.7	2.0	0.7	6.1		布留0
SP3031	石鏃	84次		褐灰色粘質土	5.0	2.8	0.6	7.7		弥生・中世
SP3032	石鏃	80次	SD-105	第2(下)層	4.3	1.9	0.8	5.7		Ⅴ
SP3033	石鏃	93次	Pit-1201E	第4層	2.2	2.1	0.2	2.7		Ⅲ-2
SP3034	石鏃	79次	SD-103	第4層	2.2	2.1	0.3	1.4		Ⅲ
SP3035	石鏃	89次		黒褐色粘質土	4.5	1.1	0.4	1.5		弥生・古墳
SP3036	石鏃	89次	SD-1114	第1層	(2.3)	1.1	0.3	(0.6)		Ⅵ-4
SP3037	石鏃	80次	SD-106	第4層	1.9	(2.0)	0.5	(1.8)	風化がやや進む	Ⅲ
SP3038	石鏃	84次	SD-10	茶灰色粘質土	(2.8)	2.5	0.5	(2.6)		中世
SP3039	石鏃	79次	SD-70	灰褐色粘質土	2.5	1.7	0.5	1.9		中世
SP3040	石鏃	80次	SD-101	第1(下)層	3.4	1.9	0.5	2.9		Ⅵ-4
SP3041	石鏃	84次	SD-56	灰褐色粘質土	(2.0)	1.5	0.3	(0.7)		中世
S3031	石錐	89次	SD-1114B	第5層	6.4	1.6	0.8	6.0		Ⅴ
S3032	石錐	79次		黒色粘質土(砂混)	6.8	1.3	0.6	5.0	頭部の両側縁に磨耗痕	弥生
S3033	石錐	93次	SK-2112	第1(下)層	5.2	1.5	0.7	3.5	錐部及び頭部に磨耗痕	Ⅲ-3
S3034	石錐	89次	SK-1112	第3層	5.0	1.6	0.6	4.4		Ⅳ-1
S3035	石錐	93次	Pit-2132	第1層	4.8	3.2	0.9	12.1		弥生中期
S3036	石錐	84次	SD-61	灰褐色粘質土	6.7	4.8	1.3	47.2	錐部に磨耗痕	中世
S3037	石錐	79次		灰褐色粘質土	5.0	1.6	0.8	7.2		弥生～中世
S3038	石錐	80次	SD-101	第5層	4.5	3.1	0.6	7.6		Ⅴ
S3039	石錐	93次		黄褐色粘質土	6.4	1.3	1.0	7.2		弥生
S3040	石錐	93次	SK-2115	第6層	5.7	1.7	1.0	5.7	両端に磨耗痕	Ⅴ-2
SP3042	石錐	84次	SD-50	第3層	(9.9)	4.3	2.0	(80.0)		中世
SP3043	石錐	84次	SD-101S	第3層	7.5	2.2	1.1	14.0		古墳後期
SP3044	石錐	84次		黒褐色粘質土	(5.9)	3.2	1.2	(28.4)		弥生・古墳
SP3045	石錐	93次	SD-1114B	第4層	(6.6)	1.7	1.0	(9.7)		Ⅳ
SP3046	石錐	93次		黒褐色粘質土	5.8	1.7	0.7	3.7		弥生・古墳
SP3047	石錐	84次	SD-101W	第3層	5.6	1.9	0.8	5.8		弥生・古墳
SP3048	石錐	80次	SD-101	第1(下)層	3.3	1.3	0.7	2.9		Ⅵ-4
SP3049	石錐	79次	SD-103	第2(下)層	(6.7)	4.3	0.8	(19.6)		Ⅲ・Ⅳ
SP3050	石錐	84次	SK-107	第1層	2.5	2.1	0.5	1.8		弥生
SP3051	石錐	84次	SD-85	灰褐色粘質土	4.3	2.0	0.4	3.4		中世
SP3052	石錐	80次	SD-06	茶灰色粘質土	(5.4)	2.2	1.4	(11.9)		中世
SP3053	石錐	93次	SD-2071	第1層	4.4	2.8	1.1	12.0		中世
SP3054	石錐	84次	SD-82	灰褐色粘質土	(4.4)	4.1	1.2	(21.0)		中世
SP3055	石錐	84次	SD-102	第3層	4.4	1.2	0.7	3.3		古墳後期
SP3056	石錐	84次	SD-66	灰褐色粘質土	(4.4)	0.9	0.7	(3.5)		中世
SP3057	石錐	93次	SK-1126	第1層	3.3	1.2	0.6	2.2		Ⅴ
SP3058	石錐	80次		黒褐色粘質土	4.6	1.6	0.7	4.4		弥生
SP3059	石錐	79次		黒色粘質土(砂混)	(5.5)	2.1	1.0	(8.7)		弥生

Ｓ3037は磨耗痕が発達しており、側縁だけでなく平面の稜上にも磨耗痕が及んでいる。

Ｓ3040には素材剥片の打面が残存しており、著しく水磨した自然面が観察できる。錐部は上下とも磨耗しており、光沢が認められる。

石小刀（Ｓ3041～3048）　35点確認している。

Ｓ3041は内刃・外刃とも鋸歯状に仕上げる。こうした鋸歯状のものは他の調査区も含め、今回報告資料の６％に認められる。素材剥片は背面に自然面をもつ剥片であったと思われ、剥片を縦方向に使用している。二次加工の程度から考え、素材剥片は横長であったと考えられる。

Ｓ3042は黒い縞の入るサヌカイトを用いている。他の資料に比べて厚く、調整も明らかに粗雑である。ａ面外刃側には階段状の剥離痕によって著しい段が形成されているほか、使用痕と思われる痕跡も一切認めることができず、未完成品と思われる。

Ｓ3043は基部に、内刃側から生じたファシット状の剥離痕が認められる。

Ｓ3044は刃部が内刃・外刃とも先端部の外縁が磨耗しており、内刃側には突起が作り出されている。また基端部からも剥離痕が認められ、基端面は明らかに整形されている。こうした例は、他の調査地も含め、今回報告する資料の36％に認められ、本遺跡の石小刀を特徴づける属性の一つである。

Ｓ3045は外刃が磨耗している。Ｓ3046は基端部に内刃側から生じたファシット状の剥離痕が認められるほか、先端部にも同様の剥離痕が観察できる。

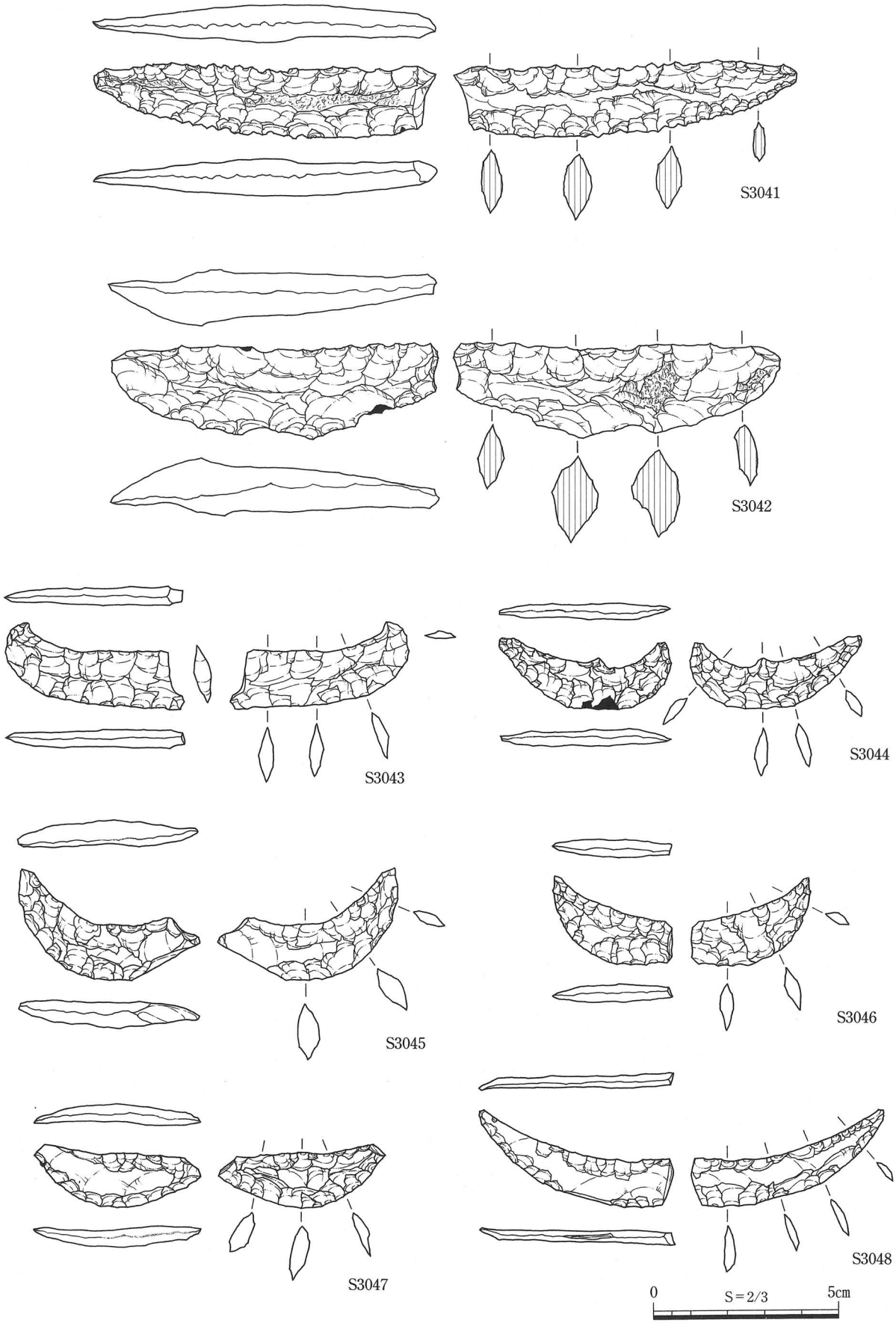
Ｓ3047はａ面側にポジティブな剥離面をとどめており、剥片を素材としていることがわかる。内刃・外刃とも基部側の刃縁には磨耗痕が認められる。

Ｓ3048はａ面にポジティブな剥離面が観察でき、剥片素材と判断できる。基端部にはａ面方向からの折損面が認められる。

石匙（Ｓ3049・3050）　２点のみ確認している。

Ｓ3049は自然面を打面として剥離された横長の剥片を素材とする。ａ面に残されたポジティブな剥離面が素材剥片の腹面、下面に残された自然面が素材剥片の打面である。またｂ面にもポジティブな剥離面が認められることから、素材剥片がひと回り大きな剥片素材の石核から剥離されたと思われる。ａ面・ｂ面とも、ポジティブな剥離面は石理に沿っている。器面の調整は全体的に粗雑であり、下辺には素材剥片の打面が残っていることも手伝って、刃部として機能しうる部分は限られている。上辺は連続的な調整が施されているが、縁辺がわずかに潰れている箇所が多く、先端部にちかい部分の縁辺は刃部としては不適当な状態である。この石器

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S3041	石小刀	93次	Pit-1207E	第2層	(9.3)	1.9	1.0	(17.3)		Ⅲ-2
S3042	石小刀	89次	SD-1053	暗灰色粘質土	8.9	2.5	1.5	29.3		中世
S3043	石小刀	79次	SK-136	第1層	(4.8)	1.5	0.5	(3.7)		弥生中期
S3044	石小刀	80次	SD-101B	第6層	4.7	1.3	0.4	(2.7)	内刃・外刃ともに磨耗痕	Ⅳ-2
S3045	石小刀	84次	SD-50	第2層	(5.2)	1.5	0.7	(6.3)	外刃に磨耗痕	中世
S3046	石小刀	79次	SD-103	第2層	(3.4)	1.4	0.5	(2.6)		Ⅲ・Ⅳ
S3047	石小刀	84次		褐灰色粘質土	(4.5)	1.5	0.5	(3.4)	内刃・外刃ともに磨耗痕	弥生・中世
S3048	石小刀	79次		黒褐色粘質土(ハード)	(5.5)	1.3	0.4	(2.8)		弥生



第462図　西地区出土打製石器（8）

にはやや粘りの少ない母岩が用いられており、そのことがこうした刃部の作出に際して不都合をもたらしていると思われる。つまみ部はａ面・ｂ面それぞれから施されたノッチ状の剥離痕によって作出されており、つまみ部の端部にもわずかに調整が施されている。

Ｓ3050は横長の剥片を素材とする。ａ面に残されたポジティブな剥離面が素材剥片の腹面、ｂ面中央の大きなネガティブな剥離痕は素材剥片の背面と思われる。両者の剥離方向はほぼ同一であり、素材剥片の剥離に先立つ打面転位は認められない。浅めの調整によって形状が整えられており、刃部の調整はおおむねｂ面のものがａ面のものに先行する。つまみ部は調整の最終段階で作出・整形されており、ａ面→ｂ面の順でノッチ状の剥離を施し、深い抉り部が作り出されている。その後、細かい剥離によってつまみ部をさらに整形しているようである。つまみ部端部の折損面は、素材剥片の剥離時～二次加工の最中のどの段階で生じたのかは定かではない。折損面には斑晶が抜けた孔が観察され、折損の一要因として想定できる。

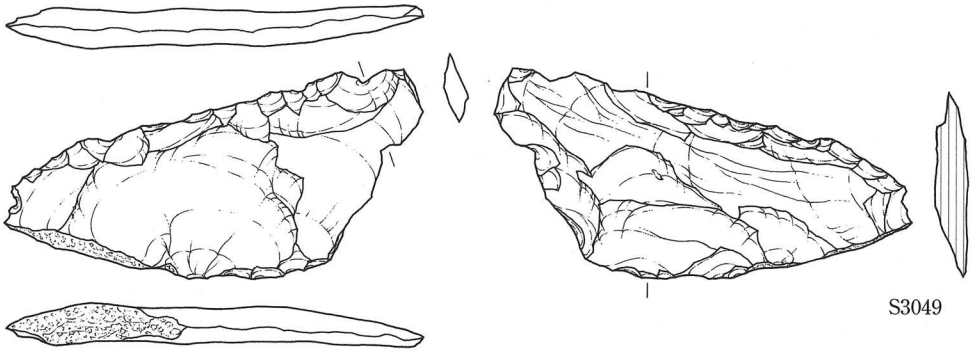
スクレイパー（Ｓ3051～3060）　68点確認している。

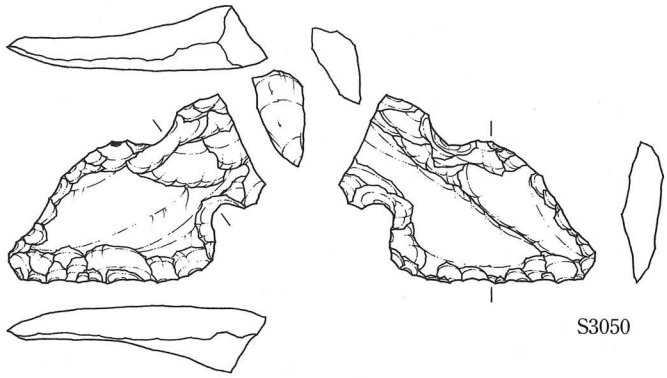
Ｓ3051は自然面打面の剥片を素材とする。素材剥片の背面側に相当するａ面に、ポジティブな剥離面が認められ、素材剥片は剥片素材の石核から得られたと思われる。石理走向と剥離面の関係については、素材剥片の背面は順目、腹面は半順目となっている。ａ面はコーンの発達が著しく、打点と推定される部分は1.66×0.7cmの範囲にわたって自然面が潰れて白色化しており、打撃痕と推定される。素材剥片の末端に対して両面加工が施され刃部に仕上げられている。刃部角は60度前後である。刃部はわずかに磨耗しており、使用痕の可能性がある。

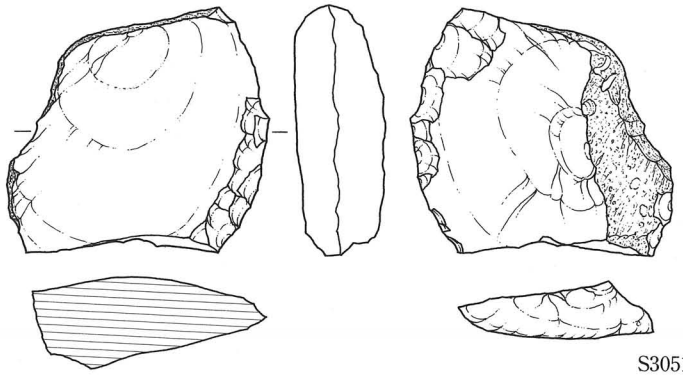
Ｓ3052は背面の一部（実測図のトーン部）が明らかに風化度の進行した剥離痕から構成されており、弥生時代以前の剥離物から剥離された剥片が利用されているようである。風化度の進行した剥離痕や自然面の残存状況から考えて、素材剥片の剥離は石核の作業面いっぱいに及んだと推察される。打面となった自然面上には、0.2×0.23cmの範囲で、自然面が部分的に潰れて白色化している箇所が認められ、素材剥片剥離時の打撃痕と思われる。素材剥片の剥離にあたっては、石核のコーナーにあたる部分が打点となっており、自然面を導線として力が左右に広がり、幅広の剥片の剥離に成功している。そうして確保された長大な末端部が刃部に利用されており、両面加工によって調整されている。刃部角は50度前後である。

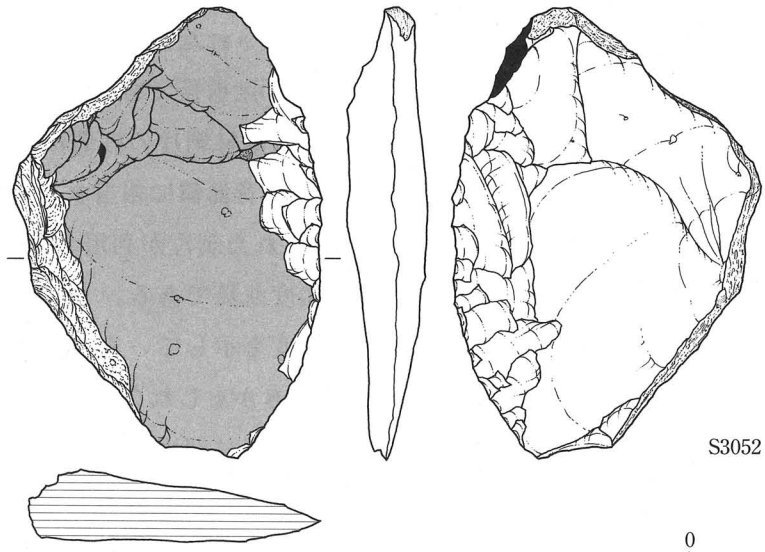
Ｓ3053はすべての剥離面がわずかに光沢をもっている。素材剥片の打面は不純物の影響もあってか折損しており、打面形態は不明である。素材剥片の背面側に相当するａ面には、ポジティブな剥離面が残されており、剥片素材の石核から得られた剥片が利用されたようである。素材剥片の末端側に刃部が作出されており、刃部角は50度前後である。一方素材剥片の打面欠損面からも二次加工が加えられており、70度前後の角度を示している。後者は階段状の末端部が発達しており、刃部とは異なる作業意図を推定すべきかもしれない。

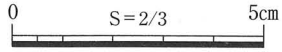
Ｓ3054はすべての剥離面がわずかに光沢をもっている。素材剥片は自然面を打面とし、原石の一端をうまく取り込みながら、石理に沿って剥離する。素材剥片の打点付近の自然面上には、0.4×0.35cmの範囲にわたって、打撃痕と思われる痕跡が残されている。刃部は素材剥片











第463図　西地区出土打製石器（9）

の右側縁・左側縁に作出されており、刃部角はそれぞれ70度前後、55度前後、両者とも両面加工である。前者には刃縁がわずかに磨耗しており、刃縁に並行する方向に線状痕が観察できる。

Ｓ3055はａ面右側の二次加工部にわずかに素材剥片の打面が残存しており、剥離面を打面として、石理に沿って剥がされた剥片が素材となっていることがわかる。素材剥片の背面側であるａ面には、自然面とともに大きな剥離痕があり、素材剥片の背面を構成していた剥離痕と思われる。素材剥片の末端に作出された刃部は、両面加工により60度前後に仕上げられている。一方、素材剥片の打面に対して、主に背面側から施された二次加工部は、90度前後となっており、縁辺に敲打痕をもつなど、刃部とは考えにくい。

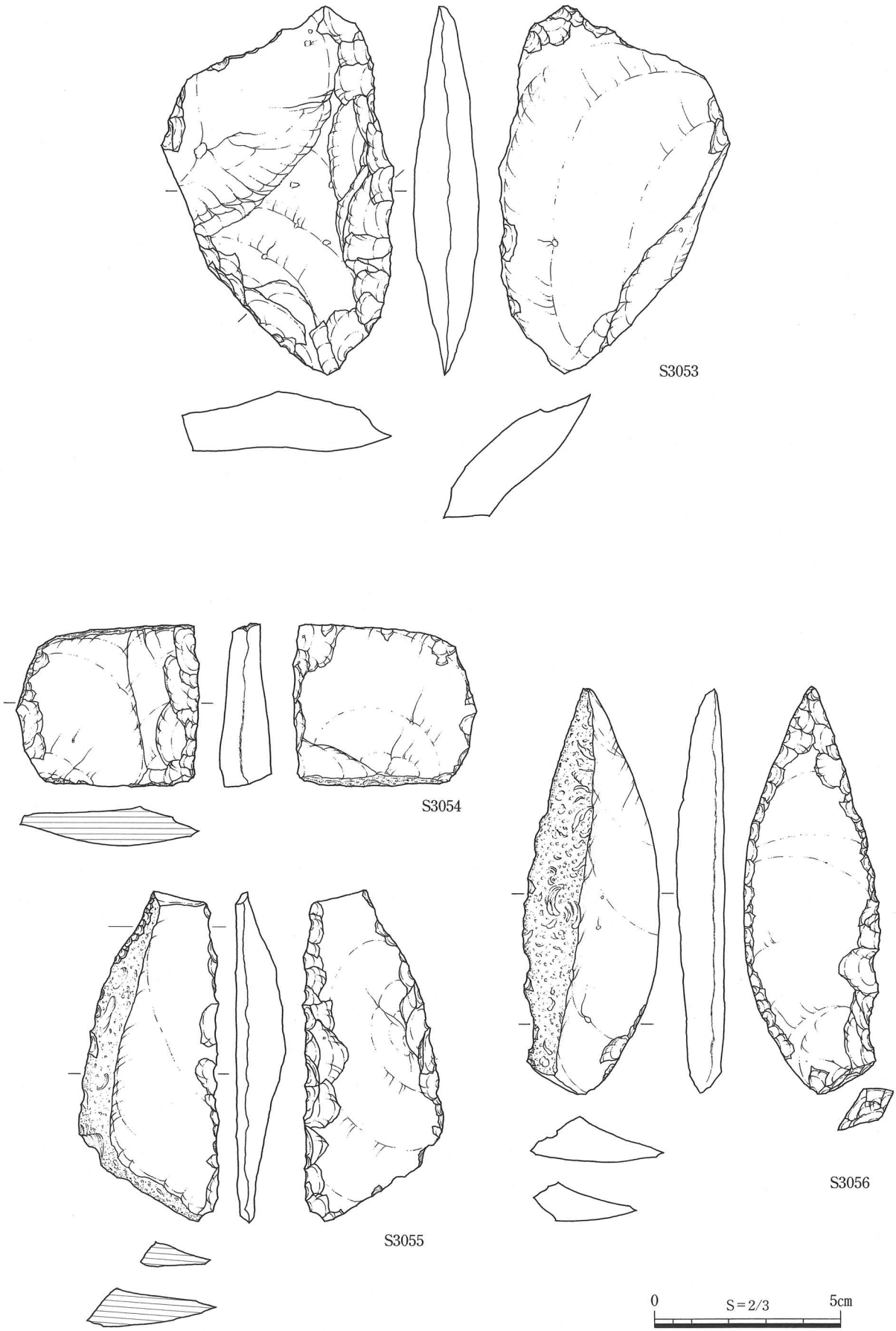
Ｓ3056は複剥離面打面の縦長剥片を素材としている。ａ面側の、自然面と剥離痕によって形成された稜が導線となり、素材剥片が著しく縦長化したと思われる。素材剥片の左側には、背面側から浅い二次加工が施されて刃部を作出しており、55度前後に仕上げられている。刃縁は激しく磨耗しており、刃縁に並行方向に線状痕が観察できる。一方素材剥片の右側にも背面側から連続的な二次加工が施されており、80度前後をはかる。縁辺にはまったく使用痕らしきものは観察できず、自然面のクラックの影響もあって、鋭利な刃部を作出するには至っていない。

Ｓ3057はａ面にもポジティブな剥離面が認められ、素材剥片が剥片素材の石核から得られていることがわかる。石理との関係は半順目であり、自然面を打面とし、自然面を側面に取り込むように剥片が剥離されている。打面となった自然面上には、自然面の稜が潰れ、微細な剥離痕が密集している箇所が1.1×0.3cmにわたって観察され、打撃痕と思われる。刃部は素材剥片の右側縁、末端に作出されている。刃部角はそれぞれ55度前後、70度前後であり、両者とも両面加工である。素材剥片の左側縁にも二次加工部が認められるが、角度は90度前後であるほか、まったく鋭利さを欠いており、刃部としては機能しなかったと思われる。

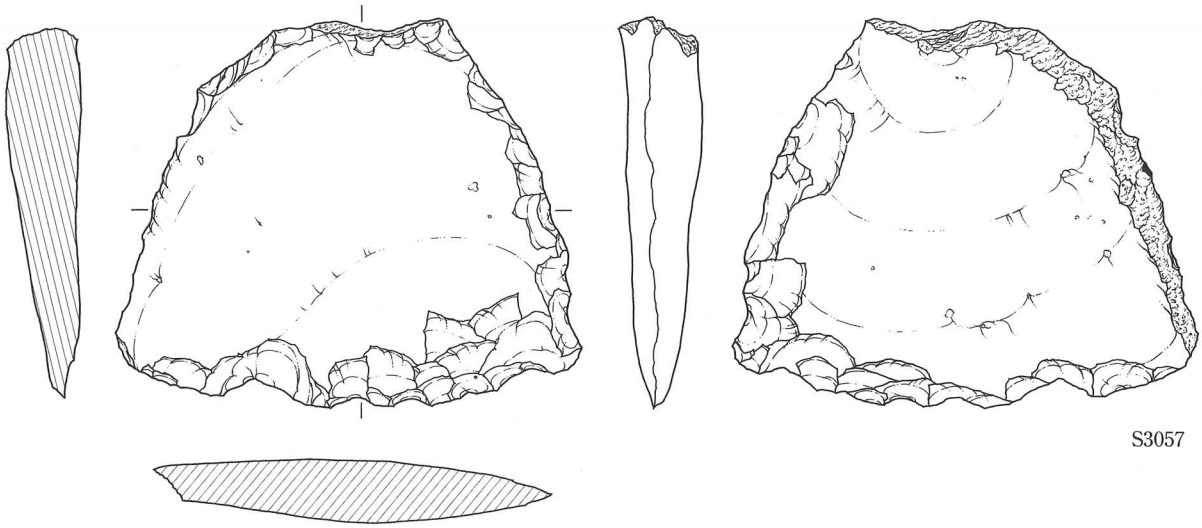
Ｓ3058は石理に沿って剥離された、単剥離面打面の剥片が利用されており、ａ面の大きな剥離痕も素材面と思われる。刃部は素材剥片の右側縁、末端に作出されており、両者とも刃部角は70度前後、両面加工で調整されている。

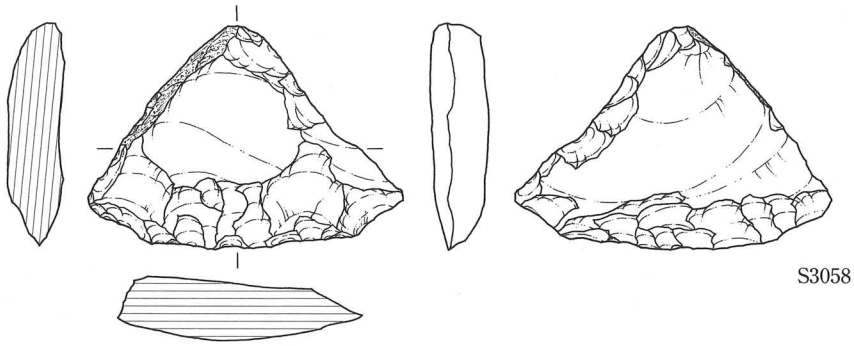
Ｓ3059は二次加工によって素材剥片の打面が失われているが、自然面の残存状況から推し量って、自然面打面であった可能性がある。ａ面の大きな剥離痕も素材面と思われる。素材剥

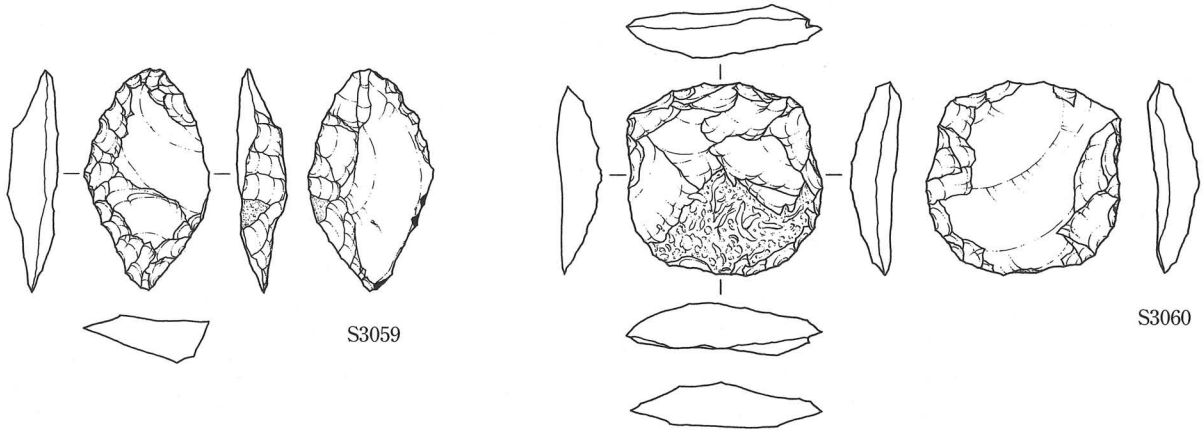
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚			
S3049	石匙	93次	排土		5.2	8.3	0.7	27.5		―
S3050	石匙	89次	SD-1114B	第7層	5.2	3.1	1.1	13.9		Ⅳ
S3051	スクレイパー	79次	SD-103	第3層	4.7	5.5	1.6	46.7	刃縁に磨耗痕	Ⅲ
S3052	スクレイパー	84次	SD-64	灰褐色粘質土	6.0	9.0	1.7	(79.2)	二重風化	中世
S3053	スクレイパー	93次	SK-2115	第5層	6.6	8.7	1.8	92.4		Ⅴ-2
S3054	スクレイパー	79次	SD-101B	第5層	4.2	4.9	1.1	32.5	刃縁に磨耗痕	Ⅳ-1
S3055	スクレイパー	89次		黄褐色粘質土	4.3	8.4	1.3	37.9		弥生
S3056	スクレイパー	84次	SD-101S	第3層	10.0	3.9	2.0	42.3	刃縁に磨耗痕	古墳後期
S3057	スクレイパー	80次	SD-106	第5(下)層	7.8	9.2	0.7	109.9		Ⅲ
S3058	スクレイパー	93次	SD-2101	第1層	4.5	6.3	1.1	29.7		Ⅳ-2
S3059	スクレイパー	93次		黄褐色粘質土	2.4	4.4	0.9	7.8		弥生
S3060	スクレイパー	93次	SK-2206	第1層	4.1	4.3	0.9	15.0		Ⅱ-1?



第464図　西地区出土打製石器（10）







0　S＝2/3　5cm

第465図　西地区出土打製石器（11）

片の末端側には45度前後の刃部が両面加工で作出される。素材剥片の打面側にも両面加工が連続的に施されており、80度前後の急角度となっている。

Ｓ3060は単剥離面打面の剥片を素材とする。全周に両面加工が施されており、素材の形状を反映してか、平面形態は円形になっている。刃部角は60度前後である。

（2）磨製石器

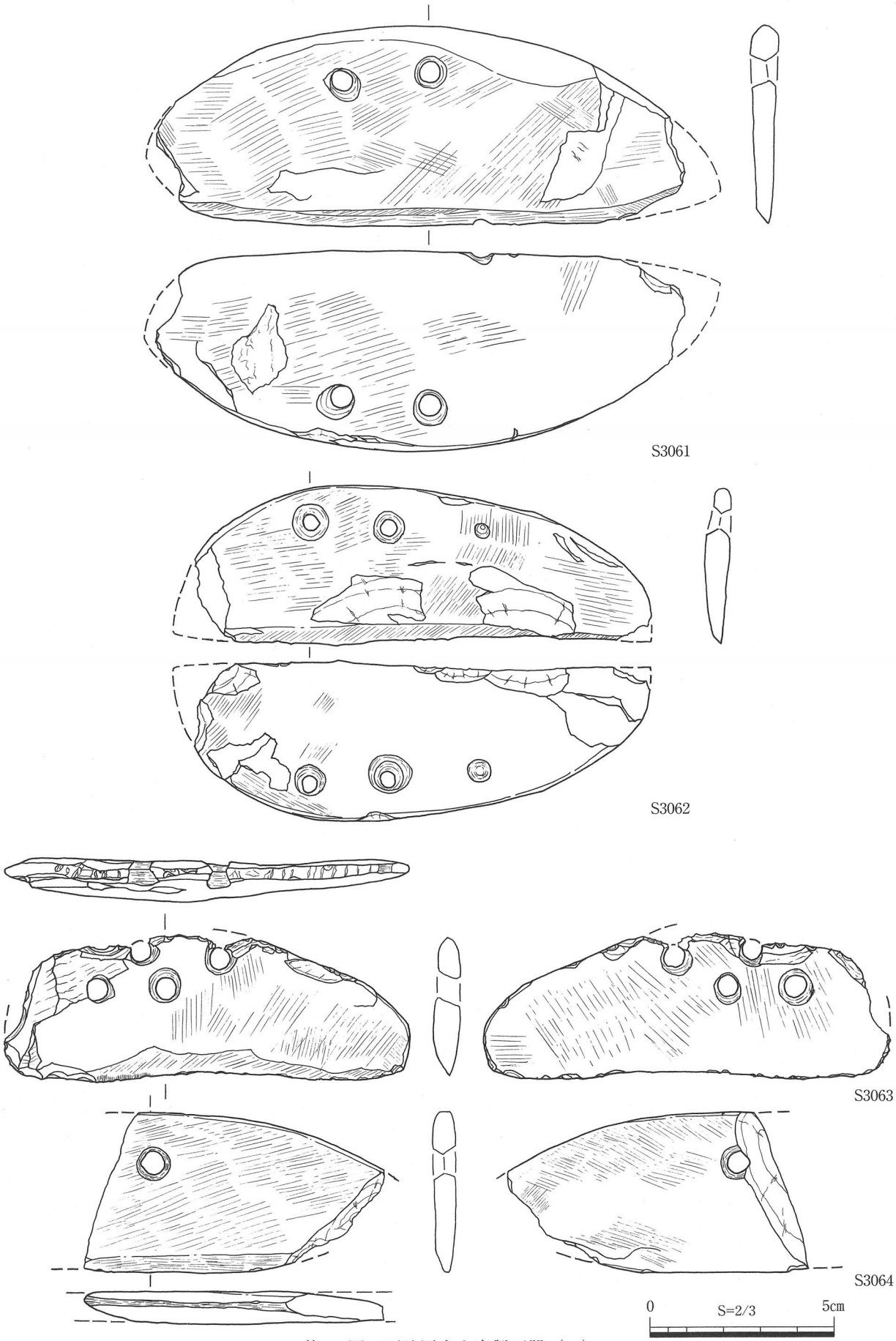
結晶片岩製石庖丁（Ｓ3061～3072・ＳＰ3060～3062）　結晶片岩製の石庖丁は12点図化した。そのうち２点は大形石庖丁である。完形の石庖丁は少なく、図化したものの中ではＳ3061・3062の２点である。石庖丁の形態は３種みられる。Ｓ3061～3063は直線刃半月形を、Ｓ3065～3067は長方形を、Ｓ3064・3068・3069は杏仁形を呈している。なお、Ｓ3070は両端部を欠損しており形態を判断できない。穿孔はすべて両面から回転によって穿孔されている。

Ｓ3061は両端部に一部欠損がみられるものの、ほぼ完形である。背部には光沢がみられる。穿孔部分の縁に紐ずれにより磨耗した痕跡がみられる。Ｓ3062は端部及び刃部が一部欠損しているが、ほぼ完形である。刃部の半分は剥離によって欠損しており、使用に伴う欠損と考えられる。両面には対応するようにそれぞれ未貫通の穿孔が１ヶ所ずつある。Ｓ3063は背部が欠損した後、再び刃部側に紐孔をあけ、再利用している石庖丁である。本石庖丁は、ａ面両端部がかなり反りあがり湾曲する形態である。背部には長軸と直交する条痕がみられるが、これは欠損面を平滑にし、背部を整形するためのものと思われる。また、背部の端部ちかくには研磨痕がみられるが、これは製作当初の痕跡と考えられる。刃部はわずかに内湾しているが、これは使用に伴う研ぎ減りによるものと考えられる。また、刃縁には細かな剥離が観察されるとともに、刃部と直交する細かな線状痕が右端にみられる。

Ｓ3064は中央で折損しており、端部も欠損している。刃縁は平坦に研磨され刃部としての機能を果たさないことから、石庖丁からなんらかの製品に転用された可能性がある。

Ｓ3065は端部を折損している。鎬の一部に磨耗痕がみられ、使用時の指押さえによる痕跡と考えられる。また孔縁部には敲打痕が確認でき、穿孔には敲打技法が用いられ、その後回転穿孔されている。ａ面の両孔間には紐ずれの痕跡が認められる。Ｓ3066は中央で折損している。端部から抉りと考えられる剥離痕が認められる。また、表面は粗い研磨が施されている。Ｓ3067は両端部が欠損している。背部には長軸と直交する条痕が認められ、背部が整形された痕跡と考えられる。

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3061	石庖丁	79次	SD-103	第2(下)層	14.3	5.4	0.8	91.8	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅲ・Ⅳ
S3062	石庖丁	93次	SD-1114	第1層	(12.4)	4.4	0.7	(52.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩B		Ⅵ-4
S3063	石庖丁	80次	SD-106	第5層	(10.9)	3.7	0.8	(48.1)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	湾曲する	Ⅲ
S3064	石庖丁	93次	SD-2101	第1層	(8.1)	4.4	0.7	(35.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ-2
S3065	石庖丁	80次	SD-106	第6(下)層	(10.0)	4.0	0.7	(49.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C	一部被熱	Ⅲ
S3066	石庖丁	93次	SK-1120	第5層	(7.5)	4.4	0.6	(37.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅴ-2
S3067	石庖丁	79次	SX-101	第1層	(6.9)	3.8	0.8	(33.1)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩F		Ⅲ-3
S3068	石庖丁	93次	SK-2115	第5層	(9.3)	5.1	0.7	(52.8)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅴ-2
S3069	石庖丁	79次	SD-102	第6層	(6.5)	5.3	0.8	(32.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅱ-2
S3070	石庖丁	79次	SK-111	第1層	(6.5)	5.5	0.7	(38.5)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ-1



第466図　西地区出土磨製石器（１）

Ｓ3068は中央部、端部とも欠損している。また、ｂ面は平坦に研磨されており、刃縁は使用による磨耗で丸みを帯びている。Ｓ3069は中央部で折損している。刃縁は細かな剥離が確認でき、使用に伴うものと考えられる。また刃部末端部には光沢がみられる。ａ面の孔縁部には敲打痕がみられることから、孔は敲打後に回転によって穿孔したものと考えられる。

Ｓ3070は両端部が欠損しているため、形態は判断できない。孔が４ヶ所に穿たれており、孔の欠損によって再穿孔されたものと考えられる。刃部に光沢がみられる。

Ｓ3071・3072は大形石庖丁である。Ｓ3071は中央、端部が欠損している。刃部は剥離しているが一部残っている。全面に研磨が施され、厚さはほぼ均一である。背部は平坦に研磨されており、精緻な作りとなっている。孔は１ヶ所確認できるが、２孔の可能性は否定できない。Ｓ3072は中央で折損しており、合わせて端部も一部欠損している。表面は風化しており、淡いピンク色を呈している。これは唐古・鍵遺跡において大形石庖丁のみに用いられている石材である。孔は１ヶ所確認できるが、２孔の可能性は否定できない。大きさは通常の石庖丁とそれほど異ならないが、穿孔の位置や石材からは、大形石庖丁である可能性が高い。

結晶片岩製石庖丁未成品（Ｓ3073～3075・ＳＰ3063～3066）　Ｓ3073～3075は結晶片岩製石庖丁の未成品であり、Ｓ3073・3074は剥離調整段階、Ｓ3075は研磨段階の未成品である。

Ｓ3073は既に整形され、刃部と思われる箇所もみうけられるが、まったく研磨されていない。用いられている石材は表面が剥落しやすく、泥質片岩にちかい石材である。また一部に自然面を残している。Ｓ3074は中央で折損し、製作途中に廃棄されたものと考えられる。上端部は敲打されており、背部を加工しようとした意図がみうけられる。

Ｓ3075は刃部が形成されていないものの、表面は一部研磨が施されている。上端部と下端部は潰れている。全体的に製品よりも厚く、未穿孔である。

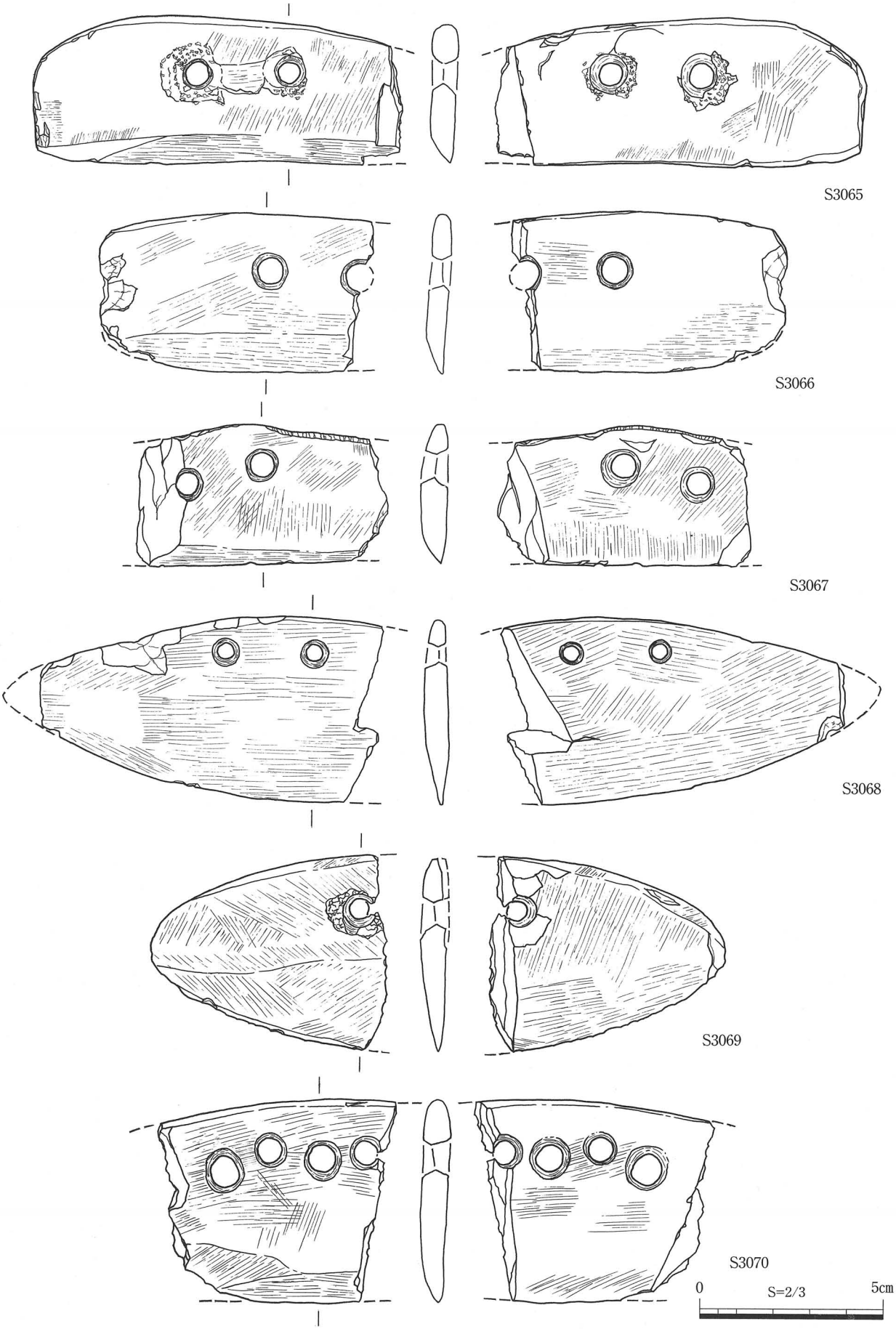
流紋岩製石庖丁（Ｓ3076～3078）　Ｓ3076～3078は流紋岩製の石庖丁であり、全て白色を呈している。Ｓ3076は直線刃半月形、Ｓ3077は外湾刃半月形である。Ｓ3078は両端部が欠損しており、形態の判別は難しい。穿孔は全て両面からおこなわれている。

Ｓ3076は穿孔部を中心に敲打が施されており、敲打穿孔が用いられた後に、仕上げとして回転穿孔が用いられたものと考えられる。表面、背部ともに精緻な研磨が施されている。

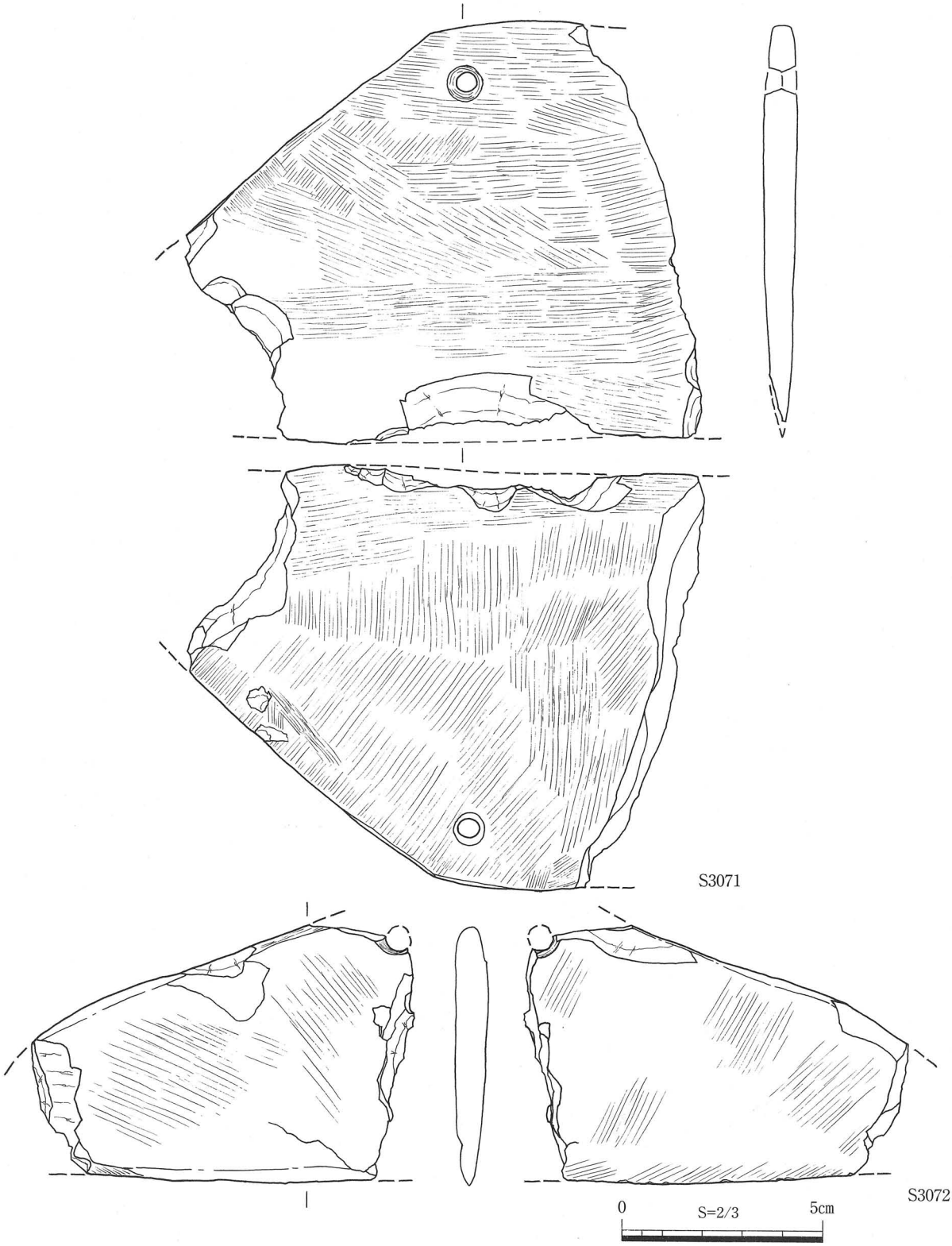
Ｓ3077は中央で折損しており、表面、背部ともに細かい研磨が施されている。穿孔位置は近距離に並んでおり、どちらか一方が再穿孔されたものと考えられる。刃部は片刃である。

Ｓ3078は両端を欠損している。穿孔は周辺の敲打痕から敲打穿孔を施した後に回転により穿孔している。刃部は両刃であるが、刃縁は平坦に研磨されて刃部としての機能を果たさない。

流紋岩製石庖丁未成品（Ｓ3079～3082・ＳＰ3067）　Ｓ3079～3082は流紋岩製石庖丁の未成品であり、白色もしくは灰白色を呈している。Ｓ3079は粗割段階、Ｓ3080は剥離調整段階、Ｓ3081・3082は穿孔段階の未成品となっている。Ｓ3081・3082はともに敲打穿孔が用いられており、その後回転穿孔されているが、未貫通である。Ｓ3079は杏仁形に整形されているが厚みがあり、器形調整途中に中央付近で折損し廃棄されたものと考えられる。

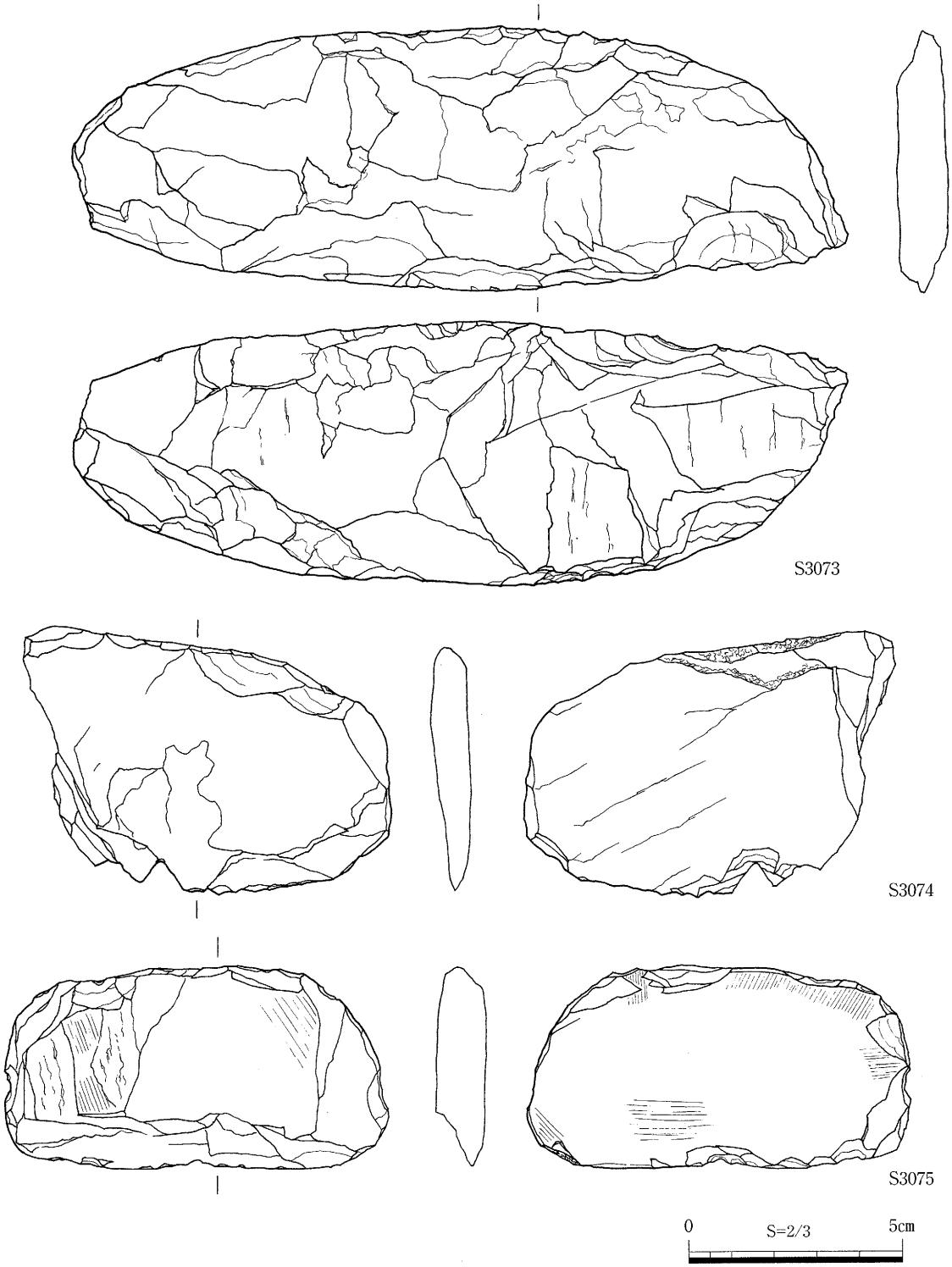


第467図　西地区出土磨製石器（２）



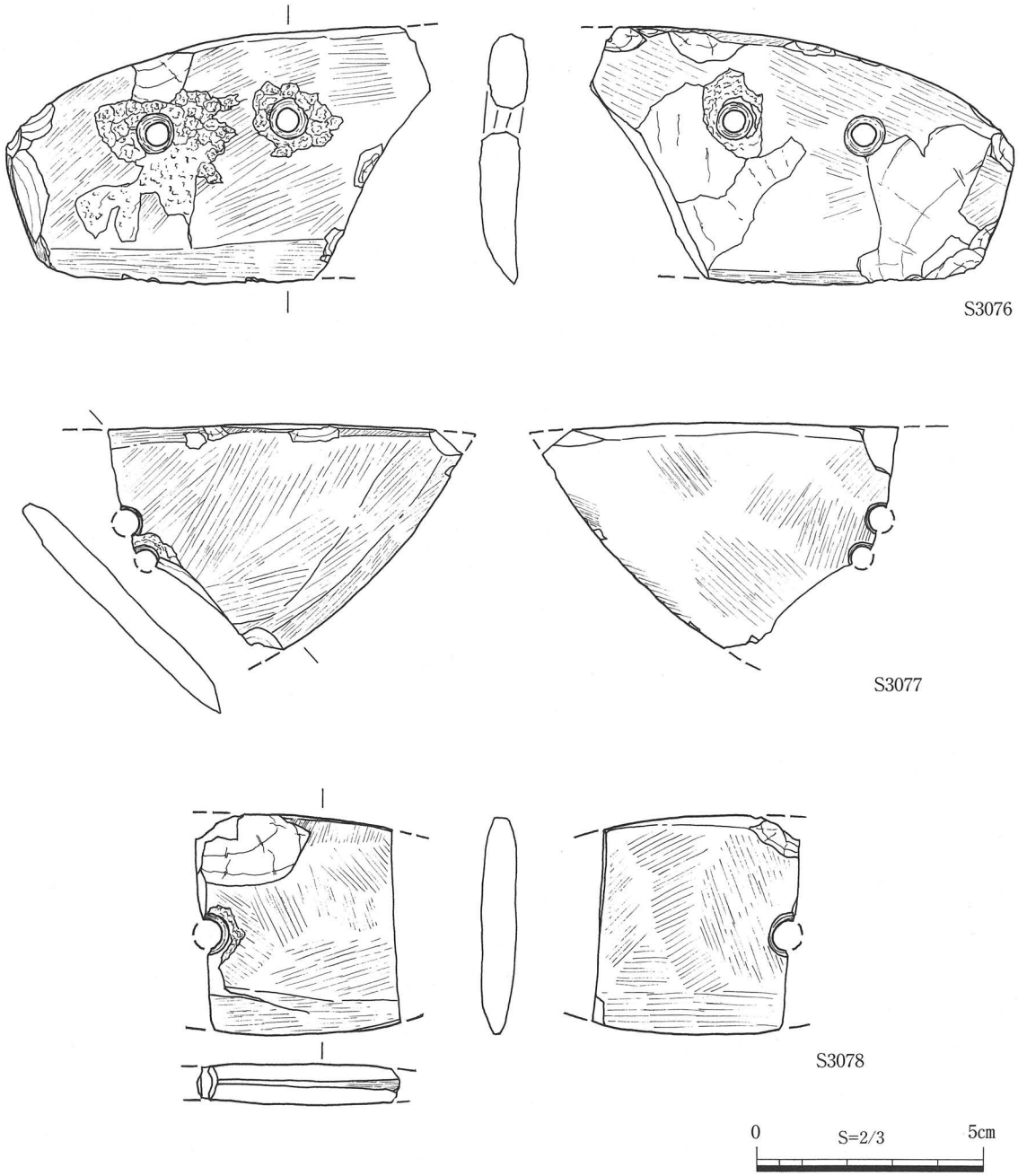
第468図　西地区出土磨製石器（3）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3071	大形石庖丁	79次		黒色粘質土(砂混)	(12.9)	10.1	0.8	(163.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩B	一部被熱	弥生
SP3060	大形石庖丁	79次		灰褐色粘質土	(9.7)	8.0	0.6	(63.4)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩C		弥生～中世
SP3061	大形石庖丁	79次		黒褐色粘質土	(7.3)	8.0	1.0	(56.8)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生
S3072	大形石庖丁	93次	SK−2120	第3層	(9.6)	(6.4)	0.9	(82.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ−1
SP3062	大形石庖丁	79次		暗灰色粘土?	(4.9)	6.7	0.7	(34.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生



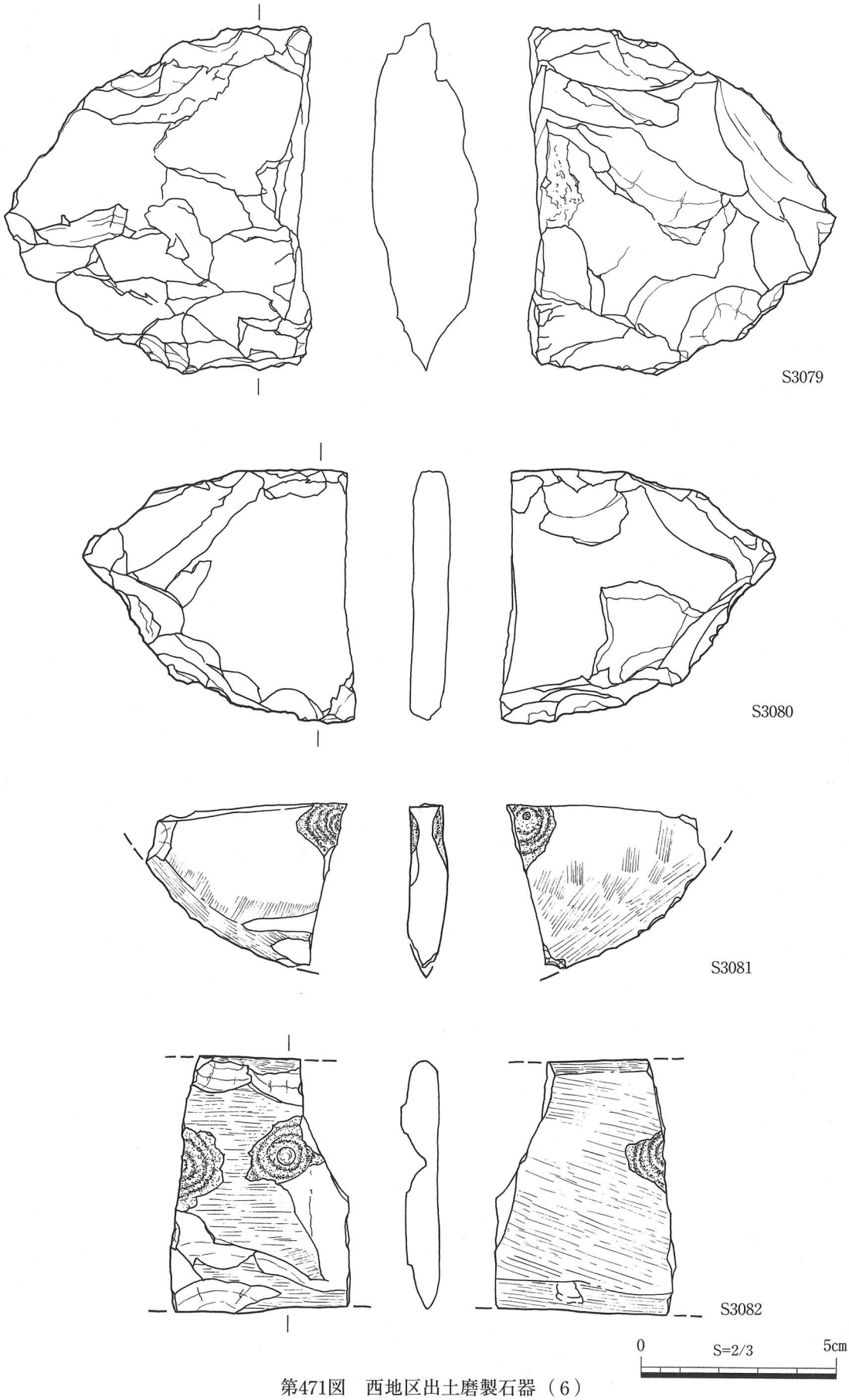
第469図　西地区出土磨製石器（４）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3073	石庖丁未成品	93次		黒褐色粘質土	(18.2)	7.2	1.2	(208.8)	凝灰岩質点紋片岩		弥生・古墳
SP3063	石庖丁未成品	79次	SD−101B	第5層	9.0	6.2	0.9	68.9	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ
SP3064	石庖丁未成品	84次		黒褐色粘質土	(9.6)	7.8	0.8	(84.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生・古墳
SP3065	石庖丁未成品	79次	SK−130	第5層	(9.0)	6.9	0.8	(59.2)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		Ⅳ−1
S3074	石庖丁未成品	93次	SK−2103	第1層	(8.7)	(6.2)	0.8	(69.0)	凝灰岩質点紋片岩		Ⅵ−4
S3075	石庖丁未成品	79次	Pit−157	黒色粘質土	8.9	4.6	1.2	83.0	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生中期?
SP3066	石庖丁未成品	93次	SK−2120	第4層	(10.5)	5.8	1.0	(86.3)	両雲母片岩		Ⅳ−1



第470図　西地区出土磨製石器（5）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3076	石庖丁	80次	SD−101B	第5−c層	9.5	5.4	1.0	(53.3)	流紋岩 H		Ⅳ−1
S3077	石庖丁	93次	SD−50N	第3層	(7.9)	(5.0)	0.7	(31.0)	流紋岩 E		中世
S3078	石庖丁	89次		黒褐色粘質土	(4.7)	4.8	0.8	(26.7)	流紋岩 C		弥生・古墳
S3079	石庖丁素材	84次	SD−53	灰褐色粘質土	(8.6)	9.5	2.7	(193.7)	柘榴石流紋岩 B		中世
SP3067	石庖丁素材	93次	Pit−1203E	第3層	(7.6)	8.5	2.3	(174.8)	柘榴石流紋岩 B		Ⅲ−2・3
S3080	石庖丁素材	93次	SK−2120	第6層	(7.1)	6.5	0.9	(59.9)	柘榴石流紋岩 A		Ⅲ−2
S3081	石庖丁未成品	93次		黄褐色粘質土	(5.2)	(4.2)	1.0	(19.4)	柘榴石流紋岩 A		弥生
S3082	石庖丁未成品	93次	SK−2120	第8層	(4.7)	6.7	1.0	(39.4)	柘榴石流紋岩 B		Ⅲ−2



第471図　西地区出土磨製石器（６）

S 3080はS 3079同様に杏仁形に整形されている。前者と異なり厚みは減じられており、製品の厚みにちかい。研磨や穿孔はおこなわれていない。

S 3081は穿孔段階の未成品である。刃部は残存しており、両刃である。刃部形態から外湾刃半月形もしくは杏仁形を呈していたと考えられるが、背部が欠損しているため判断できない。敲打により穿孔が試みられ、最終的に回転穿孔されている。S 3082は両端部が欠損しているが、残存部から長方形を呈していたと考えられる。研磨も進んでいるが、剥離によって生じた起伏が著しく、研磨の充分ではない部分が残る。刃部は片刃である。両面ともに敲打穿孔後に回転穿孔されている。

太型蛤刃石斧（S 3083～3085）　S 3083～3085は太型蛤刃石斧である。完形のものは少なく、破片もしくは欠損品が出土品の大部分を占める。以下個別に詳細を述べる。

S 3083は基部から縦方向に欠損しており、表半分が残存している。基部付近には敲打痕が残されているが、製作時に伴う痕跡と考えられる。S 3084は基部と裏面の一部を欠損している。表面は製作時における敲打の痕跡や、剥離によるくぼみが著しく、刃部以外の部分はほぼ研磨が施されていない。S 3085は基部に剥離がみられるが、基部端からの敲打により剥離したものと考えられる。基部も表面を敲打で整形しているが、その片面は敲打の上から研磨が施されている。刃部は先端で折損している。太型蛤刃石斧の未成品もしくは再加工途中品と考えられる。

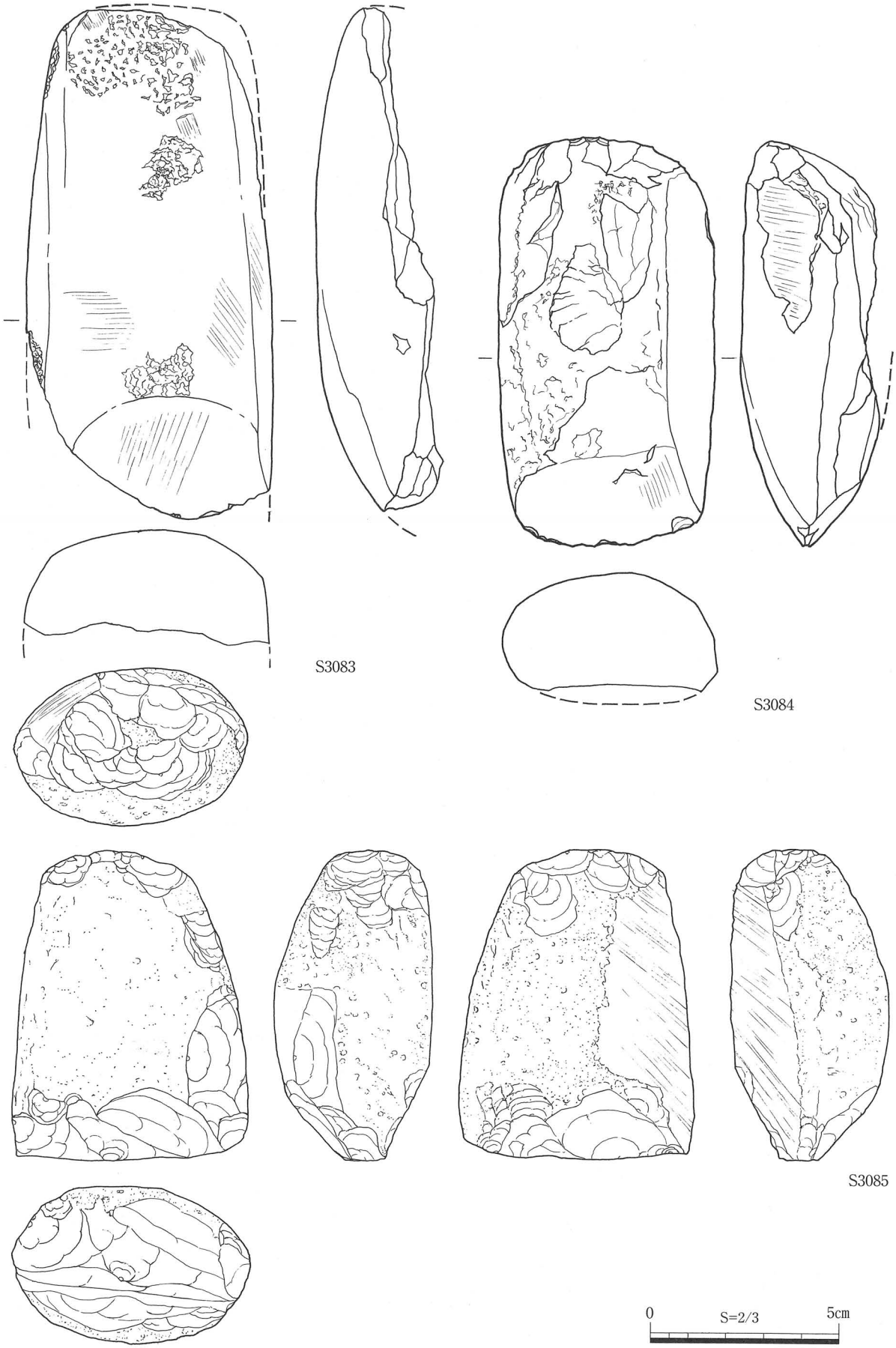
柱状片刃石斧（S 3086～3088・S P 3068）　S 3086～3088は柱状片刃石斧である。S 3087・3088は小形のものであり、完形はS 3087のみである。以下個別に詳細を述べる。

S 3086は柱状片刃石斧の刃部であるが、右側面が欠損している。石材は結晶片岩が用いられており、節理は前主面の長軸に平行する方向に取り込まれており、他地区の柱状片刃石斧と方向を同じにする。S 3087は表面に細かな研磨を施している。後主面に抉りが認められ、着柄して使用されたことがうかがえるが、その抉りは極めて浅い。刃部先端には直交する細かな擦痕が認められ、使用に伴う痕跡と思われる。S 3088は小形柱状片刃石斧であり、別の器種からの転用品と考えられる。両面ともに長軸方向の溝が残っており、擦切施溝分割による整形が試みられているが、溝部分とは別の箇所で分割されている。なお分割された側面には研磨が施されている。

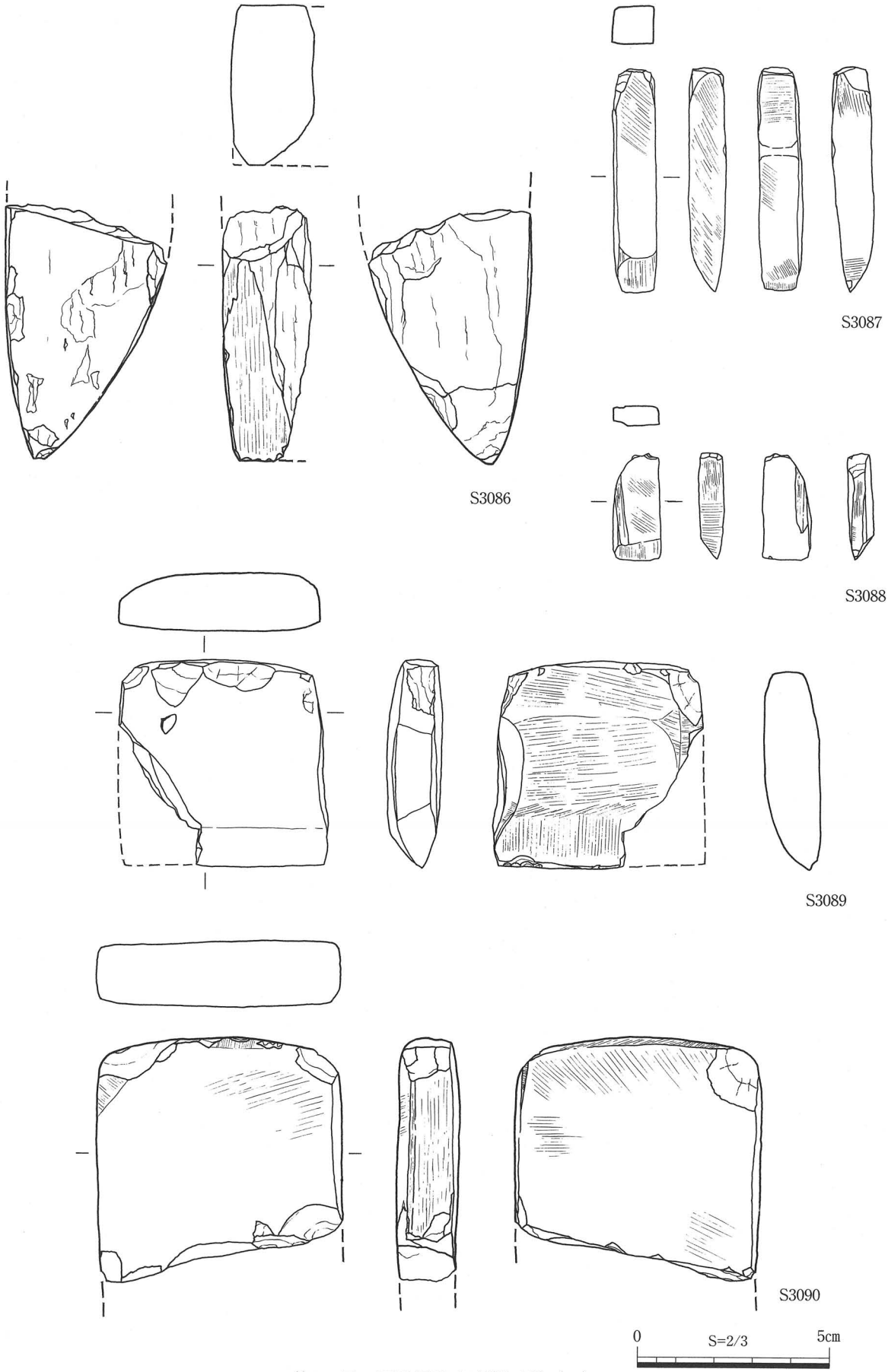
扁平片刃石斧（S 3089～3095・S P 3069・3070）　S 3089～3095は扁平片刃石斧である。結晶片岩が多用されているが、一部サヌカイト、粘板岩が使用されている。結晶片岩の節理は顕著ではなく、その方向は判断しがたい。

S 3089は側面に浅い抉りを有している。前主面左端には刃部の痕跡が残っており、横断面からもその傾斜が認められる。したがって本来の扁平片刃石斧であったものを90度回転させ、

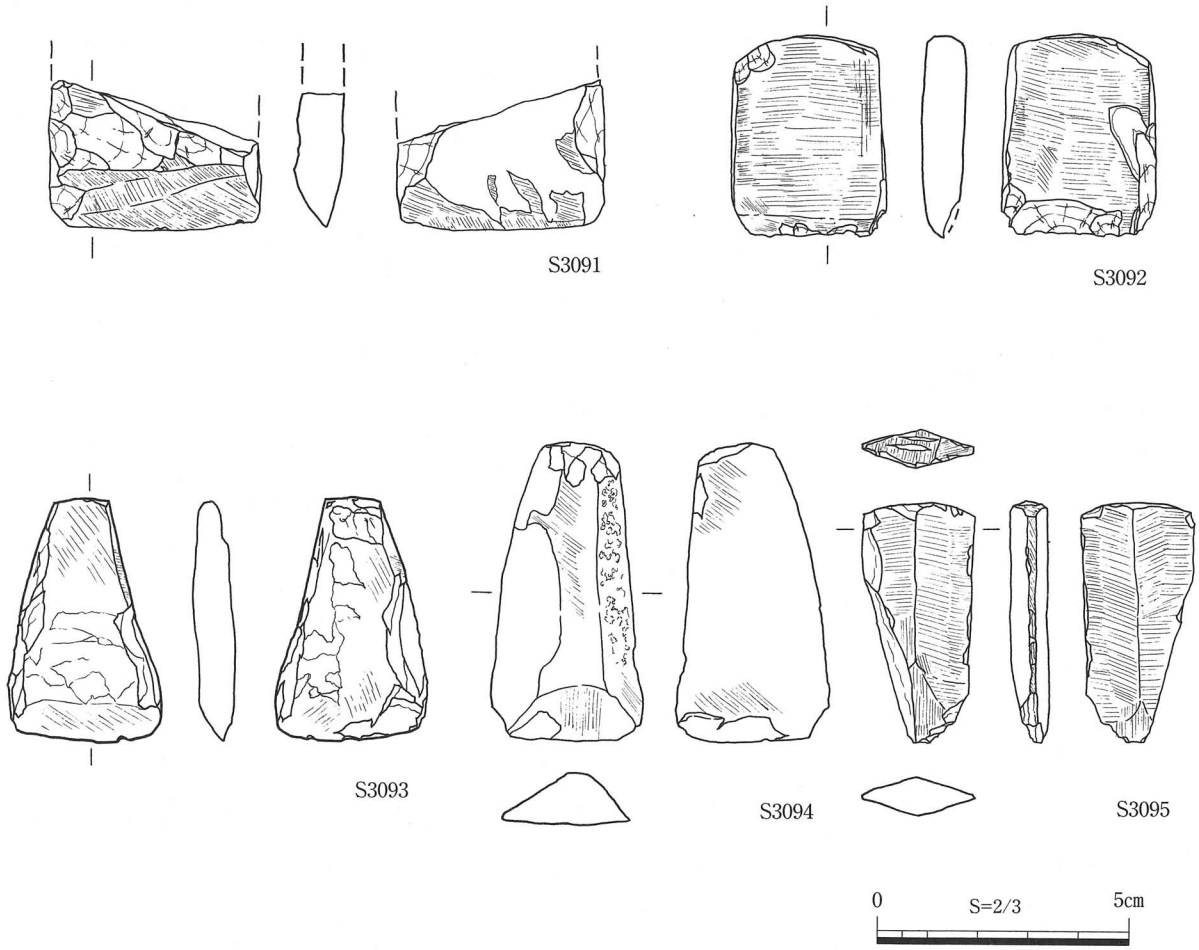
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3083	太型蛤刃石斧	79次	SD-102E	第1層	(13.5)	6.4	(2.9)	(365.1)	玄武岩質凝灰岩		Ⅱ-3
S3084	太型蛤刃石斧	93次	SD-2075		10.9	5.8	(3.5)	(398.3)	玄武岩質溶岩B		中世
S3085	太型蛤刃石斧	79次	SD-101C	第14層	(8.4)	6.1	4.3	(286.0)	流紋岩質溶結凝灰岩H		Ⅲ-2



第472図　西地区出土磨製石器（７）



第473図　西地区出土磨製石器（8）



第474図　西地区出土磨製石器（９）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3086	柱状片刃石斧	89次	SD−1114C	第12層	(6.5)	(4.2)	(2.2)	(96.9)	柘榴石片岩 C		Ⅳ−1
SP3068	柱状片刃石斧	93次	SK−2115	第8層	(6.1)	(3.9)	(1.7)	(42.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		Ⅴ−2
S3087	小形方柱状片刃石斧	93次	Pit−1201W	第6−b層	5.8	1.1	1.0	13.0	安山岩 G		Ⅲ−3
S3088	小形方柱状片刃石斧	79次		黒褐色粘質土(ハード)	(2.7)	1.2	0.6	(3.5)	安山岩 D	転用品?	弥生
S3089	扁平片刃石斧	89次	SD−1114	第1層	(5.3)	5.3	1.5	(72.6)	安山岩 A(サヌカイト)		Ⅵ−4
S3090	扁平片刃石斧	93次		黒褐色粘質土	(6.3)	6.4	1.7	(140.2)	安山岩質溶岩 B	後主面再研磨一部被熱	弥生・古墳
S3091	扁平片刃石斧(局部磨製)	89次	SD−1114	第1層	(2.9)	4.2	1.0	(16.5)	安山岩 A(サヌカイト)		Ⅵ−4
S3092	扁平片刃石斧(局部磨製)	84次	SD−111	第1層	3.9	3.0	0.8	(17.9)	安山岩 A(サヌカイト)	転用品	Ⅲ?
SP3069	扁平片刃石斧	84次		黒褐色粘質土	4.7	4.5	1.6	(57.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A	柱状片刃石斧転用	弥生・古墳
S3093	扁平片刃石斧	84次	SD−01	茶灰色粘質土	4.8	3.0	0.9	19.6	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A	石庖丁転用	近世
S3094	扁平片刃石斧	93次	SK−2120	第1層	5.9	3.0	1.0	24.6	玄武岩D	転用品	Ⅳ−1
SP3070	扁平片刃石斧	93次	SK−2122	第6層	2.4	1.9	0.4	3.3	凝灰岩質点紋片岩	石庖丁転用?	Ⅴ−1
S3095	扁平片刃石斧	89次	SD−1051	暗灰色粘質土	4.7	2.2	0.7	(8.9)	泥質ホルンフェルス A	石剣転用	中世

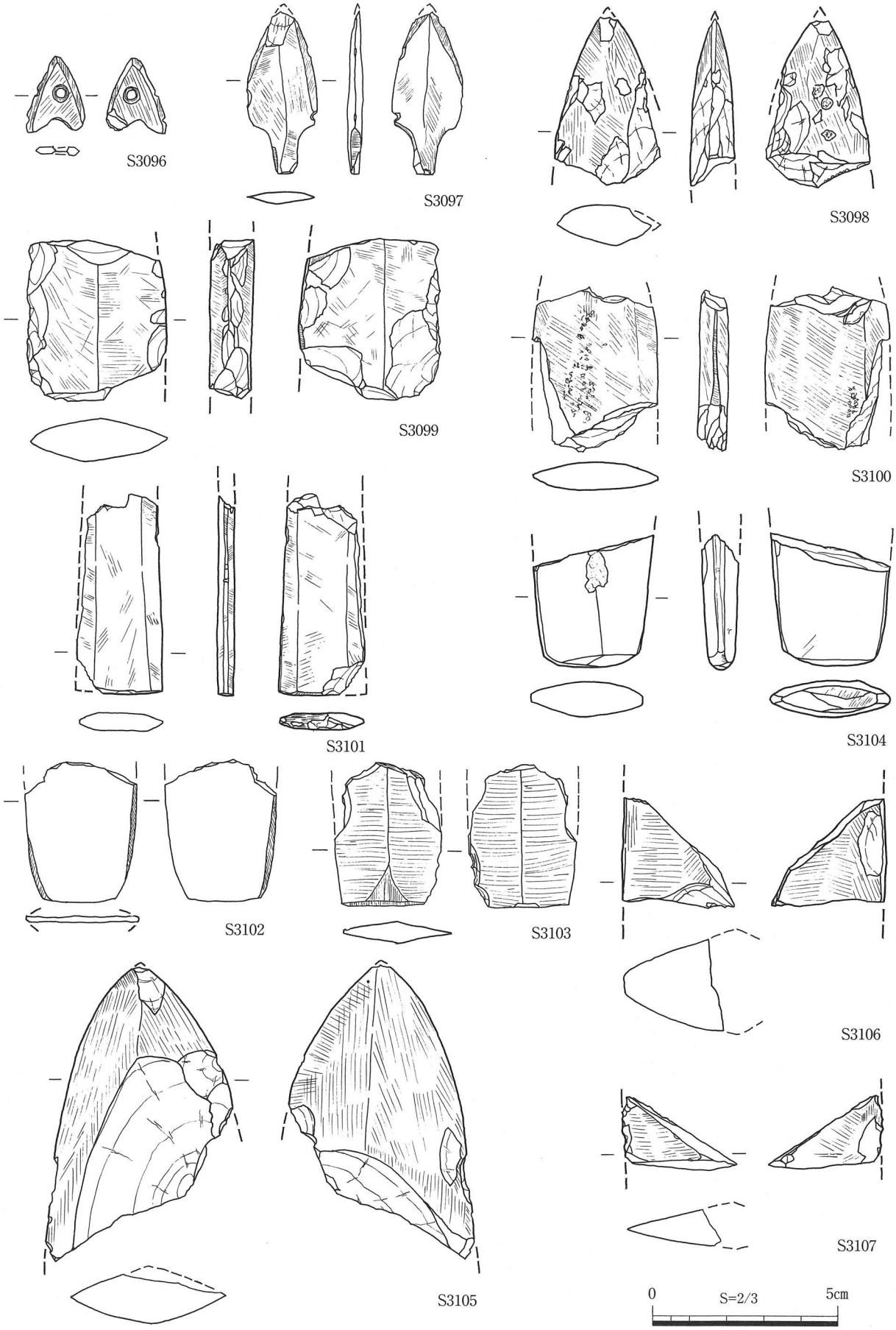
刃部再生を経て、使用されたものと考えられる。Ｓ3090は基部であり、刃部を折損している。表面は細かな研磨が施されている。Ｓ3091は表面に製作時の剥離が多く残されていることから、研磨によって完全に平滑になっているわけではない。刃部のみの残存であるが、側面は研磨によって平坦に整えられている。Ｓ3092はほぼ完形である。刃部端には微細な剥離痕がみ

られるが、これは使用に伴う刃こぼれと考えられる。表面には細かな研磨痕が認められる。S3093は尖基の扁平片刃石斧である。表面はくぼみが著しく、研磨は粗雑である。側面は一部研磨が施されている。S3094は不定形な扁平片刃石斧である。表面に敲打痕を残し、粗雑な製品である。刃部は片刃であり、裏面は研磨が施され平坦に加工されている。S3095は石剣からの転用品である。石材も他の石斧と異なり粘板岩が用いられている。中央部に鎬を有しており、断面は菱形を呈している。上端部は研磨によって平坦に整えられており、両側面に関しても石剣の刃部を潰すように研磨されている。石斧としての刃部端はとどめていないが、石斧刃部の傾斜は粗雑な研磨によって作り出されたものである。

磨製石鏃（S3096・3097）　S3096は凹基の石鏃であり、完形である。中央部に孔があり、両面から穿孔されている。端部は研磨により刃をつけている。全面に研磨が施されている。S3097は有茎の石鏃である。先端が欠けている以外は、ほぼ完形である。中央に鎬を有するが明瞭ではなく、平坦にちかい菱形を呈している。S3096・3097は結晶片岩が用いられており、ともに表面に研磨が施されている。

磨製石剣（S3098～3104・SP3071～3075）　S3098～3104は石剣であり、粘板岩、結晶片岩が多用されているが、S3098のみサヌカイトが用いられている。完形のものはなく、すべて破片もしくは欠損品である。以下個別に詳細を述べる。S3098は石剣の先端である。中央に鎬を有するが、明瞭ではない。剥離によるくぼみが多く、全面に研磨が及ばない。先端部にちかい刃部は平坦に研磨されている。断面は丸みを帯びた菱形を呈している。S3099は石剣の基部であり、先端部と片側側面の一部を欠損している。残存している側面は平坦に研磨されている。中央に鎬をもたず、断面形状は変則的な八角形を呈している。S3100・3101は基部と先端を欠損している。S3100は中央に鎬を有しており、側面は剥離が顕著である。断面は丸みを帯びた菱形を呈している。S3101に鎬はなく中央は平坦に研磨が施されている。側

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3096	磨製石鏃	84次		褐灰色粘質土	2.1	1.5	0.2	(0.8)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩A		弥生・古墳
S3097	磨製石鏃	84次		黒褐色粘質土	4.3	1.8	0.4	(3.1)	泥質ホルンフェルスA	転用品	弥生・古墳
S3098	磨製石剣	84次		茶灰色粘質土	(4.4)	(2.8)	1.1	(12.6)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	弥生～中世
S3099	磨製石剣	84次		灰褐色粘質土	(4.3)	(3.8)	1.1	(26.7)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	弥生～中世
S3100	磨製石剣	80次	SD-101C	第12層	(4.3)	3.3	0.7	(14.9)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形	Ⅳ-1
SP3071	磨製石剣	79次	SK-105	第7層	(2.0)	(0.9)	(0.2)	(0.6)	泥質片岩	鉄剣形	Ⅵ-4
SP3072	磨製石剣	79次		黒色粘質土	(2.4)	(1.5)	(0.2)	(0.7)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形	弥生
SP3073	磨製石剣	79次	表採		(2.1)	(1.7)	(0.3)	(1.1)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	―
SP3074	磨製石剣	93次		黒褐色粘質土	(1.9)	(2.4)	(0.3)	(2.0)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	弥生・古墳
S3101	磨製石剣	80次	SD-101	第4層	(5.3)	2.3	0.5	(9.8)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形 転用品	Ⅴ
S3102	磨製石剣	84次	SK-104	第3層	(3.7)	3.0	0.2	(3.0)	泥質ホルンフェルスE	鉄剣形	Ⅳ-1
S3103	磨製石剣	84次		黒褐色粘質土	(3.8)	(2.8)	0.5	(7.5)	泥質ホルンフェルスA	鉄剣形。折損部再加工	弥生・古墳
S3104	磨製石剣	80次	SD-02	茶灰色粘質土	(3.6)	3.1	1.0	(14.0)	玄武岩質凝灰岩質片岩A	鉄剣形	中世
SP3075	磨製石剣	93次		黄褐色粘質土	(3.2)	(2.6)	(0.8)	(6.8)	安山岩A(サヌカイト)	鉄剣形	弥生
S3105	磨製石戈	80次	SD-101B	第9層	(7.5)	4.5	1.3	(44.2)	安山岩A(サヌカイト)		Ⅳ-1
S3106	磨製石戈	93次	Pit-1201WB	第10(下)層	(2.9)	(3.0)	(2.5)	(18.3)	安山岩A(サヌカイト)		Ⅲ-2
S3107	磨製石戈	93次	SD-2055	第1層	(2.0)	(3.1)	(1.0)	(3.6)	安山岩A(サヌカイト)		中世



第475図　西地区出土磨製石器（10）

面も平坦に研磨が施されているが、刃をつけている部分もあり、柄部と刃部の境界付近にあたると考えられる。S3102～3104は石剣の基部である。S3102は表面の大部分が剥離している。S3103は中央に鎬を有しており、全面に細かな研磨が施されている。断面は菱形を呈している。S3104の断面は丸みを帯びた菱形を呈している。

磨製石戈（S3105～3107）　S3105は磨製石戈の先端部である。中央に鎬を有しており、全面に細かな研磨が施されている。断面はやや丸みを帯びた菱形を呈している。S3106・3107は破片である。S3106は柄部の一部と考えられ、側面はやや丸みを帯びて研磨が施されている。S3107は刃部の一部と考えられる。

（3）石製品

石製紡錘車（S3108～3111・SP3076）　S3108～3111は石製紡錘車である。S3108は半分を欠損している。一部に刃部の痕跡が認められ、石庖丁からの転用品と考えられる。両面から穿孔が施されている。S3109・3111は完形品であり、穿孔は両面から施されている。S3110はS3108同様に石庖丁からの転用品である。石庖丁の背部を利用し、他の部分を打ち欠いて円形に整えている。2孔確認され、どちらも両面から穿孔されている。また片面の穿孔付近に敲打痕があり、敲打後に回転穿孔されたと考えられる。

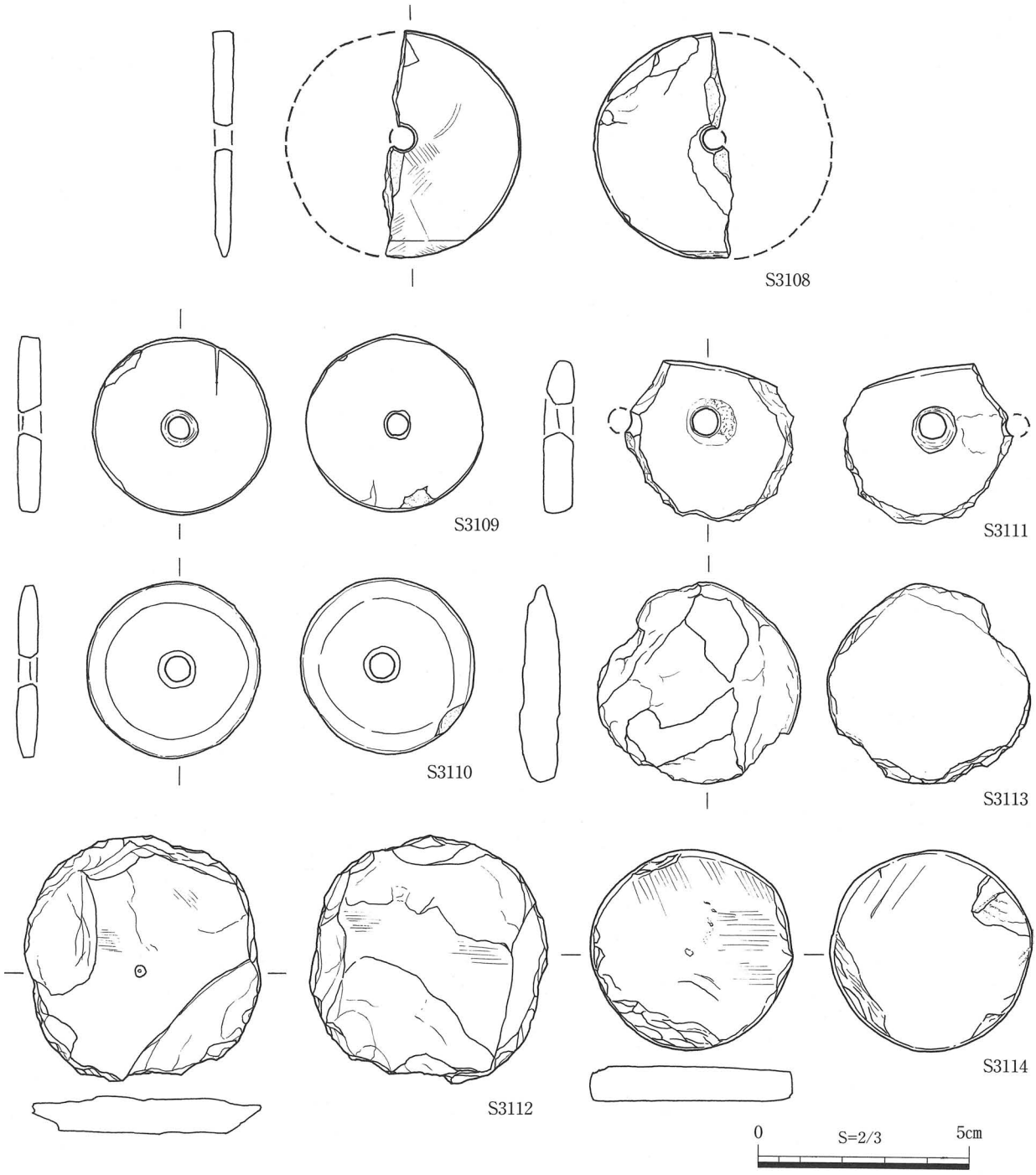
石製紡錘車未成品（S3112）　S3112は未成品であり、中央に穿孔の痕跡が認められるが、未貫通である。表面は研磨を施しているが、剥離によるくぼみで平坦に整えられていない。側面端部は未加工である。

石製円板（S3113・3114）　S3113・3114は円板状に加工されたもので、表面及び側面に研磨が施されている。穿孔が施されていないが、石製紡錘車未成品である可能性が考えられる。

垂飾品（S3115）　S3115は隅円の方形状を呈しており、結晶片岩製である。1ヶ所に穿孔を有しており、両面から施されている。全面に研磨が施されているが、一部擦切りによる溝が施されており、別器種からの転用品の可能性がある。

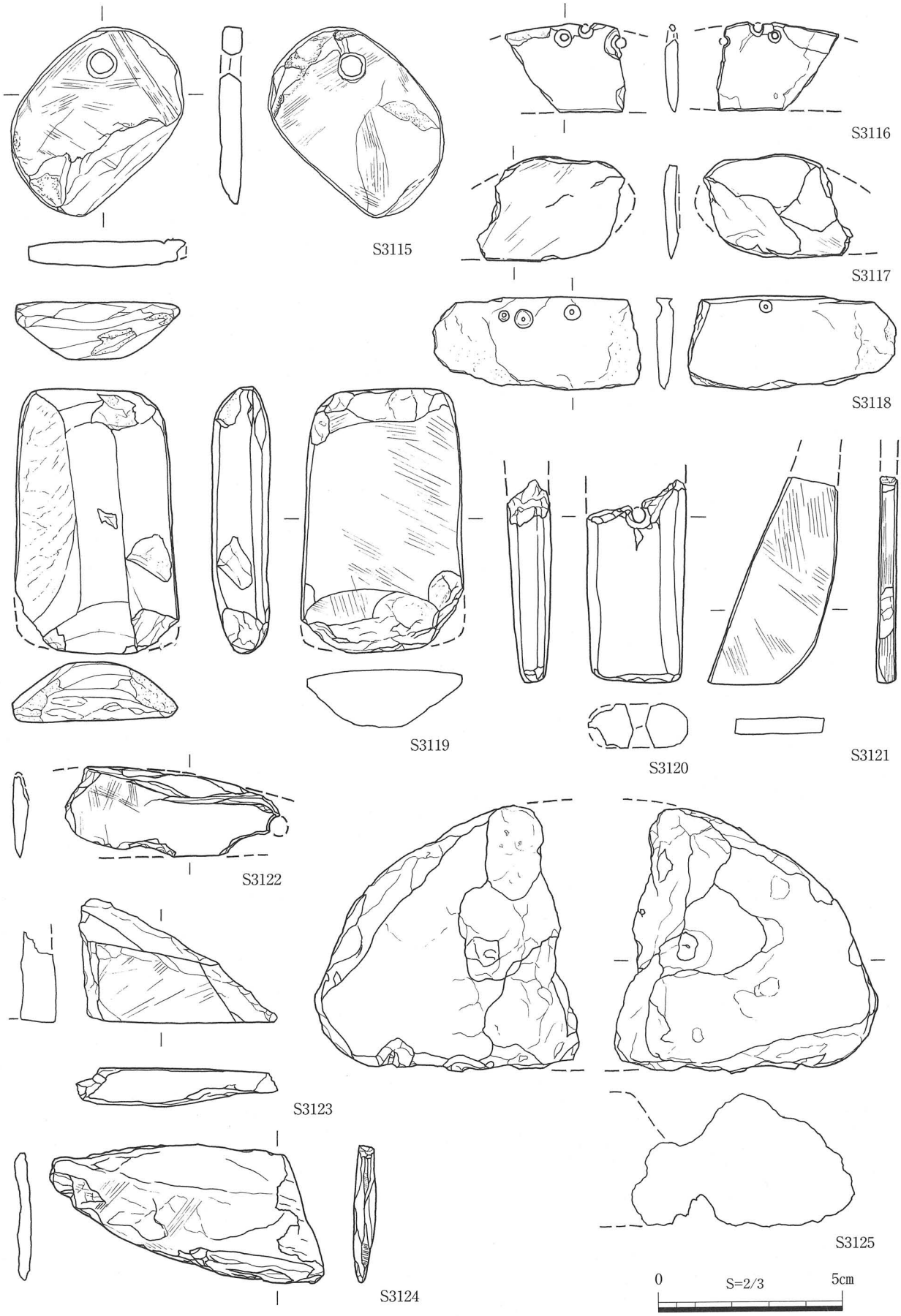
ミニチュア石製品（S3116～3118）　S3116～3118は石庖丁のミニチュア品と考えられ、いずれも刃部が形成されている。S3116・3118はともに背部ちかくに3ヶ所穿孔するが、S3118はすべて未貫通である。S3117は穿孔されていない。

用途不明石製品（S3119～3125・SP3077・3078）　S3119は扁平片刃石斧状を呈する石製品で、その転用品の可能性がある。表面は側辺の破損面を再研磨し整えていることから、横断面は台形状になる。裏面は当初の面と考えられ、丁寧な研磨で光沢をもっている。また、下端は、両面から研磨をおこなっているが、刃部を作るに至っていない。S3120は、縁辺を丸く加工した有孔の板状の製品である。基部は徐々に薄くなる。石庖丁の転用品の可能性もある。S3121は、流紋岩製の薄い板状の製品である。不定形であり、元の製品はさらに大きかったと思われる。全面に研磨が及んでおり、砥石の可能性もある。S3122・3124は刃部を有する石庖丁様の石製品である。S3122では孔を有していることから欠損した石庖丁を再研磨して



第476図　西地区出土石製品（１）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
S3108	石製紡錘車	93次	SK−2120	第2層	径5.4	厚0.5	孔径0.6	(12.7)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A	被熱。石庖丁転用	Ⅳ−1
S3109	石製紡錘車	79次	SD−103	第2(下)層	径4.1	―	0.5	14.9	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 C		Ⅲ・Ⅳ
S3110	石製紡錘車	80次	SD−105	第2層	径4.4	短径4.4	0.6	19.3	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A	石庖丁転用	Ⅴ
S3111	石製紡錘車	80次	SD−101	第4層	径4.0	短径3.6	0.8	18.6	玄武岩質凝灰岩質片岩 A	石庖丁転用	Ⅴ
SP3076	石製紡錘車	84次	SD−04	茶灰色粘質土	長軸(径)(2.6)	径(1.8)	0.4	(2.5)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		中世
S3112	石製紡錘車未成品	80次		暗褐色粘質土	径5.7	短径5.5	0.9	47.0	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		弥生
S3113	石製円板	84次		暗灰褐色粘質土	長軸(径)4.6	径4.6	1.0	(28.6)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		弥生〜中世
S3114	石製円板	79次	SD−101B		径4.8	―	0.8	35.5	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		Ⅳ



第477図　西地区出土石製品（2）

形態を整えた可能性がある。Ｓ3124は、厚みが0.6cm前後しかないことから剥片を利用して製作したものであろう。Ｓ3123は、一面のみ残し他の面は全て欠損している。このため、全体の形状や用途はわからない。残存する面は丁寧な研磨がみられる。Ｓ3125は、不定形な軽石を利用したもので、ほぼ半分が残存しているようである。欠損部にあたる中央には径２cmほどの未貫通の孔が穿たれている

石鋸（ＳＰ3079～3085・3088）　いずれも扁平に薄く割れた紅簾片岩等の剥片をそのまま利用したもので、形態を整えるための調整はおこなっていない。形態的には横長の長方形と三角形を呈するものがあるが、三角形のものは端部が欠損している可能性もある。比較的厚みのない薄いものが多い。ＳＰ3085は端部に磨耗痕がみられるが、刃部は平坦面を有し擦りきるような用途ではなさそうである。上下の長辺を刃部として使用しており、磨耗が激しい。

石鋸素材（ＳＰ3086・3087・3089～3091）　いずれも横長に割れた紅簾片岩等の剥片である。石鋸として使用は認められないもので、素材あるいは石鋸として利用できない剥片の可能性がある。

砥石（Ｓ3126～3149・ＳＰ3092～3095）　Ｓ3126・3129・3134～3137・3139・3143はⅠ類、Ｓ3127・3128・3130～3132・3140・3141・3144～3147はⅡ類、Ｓ3148・3149はⅢ類に分類される。Ⅰ・Ⅱ類のうち、Ｓ3134・3135はAa、Ｓ3140はAb、Ｓ3146・3039・3047はAcに、Ｓ3143はBa、Ｓ3144はBb、Ｓ3128・3137・3145はBcに分類される。その他のＳ3126・3127、3129～3132・3141・3146は不定形砥石である。また、Ｓ3133・3138・3142は部分片であるため、分類不能である。以下、それぞれの特徴を述べていく。

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3115	垂飾品	79次	SD-101	第1層	5.3	3.7	0.7	(22.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		Ⅴ
S3116	ミニチュア石製品	80次	SD-102	第3層	(3.2)	2.4	0.3	(4.0)	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		Ⅴ
S3117	ミニチュア石製品	89次	SD-1114B	第6層	(4.0)	2.8	0.4	(5.3)	玄武岩質凝灰岩質片岩 A		Ⅳ
S3118	ミニチュア石製品	80次		黒褐色粘質土	5.7	2.5	0.5	10.7	玄武岩質凝灰岩質点紋片岩 A		弥生
S3119	用途不明石製品	80次		黒褐色粘質土	7.3	4.4	1.6	(84.8)	玄武岩質溶岩 A	扁平片刃石斧転用	弥生
S3120	用途不明石製品	89次	SD-1092	暗灰色粘質土	(5.5)	2.7	1.2	(31.2)	玄武岩質溶岩 A		中世
S3121	用途不明石製品	93次	SD-2104	第1層	(6.0)	2.4	0.5	(11.0)	柘榴石流紋岩 C		Ⅱ-3
S3122	用途不明石製品	79次	表採		(5.8)	2.2	0.4	(7.8)	泥質ホルンフェルス B	大形石庖丁転用	―
S3123	用途不明石製品	93次		黒褐色粘質土	(3.4)	(5.3)	1.0	(18.7)	玄武岩質凝灰岩質片岩 A		弥生・古墳
S3124	用途不明石製品	93次	SK-2120	第1層	7.5	3.8	0.6	16.8	泥質点紋片岩 A		Ⅳ-1
SP3077	用途不明石製品	79次	SD-101	第3層	(8.5)	(2.2)	2.9	(82.0)	泥質片岩		Ⅴ
SP3078	用途不明石製品	93次		黒褐色粘質土	(9.1)	(6.1)	3.0	(169.2)	砂質点紋片岩		弥生・古墳
S3125	用途不明石製品	93次		黄褐色粘質土	(7.2)	(7.2)	3.7	(45.1)	石英安山岩質軽石		弥生
SP3079	石鋸	89次	SD-1114	第2層	(5.6)	3.7	0.9	(19.0)	紅簾石片岩 B		Ⅵ-4
SP3080	石鋸	93次		黄褐色粘質土	(5.7)	(4.0)	0.4	(14.6)	紅簾石片岩 A		弥生
SP3081	石鋸	79次	SD-103	第2(下)層	4.3	2.3	0.2	2.8	紅簾石片岩 B		Ⅲ・Ⅳ
SP3082	石鋸	80次	SD-101B	第11層	※5.5	2.3	0.5	10.6	紅簾石片岩 A		Ⅳ-1
SP3083	石鋸	80次	SD-106	第3層	5.2	2.9	0.3	5.8	紅簾石片岩 B		Ⅲ
SP3084	石鋸	93次	SD-2101	第3層	(4.7)	1.7	0.5	(6.0)	石英質片岩		Ⅳ-2
SP3085	石鋸	80次	SD-101	第1層	※4.5	4.8	0.9	21.5	紅簾石片岩 D		Ⅵ-4
SP3086	石鋸素材	93次	SD-2101	第2層	(10.2)	(6.9)	1.3	(82.7)	紅簾石片岩 B		Ⅳ-2
SP3087	石鋸素材	89次	SD-1114B	第5(下)層	(5.8)	3.6	0.6	(14.1)	紅簾石片岩 B		Ⅴ
SP3088	石鋸	89次		黒褐色粘質土	(6.0)	4.3	0.4	(14.0)	紅簾石片岩 B		弥生・古墳
SP3089	石鋸素材	93次	SK-2124	第1層	(4.5)	(4.0)	0.4	(9.7)	絹雲母片岩		布留0
SP3090	石鋸素材	89次	SD-1114C	第9層	13.2	5.0	1.4	106.0	絹雲母片岩		Ⅳ-2
SP3091	石鋸素材	79次	SK-111	第6(下)層	8.8	4.3	0.8	45.4	紅簾石片岩 C		Ⅳ-1

Ｓ3126は、中央にある孔を境にｅ面が欠損する。唐古・鍵遺跡において孔が貫通した砥石はこの資料のみである。孔内には回転痕がみられる。使用痕とも考えられ、周辺に孔状のくぼみが３ヶ所あるが、砥石自体に孔をあけて持ち運びを可能とした「提げ砥」とも考えられる。孔状のくぼみは、底部が丸みをもち、断面ｕ字状となる点で、中央区の２例（Ｓ4073・4074）と異なる。

Ｓ3127はａ面には使用痕E2uが２条ある。この一方を境界にしてｃ面は引きちぎられたように欠損している。ｂ面は中央付近に面を分かつ緩やかな稜があり、右半分は使用痕Ｇがある。

Ｓ3128は使用痕E2uがａ面に２条、ｃ面に１条ある。いずれも１～1.5cm程度の幅があり、明瞭な溝を形成している。

Ｓ3129はａ面には使用痕A2が２条みられるが、石の流理に沿った、比較的不明瞭な溝状を呈している。

Ｓ3130はｂ・ｄ面とも、石の流理に基づく破面が磨耗したものとみられる。ａ面は２条の使用痕E2uがみられる。Ｓ3131はａ面に使用痕E2uがある。ｃ面には長軸と直交方向に溝状の括れがみられ、凹凸の激しい面となっている。ただし砥面として使用した結果とは限らない。Ｓ3132は石材の風化により、ａ・ｂ面以外は砥面として確認できない。ａ面には使用痕E2uがみられる。

Ｓ3133はａ・ｃ・ｄ面に１～２方向の使用痕Ｇがみられるのみである。

Ｓ3134は各面には数方向の使用痕Ｇが、またｃ面には使用痕A1が数条みられる。Ｓ3135は各面に１～２方向の使用痕Ｇのみがみられる。Ｓ3136は、ａ面は不定方向の使用痕Ｇによって平坦面が形成される。また下部に断面ｖ字状の浅い溝がみられるが、使用痕であるかは不明である。ｄ面は縦方向の使用痕Ｇのみである。ｃ面は縦方向の使用痕Ｇ、Ｄと、A2が数条みられる。0.3～１cm程度の長さで、他の砥石にみられるA2よりも短い。Ｓ3137はａ面に数方向の使用痕Ｇと、A2が２条重なりあうものとが確認できる。

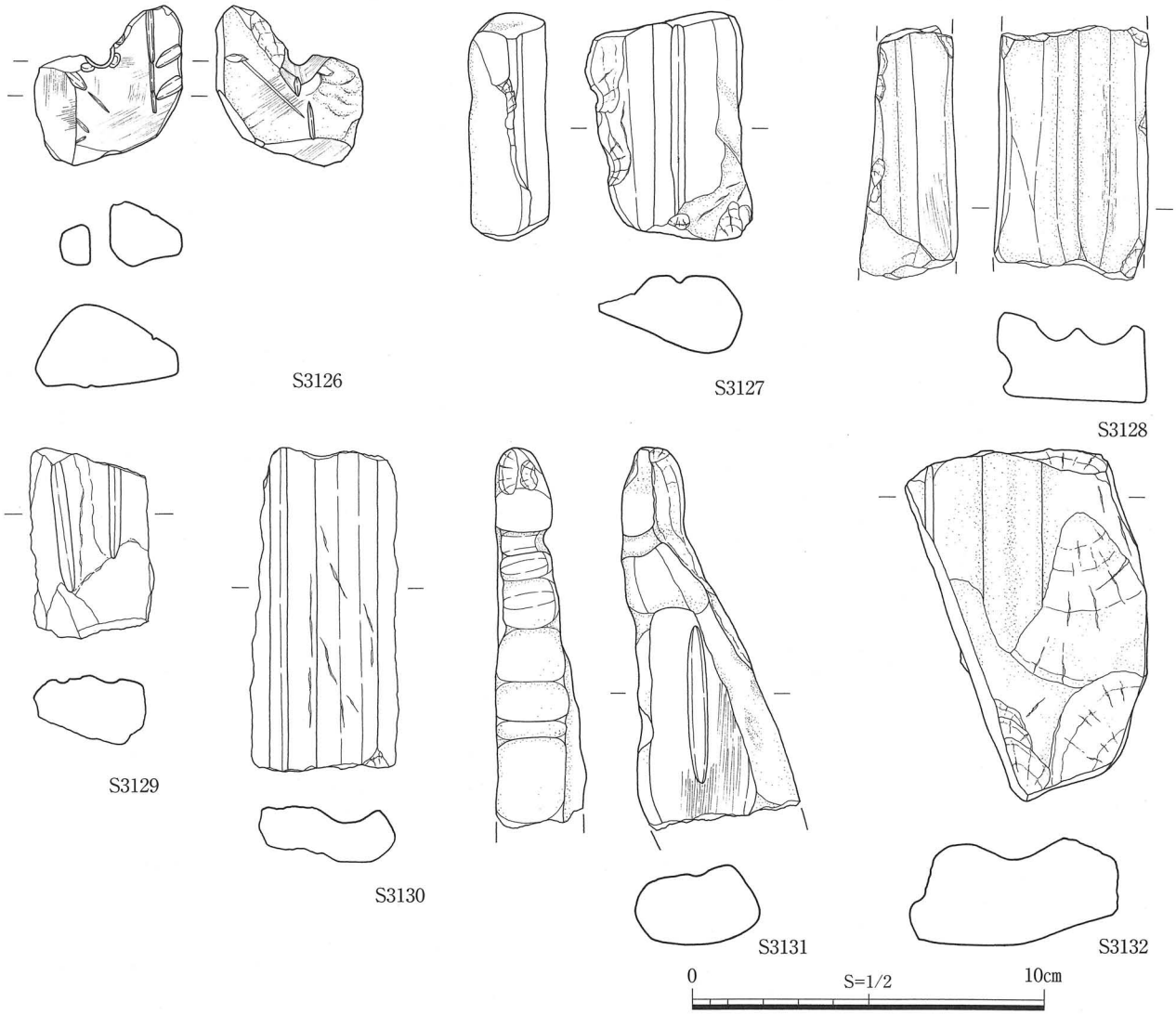
Ｓ3138は使用痕E1vがあるほか、全体に使用痕Ｃが数条みられる。

Ｓ3139はａ・ｂ・ｃ・ｄの４面が砥面とみられ、それぞれ使用痕Ｇがある。ａ面には使用痕C1vもある。砥石上部はやや細くなり、括れたようになっている。

Ｓ3140はａ面には使用痕E1v、C2v（２条）、A2がある。またこれと直交方向に、使用痕A2やE1Lが数条ずつみられる。ｂ・ｄ面は部分的に使用痕Ｇがあり、ｄ面には使用痕A2も２条ある。なおｃ・ｆ面は黒化しており、被熱の可能性がある。Ｓ3141は、もとは礫にあまり手を加えずに使用したものとみられるが、断面楕円形の扁平な形状におさまっている。使用痕はＧのみである。

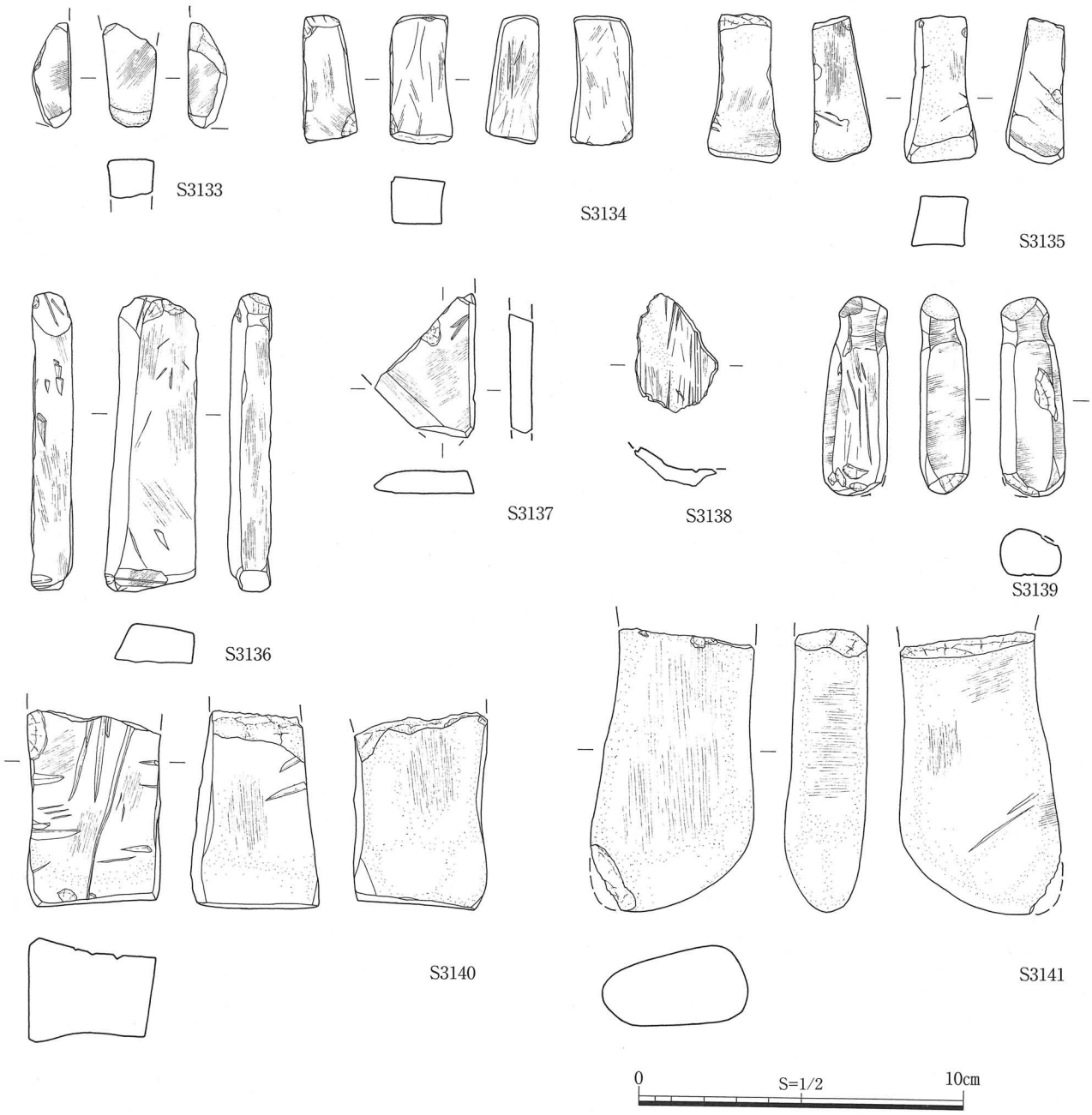
Ｓ3142は、ａ面はほぼ平坦な面で構成され、使用痕ＧとＨが確認される。ｂ面は砥面ではないが、赤味を帯び、顔料が付着している可能性もある。

Ｓ3143は、使用痕Ｇのみである。ａ・ｂ面の微妙な使用具合によって、横からみると捩れたような形状を呈す。ｃ面は、ａ・ｂ両面からの施溝によって分割したとみられるようなわず



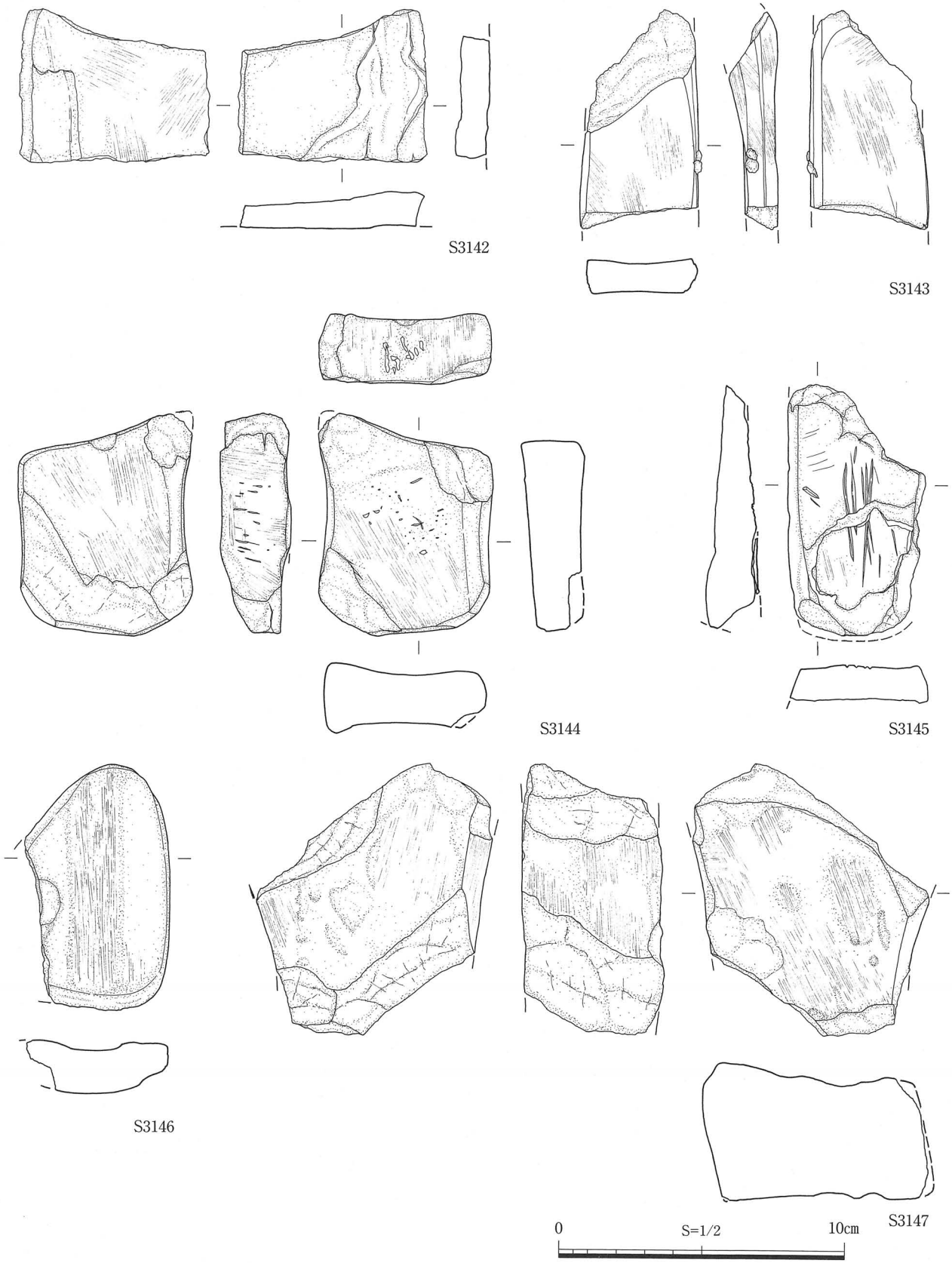
第478図　西地区出土石製品（３）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	砥石目	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S3126	砥石	93次	Pit−1201E	第4層	(4.6)	4.2	2.4	(36.0)	細粒砂岩 F	1200		Ⅲ−2
S3127	砥石	93次		黒褐色粘質土	6.5	4.8	2.3	87.0	片麻状細粒花崗岩 B	400		弥生・古墳
S3128	砥石	89次	SD−1114B	第4(下)−b層	(7.3)	4.4	2.8	(113.0)	流紋岩質凝灰岩 E	1200		Ⅴ
S3129	砥石	84次		暗灰褐色粘質土	(5.4)	(3.5)	2.0	(52.0)	片麻状細粒花崗岩 B	360		弥生〜中世
S3130	砥石	93次	SD−2059	第1層	(9.3)	(4.3)	1.6	(101.0)	片麻状細粒花崗岩 B	360		中世
S3131	砥石	79次	SD−103	第3層	(10.9)	5.1	2.6	(114.0)	片麻状細粒花崗岩 B	400		Ⅲ・Ⅳ
S3132	砥石	79次	SD−103	第1層	(10.0)	(6.9)	(3.1)	(238.0)	片麻状細粒花崗岩 B	100		Ⅲ・Ⅳ
SP3092	砥石	84次	SD−89		(3.5)	(2.1)	1.6	(11.0)	中粒砂岩 B	240		中世
S3133	砥石	89次		黒褐色粘質土	(3.3)	1.7	(1.2)	(7.0)	細粒砂岩 E	600		弥生・古墳
S3134	砥石	79次	Pit−1103	黒褐色粘質土	4.0	1.9	1.7	19.2	砂質ホルンフェルス	2000+		弥生後期?
S3135	砥石	89次	排土		(4.5)	2.3	1.8	(25.0)	泥質ホルンフェルス A	2000+		−
S3136	砥石	93次	SD−2075	第1層	9.3	2.8	(1.3)	(45.8)	砂質ホルンフェルス	1500		中世
SP3093	砥石	80次	SD−101	第4層	(5.4)	(2.2)	1.2	(11.5)	流紋岩質凝灰岩 D	1200		Ⅴ
S3137	砥石	80次		黒褐色粘質土	(4.5)	(3.1)	0.8	(11.1)	柘榴石流紋岩 C	1200		弥生
S3138	砥石	79次	SD−101B	sec第4(下)層	(3.7)	(2.6)	(1.2)	(5.0)	中粒砂岩 B	1000		Ⅳ
SP3094	砥石	84次	SD−102	第1層	(3.3)	(4.5)	1.8	(26.0)	細粒砂岩 E	80		古墳後期



第479図　西地区出土石製品（4）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	砥石目	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S3139	砥石	80次	SD−101	第5層	6.2	2.0	1.6	29.5	安山岩C	1500		Ⅴ
S3140	砥石	79次	SD−103	第2(下)層	(6.1)	4.1	4.0	(127.4)	細粒砂岩D	1200	一部被熱か	Ⅲ・Ⅳ
SP3095	砥石	93次	SD−50N	第4層	4.4	4.1	(3.1)	(53.0)	柘榴石流紋岩A	2000		中世
S3141	砥石	79次	SD−101B		(8.7)	5.0	2.6	(168.2)	細粒砂岩E	1500		Ⅳ
S3142	砥石	84次	SK−101	第2層	(5.4)	(6.6)	(1.3)	(70.0)	片麻状細粒花崗岩B	400	顔料付着か	Ⅵ−1
S3143	砥石	79次	SD−16		(7.7)	4.2	1.7	(47.0)	細粒砂岩E	1500		中世
S3144	砥石	93次	SD−50N	第4層	7.8	6.1	2.5	156.5	細粒砂岩E	400		中世
S3145	砥石	80次	SD−101	第1(下)層	(8.8)	(4.9)	1.8	(73.0)	中粒砂岩B	320		Ⅵ−4
S3146	砥石	93次	SK−2116	第1(下)層	8.7	(5.1)	1.9	(115.0)	片麻状細粒花崗岩B	240		Ⅳ−2
S3147	砥石	79次	SD−101C	第14−b層	(9.5)	(8.3)	5.0	(450.0)	細粒花崗岩A	60−		Ⅲ



第480図　西地区出土石製品（５）

かな段差がある。砥石が他の石器同様、意図的に製作されたことを示す貴重な資料といえる。

Ｓ3144はａ・ｂ面に使用痕Ｇがある。ｂ面は黒化し、中央部に敲打のような痕がみられるため、磨石類を転用あるいは磨石類に転用した可能性もある。ｃ・ｅ面は使用痕Ｇと、これと同じ方向に石包丁の「背潰し」のような痕もみられる。

Ｓ3145はａ面の下半分は接合している。縦方向に使用痕Ｄが数条みられ、この面自体がわずかな凹凸面で形成されている。

Ｓ3146はａ面に縦方向の使用痕Ｇがあり、断面が緩やかなカーブを描くような溝状となる。ｂ面はほぼ自然面とみられる。

Ｓ3147はａ・ｂ面に使用痕Ｇ、Ｈがある。所々に磨り減り、あるいは敲打や打ち割りの上から研磨を加えたと考えられるようなくぼみがみられる。ｃ・ｄ面は使用痕Ｇのみで、やや突出した平面が広がる。

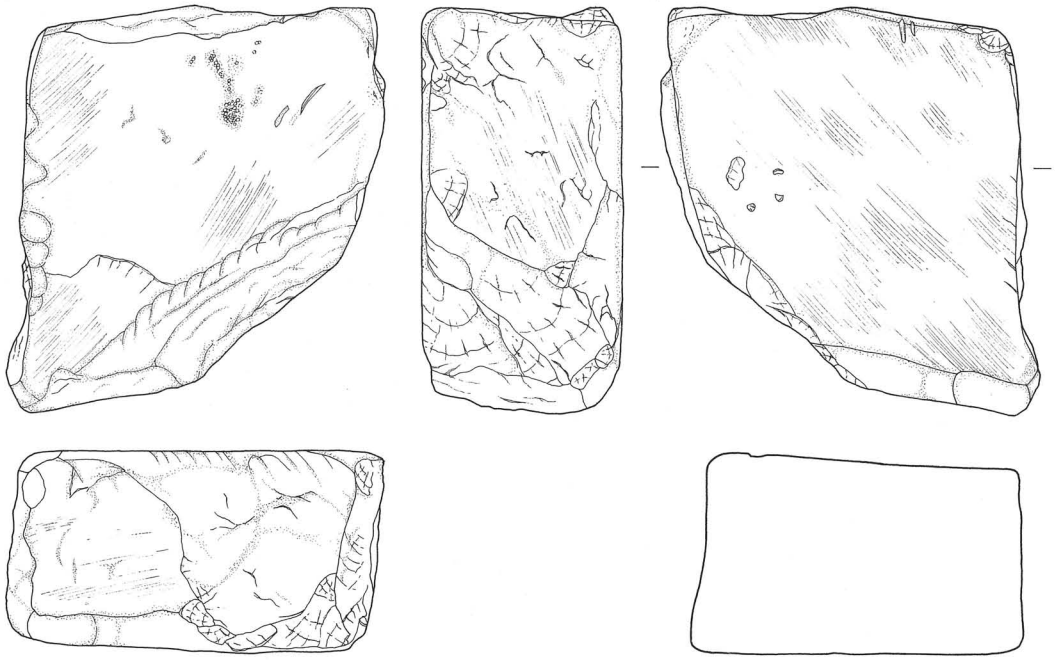
Ｓ3148は、平面形は扇形を呈する。ａ面は全面に使用痕Ｇ、Ｈと、E2uもわずかにみられる。ｂ面は使用痕ＧとＨのほかに、中央部に敲打痕もある。砥ぎ減りは両面とも顕著ではなく、ｂ面が若干くぼむにとどまる。石皿等の可能性も考えられる。

Ｓ3149は定形砥石Ｂの大形版ともみられる。ａ・ｂ面とも使用痕はＧのみである。ａ面が不定方向の使用により一つの曲面を形成しているのに対し、ｂ面は使用痕同士の切り合いによって面が複数に分かれる。ｃ・ｄ面も使用された可能性があり、中央部が緩やかな曲線を描いてくぼんでいる。

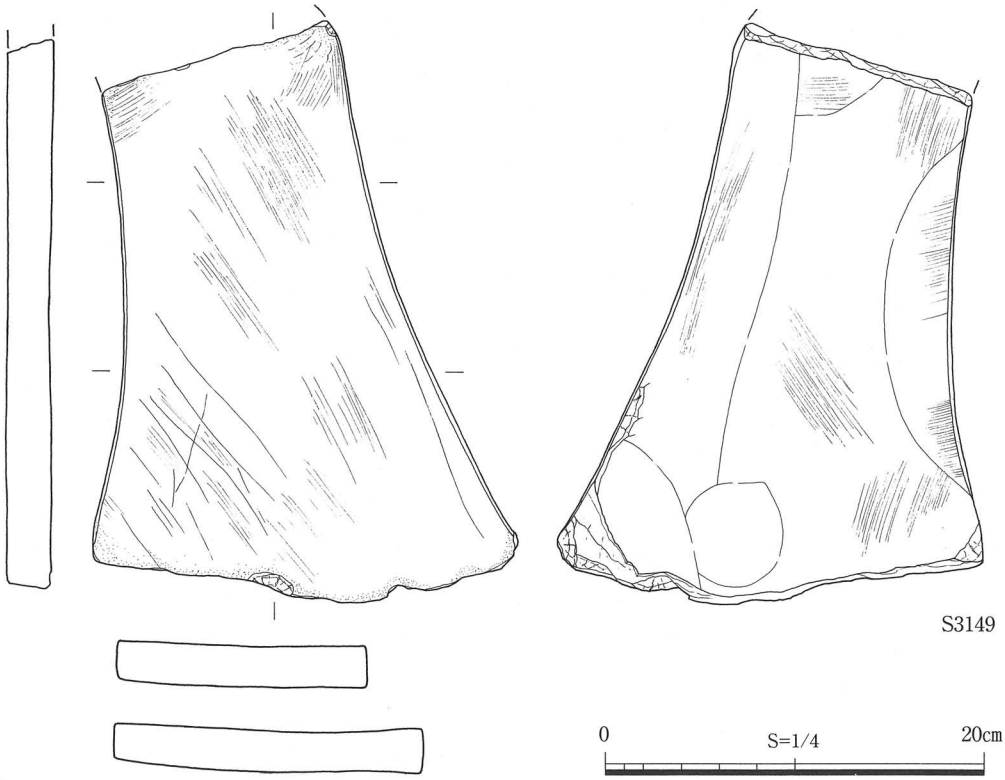
（4）礫石器

敲石（Ｓ3150～3160）　Ｓ3150は棒状の敲石で、やや軟質の砂岩が用いられている。ｅ面に使用痕Ⅳ類が認められ、部分的に使用痕Ⅲ類が伴っている。一方、ｆ面には使用痕Ⅳ類のみが認められる。Ｓ3151にはやや軟質で、肌理の粗い輝緑岩が用いられている。使用痕はほぼ全面に観察される。ｅ・ｆ面には使用痕Ｉｂ類、Ⅲ類が観察され、ｅ面の先端部では、中央に位置する箇所に使用痕Ｉｂ類が、その周囲から端部にかけて使用痕Ⅲ類が残されている。使用痕Ⅲ類の観察からは、敲石のｅ・ｆ面から力が加わったことがわかり、敲石の運動方向が推定できる。ａ～ｄ面には、一連の敲石としての痕跡に先行して磨痕が観察され、もとは磨石として使用されていたと考えられる。ｄ面の端部に使用痕Ｉｂ類が密集している部分がある。ｃ・ｄ面の使用痕Ｉｂ類はｅ・ｆ面のものと比べて大きく、２㎜以上の差をみせる箇所もあり、ｅ・ｆ面とは機能が異なっていた可能性がある。ｃ・ｄ面には使用痕Ⅱ類はほとんどみられず、ｃ・ｄ面からａ・ｂ面にかけて使用痕Ｖａ類が認められる。ａ・ｂ面では、使用痕Ｖａ類にⅢ

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	砥石目	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚					
S3148	砥石	79次	SD-101B	第7(下)層	(21.7)	19.1	9.7	(7,793.0)	片麻状アプライト	600	石皿の可能性も	Ⅳ-1
S3149	砥石	93次	SK-2116	第1層	(30.8)	22.5	2.5	(2,440.9)	細粒砂岩C	1500		Ⅳ-2



S3148



S3149

第481図　西地区出土石製品（６）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3150	敲石	79次	SK−110	第1層	17.1	5.0	3.7	381.0	中粒砂岩B		Ⅲ?
S3151	敲石	84次		黄灰色粘質土	13.1	5.9	4.6	479.5	輝緑岩B	石斧転用	弥生・古墳
S3152	敲石	84次	Pit−148	黒色粘質土	(9.4)	6.8	3.7	(407.2)	流紋岩質溶結凝灰岩E	太型蛤刃石斧転用	弥生
S3153	敲石	79次		灰褐色粘質土	9.8	6.9	4.3	486.4	輝緑岩A	太型蛤刃石斧転用	弥生〜中世

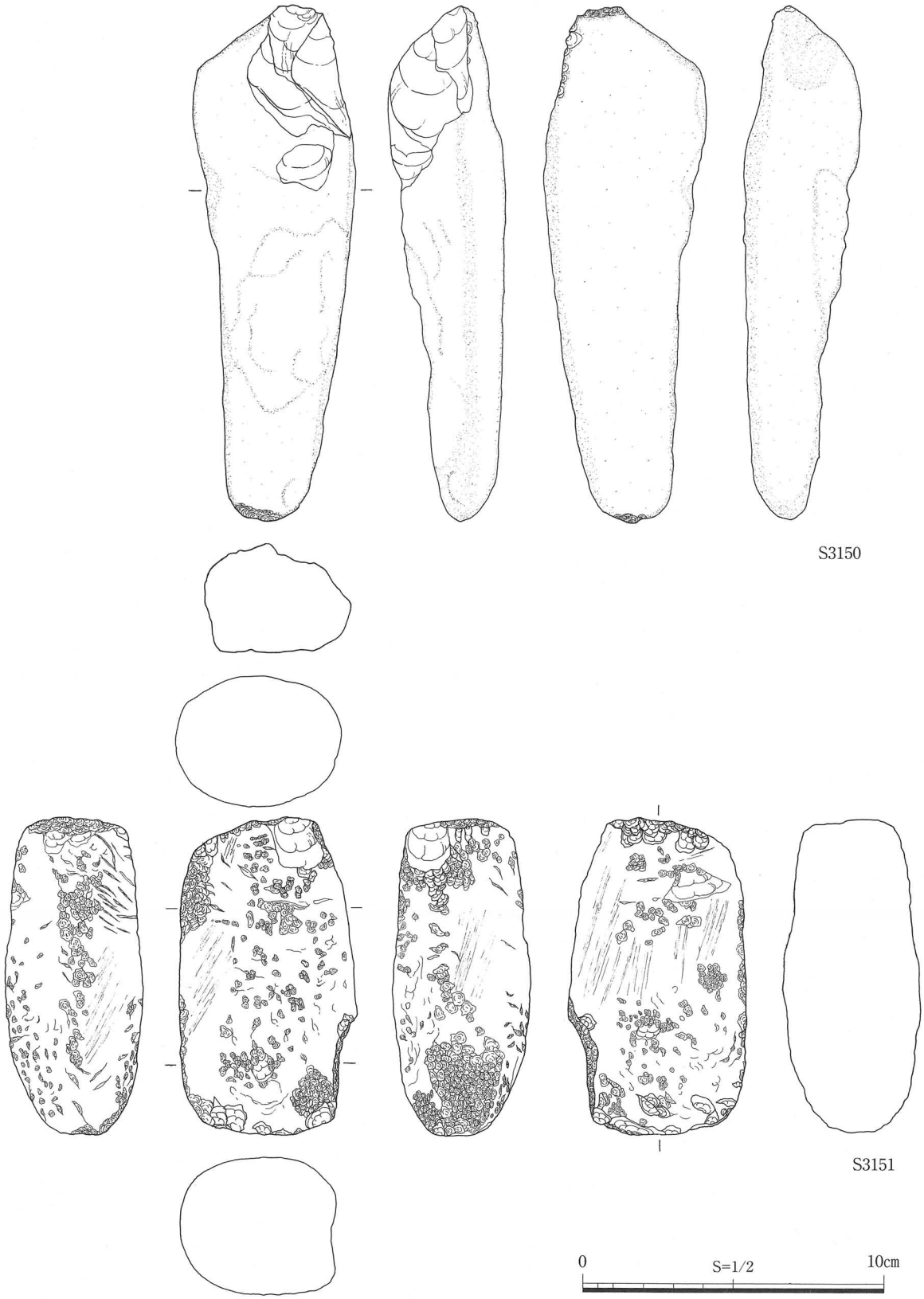
類が伴っている箇所がある。

Ｓ3152には硬質の凝灰岩が用いられており、太型蛤刃石斧の転用品である。使用痕はａ～ｄ面に認められ、すべて使用痕Ⅰａ類に分類できる。使用痕を構成する敲打痕は非常に小さく（直径0.1cm以下）、単位が明確であり、他の敲石に認められる使用痕Ⅰａ類とは異なっている。何か先鋭なものと繰り返し接触することで、使用痕がついたと考えられる。石斧の基部側にあたるｅ面からも剥離痕が生じており、切り合い関係の観察から一連の使用痕に後続すると思われる。Ｓ3153は硬質で肌理の粗い輝緑岩による敲石で、太型蛤刃石斧の転用品とみられる。使用痕は全面に及ぶが、ａ～ｄ面の４ヶ所に顕著である。使用痕はⅠａ類、Ⅰｂ類、Ⅲ類、Ⅴｂ類があるが、石斧の基部であったｅ面には、使用痕Ⅲ類が顕著に観察される。ａ面に右上がりの使用痕Ⅴｂ類がはっきりと残されている。その周囲には使用痕Ⅰａ類、Ⅰｂ類が認められ、使用痕Ⅴｂ類に対応する作業に伴って残された可能性が高い。Ｓ3154は今回報告するなかで唯一のサヌカイト（安山岩）製敲石である。随所に自然面が残っており、自然面はいわゆる「石マクリ火山岩」[(2)]の特徴をみせている。敲石のａ・ｂ面には、敲石の使用痕とは思われない大きな剥離痕が残されており、剥片生産の結果残された石核が、敲石に転用されている可能性が高い。使用痕はｃ・ｄ面とｅ・ｆ面には使用痕Ⅱ類やⅢ類が顕著で、わずかに使用痕Ⅰｂ類が伴っている。使用痕の発達が著しく、Ⅱ類が密集する範囲は白色を呈している箇所さえある。Ｓ3155には硬質で肌理の細かいチャートが用いられている。ｄ面からｅ・ｆ面にかけた全周に使用痕がみられ、ｅ・ｆ面の使用痕は顕著である。使用痕はⅡ類が多く、部分的にⅢ類が伴っている。ｅ・ｄ面は使用痕Ⅱ類のみで、石材の表面に沿って激しい凹凸をみせている。

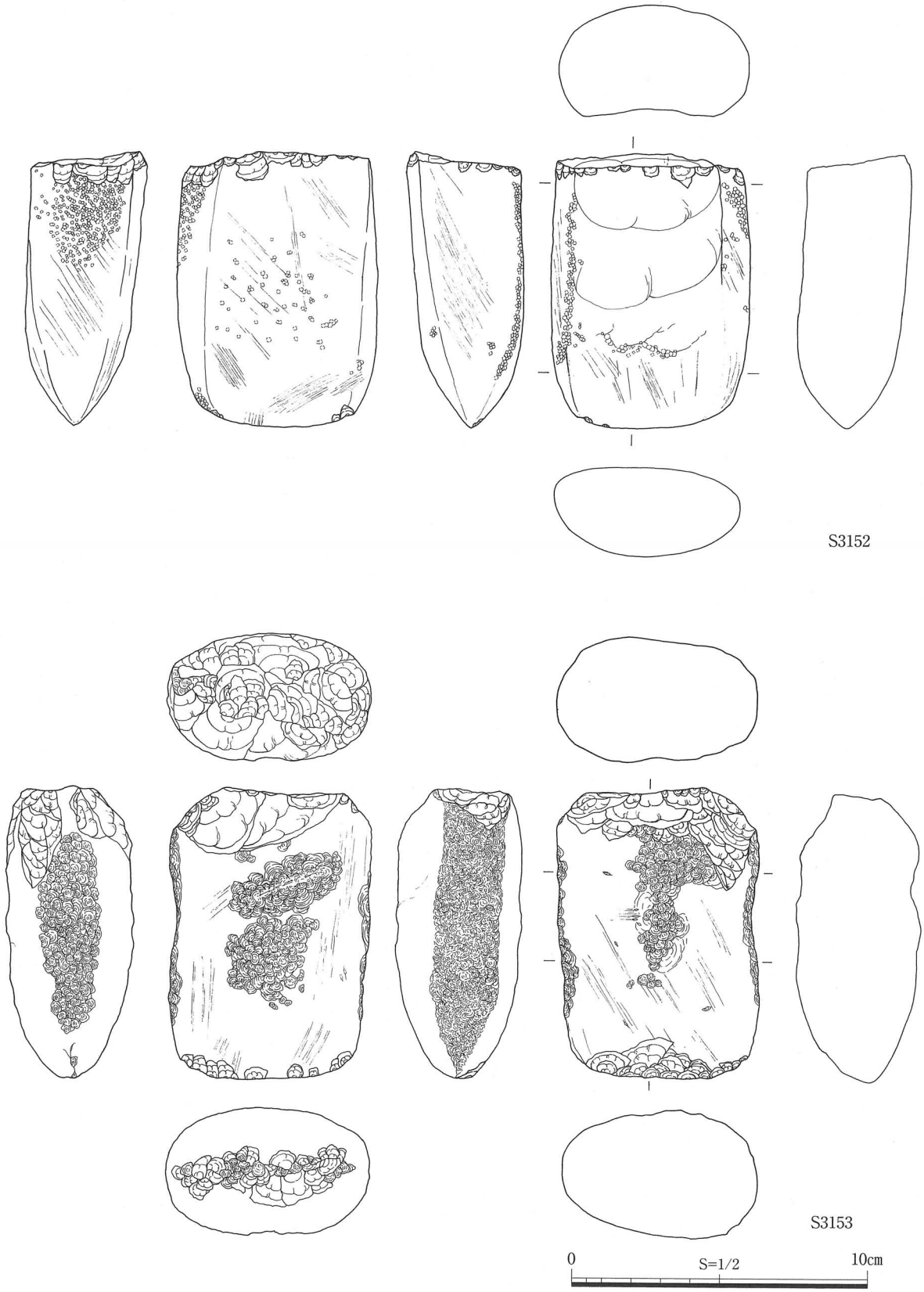
Ｓ3156には硬質の花崗岩が用いられている。敲石としての使用痕に先行して、かなり発達した磨痕がほぼ全面に残されており、使い込まれた磨石が敲石に転用されたことが推定できる。ほぼ全面に使用痕が認められ、ｃ・ｄ面に使用痕Ⅱ類が密集している。また、部分的に使用痕Ⅰａ類、Ⅰｂ類が伴っている。ｅ面には使用痕Ⅰａ類やⅠｂ類、ｆ面には、使用痕Ⅰａ類やⅠｂ類とともに、使用痕Ⅱ類やⅢ類を頻繁に認めることができる。特にｆ面は使用痕の発達が著しく、顕著に使用されたと推定できる。Ｓ3157はやや硬質で肌理の粗い斑糲岩が利用されている。ほぼ全面に使用痕が認められ、かなり使い込まれた印象を受ける。使用痕はほとんどがⅠａ類、Ⅰｂ類に分類できるが、ｄ面の一部には使用痕Ⅲ類が確認できる。

Ｓ3158は肌理の粗い軟質の凝灰岩が利用された、円盤状の敲石である。敲石としての使用痕に先行して磨痕が観察され、磨石が敲石に転用されたことがわかる。特にａ・ｂ面の中央部

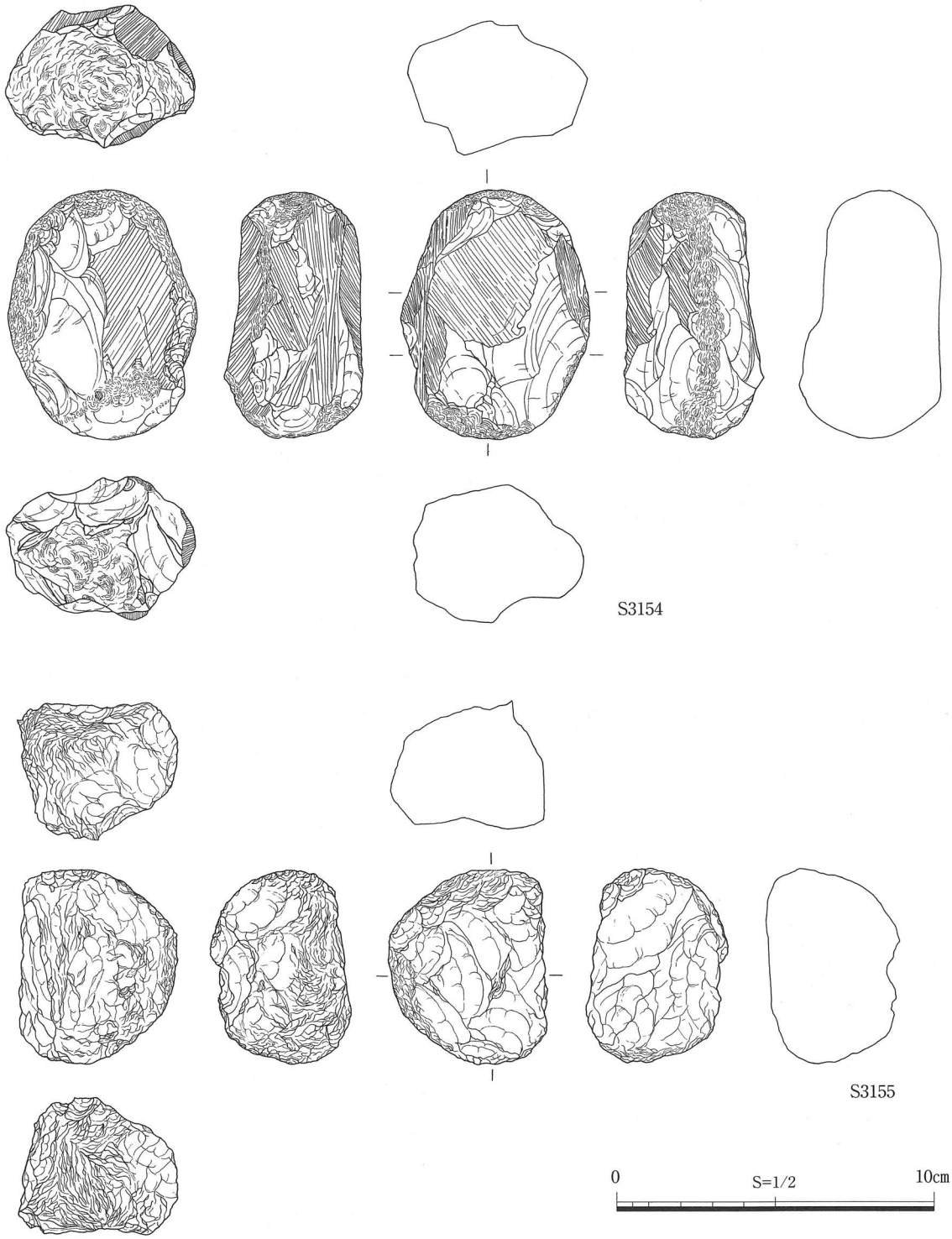
遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量（cm）			重量（g）	石種	備考	共伴時期（大和様式）
					最大長	最大幅	最大厚				
S3154	敲石	79次	SD-101	第3層	7.9	5.8	3.8	262.1	安山岩A（サヌカイト）	石核転用か	Ⅴ
S3155	敲石	89次	SK-1120	第2層	6.2	4.7	4.1	(181.3)	チャート		Ⅴ-2
S3156	敲石	79次	SD-102	第4層	6.1	6.6	4.6	294.4	細粒花崗岩B	磨石転用	Ⅱ-3
S3157	敲石	93次	SK-2120	第1層	7.8	(6.9)	5.1	(258.7)	斑糲岩B	磨痕あり	Ⅳ-1
S3158	敲石	79次	SD-101B	第10層	8.8	9.2	4.8	537.4	流紋岩質溶結凝灰岩A		Ⅲ-3
S3159	敲石	79次	Pit-1148	灰色粘質土（ブロック）	9.7	8.5	3.5	(461.7)	礫質砂岩B	磨石転用	弥生
S3160	敲石	84次		暗灰褐色粘質土	7.7	7.3	4.1	445.0	流紋岩質溶結凝灰岩F	磨石転用	弥生～中世



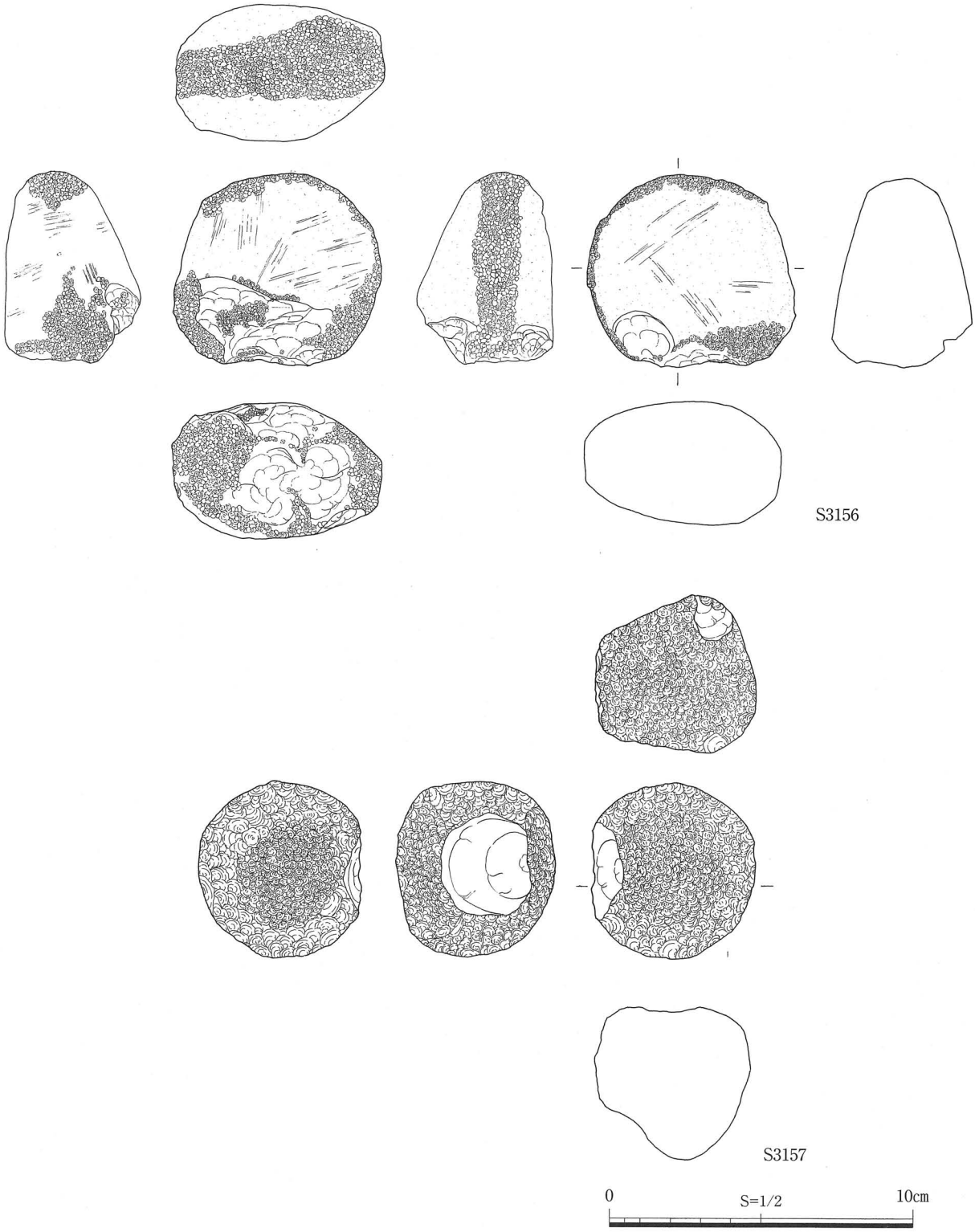
第482図　西地区出土礫石器（１）



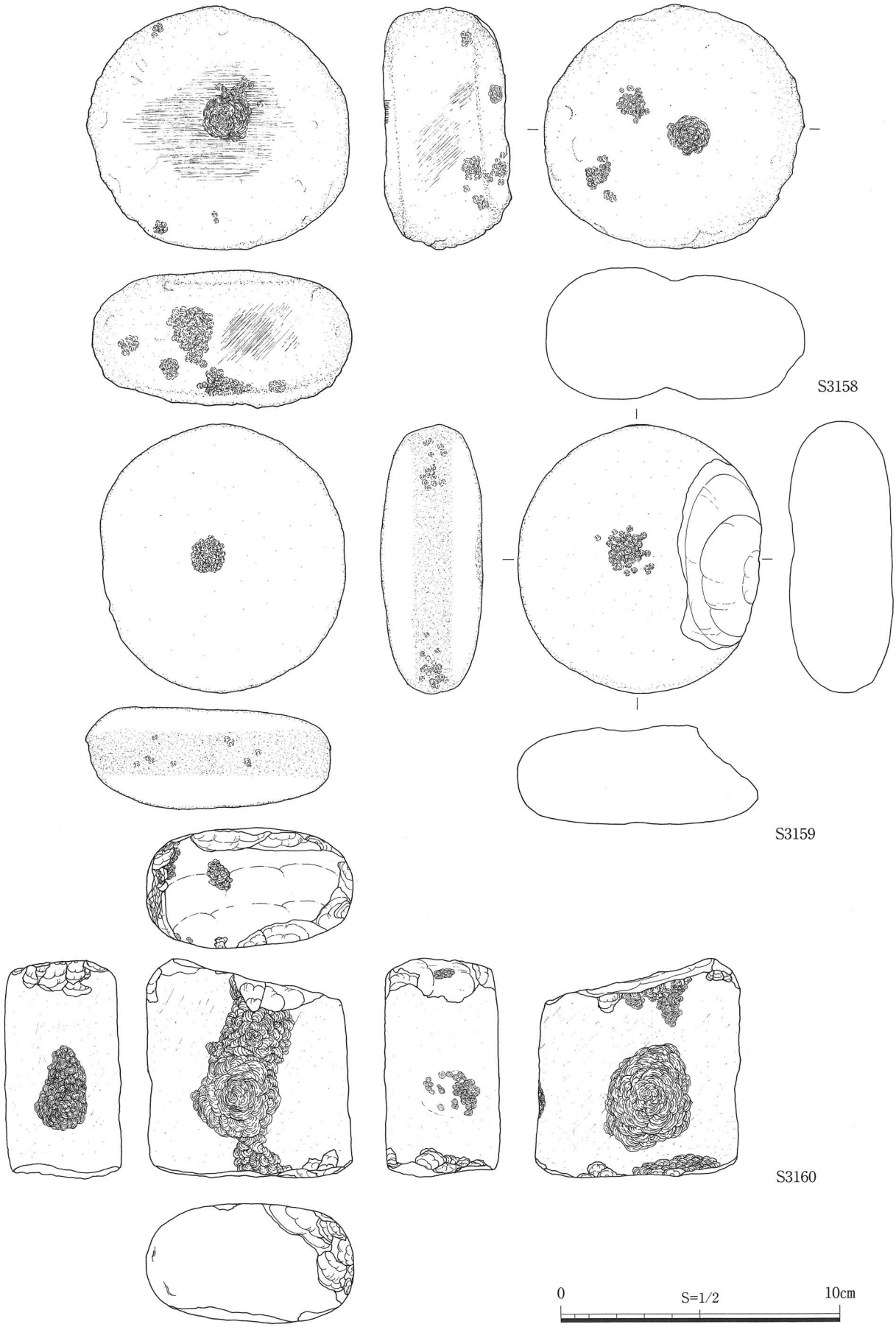
第483図　西地区出土礫石器（2）



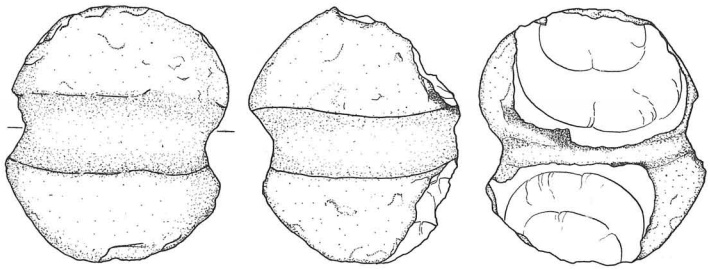
第484図　西地区出土礫石器（３）



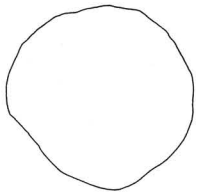
第485図　西地区出土礫石器（4）

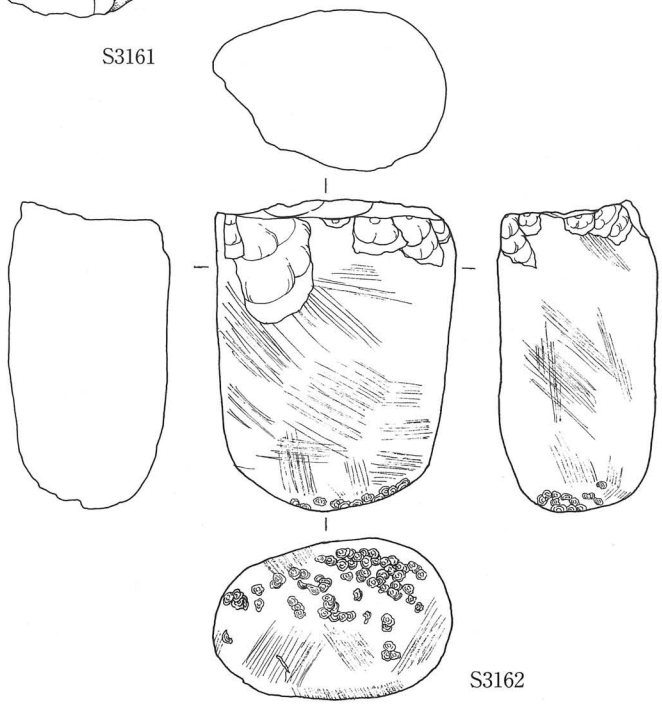


第486図　西地区出土礫石器（５）

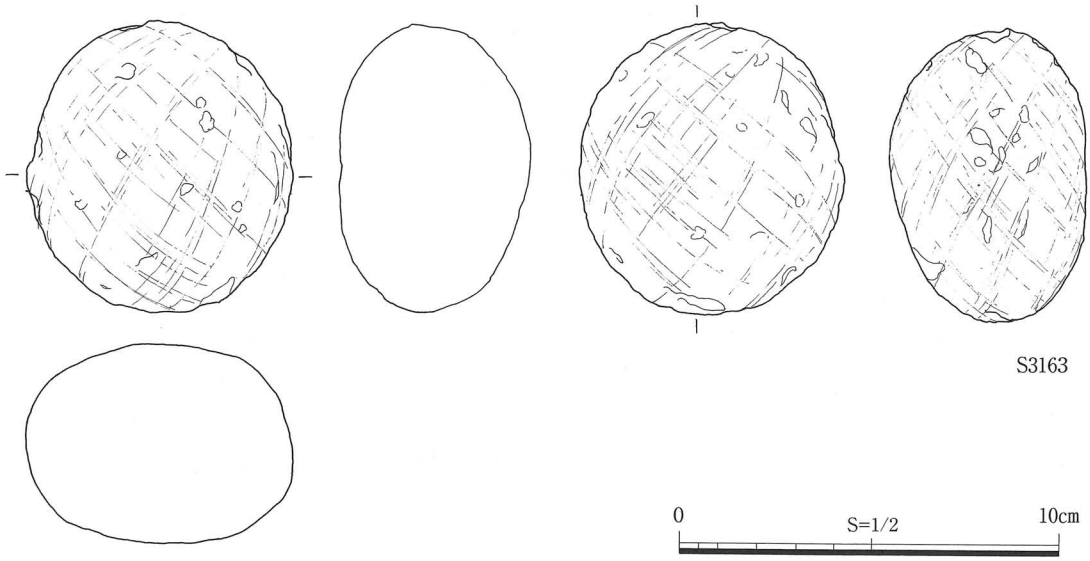


S3161





S3162



S3163

0　S=1/2　10cm

第487図　西地区出土礫石器（6）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3161	石槌	79次	SD−101B	第7(下)層	(6.8)	4.7	4.7	(251.0)	片麻状中粒花崗岩		Ⅳ−1
S3162	磨石	79次	SK−120	第3層	(8.2)	6.1	4.2	(352.1)	玄武岩A	敲石転用	Ⅵ−2
S3163	磨石	93次	SD−2066	第1層	7.6	6.8	5.1	346.3	流紋岩質溶結凝灰岩A		中世

とｆ面の磨痕はかなり発達し、面を形成している。また磨痕にはわずかに擦痕が認められ、ａ面は基軸にほぼ直交する方向、ｄ面は基軸に斜交する方向に走向している。磨石としての運動実態を考える上で注目される事例である。敲石としての使用痕は、ａ・ｂ面のものがⅤb類、そのほかはⅠa類に分類できる。Ｓ3159には硬質の礫質砂岩が用いられており、ｃ～ｆ面には敲石としての使用痕に先行して磨痕が面をなしており、磨石を転用した敲石と考えられる。ｃ～ｆ面には使用痕Ⅰa類が、ａ・ｂ面には使用痕Ⅴb類が認められる。またｃ面から使用痕Ⅲ類にあたる剥離痕が生じているが、磨痕に後続すること以外、詳細な性状は不明である。

Ｓ3160には硬くしまった凝灰岩が用いられている。敲石としての使用痕に先行して磨痕が認められ、磨石の転用品と思われる。ｅ面を除くすべての面に磨痕が認められ、それぞれが面をなしている。敲石としての使用痕は全面に認められ、ｅ面には使用痕Ⅰb類を主体に、Ⅰa類、Ⅱ類、Ⅲ類が残されている。ｃ・ｄ面の中央部には使用痕Ⅰb類が密集する。またａ・ｂ面の端部には使用痕Ⅰa類がみられる。ａ・ｂ面には使用痕の密集している箇所があり、主に使用痕Ⅰb類が観察できる。使用痕の状況から、台石として機能した可能性もある。

石槌（Ｓ3161）　Ｓ3161は西地区で唯一の石槌である。かなりもろい花崗岩が用いられている。ａ～ｄ面の中央部の溝は、幅0.4㎝程度の箇所から２㎝程度の箇所まであり、いずれの箇所においても溝は磨痕からなっている。使用痕は石質の影響もあって観察しにくいが、ｅ・ｆ面から大きな剥離痕が生じており、石槌の機能を考える上で注目される。

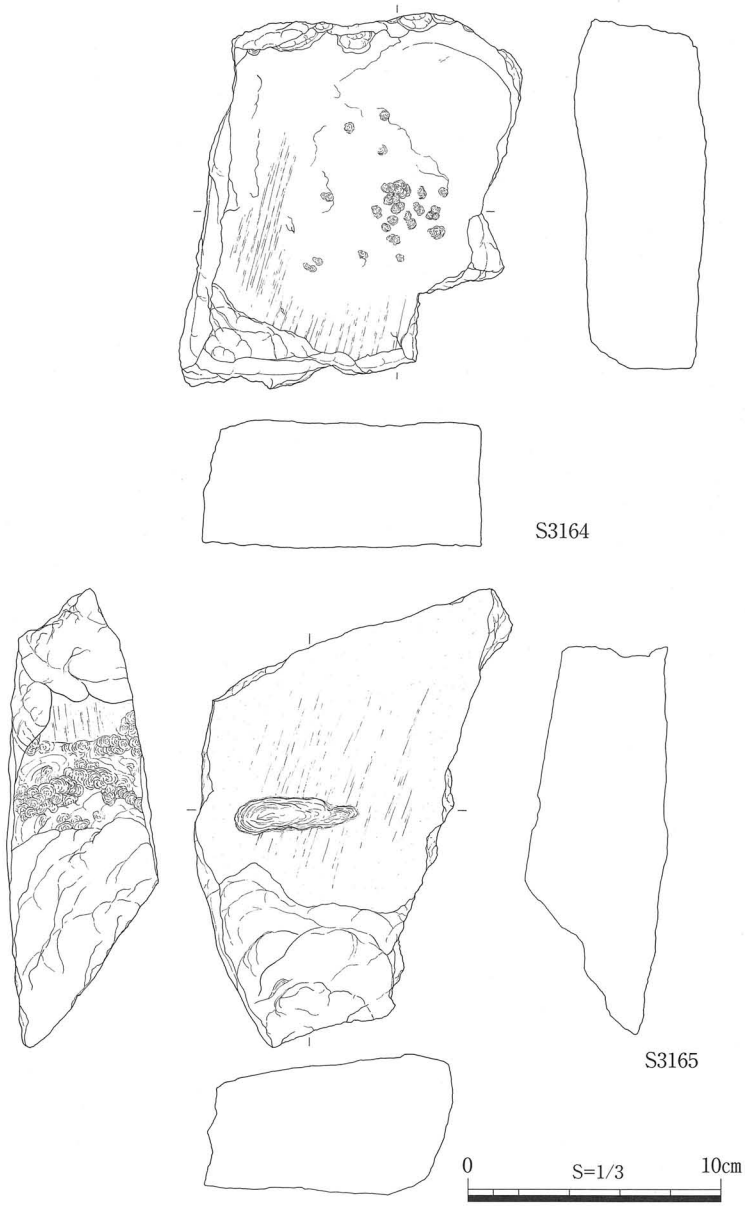
磨石（Ｓ3162・3163）　Ｓ3162はやや硬質である玄武岩が用いられている。やや扁平な棒状を呈する形状である。敲石が磨石に転用されている。敲石としての使用痕は、Ⅰa類とⅠb類に分類される。剥離痕で構成されているｅ面を除いたすべての部位に磨痕が認められ、ｆ面の磨痕は面を形成している。その一方、ｅ面の剥離痕からはさらに剥離痕が生じており、切り合い関係の上で磨痕に後続することから、本資料はかなり複雑な使用過程を経ているようである。

Ｓ3163はもろい石材で、凝灰岩が用いられている。やや扁平な球体を呈する形状で、拳大の握るのに適した大きさである。すべての部位に磨痕が観察できる。石質の影響から、磨痕は若干ザラつきをもっている。

台石（Ｓ3164・3165）　Ｓ3164には硬質の石材である斑糲岩が用いられている。敲打痕に先行して、ａ面の端部に磨痕がみられることから、石皿の転用品と考えられる。剥離痕で構成されている面が多く、明確な使用痕はｃ・ｅ面にのみ観察できる。ｅ面にはわずかに磨痕が、ａ面には磨痕と、それに後続して使用痕Ⅴb類が残されている。

Ｓ3165には硬質の花崗岩が用いられている。敲打痕に先行してａ面に磨痕がみられることから石皿の転用品と考えられる。多くの面が、磨痕が残された後に欠損しているため、使用痕はａ・ｃ面に観察できる。使用痕はⅤb類に相当する。

投弾（ＳＰ3096～3101）　全長３～５㎝、重さ約30～80ｇの自然の楕円あるいは球形を呈する円礫を利用したものである。人為的な加工はみられないので、投弾の確証はない。



第488図　西地区出土礫石器（7）

遺物番号	器種	調査次数	遺構名	層位/土色	法量(cm)			重量(g)	石種	備考	共伴時期(大和様式)
					最大長	最大幅	最大厚				
S3164	台石	79次	SD-101B	第9層	(14.5)	(10.4)	(5.0)	(1,818.0)	斑糲岩C	石皿転用	Ⅲ-3
S3165	台石	79次	SD-101B	第7(下)層	(15.8)	(9.3)	(5.8)	(1,391.0)	片麻状斑状花崗岩	石皿転用	Ⅳ-1
SP3096	投弾	84次	SD-110	第2層	4.6	3.6	3.4	80.6	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	Ⅲ-2
SP3097	投弾	84次	SD-01S	茶灰色粘質土	3.4	3.4	2.8	42.6	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	中世
SP3098	投弾	93次	SK-2115	第6層	3.3	2.8	2.2	31.5	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	Ⅴ-2
SP3099	投弾	93次	SK-2115	第3層	3.8	3.2	2.4	39.8	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	Ⅴ-2
SP3100	投弾	93次	SK-2116	第3-b層	2.9	2.8	2.8	31.2	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	Ⅳ-2
SP3101	投弾	93次	SD-1114B	第4層	2.9	3.0	2.2	28.9	流紋岩質溶結凝灰岩D	加工痕なし	Ⅳ

註

(1)　粟田薫「打製石剣の製作技術」『弥生文化博物館研究報告』第4集　pp.31－54、1995年。

(2)　佐藤良二「サヌカイト」『季刊考古学』第99号　雄山閣出版　pp.22－25、2007年。

第８節　まとめ

１．地形

西地区における範囲（内容）確認調査は、第79・80・84・89・93次の５件とも地区の北側に偏っている。それまでの調査では、第８・11・14・20次調査区付近に西地区微高地の中心が考えられていた。しかし、今回の範囲（内容）確認調査により、西地区の微高地が唐古池付近にまで拡がることが判明した。北地区微高地との境は、唐古池の南から北西へと抜ける弥生時代前期の落ち込み（南方砂層？）によって分かたれるものと考えられる。南側については、第58・73次調査区で溝群を検出しており、ここに末端を求めることができる。西側に関しては、弥生時代中期前葉環濠と考えられる第19次ＳＤ－203、第79次ＳＤ－102、第101次ＳＤ－101が描くラインに求められよう。東側については、第80次ＳＤ－106、第89次ＳＤ－1114Ｄの区画溝がその末端部を画していると考えられる。これによって示される範囲は長軸360ｍ、短軸120ｍであり、現段階では弥生時代の河跡の流入や落ち込みを確認できず、唐古・鍵遺跡範囲内における最大の微高地となる。安定した土地であるため、弥生時代前期から古墳時代初頭までの遺構が累積している。

２．遺構変遷

（１）弥生時代前期～中期前葉（第489図）

西地区では、弥生時代前期の遺構の集中が著しい。そして、出土土器は古い様相をもつものが多く、唐古・鍵遺跡の弥生集落成立にかかわる地区といえよう。特に、第８・11・14・20次調査区では、木器貯蔵穴と呼ばれる大型土坑を多数検出している。こうした土坑群は、第38次調査区を経て、第84・89・93次調査区にまで拡がりをもつと考えられる。第84次ＳＫ－201から出土した彩文を施す一木式高杯脚部（W3018）、第89次ＳＫ－1201から出土した小型壷、第93次ＳＫ－2115付近から集中して出土する特殊文様をもつ前期弥生土器片などは、いずれもこうした大型土坑に伴うものである。西地区が唐古・鍵遺跡における最大の微高地であることは先述したが、そのことはこの弥生時代前期遺構の集中からも肯定される。さらに、第16次調査区では、幅３ｍ前後の大溝であるＳＤ－105・106を並行して検出しており、深さは0.7ｍ前後と浅いが弥生時代前期の環濠となる可能性もある。その場合、環濠は西地区だけを画していたものと考えられる。なお、第16次調査区からは、流紋岩の原材、剥片、破砕片、石庖丁未成品が出土しており、近辺に流紋岩製石庖丁の製作址が想定される。

弥生時代中期前葉には、微高地の西末端に沿って第19次ＳＤ－203・1203、第79次ＳＤ－102、第101次ＳＤ－101の一連となる大溝が掘削される。この大溝は、その外側に弥生時代中

第76表　西地区　範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表（1）

時期	土器様式	調査次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
前期	Ⅰ	79次	SK	201・202			
			SD	—			
		80次	SK	—			
			SD	—			
		84次	SK	201・202	201〔高杯（一木式）（W3018）〕		202〔卜骨（B5023）〕
			SD	—			
		89次	SK	1201・1202・1203			
			SD	—			
			SX	1201・1202			
		93次	SK	2201・2203・2204・2205・2207・2208・2209	2201〔平鍬（W3002）〕		2207〔搬入土器（P5535（伊勢湾岸））〕
			SD	—			
			SX	2107			
中期初頭	Ⅱ－1	79次	SK	125			
			SD	—			
		80次	SK	—			
			SD	—			
		84次	SK	—			
			SD	—			
		89次	SK	—			
			SD	—			
		93次	SK	2206		2206〔スクレイパー（S3060）〕	
			SD	—			
			SX	2109			
中期前葉	Ⅱ－2・3	79次	SK	118下層・127			
			SD	102・102E・104・118	102〔蓋（W3020）〕	102〔石庖丁（S3069）、敲石（S3156）〕 102E〔太型蛤刃石斧（S3083）〕	102〔搬入土器（P5509（伊勢湾岸））、加工痕のある角（BP5020）〕
		80次	SK	—			
			SD	—			
		84次	SK	—			
			SK	—			
		89次	SK	—			
			SK	—			
		93次	SK	2105			
			SD	2104		2104〔用途不明石製品（S3121）〕	

期中葉の大環濠が並行しており、その先行環濠となることは確実である。ただし、この環濠が弥生時代中期中葉以前に集落全体を囲むものであったのか、西地区だけであったのかは不明である。

また、弥生時代中期前葉の西地区では弥生時代前期から続いて、多くの木器貯蔵穴が掘削されている。この時期の遺構は、伊勢湾沿岸地域から搬入された内傾口縁土器を出土するものが多い。なお、第22次調査で独鈷石が出土した中世土坑のＳＫ－51には、内傾口縁土器を含む大和第Ⅱ－２様式の土器が多量に含まれていた。おそらく、これらは単一の弥生時代中期前葉遺構に伴っていた遺物と考えられる。

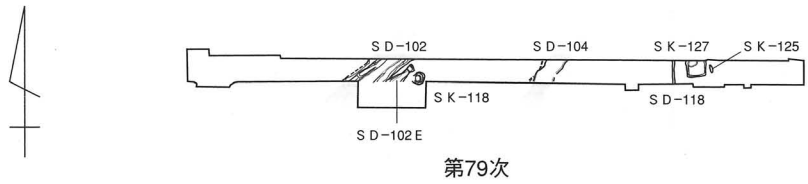
第74次調査区からは、大和第Ⅱ－２様式の大型建物跡を検出している。南－北に軸をもち、梁間２間（約7.0m）、桁行５間（約11.4m）以上である。南側については、まだ桁が延びる可能性もある。独立棟持柱を有する総柱型の掘立柱建物である。柱の直径は60cmを測る。なお、第22次調査区で検出したＳＫ－205は、平鍬を礎板として柱根が残存していた。大型建物跡の柱穴となる可能性があろう。

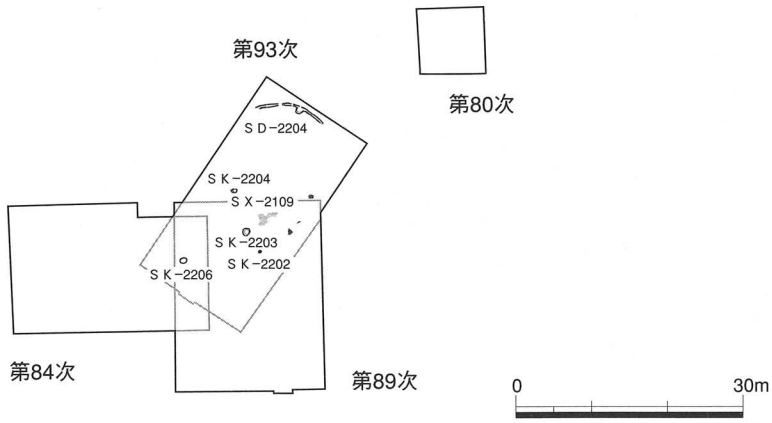
第93次調査区で検出したＳＸ－2109及び周辺の焼土面は、ＳＸ－2109の灰層中に含まれていた土器と周辺から出土する被熱土器から大和第Ⅱ－１－ｂ様式に位置づけられる。被熱土器には、著しく発泡したものがあり、かなりの高熱を受けたものと想定される。また、同じく周辺から出土する用途不明の円形土台状土製品も、胎土から大和第Ⅱ様式と考えられ、高熱を使用する遺構に伴う遺物であった可能性が高い。

（２）弥生時代中期中葉（第490図）

弥生時代中期中葉に、唐古・鍵遺跡の集落範囲全体をめぐっていたと考えられる大環濠が掘削される。西地区においては、第13次ＳＤ－06、第19次ＳＤ－204、第79次ＳＤ－101として検出している。その規模は、幅約8.0ｍ、深さ約1.5ｍに及ぶ。大環濠は、以降の環濠が外側へ重ねられ環濠帯を形成するが、その内側にあって弥生時代中期中葉の居住域を画している。

この大環濠と軌を一にして、居住域内部には区画溝が掘削される。西地区においては、第80次ＳＤ－106・第89次ＳＤ－1114や第79次ＳＤ－103がこれにあたる。これらは、当初はさほど幅広い溝ではないが、同一地点での幾度もの再掘削を経て、上面は大溝状を呈している。また、第89次ＳＤ－1114には、同規模のＳＤ－1115や小溝のＳＤ－1110・1111・1117が取り付いており、微高地からの雨水等を排水する役目をもっていたと考えられる。





第489図　西地区　範囲（内容）確認調査の弥生時代前期～中期前葉遺構分布図（Ｓ＝1/1,000）

第77表　西地区　範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表（2）

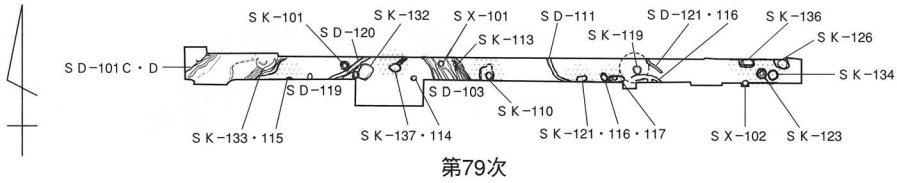
時期	土器様式	調査次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
中期中葉	Ⅲ	79次	SK	101・107・113・114・116・118上層・122・132・133・135・SX−101	101〔穂摘具（W3009）〕118上層〔籠編物（W3031・WP3001）〕	SX−101〔石庖丁（S3067）〕	101〔有孔土玉（D5032）〕132〔搬入土器（P5485（伊賀・尾張））〕
			SD	101D・101C・103・103B・103C・111・116・119・120・121・122・123	101B〔蓋（W3021）〕	101C〔太型蛤刃石斧（S3085）、砥石（S3147）〕／101B〔石剣（S3002）、敲石（S3158）、台石（S3164）〕／103〔石剣（SP3013）、石鏃（SP3028・3034）、石錐（SP3049）、石小刀（S3046）、スクレイパー（S3051）、石庖丁（S3061）、石製紡錘車（S3109）、石鋸（SP3081）、砥石（S3131・3132・3140）〕／120〔石剣（S3003）〕	103〔物入土器（漆）（P5302）、搬入土器（P5441（大和南部?）・5494（伊賀・尾張）・5498（伊賀・尾張）・5528（伊勢湾岸））、用途不明土製品（D5054）〕
			SB	101（SK−115）・102（SK−137）・103（SK−110）・104（SK−121）・105（SK−117）・106（SK−119）・107（SK−136）・108（SK−123）・109（SK−134）・110（SK−126）		SK−136〔石小刀（S3043）〕SK−110〔敲石（S3150）〕	
			SX	102			
		80次	SK	−			
			SD	106・106B・106C・106D	106〔用途不明品（W3029）〕	106〔石剣（S3009・SP3019）、石鏃（S3017・SP3025・3037）、スクレイパー（S3057）、石庖丁（S3063・3065）、石鋸（SP3083）〕	106〔絵画土器（P5047）、搬入土器（P5415（瀬戸内））、土器片円板（D5146・5150・5155）、管玉（A5031）〕／106D〔搬入土器（P5495（伊賀・尾張））〕
		84次	SK	108			
			SD	110・111・112・113		110〔投弾（SP3096）〕／111〔扁平片刃石斧（局部磨製）（S3092）〕／113〔石鏃（S3016）〕	
		89次	SK	1128			
			SD	1110・1111・1114D・1115A・1115B・1117			
		93次	SK	2104・2107・2112・2120・2121	2120〔盾（W3013）、石戈柄（W3014・SP3102）、部材（W3022）〕	2112〔石錐（S3033）〕2120〔石剣（S3004・SP3102）、石鏃（S3019）、石包丁素材（S3080）、石包丁未成品（S3082）〕	2107〔弭（B5005）〕／2120〔土器文様（P5104（木葉文））、土製投弾（D5023）、刺突具（B5013）、用途不明品（把状）（B5018）、卜骨（B5025）〕／2121〔土器文様（P5103（木葉文）・5110（木葉文）・5127（直線文））、搬入土器（P5578（?））、円形土台状土製品（D5077）〕
			SB	1201	Pit−1201W〔刀剣鞘（W3011）、不明容器（W3016）、用途不明品（W3027）〕Pit−1201WB〔板材（W3024）、柱（W3025）〕	Pit−1201E〔石鏃（SP3033）、砥石（S3126）〕／Pit−1203E〔石鏃（S3029）、石包丁素材（SP3067）〕／Pit−1207E〔石小刀（S3041）〕／Pit−1204C〔石鏃（S3021）〕／Pit−1206C〔石鏃（S3024）〕／Pit−1201W〔小形方柱状片刃石斧（S3087）〕／Pit−1201WB〔磨製石戈（S3106）〕	Pit−1204E〔土器文様（P5121（羽状文））、弭（B5004）〕／Pit−1210E〔土器文様（P5126（斜格文））〕／Pit−1204C〔土器文様（P5122（三角刺突文）〕／Pit−1201W〔加工痕のある骨（BP5025）〕／Pit−1201WB〔加工痕のある骨（BP5026）〕／Pit−1205W〔土器文様（P5107（木葉文風））〕
			SD	−			

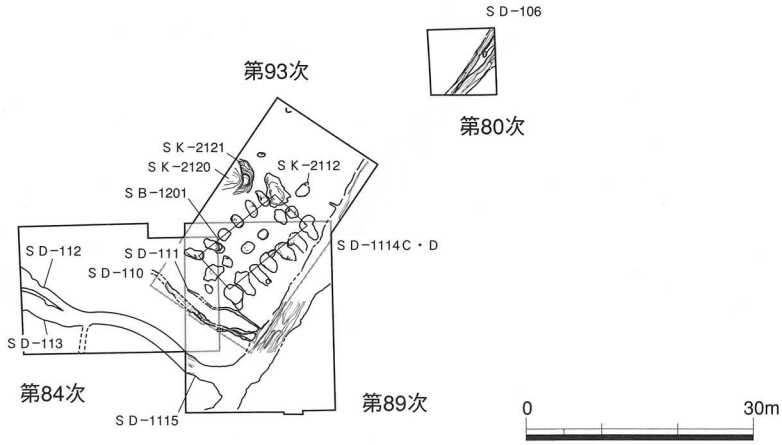
この第80次ＳＤ－106・第89次ＳＤ－1114の区画溝に軸を揃えて建てられたのが、第93次調査区において検出した大型建物跡のＳＢ－1201である。南西－北東に軸をもち、梁間２間（約6.0m）、桁行６間（約13.2m）である。独立棟持柱はもたないが、第74次調査区の大型建物跡と同様に総柱型の掘立柱建物となる。北西隅柱の直径は83.2cmを測る。柱穴掘形内から出土した土器によって、大和第Ⅲ－２様式に位置づけられる。なお、本建物跡周辺では、第84次Pit－104・110、第89次Pit－1250の大型柱穴を検出しており、大型建物跡がＳＢ－1201だけ

にとどまらないことは確実である。このうち、第84次Pit－104は、上面を切るＳＤ－110から大和第Ⅲ－２様式の土器が出土しており、ＳＢ－1201に先行する可能性が高い。

周辺遺構として注目すべきは、本建物跡の北西隅柱に接して掘り込まれたＳＫ－2121・2120である。これらは、大和第Ⅲ－１・２様式に連続して掘り込まれた大型の井戸と考えられる。このうちＳＫ－2120からは、柄が炭化した石戈と盾断片が出土している。この点に関して、時期は大和第Ⅳ様式と異なるが、隣接する第89次ＳＤ－1114Ｂから出土した盾と戈を持つ人物の絵画土器（Ｐ5024）が一つの手掛かりを与えてくれる。これは清水風遺跡の絵画土器とともに、大型建物の傍らでおこなわれた儀礼行為を描写したものと考えられるが、まさに大型建物跡のＳＢ－1201とその周辺から出土した盾と戈を結びつけるものといえよう。また、第80・93次調査区であわせて磨製石戈が５点（Ｓ3105～3107他）という、他の地区にはない集中を示しているが、大型建物跡との関連で解釈することも可能である。

大型建物跡に注目は集まりがちであるが、北へわずか60ｍ離れた第79次調査区では、竪穴住居跡に伴うと考えられる弥生時代中期中葉の炭灰土坑を多数検出している。この炭灰土坑を灰穴炉と仮定して、復原される竪穴住居跡は10棟である。ここは、通常の居住域といえよう。なお、この第79次調査区と大型建物跡を検出した第93次調査区の石器組成（第75表）を比較





第490図　西地区　範囲（内容）確認調査の弥生時代中期中葉遺構分布図（Ｓ＝1/1,000）

第78表　西地区　範囲（内容）確認調査の遺構・遺物変遷表（3）

時期	土器様式	調査次数	遺構	番号	木製品	石器	特殊遺物
中期後葉	Ⅳ	79次	SK	111・129・130・131	111〔原材（W3030）〕 130〔平鍬未成品（W3003）、泥除未成品（W3004）〕	111〔石庖丁（S3070）、石鋸素材（SP3091）〕／130〔石庖丁未成品（SP3065）〕	
			SD	101B・112・113・115	101B〔鍬曲柄（W3005）、縦杓子未成品（W3015）、合子（W3017）、高杯（組合せ式）（W3019）、用途不明品（W3028）〕	101B〔スクレイパー（S3054）、石庖丁未成品（SP3063）、石製円板（S3114）、砥石（S3138・3141・3148）、石鏃（S3161）、台石（S3165）〕	101B〔刺突具（B5012）、用途不明品（ヘラ状）（B5015）、卜骨（B5022）〕
		80次	SK	101・102			
			SD	101B		101B〔石小刀（S3044）、石庖丁（S3076）、磨製石剣（S3100）、磨製石戈（S3105）、石鋸（SP3082）〕	101B〔絵画土器（P5009・5044）、搬入土器（P5435（紀伊））、土器片紡錘車（D5095）、土器片円板（D5165）、鳴石容器・蓋・翡翠製勾玉（A5016・5017・5018・5019）〕
		84次	SK	103・104・105	103〔用途不明品（W3026）〕	104〔磨製石剣（S3102）〕	103〔搬入土器（P5543（伊勢湾岸））、円形土台状土製品（D5075）、管玉（A5033）、骨針（B5010）〕
			SD	—			
		89次	SK	1112・1113・1114・1115・1117・1118・1129・1130・1131・1132・1133・1136		1112〔石錐（S3034）〕	1129〔土器文様（P5124（双頭渦文）〕
			SD	1114C	1114C〔盾（W3012）〕	1114C〔中形尖頭器（S3015）、柱状片刃石斧（S3086）、石鋸素材（SP3090）〕	1114C〔搬入土器（P5570（？））、土器片円板（D5161）、用途不明品（B5019）、加工痕のある骨（BP5027）〕
		93次	SK	2116・2120	2116〔糸巻具（W3010）〕	2116〔砥石（S3146・3149）、投弾（SP3100）〕／2120〔石剣（SP3011）、大形石庖丁（S3072）、石庖丁未成品（SP3066）、扁平片刃石斧（S3094）、石製紡錘車（S3108）、用途不明石製品（S3124）、敲石（S3157）〕	2116〔用途不明品（BP5015）、加工痕のある角（BP5021）〕 2120〔絵画土器（P5046）、搬入土器（P5471（近江））、土器片紡錘車未成品（D5133・5140）、土器片円板（D5163）〕
			SD	2101		2101〔石剣（SP3010）、中形尖頭器（S3013）、スクレイパー（S3058）、石庖丁（S3064）、石鋸（SP3084）、石鋸素材（SP3086）〕	2101〔土器文様（P5135（綾杉文・鋸歯文））、渦文タタキ（P5146）、搬入土器（P5406（瀬戸内）・5432（和泉））〕
			SX	2104・2106・2108			
後期初頭	Ⅴ	79次	SK	102・104・106	102〔木錘（W3008）〕		102〔渦文タタキ（P5148）〕
			SD	101		101〔垂飾品（S3115）、用途不明石製品（SP3077）、敲石（S3154）〕	
		80次	SK	—			
			SD	101・102・105		101〔石錐（S3038）、磨製石剣（S3101）、石製紡錘車（S3111）、石鋸（SP3085）、砥石（S3139）〕／102〔ミニチュア石製品（S3116）〕／105〔石鏃（SP3032）、石製紡錘車（S3110）〕	101〔搬入土器（P5492（伊賀・尾張））、無孔土玉（D5049）、用途不明土製品（D5072）、土器片円板（D5160）〕 105〔土器片紡錘車（D5092）、大玉・素材（A5001−3）〕
		84次	SK	101		101〔砥石（S3142）〕	101〔土製投弾（D5027）〕
			SD	—			
		89次	SK	1120・1126・1127・1135		1120〔石庖丁（S3066）、敲石（S3155）〕 1126〔石錐（SP3057）〕	1120〔台形土台状土製品（D5074・5078）、土器片円板（D5154）〕
			SD	1114B・1116		1114B〔石剣（S3008）、石鏃（S3031）、石匙（S3050）、ミニチュア石製品（S3117）、石鋸素材（SP3087）、砥石（S3128）〕	1114B〔絵画土器（P5024・5030・5075）、土器文様（P5113（方画文）・5128（放射状文））、搬入土器（P5538（伊勢湾岸）・5539（伊勢湾岸）・5544（伊勢湾岸））、用途不明土製品（D5055）、土器片円板（D5153・5157）〕 1116〔無孔土玉（D5052）〕
		93次	SK	2115・2118・2122		2115〔石剣（SP3008）、石錐（S3040）、スクレイパー（S3053）、石庖丁（S3068）、柱状片刃石斧（SP3068）、投弾（SP3098・3099）〕 2122〔扁平片刃石斧（SP3070）〕	2115〔土器文様（P5125（双頭渦文））、搬入土器（P5426（摂津？））、杓子形土製品（D5016）、弭（B5003・5006）、骨針（BP5001・5003・5006）、用途不明品（ヘラ状）（BP5010・5012）、用途不明品（BP5016）〕／2122〔加工痕のある角（BP5023）〕
			SD	2103・1114B		1114B〔石錐（SP3045）、投弾（SP3101）〕 2103〔石鏃（S3025）〕	2103〔搬入土器（P5536（伊勢湾岸））〕
			SX	2106			2106〔搬入土器（P5406（瀬戸内）・5459（近江））〕

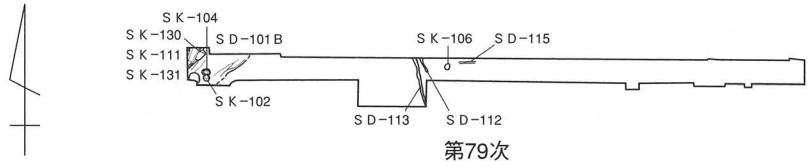
しても、磨製石戈以外に大きな差はない。むしろ、大型建物跡を有し特殊地区であるはずの第93次調査区の方が、石鏃や石錐、投弾は多い。

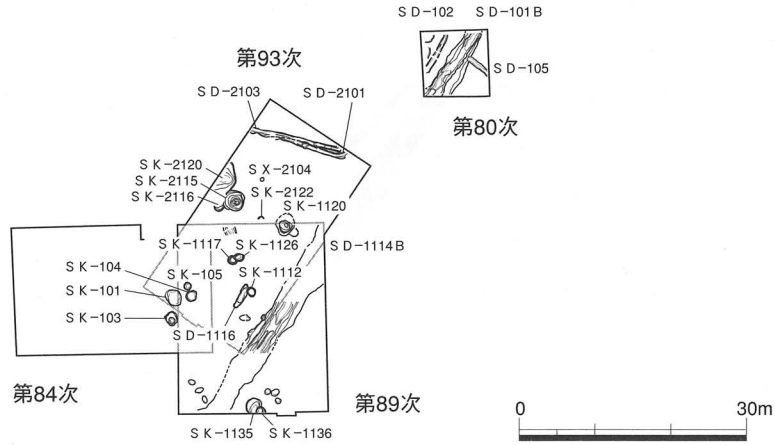
この他、第20次調査で検出したＳＸ－101は、長軸約6.5ｍ、短軸約5.0ｍ、深さ約2.4ｍと唐古・鍵遺跡で最大規模の井戸であるが、中層より卜骨や完形壷など祭祀に関わると考えられる遺物が出土している。さらに、隣接するＳＫ－107では、壷に卜骨が入れられていた。

（３）弥生時代中期後葉～後期初頭（第491図）

西地区では、弥生時代中期後葉の遺構に偏りがあり、第８・11次調査区周辺では大和第Ⅳ様式の遺構が少ないことは概報段階から指摘されていた。この点については、第79次調査区でも同様であり、弥生時代中期中葉の居住域となった調査区東側に弥生時代中期後葉の遺構は見当たらず、大環濠よりも外側となる調査区西端でＳＫ－111・130といった木器貯蔵穴の集中が認められるが居住に伴うものではない。これに対し、第84・89・93次調査区においては大和第Ⅳ様式の遺構の集中が著しい。井戸に関しては、大和第Ⅳ～Ⅴ様式の変遷を追うことができる。また、その東側を画した区画溝である第80次ＳＤ－101Ｂ・第89次ＳＤ－1114Ｂもこの段階の再掘削であり、大和第Ⅳ様式の土器が多量に出土する。

そして、第80次ＳＤ－101Ｂからは、下層から直立して広口壷（Ｐ3011）が、中層から大型





第491図　西地区　範囲（内容）確認調査の弥生時代中期後葉～後期初頭遺構分布図（Ｓ＝1/1,000）